

白滝遺跡群Ⅻ

第3分冊（本文Ⅲ章・石器実測図・分布図編）

遠軽町 旧白滝5遺跡（2）

旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査業務報告書

Ⅲ 遺構と遺物

- 2 遺物
- (5) D3b・c区(b区：Sb-40、c区：41～45)の石器
 - (6) F1区(Sb-46～49)の石器
 - (7) F2区(Sb-50～52)の石器
 - (8) F3区(Sb-53～58)の石器

平成25年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

記号等の説明

- 1 接合資料の中で、剥片石器や石核の素材である剥片もしくは原石を分割したものについては「個体A」「個体B」・・と呼称した。
- 2 接合資料は剥離工程を理解し易くするために模式図を作成し、実測図と共に掲載した。模式図は同一段階の剥離群毎にトーンを変え、剥離の流れを番号で示した。但し、切り合い関係がなく、前後関係が明らかでないものにおいても便宜上番号を付けたので、詳細は個々の説明を参照願いたい。
- 3 一部の接合資料実測図においては、視覚的に図を理解し易くするために接合剥片の腹面側をトーンで示した。また、接合資料内に剥片素材の個体が存在する場合、全体の剥離の腹面と区別するために、個体の調整剥片腹面を目の粗いトーンで示した。
- 4 剥離模式図の縮尺は原則1:5である。模式図中の矢印(→)は接合剥片の剥離方向を示すが、接合剥片の打点側が欠損している場合は切れた矢印(→)で示し、重なって見えない部分は破線の矢印(---→)で示した。また、折れの場合は加圧部分に▲を付けている。
- 5 尖頭器・舟底形石器などの製作石器が欠落した接合資料で、その形状が復元可能な場合は剥離工程模式図に太実線で輪郭線を復元している。
- 6 調査区域図および遺物分布図などの方位記号は平面直角座標の北を、レベルは標高(単位はm)を示す。
- 7 遺構や石器ブロックについては以下の略号を使用した場合がある。
Sb: 石器ブロック Cb: 炭化木片ブロック
- 8 遺物分布図では以下の記号を用いた。また、母岩別資料の挿入に掲載した母岩情報表と模式図には、括弧内に示した器種略称を用いている。
●: 剥片 (FK) ●: 石刃 (BL) ●: 縦長剥片 (LF) +: 削片 (SP)
✱: 細石刃 (MB) ✱: 細石刃核 (MC) ◆: 舟底形石器 (BT) ▲: 尖頭器 (PT)
◆: 両面調整石器 (BF) ▲: 彫器 (BU) ■: 搔器 (ES) ◆: 錐形石器 (DR)
▼: 二次加工ある剥片 (RF) ▼: 削器 (SS) ✱: 石核 (CO) ✱: 石刃核 (BC)
△: 石鏃 (AH) □: 礫石器等 【斧形石器・敲石・砥石・台石・原石・礫が該当】
- 9 遺物分布図の記号横の数字は遺物番号を示している。また、分布図中に示した遺物実測図横の数字は掲載番号である。
- 10 石器ブロック別分布図、母岩別接合資料分布図では、全体の遺物を網かけで示している。
- 11 接合資料の接合分布図では、折れ面接合を全て実線で示した。
- 12 石質は掲載遺物の一覧表に示したが、黒曜石については、以下の五種類に分けて示した(口絵40)。
黒曜石1: 黒色 黒曜石2: 梨肌 黒曜石3: 黒色に茶色が混じる(黒>茶)
黒曜石4: 茶色に黒色が混じる(茶>黒)
黒曜石5: 黒色に紫色もしくは紫色がかった茶色が混じる(黒>紫・茶)
接合資料の一覧表ではスペースの関係上、上記の黒曜石1~5についてそれぞれを1~5の数字のみで示した。
- 13 黒曜石以外の石質については、実測図番号の下に以下の略号で示した。
安山岩: An めのう: Ag 碧玉: Ja 珪岩: Qu チャート: Ch 粘板岩: Si
砂岩: Sa 珪質頁岩: Si-Sh 泥岩: Mu

第3分冊（本文Ⅲ章・石器実測・分布図編）目次

Ⅲ 遺構と遺物	1
2 遺物	1
(5) D3b・c区(b区：Sb-40、c区：Sb-41～45)の石器	1
(6) F1区(Sb-46～49)の石器	269
(7) F2区(Sb-50～52)の石器	293
(8) F3区(Sb-53～58)の石器	396

第3分冊(本文Ⅲ章・石器実測・分布図編)挿図目次

Ⅲ章 遺構と遺物	
図Ⅲ-314 D3b・c区 接合資料分布図	2
図Ⅲ-315 D3b区 接合資料分布図	3
図Ⅲ-316 D3c区 接合資料分布図	4
図Ⅲ-317 Sb-40分布状況(平面・断面図)	5
図Ⅲ-318 Sb-40出土遺物の分布(1)	6
図Ⅲ-319 Sb-40出土遺物の分布(2)	7
図Ⅲ-320 Sb-40出土遺物の分布(3)	8
図Ⅲ-321 Sb-40出土遺物の分布(4)	9
図Ⅲ-322 Sb-40出土遺物の分布(5)	10
図Ⅲ-323 Sb-40出土遺物の分布(6)	11
図Ⅲ-324 Sb-40出土遺物の分布(7)	12
図Ⅲ-325 Sb-41分布状況(平面・断面図)	13
図Ⅲ-326 Sb-41出土遺物の分布(1)	14
図Ⅲ-327 Sb-41出土遺物の分布(2)	15
図Ⅲ-328 Sb-41出土遺物の分布(3)	16
図Ⅲ-329 Sb-41出土遺物の分布(4)	17
図Ⅲ-330 Sb-41出土遺物の分布(5)	18
図Ⅲ-331 Sb-41出土遺物の分布(6)	19
図Ⅲ-332 Sb-41出土遺物の分布(7)	20
図Ⅲ-333 Sb-41出土遺物の分布(8)	21
図Ⅲ-334 Sb-42分布状況(平面・断面図)	22
図Ⅲ-335 Sb-42・43分布状況(平面・断面図)	23
図Ⅲ-336 Sb-44分布状況(平面・断面図)	24
図Ⅲ-337 Sb-45分布状況(平面・断面図)	25
図Ⅲ-338 D3b・c区の石器(1) 石鏃・尖頭器	28
図Ⅲ-339 D3b・c区の石器(2) 尖頭器	29
図Ⅲ-340 D3b・c区の石器(3) 尖頭器	30
図Ⅲ-341 D3b・c区の石器(4) 尖頭器	31
図Ⅲ-342 D3b・c区の石器(5) 尖頭器	32
図Ⅲ-343 D3b・c区の石器(6) 尖頭器	33
図Ⅲ-344 D3b・c区の石器(7) 尖頭器	34
図Ⅲ-345 D3b・c区の石器(8) 尖頭器・両面調整石器	35
図Ⅲ-346 D3b・c区の石器(9) 両面調整石器	36
図Ⅲ-347 D3b・c区の石器(10) 舟底形石器	38
図Ⅲ-348 D3b・c区の石器(11) 細石刃・形器	40
図Ⅲ-349 D3b・c区の石器(12) 掻器	41
図Ⅲ-350 D3b・c区の石器(13) 掻器	42
図Ⅲ-351 D3b・c区の石器(14) 掻器	43
図Ⅲ-352 D3b・c区の石器(15) 掻器	44
図Ⅲ-353 D3b・c区の石器(16) 削器	46
図Ⅲ-354 D3b・c区の石器(17) 削器	47
図Ⅲ-355 D3b・c区の石器(18) 削器	48
図Ⅲ-356 D3b・c区の石器(19) 削器	49
図Ⅲ-357 D3b・c区の石器(20) 鎌形石器・二次加工ある剥片・石刃	50
図Ⅲ-358 D3b・c区の石器(21) 石刃	52
図Ⅲ-359 D3b・c区の石器(22) 石刃	53
図Ⅲ-360 D3b・c区の石器(23) 石刃	54
図Ⅲ-361 D3b・c区の石器(24) 石刃	55
図Ⅲ-362 D3b・c区の石器(25) 石刃	56
図Ⅲ-363 D3b・c区の石器(26) 石刃	57
図Ⅲ-364 D3b・c区の石器(27) 石刃・石刃核	58
図Ⅲ-365 D3b・c区の石器(28) 石刃核	60
図Ⅲ-366 D3b・c区の石器(29) 石刃核	61
図Ⅲ-367 D3b・c区の石器(30) 石刃核	62
図Ⅲ-368 D3b・c区の石器(31) 石刃核	63
図Ⅲ-369 D3b・c区の石器(32) 石刃核・石核	64
図Ⅲ-370 D3b・c区の石器(33) 石核	65
図Ⅲ-371 D3b区の石器(1) 母岩583 接合2399-2401(1)	67
図Ⅲ-372 D3b区の石器(2) 母岩583 接合2399-2401(2)	68
図Ⅲ-373 D3b区の石器(3) 母岩583 接合2399-2401(3)	69
図Ⅲ-374 D3b区の石器(4) 母岩584 接合2408(1)	71
図Ⅲ-375 D3b区の石器(5) 母岩584 接合2408(2)	72
図Ⅲ-376 D3b区の石器(6) 母岩584 接合2408(3)	73
図Ⅲ-377 D3b区の石器(7) 母岩584 接合2408(4)	74
図Ⅲ-378 D3b区の石器(8) 母岩584 接合2408(5)	75
図Ⅲ-379 D3b区の石器(9) 母岩601 接合2447(1)	77
図Ⅲ-380 D3b区の石器(10) 母岩601 接合2447(2)、母岩656 接合2814・2816(1)	78
図Ⅲ-381 D3b区の石器(11) 母岩656 接合2814・2816(2)	80
図Ⅲ-382 D3b区の石器(12) 母岩656 接合2814・2816(3)	81
図Ⅲ-383 D3b区の石器(13) 母岩656 接合2814・2816(4)	82
図Ⅲ-384 D3b区の石器(14) 母岩639 接合2592(1)	84
図Ⅲ-385 D3b区の石器(15) 母岩639 接合2592(2)	85
図Ⅲ-386 D3b区の石器(16) 母岩639 接合2592(3)	86
図Ⅲ-387 D3b区の石器(17) 母岩639 接合2592(4)、母岩587 接合2419(1)	87
図Ⅲ-388 D3b区の石器(18) 母岩587 接合2419(2)	88
図Ⅲ-389 D3b区の石器(19) 母岩603 接合2461	89
図Ⅲ-390 D3b区の石器(20) 母岩605 接合2471	90

図Ⅲ-391	D3b区の石器(21)	母岩641	接合2596	123						
.....	92	図Ⅲ-418	D3b区の石器(48)	母岩585	接合2412(3)	124		
図Ⅲ-392	D3b区の石器(22)	母岩644	接合2602		
.....	93	図Ⅲ-419	D3b区の石器(49)	母岩585	接合2412(4)	125		
図Ⅲ-393	D3b区の石器(23)	母岩657	接合2820(1)		
.....	94	図Ⅲ-420	D3b区の石器(50)	母岩585	接合2412(5)	126		
図Ⅲ-394	D3b区の石器(24)	母岩657	接合2820(2)		
.....	95	図Ⅲ-421	D3b区の石器(51)	母岩585	接合2412(6)	127		
図Ⅲ-395	D3b区の石器(25)	母岩657	接合2820(3)		
.....	96	図Ⅲ-422	D3b区の石器(52)	母岩585	接合2412(7)、	母岩586	接合2417(1)	128
図Ⅲ-396	D3b区の石器(26)	母岩657	接合2820(4)		
.....	97	図Ⅲ-423	D3b区の石器(53)	母岩586	接合2417(2)	130		
図Ⅲ-397	D3b区の石器(27)	母岩657	接合2820(5)		
.....	98	図Ⅲ-424	D3b区の石器(54)	母岩586	接合2417(3)、	母岩598	接合2445(1)	131
図Ⅲ-398	D3b区の石器(28)	母岩616	接合2508(1)		
.....	100	図Ⅲ-425	D3b区の石器(55)	母岩598	接合2445(2)、	母岩602	接合2456(1)	133
図Ⅲ-399	D3b区の石器(29)	母岩616	接合2508(2)		
.....	101	図Ⅲ-426	D3b区の石器(56)	母岩602	接合2456(2)	134		
図Ⅲ-400	D3b区の石器(30)	母岩617	接合2511(1)		
.....	102	図Ⅲ-427	D3b区の石器(57)	母岩602	接合2456(3)、	母岩606	接合2472(1)	135
図Ⅲ-401	D3b区の石器(31)	母岩617	接合2511(2)		
.....	103	図Ⅲ-428	D3b区の石器(58)	母岩606	接合2472(2)、	母岩642	接合2597(1)	136
図Ⅲ-402	D3b区の石器(32)	母岩620	接合2518(1)		
.....	104	図Ⅲ-429	D3b区の石器(59)	母岩642	接合2597(2)	137		
図Ⅲ-403	D3b区の石器(33)	母岩620	接合2518(2)		
.....	106	図Ⅲ-430	D3b区の石器(60)	石刃技法・剥片生産関連	写真掲載資料	139		
図Ⅲ-404	D3b区の石器(34)	母岩621	接合2519		
.....	107	図Ⅲ-431	D3b区の石器(61)	石刃技法・母岩別接合資料分布図	140			
図Ⅲ-405	D3b区の石器(35)	母岩624	接合2527		
.....	108	図Ⅲ-432	D3c区の石器(1)	母岩662	接合2898(1)	142		
図Ⅲ-406	D3b区の石器(36)	母岩659	接合2831・		
.....	2832(1)		
図Ⅲ-407	D3b区の石器(37)	母岩659	接合2831・		
.....	2832(2)		
図Ⅲ-408	D3b区の石器(38)	母岩655	接合2801(1)		
.....	112	図Ⅲ-433	D3c区の石器(2)	母岩662	接合2898(2)、	母岩663	接合2899(1)	144
図Ⅲ-409	D3b区の石器(39)	母岩655	接合2801(2)		
.....	113	図Ⅲ-434	D3c区の石器(3)	母岩663	接合2899(2)	145		
図Ⅲ-410	D3b区の石器(40)	母岩643	接合2601		
.....	114	図Ⅲ-435	D3c区の石器(4)	母岩663	接合2899(3)、	母岩666	接合2904(1)	146
図Ⅲ-411	D3b区の石器(41)	母岩615	接合2507(1)		
.....	116	図Ⅲ-436	D3c区の石器(5)	母岩666	接合2904(2)	147		
図Ⅲ-412	D3b区の石器(42)	母岩615	接合2507(2)		
.....	117	図Ⅲ-437	D3c区の石器(6)	母岩666	接合2904(3)	148		
図Ⅲ-413	D3b区の石器(43)	母岩619	接合2517		
.....	118	図Ⅲ-438	D3c区の石器(7)	母岩666	接合2904(4)	149		
図Ⅲ-414	D3b区の石器(44)	尖頭器・両面調整石器	関連写真掲載資料		
.....	119	図Ⅲ-439	D3c区の石器(8)	母岩667	接合2905(1)	151		
図Ⅲ-415	D3b区の石器(45)	尖頭器・両面調整石器	製作母岩別接合資料分布図		
.....	120	図Ⅲ-440	D3c区の石器(9)	母岩667	接合2905(2)	152		
図Ⅲ-416	D3b区の石器(46)	母岩585	接合2412(1)		
.....	122	図Ⅲ-441	D3c区の石器(10)	母岩679	接合2924(1)	153		
図Ⅲ-417	D3b区の石器(47)	母岩585	接合2412(2)		
.....	図Ⅲ-442	D3c区の石器(11)	母岩679	接合2924(2)	154		
.....	図Ⅲ-443	D3c区の石器(12)	母岩681	接合2927(1)	156		

図Ⅲ-444	D3c区の石器(13)	母岩681	接合2927(2)	157	図Ⅲ-471	D3c区の石器(40)	母岩758	接合3234(1)	190
図Ⅲ-445	D3c区の石器(14)	母岩681	接合2927(3)	158	図Ⅲ-472	D3c区の石器(41)	母岩758	接合3234(2)	191
図Ⅲ-446	D3c区の石器(15)	母岩681	接合2927(4)、	159	図Ⅲ-473	D3c区の石器(42)	母岩664	接合2901	192
図Ⅲ-447	D3c区の石器(16)	母岩751	接合3211(1)	160	図Ⅲ-474	D3c区の石器(43)	母岩669	接合2910	194
図Ⅲ-448	D3c区の石器(17)	母岩682	接合2928(1)	162	図Ⅲ-475	D3c区の石器(44)	母岩670	接合2911	195
図Ⅲ-449	D3c区の石器(18)	母岩682	接合2928(2)	163	図Ⅲ-476	D3c区の石器(45)	母岩671	接合2912	196
図Ⅲ-450	D3c区の石器(19)	母岩688	接合2935(1)	165	図Ⅲ-477	D3c区の石器(46)	母岩673	接合2915	198
図Ⅲ-451	D3c区の石器(20)	母岩688	接合2935(2)	166	図Ⅲ-478	D3c区の石器(47)	母岩676	接合2920(1)	199
図Ⅲ-452	D3c区の石器(21)	母岩688	接合2935(3)	167	図Ⅲ-479	D3c区の石器(48)	母岩676	接合2920(2)、	200
図Ⅲ-453	D3c区の石器(22)	母岩688	接合2935(4)	168	図Ⅲ-480	D3c区の石器(49)	母岩677	接合2922(2)	202
図Ⅲ-454	D3c区の石器(23)	母岩688	接合2935(5)	169	図Ⅲ-481	D3c区の石器(50)	母岩683	接合2929	203
図Ⅲ-455	D3c区の石器(24)	母岩692	接合2943(1)	170	図Ⅲ-482	D3c区の石器(51)	母岩687	接合2934(1)	204
図Ⅲ-456	D3c区の石器(25)	母岩692	接合2943(2)	172	図Ⅲ-483	D3c区の石器(52)	母岩687	接合2934(2)	205
図Ⅲ-457	D3c区の石器(26)	母岩692	接合2943(3)	173	図Ⅲ-484	D3c区の石器(53)	母岩748	接合3207	207
図Ⅲ-458	D3c区の石器(27)	母岩692	接合2943(4)、	174	図Ⅲ-485	D3c区の石器(54)	母岩721	接合3055(1)	208
図Ⅲ-459	D3c区の石器(28)	母岩724	接合3081(1)	175	図Ⅲ-486	D3c区の石器(55)	母岩721	接合3055(2)	209
図Ⅲ-460	D3c区の石器(29)	母岩724	接合3081(2)	176	図Ⅲ-487	D3c区の石器(56)	母岩710	接合2987(1)	210
図Ⅲ-461	D3c区の石器(30)	母岩724	接合3081(3)	177	図Ⅲ-488	D3c区の石器(57)	母岩710	接合2987(2)	211
図Ⅲ-462	D3c区の石器(31)	母岩726	接合3089(1)	178	図Ⅲ-489	D3c区の石器(58)	母岩710	接合2987(3)	212
図Ⅲ-463	D3c区の石器(32)	母岩726	接合3089(2)	179	図Ⅲ-490	D3c区の石器(59)	母岩710	接合2987(4)	213
図Ⅲ-464	D3c区の石器(33)	母岩726	接合3089(3)	180	図Ⅲ-491	D3c区の石器(60)	母岩723	接合3076(1)	215
図Ⅲ-465	D3c区の石器(34)	母岩750	接合3210(1)	181	図Ⅲ-492	D3c区の石器(61)	母岩723	接合3076(2)	216
図Ⅲ-466	D3c区の石器(35)	母岩750	接合3210(2)	182	図Ⅲ-493	D3c区の石器(62)	母岩723	接合3076(3)	217
図Ⅲ-467	D3c区の石器(36)	母岩753	接合3222(1)	184	図Ⅲ-494	D3c区の石器(63)	母岩727	接合3090(1)	218
図Ⅲ-468	D3c区の石器(37)	母岩753	接合3222(2)	185	図Ⅲ-495	D3c区の石器(64)	母岩727	接合3090(2)	219
図Ⅲ-469	D3c区の石器(38)	母岩757	接合3233(1)	186	図Ⅲ-496	D3c区の石器(65)	母岩727	接合3090(3)	220
図Ⅲ-470	D3c区の石器(39)	母岩757	接合3233(2)	187					
			接合3233(3)	188					

図Ⅲ-497	D3c区の石器(66)	母岩727	接合3090(4)	221	図Ⅲ-523	D3c区の石器(92)	母岩708	接合2977(1)	258	
図Ⅲ-498	D3c区の石器(67)	母岩680	接合2925-2926(1)	222	図Ⅲ-524	D3c区の石器(93)	母岩708	接合2977(2)	259	
図Ⅲ-499	D3c区の石器(68)	母岩680	接合2925-2926(2)	223	図Ⅲ-525	D3c区の石器(94)	母岩708	接合2977(3)、母岩707	接合2974(1)	260
図Ⅲ-500	D3c区の石器(69)	母岩680	接合2925-2926(3)	224	図Ⅲ-526	D3c区の石器(95)	母岩707	接合2974(2)、母岩689	接合2938(1)	262
図Ⅲ-501	D3c区の石器(70)	母岩709	接合2983-2984(1)	227	図Ⅲ-527	D3c区の石器(96)	母岩689	接合2938(2)	263	
図Ⅲ-502	D3c区の石器(71)	母岩709	接合2983-2984(2)、母岩719	接合3044・3045(1)	228	図Ⅲ-528	D3c区の石器(97)	母岩689	接合2938(3)	264
図Ⅲ-503	D3c区の石器(72)	母岩719	接合3044・3045(2)	229	図Ⅲ-529	D3c区の石器(98)	石刃技法・剥片生産関連	写真掲載資料(1)	266	
図Ⅲ-504	D3c区の石器(73)	母岩746	接合3190-3191(1)	230	図Ⅲ-530	D3c区の石器(99)	石刃技法・剥片生産関連	写真掲載資料(2)	267	
図Ⅲ-505	D3c区の石器(74)	母岩746	接合3190-3191(2)	231	図Ⅲ-531	D3c区の石器(100)	石刃技法母岩別接合資料分布図	268		
図Ⅲ-506	D3c区の石器(75)	母岩746	接合3190-3191(3)、母岩747	接合3197・3198(1)	232	図Ⅲ-532	F1区	接合資料分布図	270	
図Ⅲ-507	D3c区の石器(76)	母岩747	接合3197-3198(2)	233	図Ⅲ-533	Sb-46分布状況(平面・断面図)	271			
図Ⅲ-508	D3c区の石器(77)	母岩747	接合3197-3198(3)	234	図Ⅲ-534	Sb-47分布状況(平面・断面図)	272			
図Ⅲ-509	D3c区の石器(78)	母岩711	接合2998(1)	236	図Ⅲ-535	Sb-48分布状況(平面・断面図)	273			
図Ⅲ-510	D3c区の石器(79)	母岩711	接合2998(2)、母岩722	接合3061(1)	238	図Ⅲ-536	Sb-48出土遺物の分布(1)	274		
図Ⅲ-511	D3c区の石器(80)	母岩722	接合3061(2)、母岩717	接合3024+3025(1)	239	図Ⅲ-537	Sb-48出土遺物の分布(2)	275		
図Ⅲ-512	D3c区の石器(81)	母岩717	接合3024+3025(2)	240	図Ⅲ-538	Sb-48出土遺物の分布(3)	276			
図Ⅲ-513	D3c区の石器(82)	尖頭器・両面調整石器	関連写真掲載資料(1)	243	図Ⅲ-539	Sb-48出土遺物の分布(4)	277			
図Ⅲ-514	D3c区の石器(83)	尖頭器・両面調整石器	関連写真掲載資料(2)	244	図Ⅲ-540	Sb-49分布状況(平面・断面図)	278			
図Ⅲ-515	D3c区の石器(84)	尖頭器・両面調整石器	関連写真掲載資料(3)	247	図Ⅲ-541	Sb-49出土遺物の分布	279			
図Ⅲ-516	D3c区の石器(85)	尖頭器・両面調整石器	関連写真掲載資料(4)	249	図Ⅲ-542	F1区の石器(1)	石刃鏃・石鏃・尖頭器	281		
図Ⅲ-517	D3c区の石器(86)	尖頭器・両面調整石器	関連写真掲載資料(5)	250	図Ⅲ-543	F1区の石器(2)	尖頭器	282		
図Ⅲ-518	D3c区の石器(87)	尖頭器・両面調整石器	製作母岩別接合資料分布図	251	図Ⅲ-544	F1区の石器(3)	尖頭器・両面調整石器・舟底形石器	284		
図Ⅲ-519	D3c区の石器(88)	母岩668	接合2906	253	図Ⅲ-545	F1区の石器(4)	舟底形石器・彫器・削器	285		
図Ⅲ-520	D3c区の石器(89)	母岩755	接合3228	254	図Ⅲ-546	F1区の石器(5)	石刃・石刃核	287		
図Ⅲ-521	D3c区の石器(90)	母岩756	接合3232(1)	256	図Ⅲ-547	F1区の石器(6)	石核	288		
図Ⅲ-522	D3c区の石器(91)	母岩756	接合3232(2)	257	図Ⅲ-548	F1区の石器(7)	石核	289		
					図Ⅲ-549	F1区の石器(8)	母岩770	接合3559	291	
					図Ⅲ-550	F1区の石器(9)	母岩769	接合3554	292	
					図Ⅲ-551	F2区	接合資料分布図	294		
					図Ⅲ-552	Sb-50分布状況(平面・断面図)	295			
					図Ⅲ-553	Sb-50出土遺物の分布(1)	296			
					図Ⅲ-554	Sb-50出土遺物の分布(2)	297			
					図Ⅲ-555	Sb-50出土遺物の分布(3)	298			
					図Ⅲ-556	Sb-50出土遺物の分布(4)	299			
					図Ⅲ-557	Sb-51分布状況(平面・断面図)	300			
					図Ⅲ-558	Sb-51出土遺物の分布(1)	301			
					図Ⅲ-559	Sb-51出土遺物の分布(2)	302			
					図Ⅲ-560	Sb-51出土遺物の分布(3)	303			
					図Ⅲ-561	Sb-51出土遺物の分布(4)	304			
					図Ⅲ-562	Sb-52分布状況(平面・断面図)	305			

図Ⅲ-563	F2区の石器(1)	石鏃・尖頭器	308	図Ⅲ-594	F2区の石器(32)	母岩857	接合4052(1)	
図Ⅲ-564	F2区の石器(2)	尖頭器・両面調整石器	309	図Ⅲ-595	F2区の石器(33)	母岩857	接合4052(2)	348
図Ⅲ-565	F2区の石器(3)	舟底形石器	310	母岩854	接合4044			350
図Ⅲ-566	F2区の石器(4)	舟底形石器	312	図Ⅲ-596	F2区の石器(34)	尖頭器・両面調整石器		
図Ⅲ-567	F2区の石器(5)	舟底形石器・掻器	313	関連写真掲載資料(1)				352
図Ⅲ-568	F2区の石器(6)	掻器・削器・錐形石器・ 二次加工ある剥片	314	図Ⅲ-597	F2区の石器(35)	尖頭器・両面調整石器		
図Ⅲ-569	F2区の石器(7)	削片・石刃	316	関連写真掲載資料(2)				353
図Ⅲ-570	F2区の石器(8)	石刃核	318	図Ⅲ-598	F2区の石器(36)	尖頭器・両面調整石器		
図Ⅲ-571	F2区の石器(9)	石刃核	319	製作母岩別接合資料分布図				355
図Ⅲ-572	F2区の石器(10)	石刃核	320	図Ⅲ-599	F2区の石器(37)	母岩849	接合4028	357
図Ⅲ-573	F2区の石器(11)	石刃核・石核・巖石	321	図Ⅲ-600	F2区の石器(38)	母岩787	接合3581(1)	358
図Ⅲ-574	F2区の石器(12)	母岩776	接合4020(1)	図Ⅲ-601	F2区の石器(39)	母岩787	接合3581(2)	
図Ⅲ-575	F2区の石器(13)	母岩776	接合4020(2)	母岩790	接合3584(1)			359
図Ⅲ-576	F2区の石器(14)	母岩797	接合3593(1)	図Ⅲ-602	F2区の石器(40)	母岩790	接合3584(2)	360
図Ⅲ-577	F2区の石器(15)	母岩797	接合3593(2)	図Ⅲ-603	F2区の石器(41)	母岩793	接合3587	362
図Ⅲ-578	F2区の石器(16)	母岩797	接合3593(3)	図Ⅲ-604	F2区の石器(42)	母岩796	接合3592(1)	363
図Ⅲ-579	F2区の石器(17)	母岩802	接合3598(1)	図Ⅲ-605	F2区の石器(43)	母岩796	接合3592(2)	364
図Ⅲ-580	F2区の石器(18)	母岩802	接合3598(2)	図Ⅲ-606	F2区の石器(44)	母岩796	接合3592(3)	365
図Ⅲ-581	F2区の石器(19)	母岩802	接合3598(3)	図Ⅲ-607	F2区の石器(45)	母岩796	接合3592(4)	366
図Ⅲ-582	F2区の石器(20)	母岩802	接合3598(4)	図Ⅲ-608	F2区の石器(46)	母岩796	接合3592(5)	367
図Ⅲ-583	F2区の石器(21)	母岩805	接合3615(1)	図Ⅲ-609	F2区の石器(47)	母岩851	接合4035-4036 (1)	370
図Ⅲ-584	F2区の石器(22)	母岩805	接合3615(2)	図Ⅲ-610	F2区の石器(48)	母岩851	接合4035-4036 (2)	371
母岩773	接合3565(1)			図Ⅲ-611	F2区の石器(49)	母岩852	接合4037(2)	372
図Ⅲ-585	F2区の石器(23)	母岩773	接合3565(2)	母岩858	接合4065(1)			372
母岩774	接合3566(1)			図Ⅲ-612	F2区の石器(50)	母岩858	接合4065(2)	374
図Ⅲ-586	F2区の石器(24)	母岩774	接合3566(2)	母岩789	接合3583(1)			374
母岩782	接合3573(1)			図Ⅲ-613	F2区の石器(51)	母岩789	接合3583(2)	375
図Ⅲ-587	F2区の石器(25)	母岩782	接合3573(2)	母岩853	接合4041(1)			375
図Ⅲ-588	F2区の石器(26)	母岩800	接合3596	図Ⅲ-614	F2区の石器(52)	母岩853	接合4041(2)	376
母岩788	接合3582(1)			図Ⅲ-615	F2区の石器(53)	母岩788	接合3582(2)	377
図Ⅲ-589	F2区の石器(27)	母岩803	接合3601	図Ⅲ-616	F2区の石器(54)	母岩771	接合3560(1)	378
図Ⅲ-590	F2区の石器(28)	母岩848	接合4022-4023 (1)	図Ⅲ-617	F2区の石器(55)	母岩771	接合3560(2)	380
図Ⅲ-591	F2区の石器(29)	母岩848	接合4022-4023 (2)	図Ⅲ-618	F2区の石器(56)	母岩771	接合3560(3)	381
図Ⅲ-592	F2区の石器(30)	母岩850	接合4031	図Ⅲ-619	F2区の石器(57)	母岩772	接合3562(1)	382
図Ⅲ-593	F2区の石器(31)	母岩859	接合4073	図Ⅲ-620	F2区の石器(58)	母岩772	接合3562(2)	

.....	383	図Ⅲ-631	Sb-53出土遺物の分布	399		
図Ⅲ-621	F2区の石器(59) 母岩772 接合3562(3)	384	図Ⅲ-632	Sb-54分布状況(平面・断面図)	400
.....	384	図Ⅲ-633	Sb-54出土遺物の分布	401		
図Ⅲ-622	F2区の石器(60) 母岩784 接合3578(1)	386	図Ⅲ-634	Sb-55分布状況(平面・断面図)	402
.....	386	図Ⅲ-635	Sb-55出土遺物の分布	403		
図Ⅲ-623	F2区の石器(61) 母岩784 接合3578(2)	387	図Ⅲ-636	Sb-56分布状況(平面・断面図)	404
.....	387	図Ⅲ-637	Sb-57分布状況(平面・断面図)	405		
図Ⅲ-624	F2区の石器(62) 母岩777 接合3568	388	図Ⅲ-638	Sb-58分布状況(平面・断面図)	406
.....	388	図Ⅲ-639	Sb-58出土遺物の分布	407		
図Ⅲ-625	F2区の石器(63) 舟底形石器製作・石刃技法 ・剥片生産関連写真掲載資料(1)	390	図Ⅲ-640	F3区の石器(1) 尖頭器	410
.....	390	図Ⅲ-641	F3区の石器(2) 尖頭器・舟底形石器	411		
図Ⅲ-626	F2区の石器(64) 舟底形石器製作・石刃技法 ・剥片生産関連写真掲載資料(2)	391	図Ⅲ-642	F3区の石器(3) 舟底形石器	412
.....	391	図Ⅲ-643	F3区の石器(4) 両面調整石器	413		
図Ⅲ-627	F2区の石器(65) 舟底形石器製作・石刃技法 ・剥片生産関連写真掲載資料(3)	394	図Ⅲ-644	F3区の石器(5) 彫器・搔器・削器・ 二次加工ある剥片・削片	414
.....	394	図Ⅲ-645	F3区の石器(6) 石刃	416		
図Ⅲ-628	F2区の石器(66) 石刃技法母岩別接合資料分布図	395	図Ⅲ-646	F3区の石器(7) 石刃	418
.....	395	図Ⅲ-647	F3区の石器(8) 石刃・石刃核・石核	419		
図Ⅲ-629	F3区 接合資料分布図	397				
.....	397						
図Ⅲ-630	Sb-53分布状況(平面・断面図)	398				

第3分冊(本文Ⅲ章・石器実測・分布図編)表目次

Ⅲ章 遺構と遺物

表Ⅲ-19	母岩番号順挿入・図版一覧表	421
-------	---------------	-------	-----

III 遺構と遺物

(5) D3b・c区 (b区: Sb-40, c区: Sb-41～45) の石器

① 石器ブロックの分布

ブロック間接合状況(図Ⅲ-314～316)

D3b・c区は調査区のはほぼ中央に位置する。西側はD3a区と接し北東側は深い沢状地形を挟んだ対岸にF1区が位置する。ブロック範囲の設定はⅢ章2節1項で説明したように、密度分布、組成器種の分布、接合資料の分布を基準としている。なお、図Ⅲ-314～316の折れ接・剥離面接合資料の接合線を表示した分布図であるが、隣接区域に分布する遺物であっても当該区域遺物と接合関係を有する資料については遺物点・接合線を表示している。

各ブロックともブロック内接合を主体とし、特に遺物集中域を中心とした接合関係が認められる。但し、Sb-40・41については接合関係の大半が傾斜方向に認められ、ソリフラクションと沢状地形の影響を受け、本来遺棄された原位置から地形に沿って大きく移動したものと判断される。そのため遺物分布を検討する際は、原位置では石器群毎で個別に形成されていた分布集中範囲が、一つの大きな帯状の分布へと移動した状況を考慮する必要がある。

ブロック間接合は主に隣接ブロックとの間で確認できるが、Sb-37・40・41間では主体とするブロックから若干数が隣接ブロックの近接範囲に点在する内容で認められ、各区が単独でまとまる、排他的な状況にあると看取できた。D3c区Sb-41～42の間には接合距離8mを越える複数のブロック間接合が認められる。

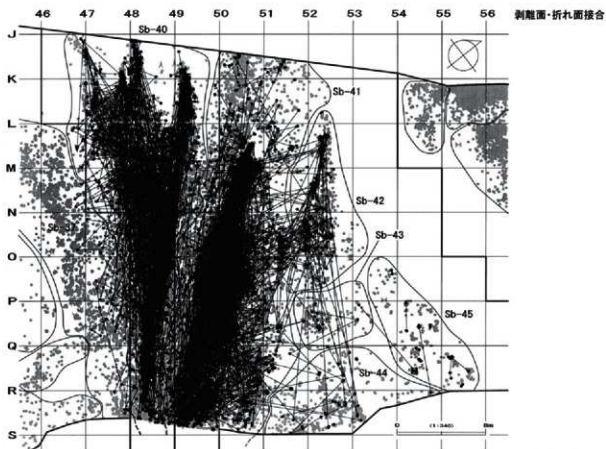
Sb-40(図Ⅲ-317～324)

Sb-40はD3b区に位置し、規模は35.4×12.2m、面積は261.9㎡を測る。遺物分布はJ46～49区からS48区へ収束する、密度の非常に高い帯状の集中域として認めることができる。出土総点数は19,002点・144,905.2gで、この内剥片が18,271点・96.2%、石刃・縦長剥片が352点・1.9%を占める。また剥片の2,478点(13.6%)、石刃・縦長剥片の69点(19.6%)に剥離面接合関係がみられる。主な出土遺物には尖頭器・両面調整石器(96点)、搔器(39点)、削器(58点)、石刃核・石核(60点)があり、尖頭器類と石刃石器の出土量が多い。各器種ともブロック範囲全体から出土し、特定の集中範囲等は見出せない。出土遺物の内容から、有舌尖頭器石器群やホロカ型器を伴う石器群が混在するブロックと考えられる。

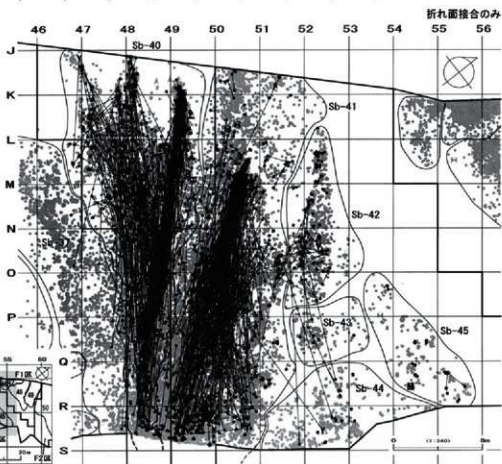
Sb-41(図Ⅲ-325～333)

Sb-41はD3c区南西側に位置し、規模は35.2×11.7m、面積は323.7㎡を測る。遺物分布はJ50・51区からS48・49区へ続く、密度の非常に高い帯状の集中域として認めることができる。平面分布で細分を試みるならば、L50～L49区、N50～Q48区、Q50～R49区など、北から南に続く幾つかの帯状の単位に区分が可能かもしれない。出土総点数は26,526点・241,766.9gで、その内剥片が25,538点・96.3%、石刃・縦長剥片が681点・2.6%を占める。また剥片の3,308点(13.0%)、石刃・縦長剥片の174点(25.6%)に剥離面接合関係がみられる。主な出土遺物には尖頭器・両面調整石器(88点)、舟底形石器(7点)、彫器(7点)、搔器(19点)、削器(31点)、細石刃(5点)、石刃核・石核(35点)があり、Sb-40と同様に尖頭器類と石刃石器の出土量が多い。また尖頭器にはⅢ類(有舌尖頭器)が5点含まれる。搔器・削器・細石刃・舟底形石器・石刃はブロックの南東側、Pライン以下にまとまり、特に大型石刃と並行剥離で刃部調整した削器が同範囲に集中している。出土遺物の内容から、有舌尖頭器

2 遺物

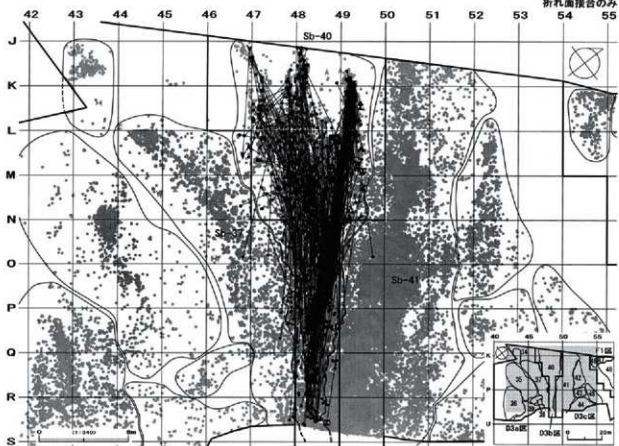
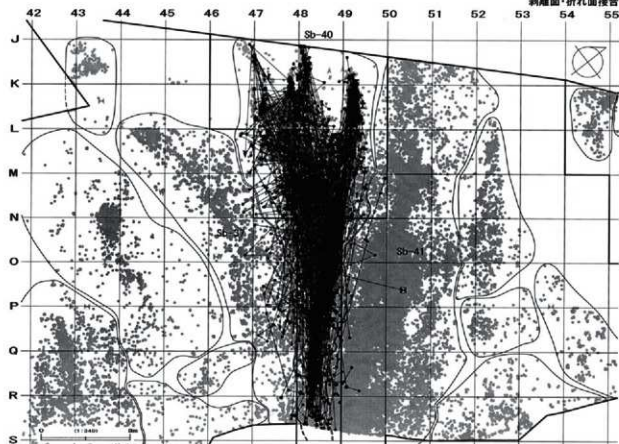


剥離面・折れ面接合



折れ面接合のみ

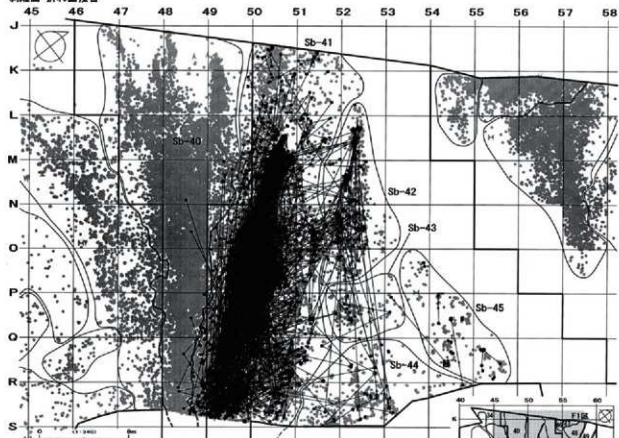
図Ⅲ-314 D3b・c区 接合資料分布図



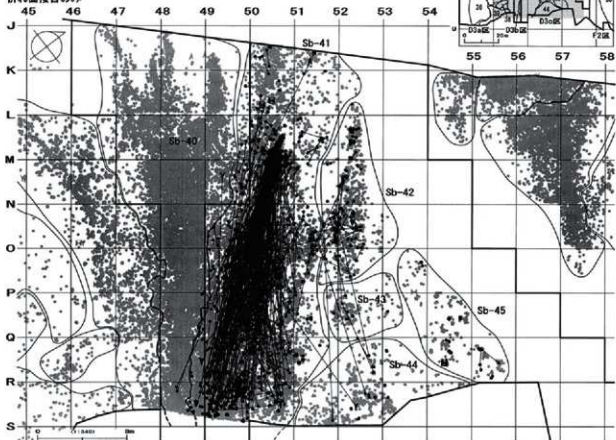
図Ⅲ-315 D3b区 接合資料分布図

2 遺 物

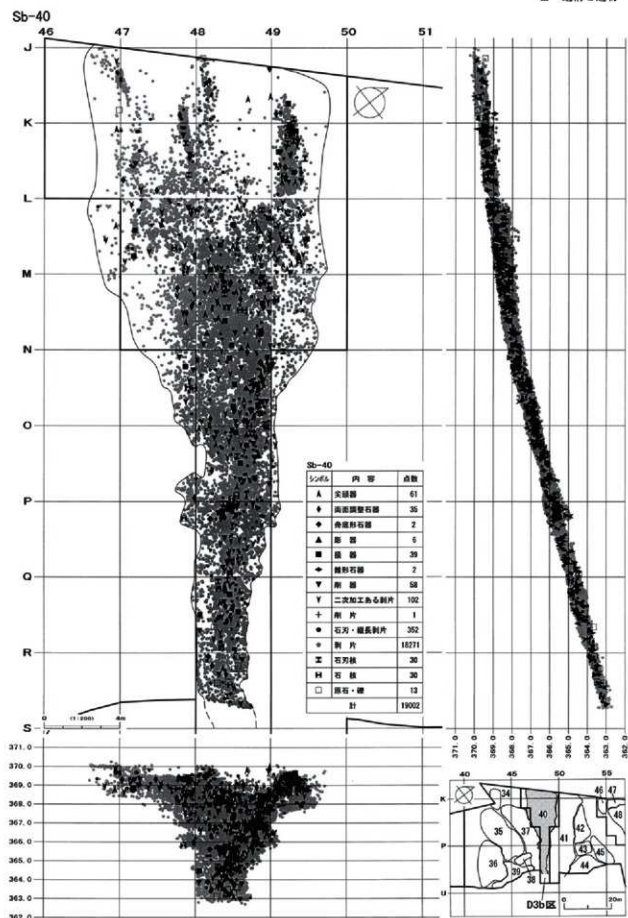
剥離面・折れ面接合



折れ面接合のみ

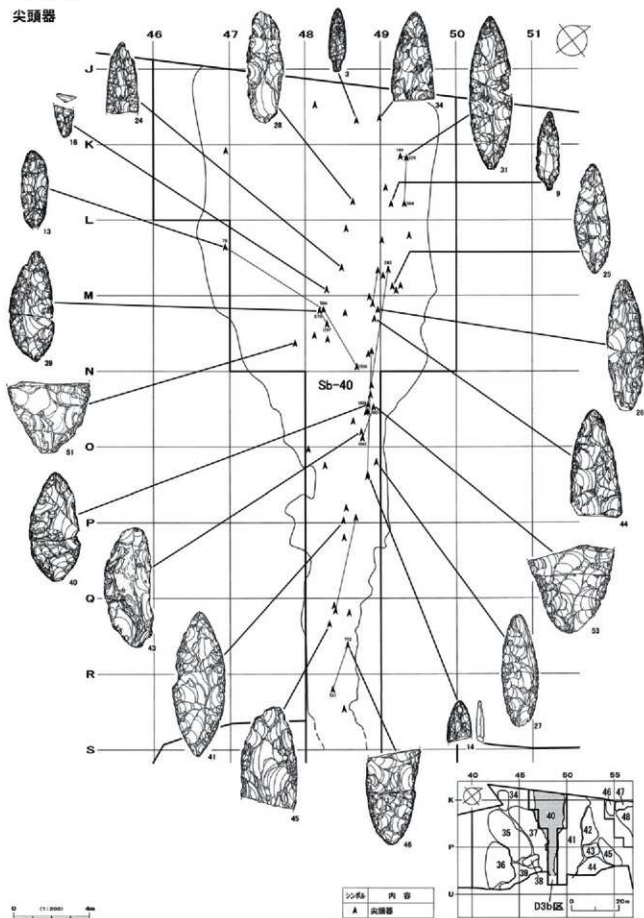


図Ⅲ-316 D3c区 接合資料分布図



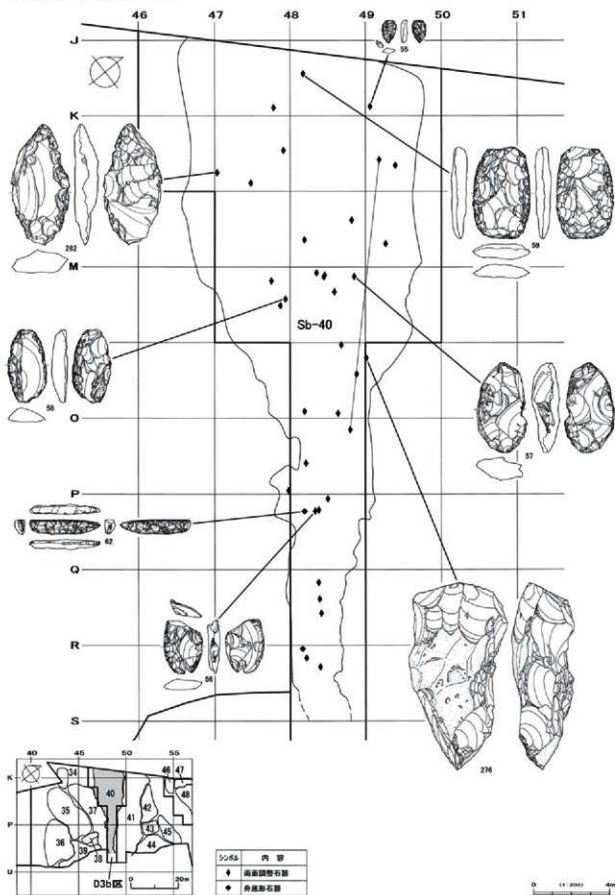
図III-317 Sb-40分布状況(平面・断面図)

2 遺物
尖頭器



図Ⅲ-318 Sb-40 出土遺物の分布 (1)

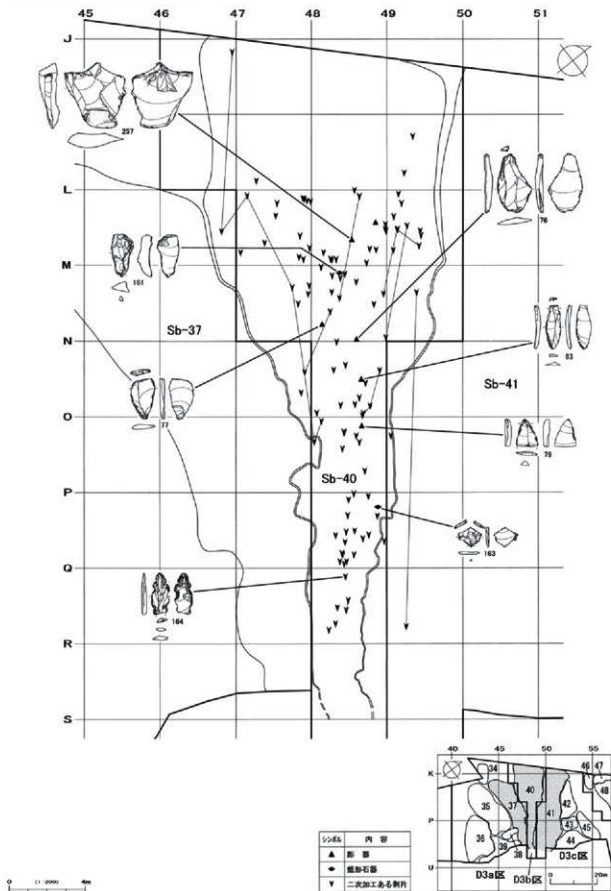
両面調整石器・舟底形石器



図III-319 Sb-40 出土遺物の分布(2)

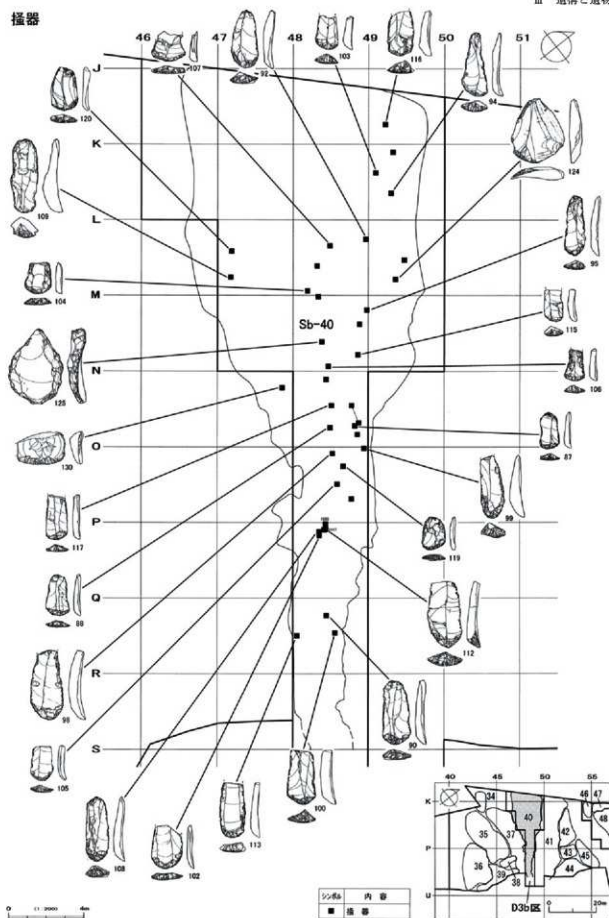
2 遺物

彫器・錐形石器・二次加工ある剥片



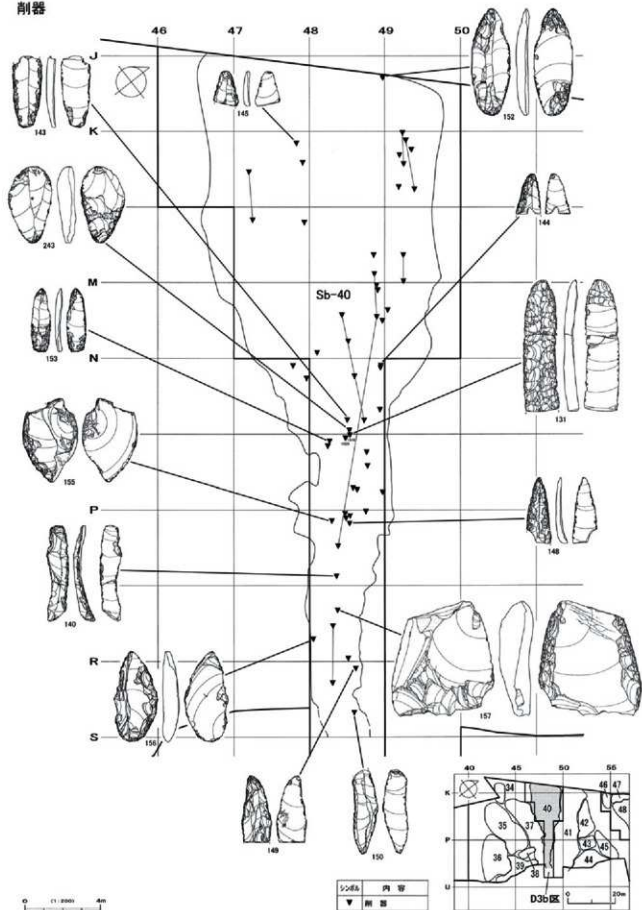
図Ⅲ-320 Sb-40 出土遺物の分布 (3)

搔器



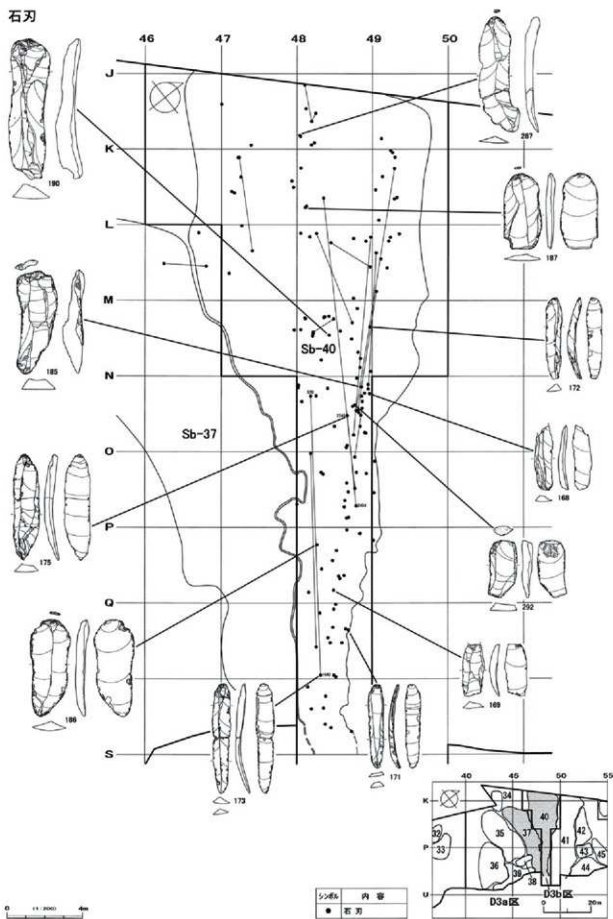
図III-321 Sb-40 出土遺物の分布 (4)

2 遺物
 削器



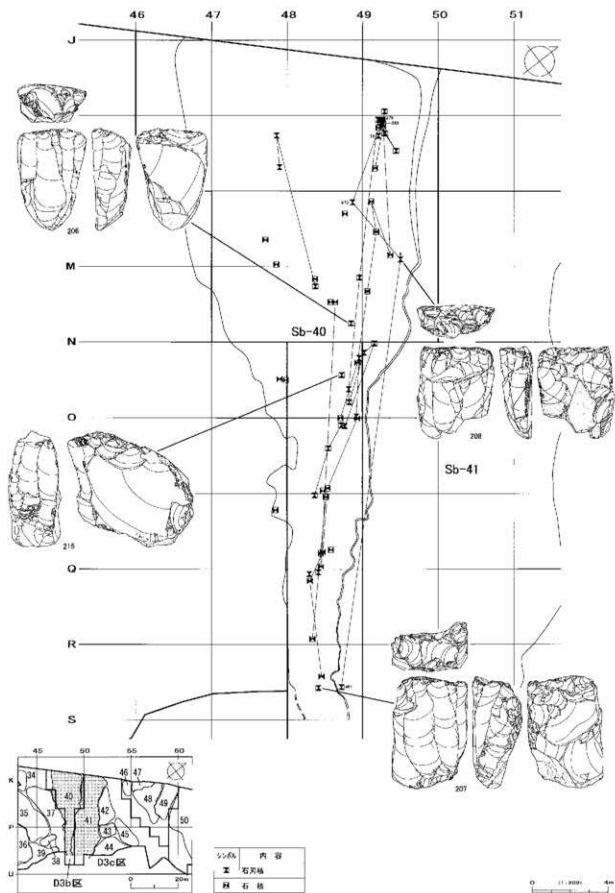
図三-322 Sb-40 出土遺物の分布 (5)

石刃

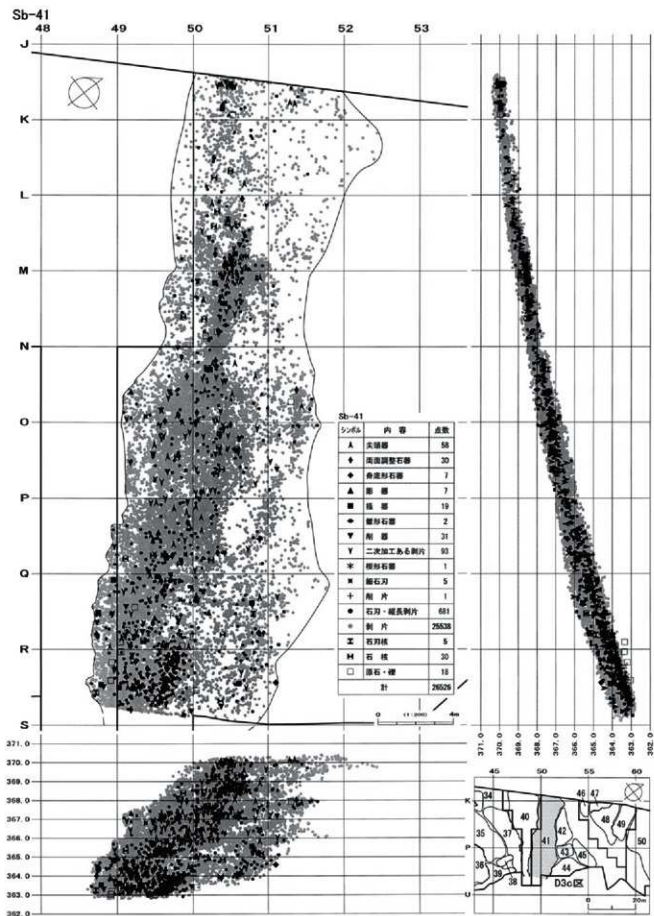


図Ⅲ-323 Sb-40 出土遺物の分布 (6)

石刃核・石核

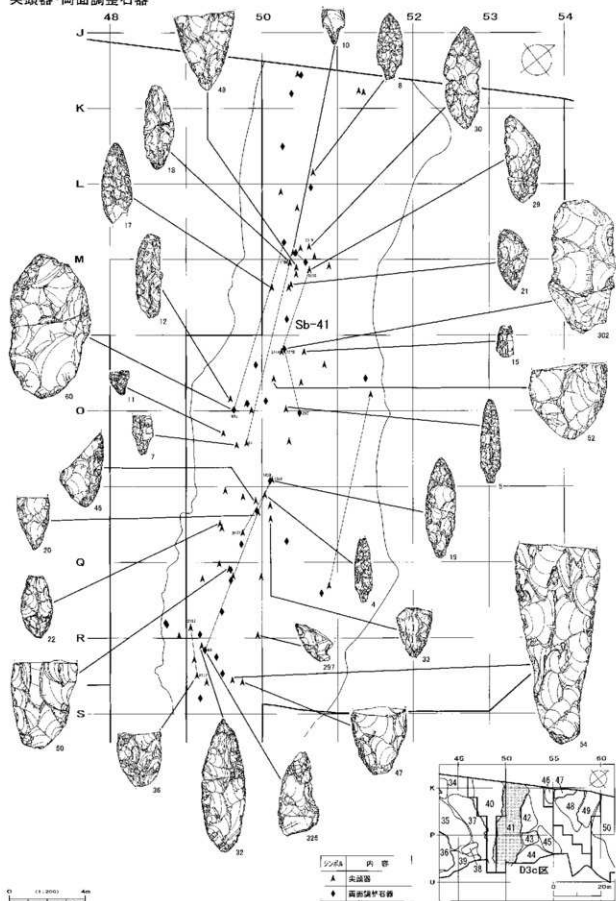


図Ⅲ-324 Sb-40 出土遺物の分布(7)



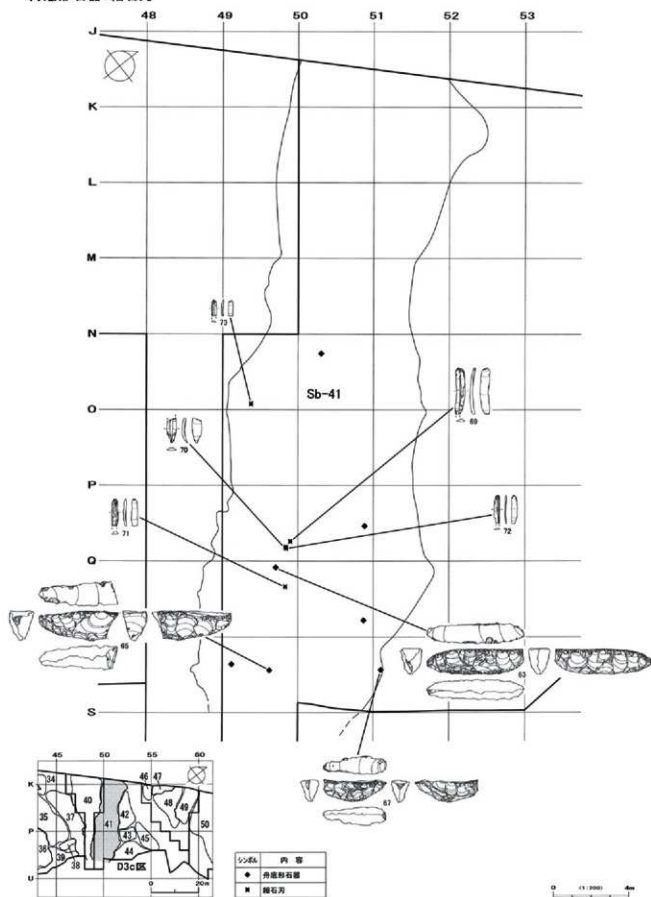
図Ⅲ-325 Sb-41 分布状況(平面・断面図)

尖頭器・両面調整石器



図Ⅲ-326 Sb-41 出土遺物の分布 (1)

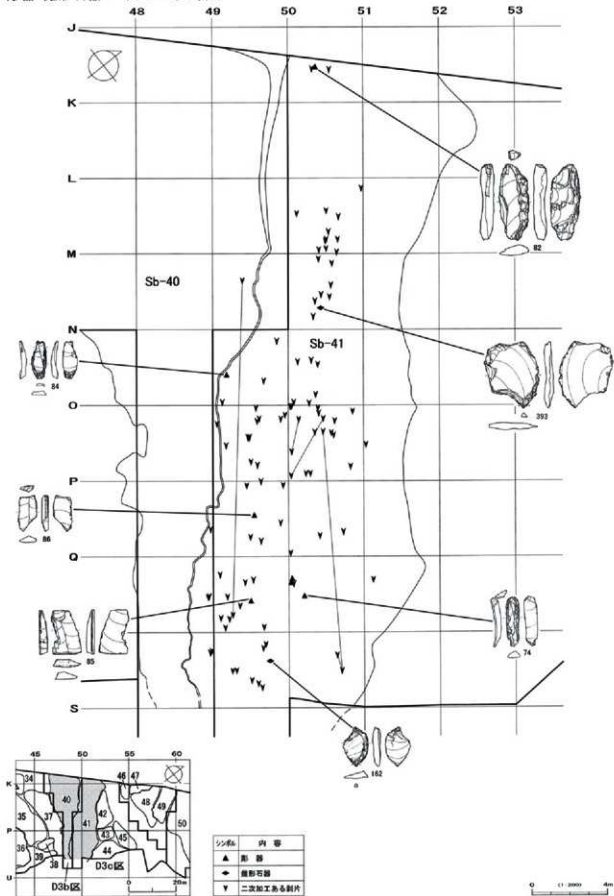
舟底形石器・細石刃



図Ⅲ-327 Sb-41 出土遺物の分布(2)

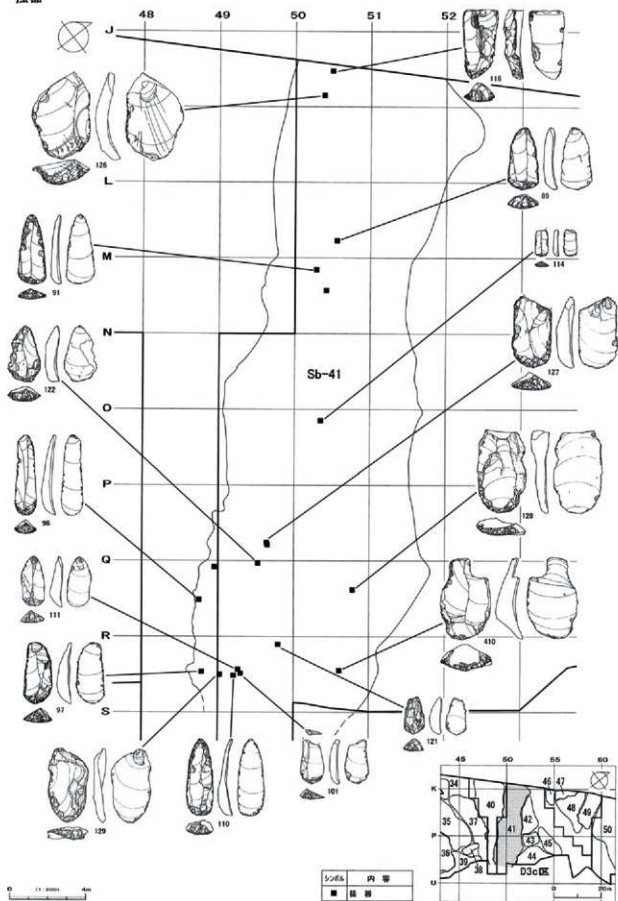
2 遺物

彫器・錐形石器・二次加工ある剥片

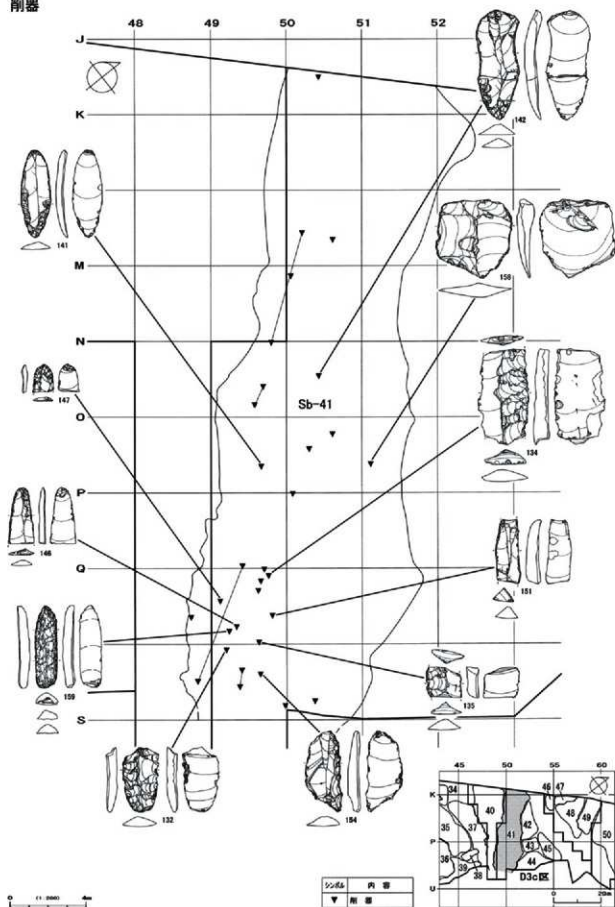


図Ⅲ-328 Sb-41 出土遺物の分布(3)

石器

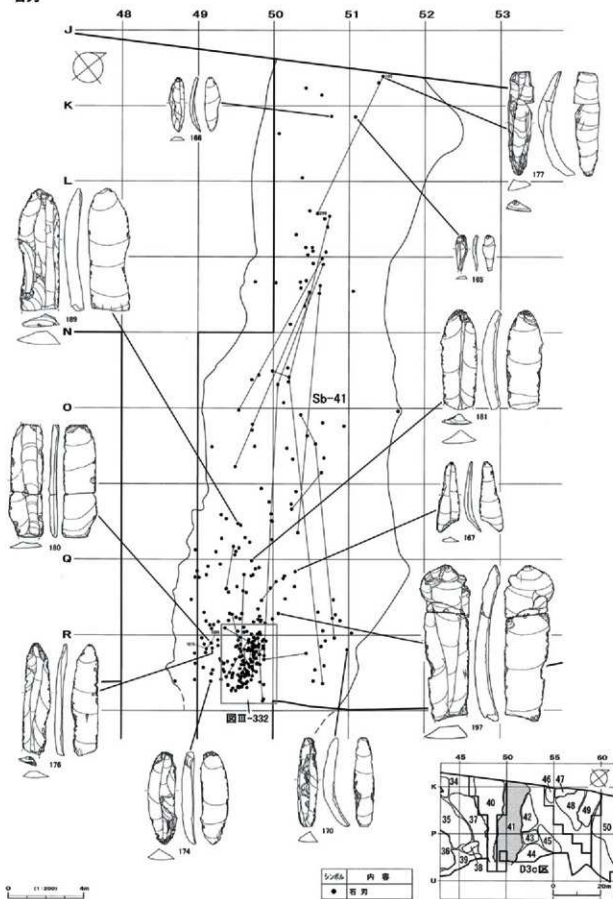


図Ⅲ-329 Sb-41 出土遺物の分布(4)



図Ⅲ-330 Sb-41 出土遺物の分布 (5)

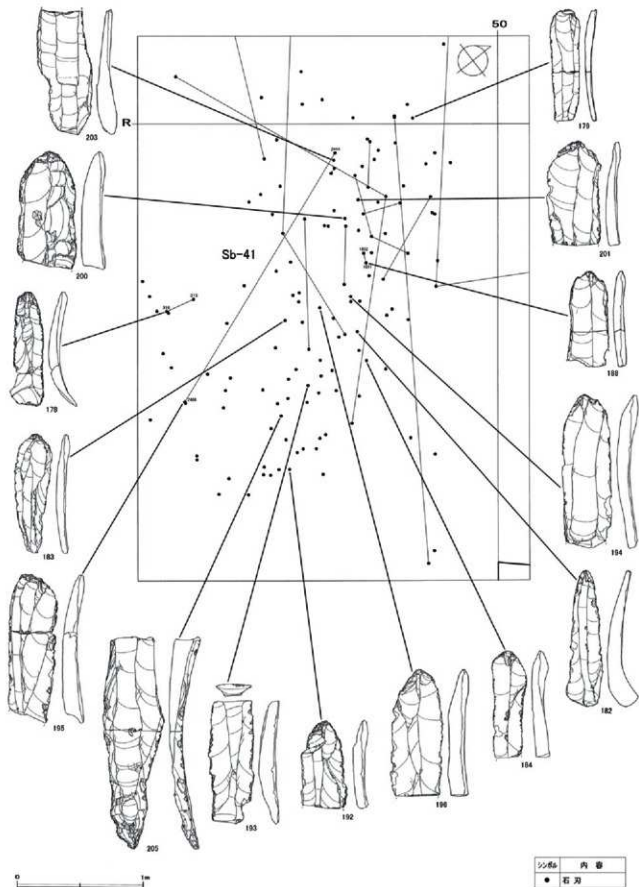
石刃



図Ⅲ-331 Sb-41 出土遺物の分布 (6)

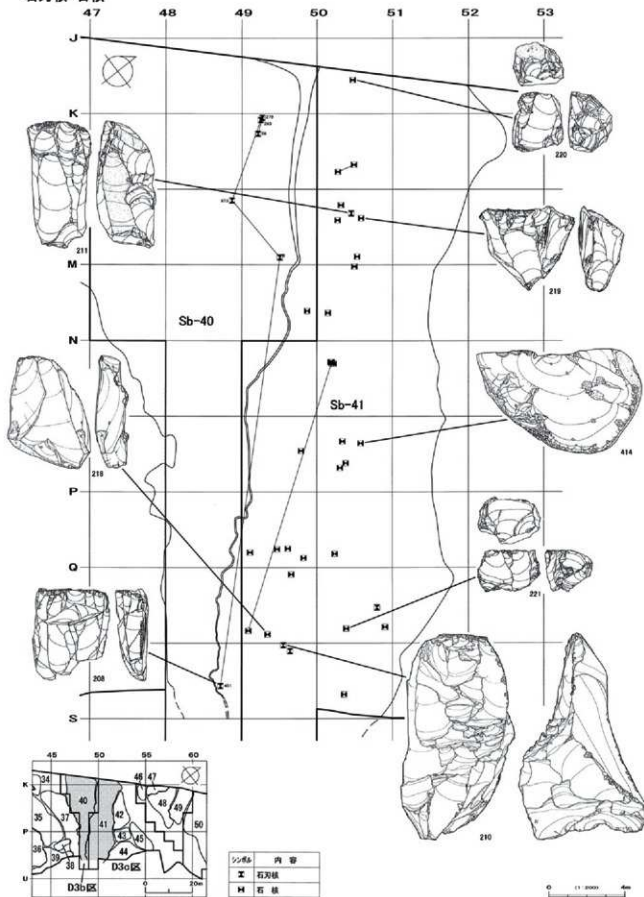
2 遺物

石刃 (拡大)



図Ⅲ-332 Sb-41 出土遺物の分布 (7)

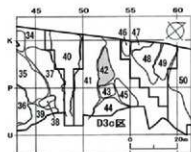
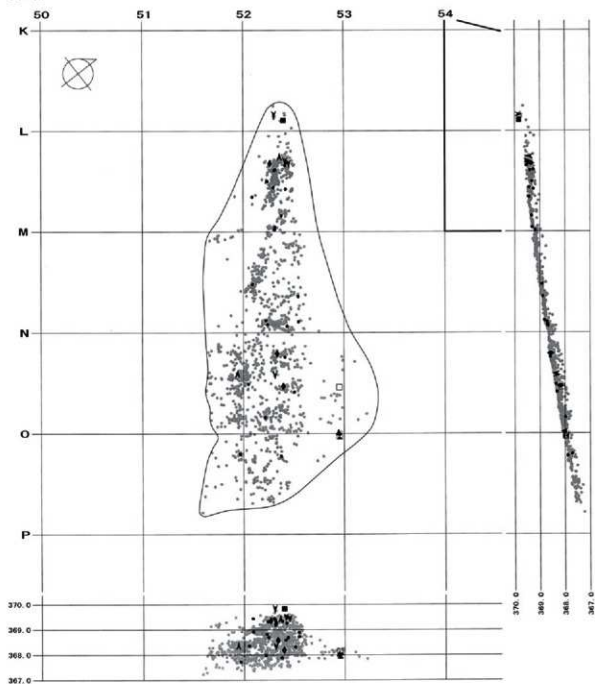
石刃核・石核



図III-333 Sb-41 出土遺物の分布 (8)

2 遺物

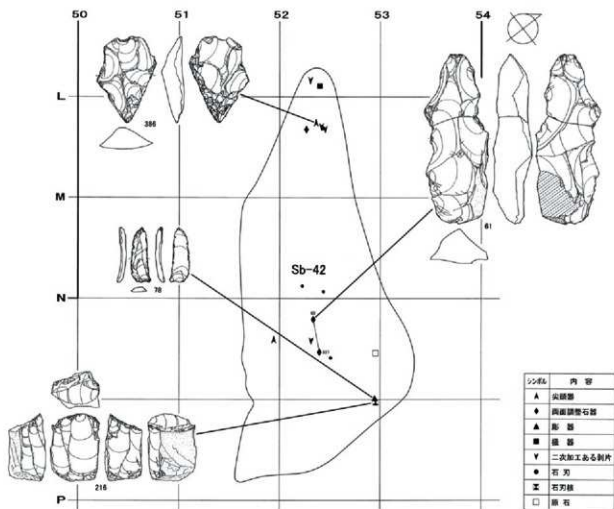
Sb-42



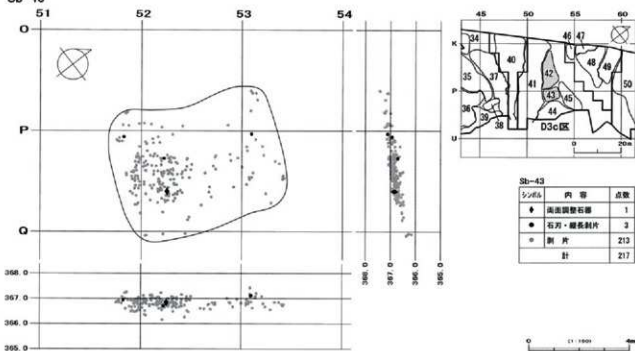
Sb-42

記号	内容	点数
A	尖頭鏟	2
◆	四面磨製石器	3
▲	新 器	1
■	銼 器	1
▽	二次加工尖石削片	4
●	石刀、燧石削片	23
○	削 片	1418
□	石刀核	1
□	燧石	1
	計	1454

図Ⅲ-334 Sb-42分布状況(平面・断面図)



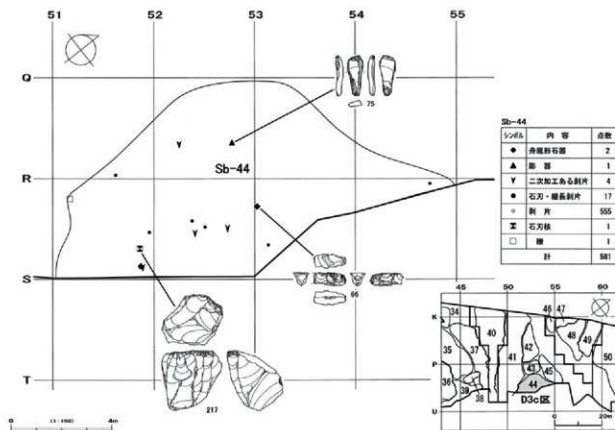
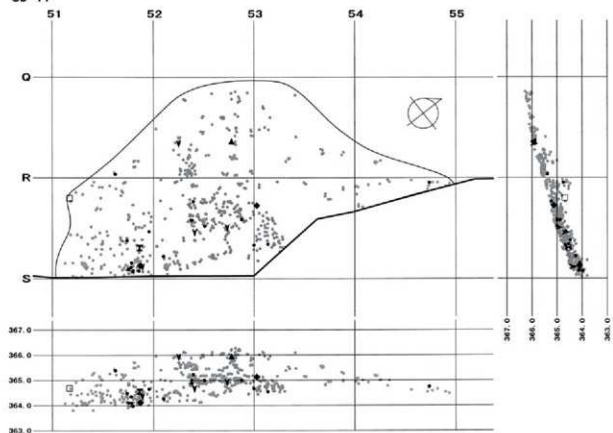
Sb-43



図Ⅲ-335 Sb-42・43分布状況(平面・断面図)

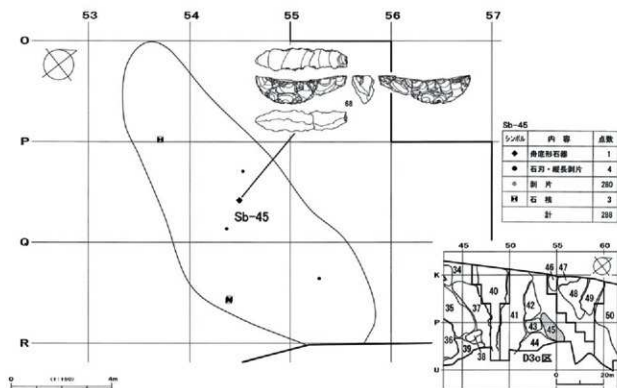
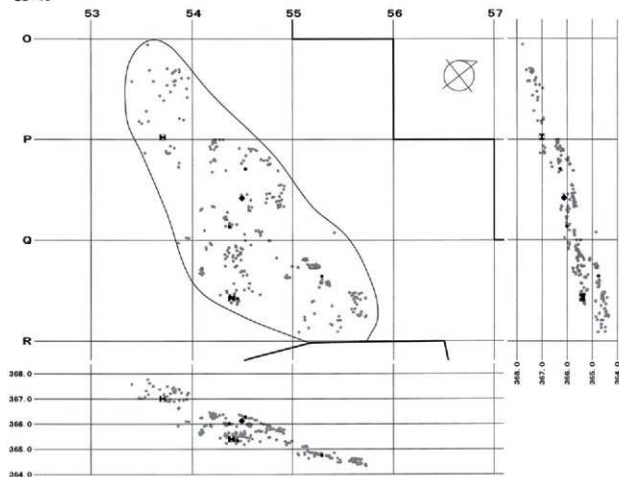
2 遺物

Sb-44



图Ⅱ-336 Sb-44 分布状况(平面・断面图)

Sb-45



図Ⅲ-337 Sb-45分布状況(平面・断面図)

石器群やホロカ型彫器を伴う石器群が混在するブロックと考えられる。

Sb-42(図Ⅲ-334・335)

Sb-42はD3c区の中央部に位置し、規模は16.7×6.9m、面積は73.5㎡を測る。遺物分布は地形傾斜に沿って北西から南東方向へ連なるように認められ、特にL52区とN52区周辺にやや密度の高い範囲が認められる。出土総点数は1,454点・25,495.1gで、その内剥片が1,418点・97.5%、石刃・縦長剥片が23点・1.6%を占める。また剥片の152点(10.7%)、縦長剥片の2点(8.7%)に剥離面接合関係がみられる。主な出土遺物には尖頭器・両面調整石器(5点)がある。ツール類の分布はL52区周辺とN52区周辺の2か所にまとまっている。

Sb-43(図Ⅲ-335)

Sb-43はD3c区の中央部に位置し、規模は6.8×5.4m、面積は33.0㎡を測る。遺物分布はP52区南西側にまとまりが認められる。出土総点数は217点・1,225.4gで、その内剥片が213点・98.2%、石刃・縦長剥片が3点・1.4%を占める。また剥片の8点(3.8%)に剥離面接合関係がみられるが、接合率は低い。主な出土遺物には両面調整石器が1点みられる。

Sb-44(図Ⅲ-336)

Sb-44はD3c区の東部、段丘崖の縁辺に位置し、規模は16.2×7.8m、面積は72.6㎡を測る。遺物分布はブロック南西側に多くみられる。出土総点数は581点・2,940.3gで、その内剥片が555点・95.5%、石刃・縦長剥片が17点・2.9%を占める。また剥片の24点(4.3%)、石刃の1点に剥離面接合関係がみられる。主な出土遺物には舟底形石器(2点)、彫器(1点)、石刃核(1点)がある。出土遺物の特徴からは小型舟底形石器石器群を主体としたブロックと考えられる。

Sb-45(図Ⅲ-337)

Sb-45はD3c区の北東部、深い沢地形の縁辺に位置し、規模は14.8×5.6m、面積は60.3㎡を測る。遺物分布はブロック全体に散在する様にみられる。出土総点数は288点・2,779.5gで、その内剥片が280点・97.2%、石刃・縦長剥片が4点・1.4%を占める。また剥片の7点(2.5%)に剥離面接合関係がみられるが、接合率は低い。主な出土遺物には舟底形石器Ⅱa類(1点)・石核(3点)がある。

② 出土石器(表Ⅲ-1~7)

出土した遺物はD3b区で表土・Ⅱ層をあわせ、石鏃(1点)、尖頭器(Ⅰ類78点・Ⅲ類4点)、両面調整石器(Ⅰ類46点)、舟底形石器(Ⅰb類1点・Ⅱa類1点・Ⅱ類1点)、彫器(8点)、搔器(43点)、削器(74点)、錐形石器(2点)、二次加工ある剥片(105点)、石刃(164点)、縦長剥片(199点)、石刃核(36点)、石核(37点)、削片(4点)、剥片(48,828点)、原石(7点)、礫(6点)がある。他の区域と比較して尖頭器・両面調整石器、搔器、削器などが多く認められる。総点数は49,645点、総重量は209,919.3gである。層位・取り上げ方法別の内訳はⅡ層土取り遺物19,004点・144,908.4g、表土一括遺物4,241点・33,253.8g、Ⅱ層一括遺物26,396点・30,820.9g、ボサ遺物4点・936.2gである。

石器石材には黒曜石(49,620点)、頁岩(16点)、安山岩(1点)、チャート(1点)、珪岩(1点)、めのう(2点)、砂岩(3点)、粘板岩(1点)がみられる。黒曜石が圧倒的に多く、99.9%以上を占める。黒曜石を石質細分すると、黒曜石1(10,121点・51.7%)、黒曜石2(26点・0.1%)、黒曜石3(2,855点・14.6%)、黒曜石4(3,736点・19.1%)、黒曜石5(2,857点・14.6%)の割合となる。括弧内の数値は石質を確認した資料数を分母に算出している。

D3c区では石鏃(1点)、尖頭器(Ⅰ類68点・Ⅲ類6点)、両面調整石器(Ⅰ類46点)、舟底形石器(Ⅱa類5点・Ⅱb類3点・Ⅱ類4点)、細石刃(6点)、彫器(13点)、搔器(24点)、削器(49点)、錐形石器(3

点)、二次加工ある剥片(115点)、楔形石器(1点)、石刃(353点)、縦長剥片(425点)、石刃核(8点)、石核(50点)、削片(4点)、剥片(71,459点)、原石(10点)、礫(10点)がある。総点数は72,663点、総重量は394,092.3gである。層位・取り上げ方法別の内訳はⅡ層位取り遺物29,066点・274,207.2g、表土一括遺物8,572点・57,305.2g、Ⅱ層一括遺物34,930点・59,071.7g、ボサ遺物92点・3,449.2g、排土遺物3点・59.0gである。

石器石材には黒曜石(72,642点)、頁岩(12点)、安山岩(1点)、めのう(3点)、碧玉(2点)、粘板岩(3点)がみられる。黒曜石が圧倒的に多く、99.9%以上を占める。黒曜石を石質細分すると、黒曜石1(10,544点・35.0%)、黒曜石2(33点・0.1%)、黒曜石3(6,468点・21.5%)、黒曜石4(7,817点・26.0%)、黒曜石5(5,227点・17.4%)の割合となる。括弧内の数値は石質を確認した資料数を分母に算出している。

D3b・c区は隣接区域で遺物の平面分布が連続している。両区とも複数の石器群が混在するとみられるが、その内容は両区にはほぼ同一の石器群が分布する状況と捉えられた。接合資料の分布状況(図Ⅲ-315・316)をみれば区域の分離はある程度可能だが、多数を占める非接合資料を含めれば厳密な分離は困難と判断された。よって単体資料についてはD3b・c区としてまとめて掲載することとし、各資料の実測図右下に区名を記載することとした。

混在石器群の抽出については、主に石器形態、製作技術等から検討を行い、有舌尖頭器石器群、小型舟底形石器石器群、ホロカ型彫器を伴う石器群の存在が考えられた。しかし、①遺物分布にはソリフラクションの強い影響が考えられるため出土地点による共伴性の指摘が困難であること、②大多数の資料が非接合資料であること、③形態的特徴から石器群を判断できるものは一部の特徴的な石器に限られることから、石器群としてまとめた資料を分離することはできなかった。但し、接合資料の復元状況からは、有舌尖頭器石器群が主体的に出土していることが推測される。

石 鐮(図Ⅲ-338-1・2、図版168)

石鐮は表土・Ⅱ層を含め2点・2個体が出土し全て図示した。石材は2点とも黒曜石1である。形態は1が正三角形、2は二等辺三角形を呈し、基底部は若干内湾気味である。2の先端部は細かな加工により錐状の突出部が形成されている。

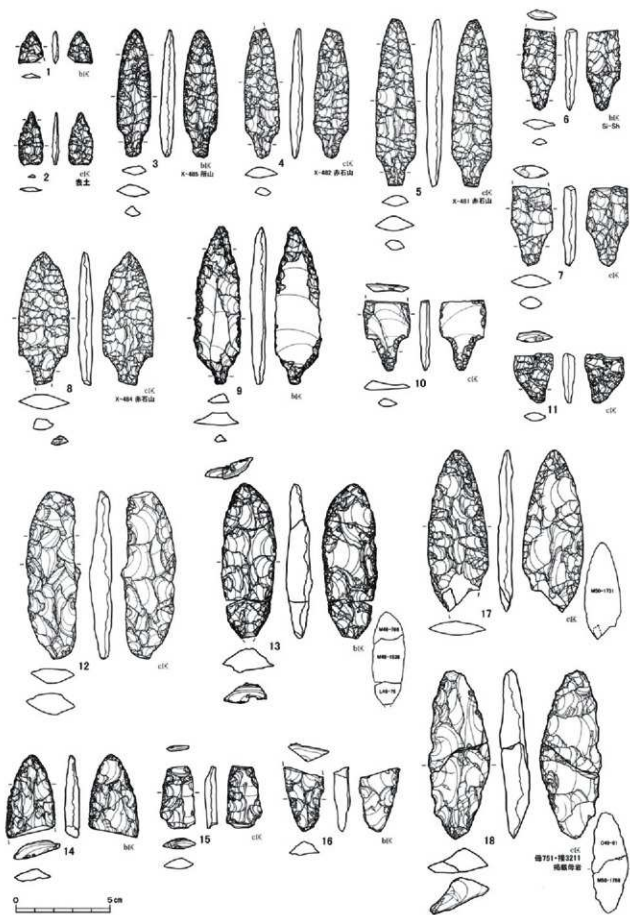
尖頭器(図Ⅲ-338-3～図Ⅲ-345-54、図版168～173)

尖頭器は表土・Ⅱ層を含め155点・128個体が出土し69点・52個体を図示した。類型別の出土点数は、Ⅰ類(舌部・削片剥離のないもの)が145点・118個体(b区:59個体、c区:59個体)、Ⅲ類(有舌尖頭器)が10点・10個体(b区:3個体、c区:7個体)である。b・c区からは等量の出土がみられ、類型・形態・大きさについても区域間で大きな差異は認められない。石材は黒曜石が大多数を占める他、頁岩が2点みられる。特に黒曜石1(68点)・黒曜石4(43点)が多く利用されている。素材は原石(核)と剥片の両者がみられる。大きさは長さ10cm未満・幅3cm未満の小型から、幅6.5cmを超える大型まであり、幅6cm前後の資料にも丁寧な剥離を受けるものがみられる。但し、主体となるのは長さ10～15cm・幅3～4.5cm・厚さ0.8cm程度の小・中型品である。剥離面接合関係を有するものは25点・22個体、尖頭器全体の17%程度で、Ⅰ類の幅4.5cmを超える大型品が主体である。

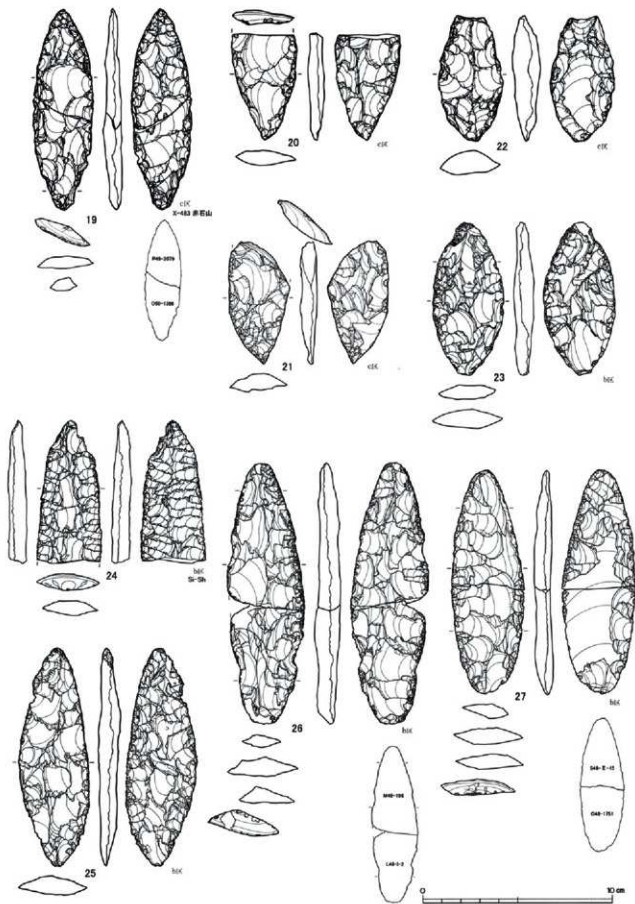
産地分析を定形的な5点の資料について行い、Ⅰ類では19が「赤石山」、Ⅱ類では3が「所山」、4・5・8が「赤石山」、の判定結果を得た。

3～11はⅢ類・有舌尖頭器である。3～7は幅2.5cm未満の細身で、完形の3～5の長幅比は3.5を超える。カエシが不明瞭で肩部から緩やかに内湾して舌部へ続く。8は幅2.5cmで長幅比が2.5程度の幅広のもの。肩部から舌部への屈曲が強い。9・10は縁調整を主体とし広く素材面を残すもの。9は

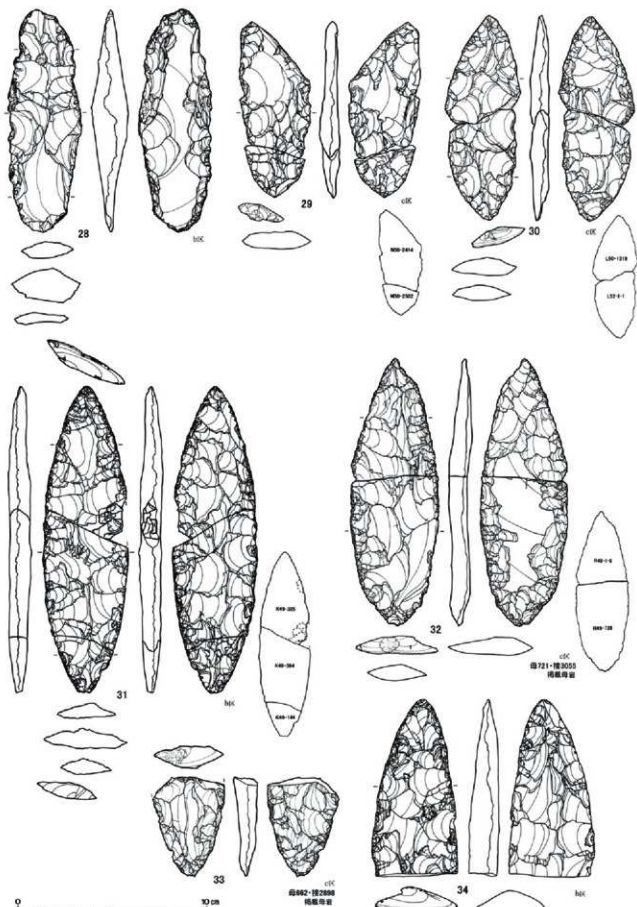
2 遺物



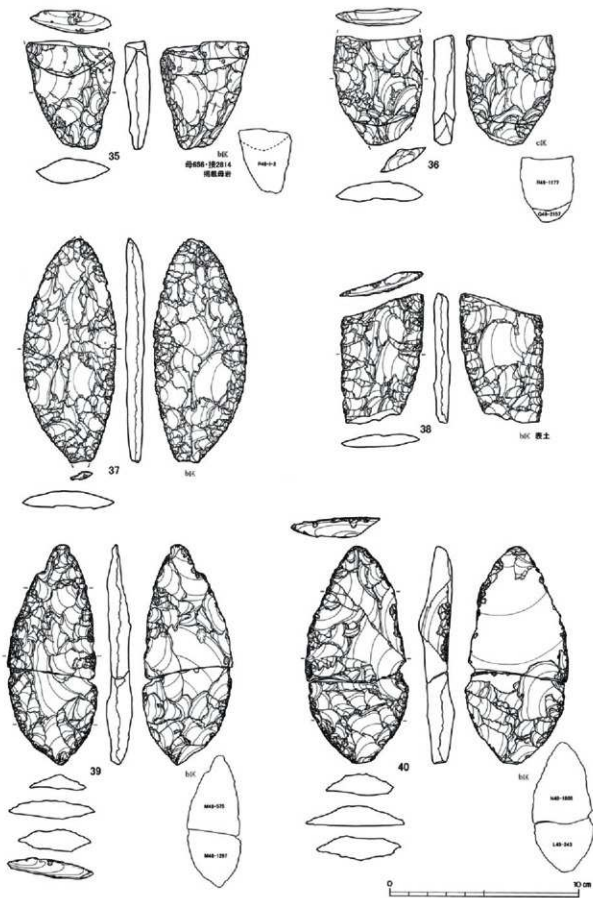
図Ⅲ-338 D3b・c区の石器(1) 石鏃・尖頭器



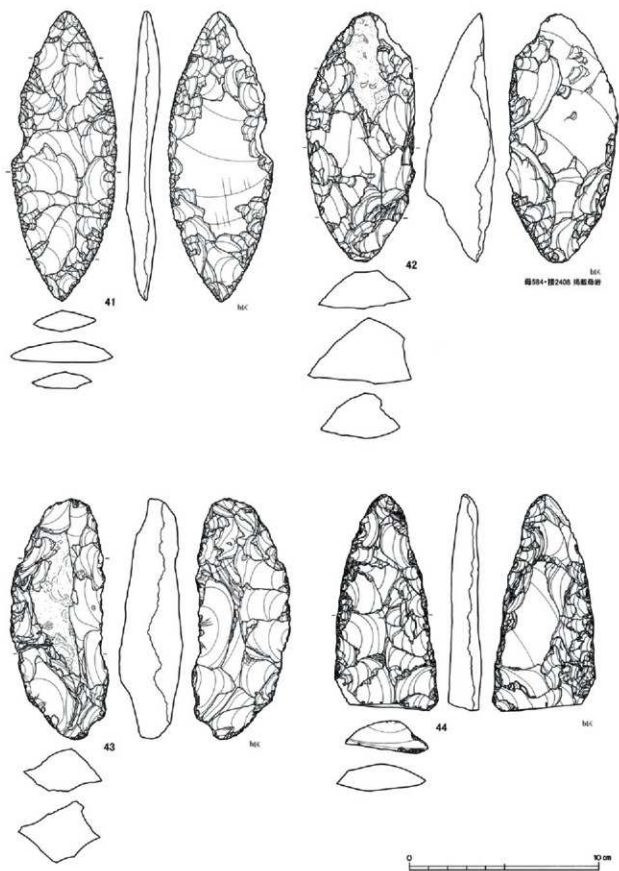
図Ⅲ-339 D3b・c区の石器(2) 尖頭器



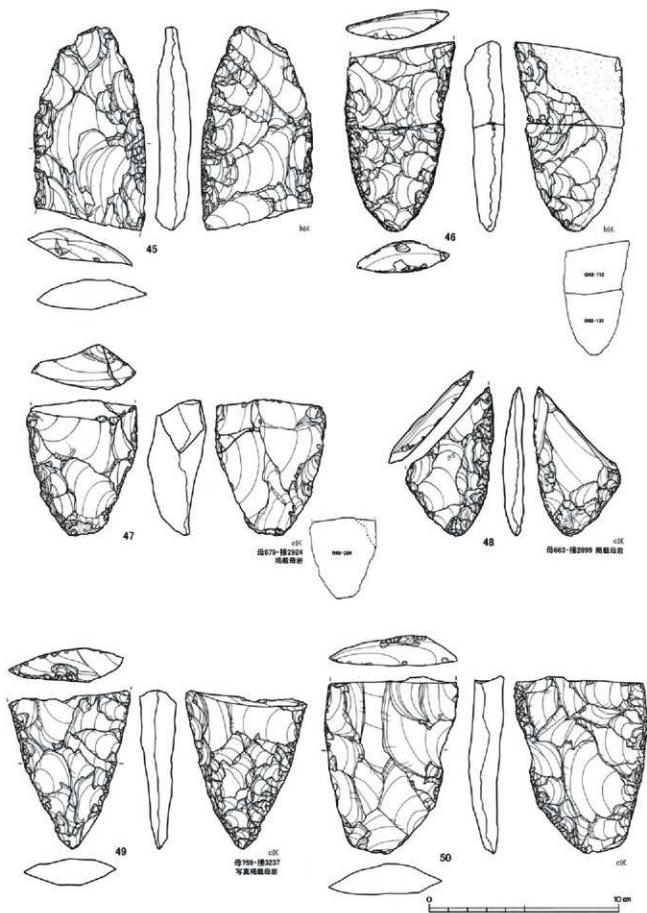
図Ⅲ-340 D3b・c区の石器(3) 尖頭器



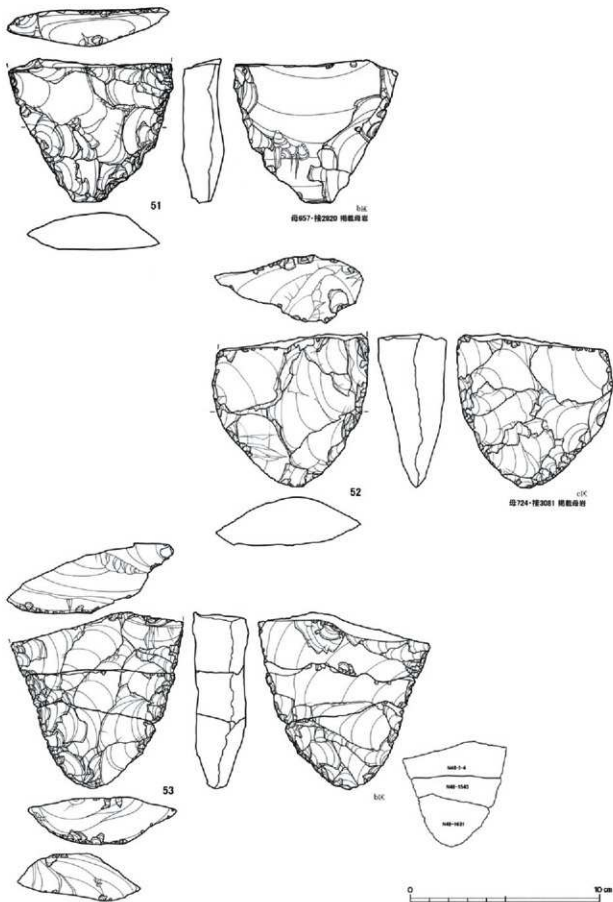
図III-341 D3b・c区 of 石器(4) 尖頭器



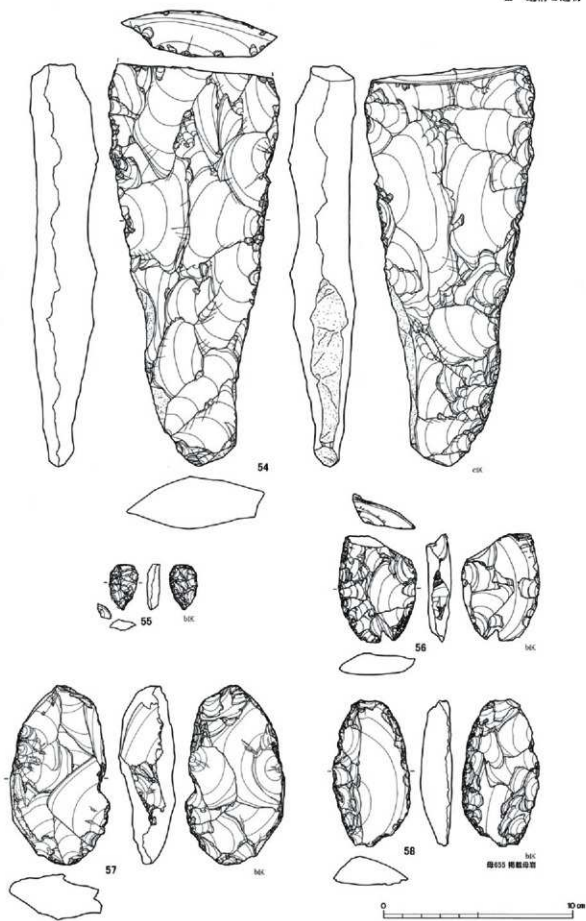
図Ⅱ-342 D3b・c区の石器(5) 尖頭器



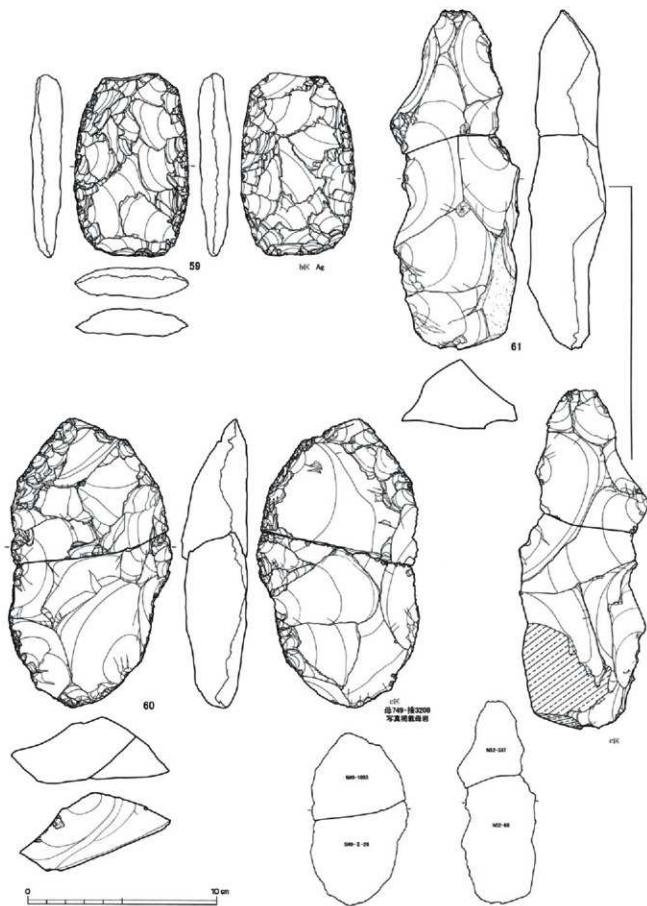
図III-343 D3b・c区の石器(6) 尖頭器



図Ⅱ-344 D3b・c区 of 石器 (7) 尖頭器



図Ⅲ-345 D3b・c区の石器(8) 尖頭器・両面調整石器



図Ⅲ-346 D3b・c区の石器(9) 両面調整石器

先端部右側縁の加工が急角度に入り、平面形状が左右非対称となっている。10は肩部から舌部への屈曲が強く明瞭に作り出されている。3～8の有舌尖頭器の器体調整は右下がりの斜並行剥離を主体としており、縁辺形状は直線的で整っている。

12～54はI類尖頭器である。以下幅を基準とした大きさの順に記載していく。

12～16は幅3cm未満で長さ9cm以下の小型のもの。12は左側縁に比べ右側縁の加工が大型で粗い。13はヒンジのために厚みが除去しきれておらず、裏面は凹凸が激しい。14は平坦剥離を主体とした精緻な加工がみられる。15は縦長剥片を素材として細身に加工されており、有舌尖頭器未成品の可能性がある。

17～23は幅3.0～3.5cm程度のもので、長さは10cm以下が主体である。17・19は薄手の調整により器面が整えられ、端正な形状である。18は厚さが1cm以上あり、粗い加工の段階で破損している。22・23は長幅比が2.5以下の幅広のもの。23は器面が整えられ縁辺も鋭利に加工されるが、22は加工が粗く縁辺も不整で全体に厚みを残したまま遺棄されている。

24～30は幅3.5～4.0cm程度のもので、長さは10～15cmが主体である。24は頁岩製で非常に整った右上がりの斜並行剥離によって器面調整されている。25は裏面に細かな平坦剥離が多用されている。26は下半部左側縁の剥離が大型で且つ厚みが残っており、この箇所への剥離が原因で破損している。27・28は素材腹面を広く残すもので、27は縦長、28は横長の剥片を素材としている。27は薄手の剥離を受け、器面が滑らかに加工されている。28は素材打撃部の厚みが取り切れておらず粗い加工の段階で遺棄されている。29は折損後、上半部個体に再加工を施している。

31～36は幅4.0～4.5cm程度のもので、長さは15cm前後が主体となる。32は掲載母岩721の資料で、20cmを超える大型尖頭器製作時の調整剥片を素材としている。

37～48は幅4.5～6cmで主に5cm前後を主体とする。長さは12cm前後と15cm前後のものが認められるが、破損品の一部は15cmを大きく超える可能性がある。37・38は薄手且つ器面が平坦に加工されている。類似する資料が上白滝5遺跡Sb-6～11の小型舟底形石器器群で認められる。また、37は表面に多方向に走る細かな傷が観察される。39・40は長幅比2.5以下の幅広のもので、裏面に素材腹面を残し粗い加工の段階で破損している。40は正面中央部右側縁付近に厚みを残しており、これを除去する剥離によって破損している。41は先端部側の剥離に比べ素材面や下半部調整面の風化が強く二重パティナとなっている。42は掲載母岩584の資料で、転蹠から粗割りされた分厚い剥片を素材としている。46の裏面の自然面は著しく摩耗・風化した素材腹面の可能性がある。

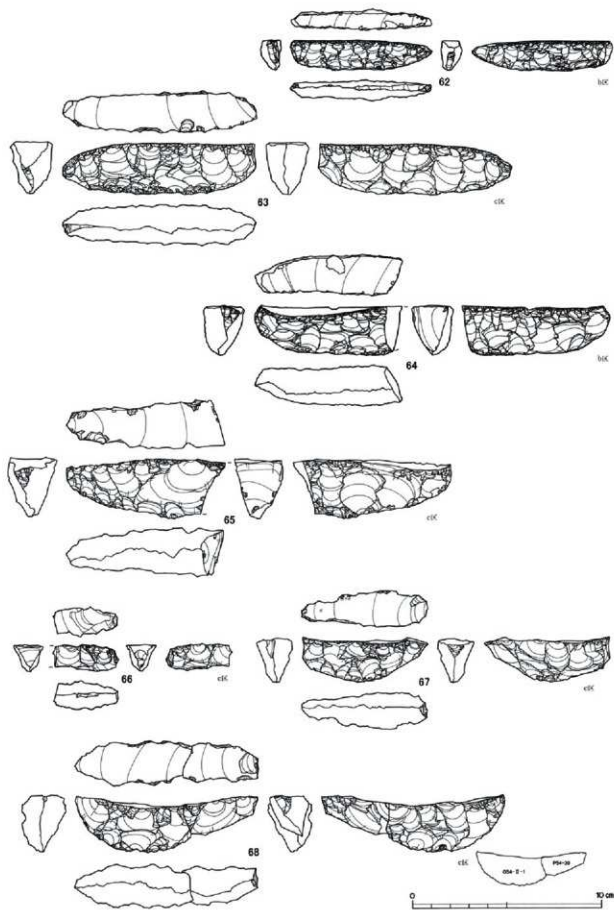
49～54は幅6.5cm以上の大型品だが、全て欠損品のため主体となる長さは不明である。全体に大型剥離で加工されており、製作過程で破損したものと考えられる。

両面調整石器(図Ⅲ-345-55～図Ⅲ-346-61、図版173・174)

両面調整石器は表土・II層を含め92点・83個体(b区:45個体、c区39個体、両区間で接合した個体あり)が出土し、7個体を図示している。石材はめものう製が1点と、他は全て黒曜石である。剥離面接合関係を有するものは26個体あり、転蹠の粗剥片と核、石刃技法の大型調整剥片と石核などが素材に利用されている。

55は先端部の折損後に再加工が施され小型化している。56～58・60・61は尖頭器製作を目的としたが、破損や剥離継続が困難な器形が原因で遺棄されたものと考えられる。57・58・60・61は大型の粗い剥離が主体である。59はめものう製で末端部にはへら状の縁辺を作り出し、上端部には平坦な自然面を残置している。器面は薄手の平坦剥離で丁寧に整形されている。

舟底形石器(図Ⅲ-347-62～68、図版174)



図Ⅲ-347 D3b・c区の石器(10) 舟底形石器

舟底形石器はⅡ層から15点・14個体が出土し7個体を図示した。類型別の点数はIb類(小型、幅8~12mm):1個体、IIa類(加工が粗く15cm以下、主に10cm以下):5個体、IIb類(甲板面・側面が平坦で10cm以上、主に15cm以上):3個体で、その他細分不能なII類が5個体みられる。出土はIb類がb区から、II類の多くはc区から出土している。図示したものは62がIb類、63~65がIIb類、66~68がIIa類である。石材は全て黒曜石で、特にIIa類で黒曜石4が多く使用されている。剥離面接合関係を有するものはなく、全て搬入品と考えられる。なお、63・65は形態と出土地点からホロカ型彫器を伴う石器群に属することが考えられる。

62は両端に桶状剥離が認められ、正面側からの剥離は下縁に沿って器体中央部まで及んでいる。また甲板面縁辺が直線的に加工されている。63は上下縁に連続的な小剥離を加え直線的に整形している。64の下縁中央部は潰れたように剥離されている。66は粗い剥離によって高さ1.5cm未満にまで小型化されている。

細石刃(図Ⅲ-348-69~73、図版175-69~73・222)

細石刃は表土・Ⅱ層を含め6点・6個体が出土し、全て掲載した。挿図のほか写真図版のみの掲載が1点(図版175-222)ある。石材は全て黒曜石1である。剥離面接合するものはなく、また細石刃核や削片の出土もみられない。細石刃は全てD3c区出土でSb-41のP49区周辺にまとまり、周辺には舟底形石器IIb類の分布がみられ共伴の可能性はある。但し、ソリフракシヨンの影響を強く受けたブロックである点注意が必要である。なお、写真図版175-223・224はF1区出土資料で、誤って同図版に掲載している。

69・70は幅1cm弱のもの。69は背面に下・斜め方向からの剥離面がみられ両面調整体母型の細石刃核から剥離された可能性がある。70は末端の湾曲が強い。71~73・222は幅0.5cm前後のもの。71の背面には稜調整様の横方向の剥離がみられる。71・73の側縁には不連続的な微細剥離痕が、72・222の右側縁全縁には連続的な小剥離が認められる。

彫器(図Ⅲ-348-74~86、図版175)

彫器は表土・Ⅱ層を含め21点・20個体(b区:8個体、c区:12個体)が出土し14個体を図示している。石材は黒曜石のほか、頁岩・めのう・碧玉などがみられ、黒曜石以外の石材が3割以上を占める。剥離面接合関係を有するものは1点のみで、彫器は搬入品が主体と考えられる。以下、彫刀面の作出部位を基準に記載していく。

74~77は素材端部に概ね横方向の彫刀面を作出するもので、全て左刃である。74・75は急角度の側縁調整と彫刀面から背面への調整が認められる。76は上下両端に彫刀面の作出が行われ、下端のものは側刃に近い。74~76の彫刀面は腹面側に傾くように、77は腹面とほぼ垂直に作出されている。

78~80は上端部から左側面にかけて斜めに彫刀面を作出するもので、右側縁上端の急角度調整部を打面としている。打面部は長軸に対し斜めに調整され、彫刀面は70~80°の角度で剥離されている。また彫刀面と腹面のなす角度は105~115°である。

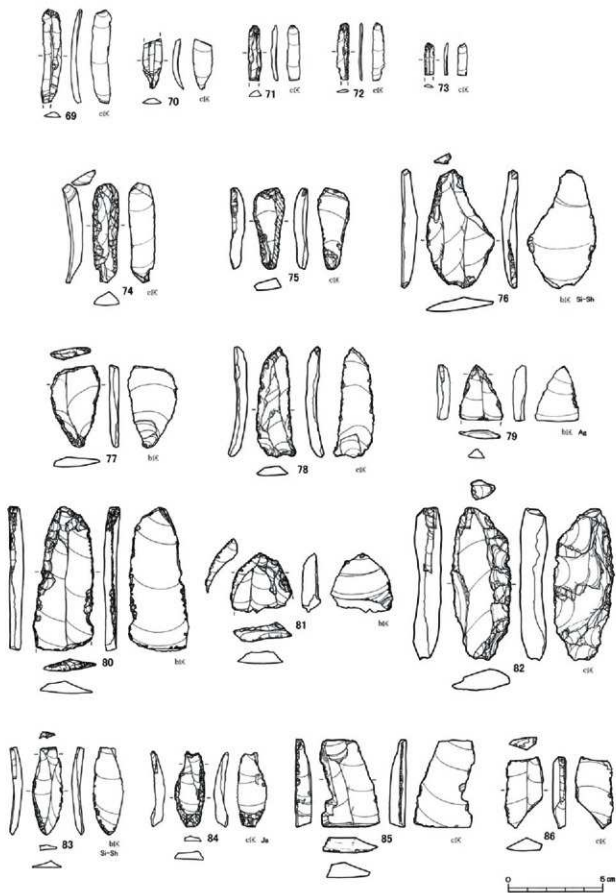
81は背面右側縁上端部の調整打面から背面側に傾くように左刃の彫刀面を作出するもので、ホロカ型彫器と捉えられる。

82は交叉型のもので、両面調整石器の端部に彫刀面を作出している。

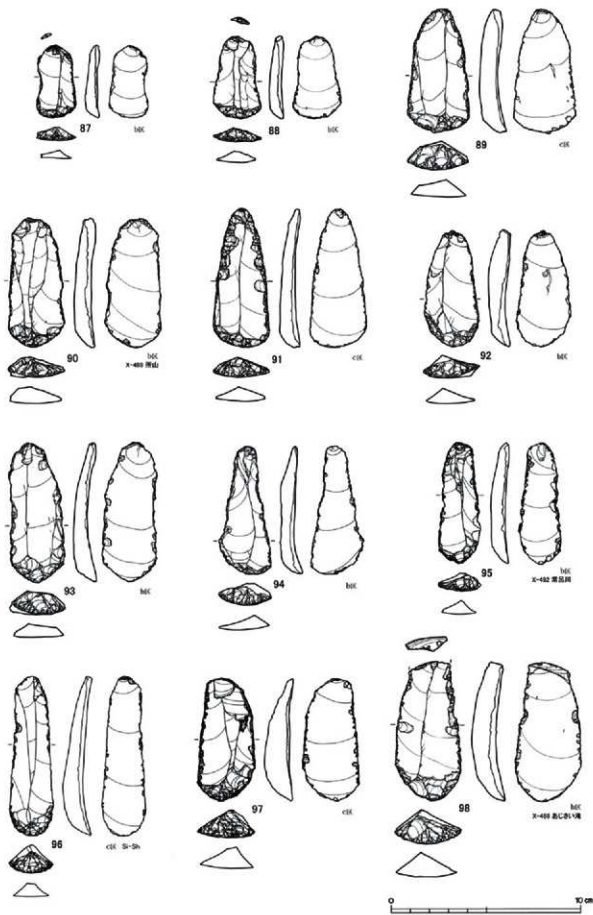
84~86は側刃型で83・84が上端部の調整打面、85・86が折れ面打面である。いずれも腹面との角度が90°前後となっている。基部調整は83が錯向、84が両面加工である。

搔器(図Ⅲ-349-87~Ⅲ-352-130、図版175~178)

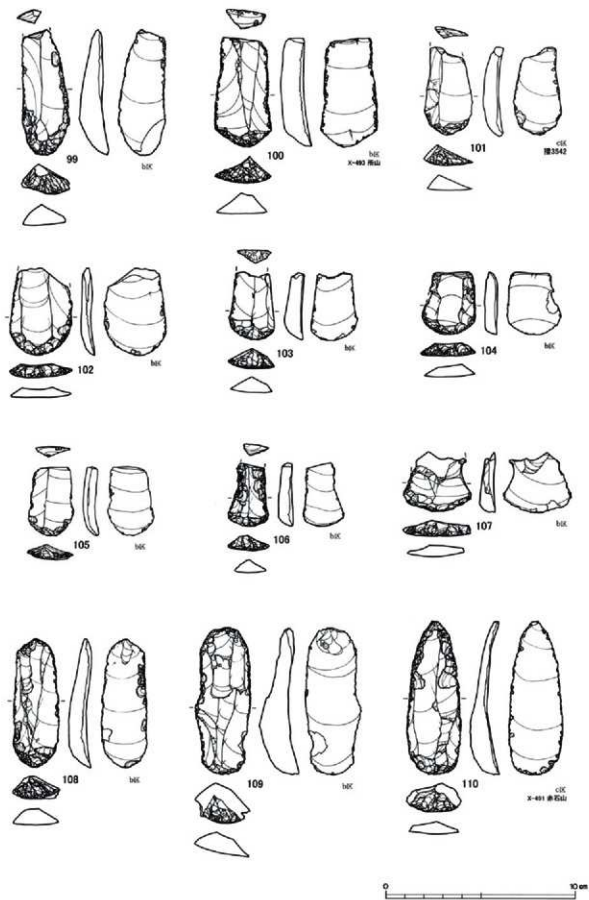
搔器は表土・Ⅱ層を含め67点・65個体(b区:41個体、c区:24個体)が出土し45個体を図示した。



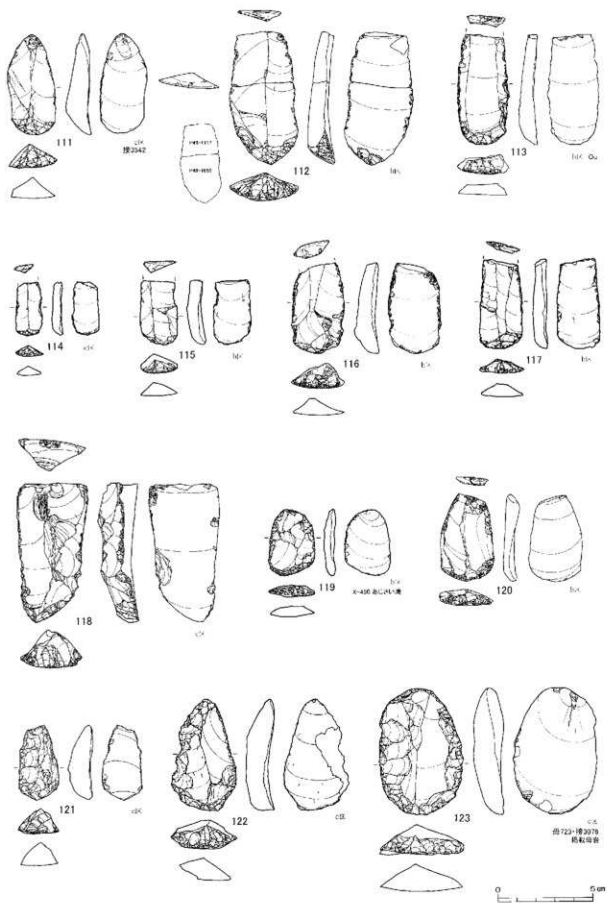
図Ⅲ-348 D3b・c区の石器(11) 細石刃・彫器



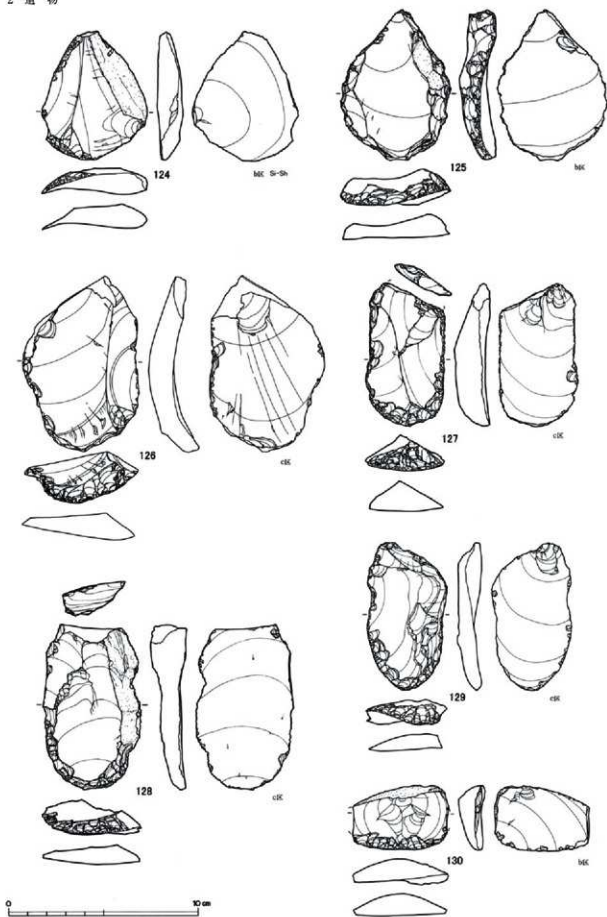
図Ⅲ-349 D3b・c区の石器(12) 掻器



図Ⅲ-350 D3b・c区の石器(13) 挿器



図III-351 D3b・c区の石器(14) 掻器



図Ⅲ-352 D3b・c区の石器(15) 挿器

石材は頁岩(3点)・珪岩(1点)が少数みられる他は全て黒曜石で、特に黒曜石1が43点と6割以上を占めている。素材は石刃が41個体と多数を占め、剥片では尖頭器・両面調整石器の調整剥片が認められた。石刃の打面は線状を含む小打面で打面調整・頭部調整が特徴である。剥離面接合関係を有する資料は5個体で、大多数が搬入品と考えられる。

刃部調整剥離の末端部周辺にパンチ痕が観察されるものは15個体あり、全てb区出土であった。また、パンチ痕がある搔器の素材は、判別可能なものは全て石刃であった。パンチ痕については刃部切断再生技法の考察があるが(高倉 2004)、本ブロックのものはやや軽微で、切断に至る状態に及ぶものとは捉えがたい。また、切断技法を示す切断された刃部破片の出土もみられない。

表面変化の顕著なものや肉眼観察で白滝以外の産地と予測されるもの6点について産地分析を行った。その結果、90・100が「所山」、95が「常呂川」、98が「あじさい滝」、110・119が「赤石山」と判定された。有舌尖頭器と同様に置戸産黒曜石が含まれている。産地分析の詳細はV章に掲載した。

以下、素材と最大幅位置を基準とした形態的特徴ごとにまとめ、記載していく。

87~118は石刃素材のもの。大多数は最大厚が刃部もしくは下半部に位置する素材を使用している。側縁調整は無加工か軽微なものが主体で、素材打面を除去するような基部加工は91・97・110の少数に限られる。

87~107は刃部に最大幅が位置するものである。87・88は長さ4cm程度の小型品。93・99は刃部がやや突出するように作出され、99の刃角は50°と鋭角である。106・107は刃部両端が突出するように整形されている。106は左側縁が急角度調整、右側縁が緩斜度調整を受けている。90・93・95・100は表面に多方向に走る細かな傷が顕著にみられ、さらに90・95・100は「常呂川」、「所山」の産地分析結果が得られている。

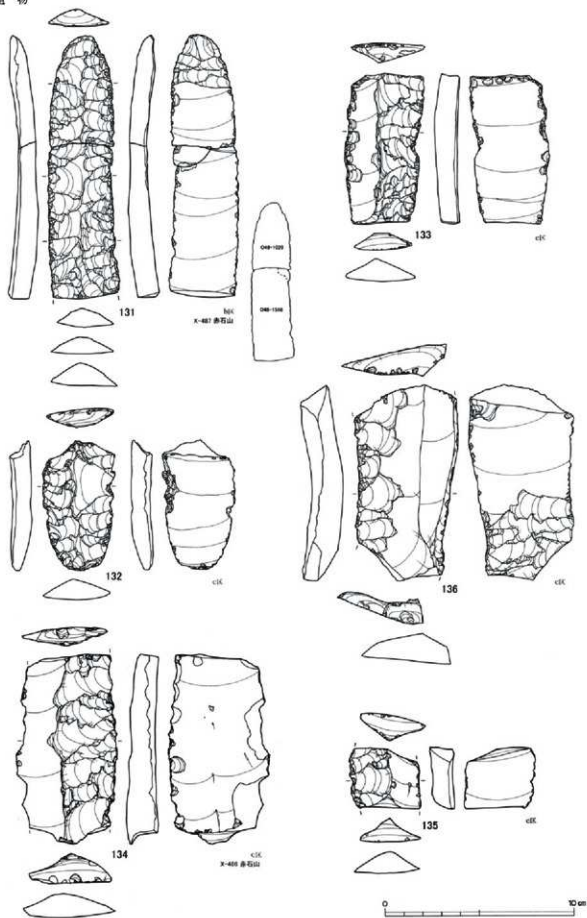
108~118は中央部に最大幅が位置するものである。刃部が最大幅のものに比べ刃部幅が若干狭い。108・112・118は突出する様に刃部が形成されている。110は基部を尖頭形に整形している。111は101と接合関係を持つ。

119~130は素材不明もしくは剥片素材のものである。大きさ・形態は多様だが厚さ1cm未満の薄片と1cm以上の厚手のものが認められ、前者は主に尖頭器・両面調整石器の調整剥片が素材と考えられる。119・120は薄片で119には側縁加工がみられる。121は末端に彫刀面状の横方向の剥離がみられ、刃部調整によって加工されている。また刃部縁辺には調整剥離以前の斜め方向の線状痕が観察され、彫器の使用痕と捉えられる。再生により小型化した彫器を搔器に転用したものであろう。123は掲載母岩723の資料で尖頭器調整剥片を素材としている。125・126は幅広で湾曲の強い剥片が素材で、125は左上半を除くほぼ全縁に急角度調整が加えられている。130は横長剥片を素材とし、腹面側末端部に調整が加えられている。

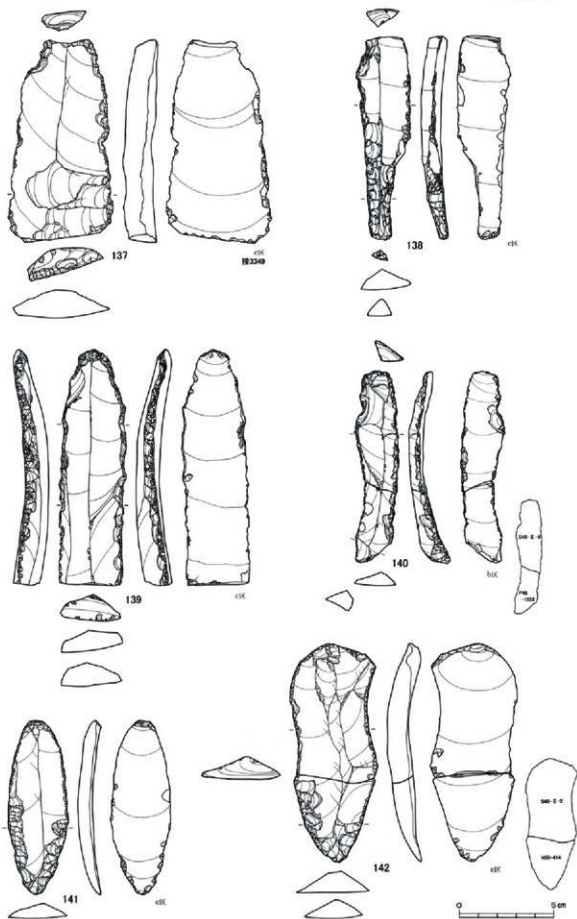
削 器(図Ⅲ-353-131~Ⅲ-356-159、図版178~180)

削器は表土・II層を含め123点・107個体(b区:63個体、c区:44個体)が出土し33個体を図示した。石材は大多数が黒曜石で、頁岩(2点)・安山岩(1点)が少数みられる。特に黒曜石1が65点と半数以上を、黒曜石3・4が4割程度を占める。素材は石刃と剥片が同程度使用され、剥片では石刃技法母型の調整剥片と、尖頭器・両面調整石器の調整剥片の利用が認められる。石刃で打面が残置するものは、調整打面・頭部調整・リップ状の特徴がみられる。剥離面接合関係を有するものは14個体と少数で、削器の大多数が搬入品と考えられる。

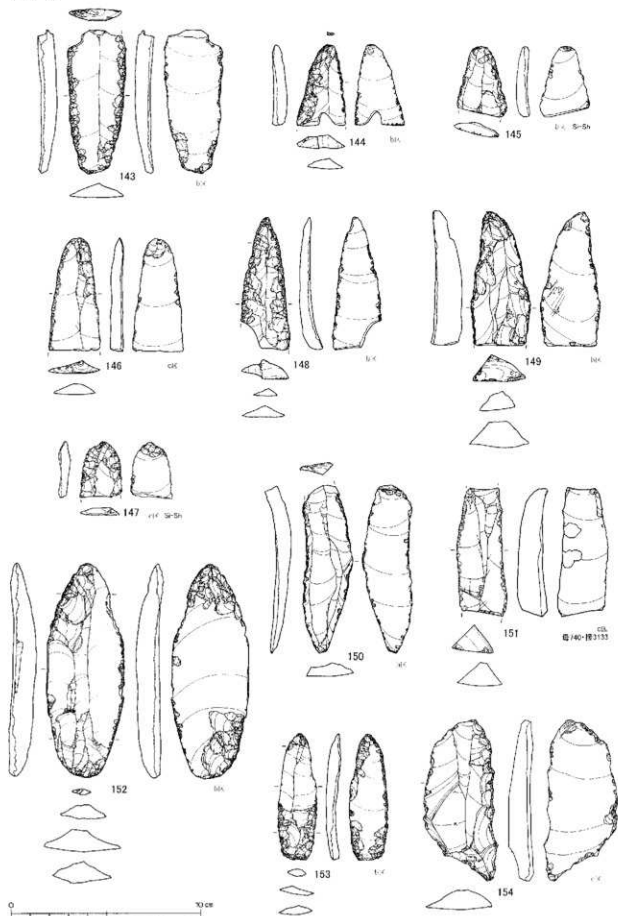
後述するホロカ型彫器を伴う石器群と考えられる資料、131・134について産地分析を行い、2点とも「赤石山」の判定結果を得た。



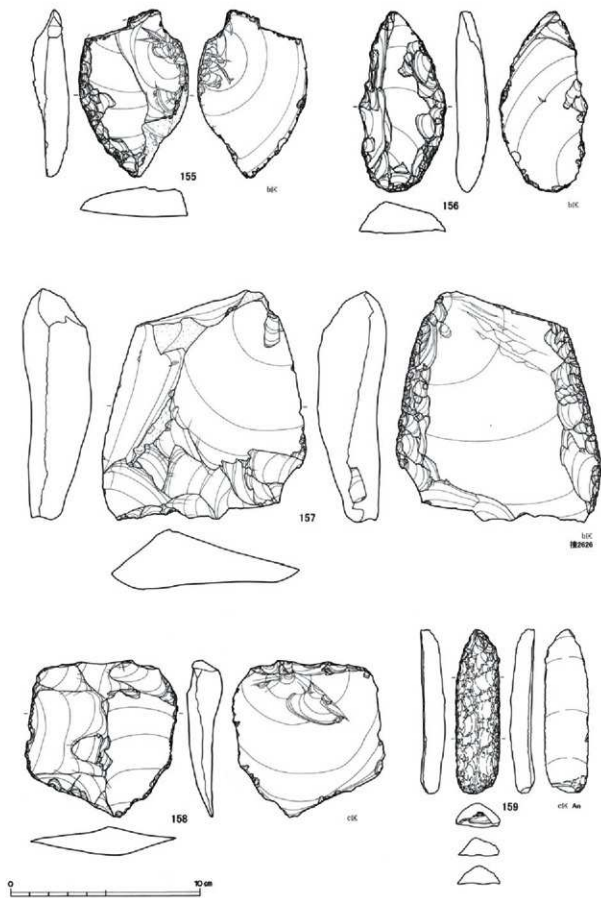
図Ⅲ-353 D3b・c区の石器(16) 削器



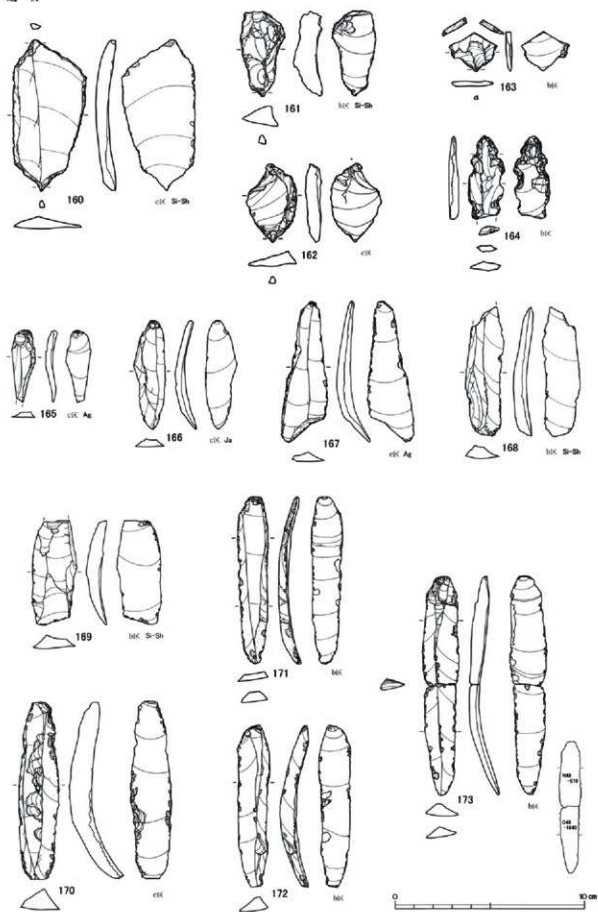
図Ⅲ-354 D3b・c区の石器(17) 削器



図Ⅲ-355 D3b・c区の石器(18) 削器



図Ⅲ-356 D3b・c区の石器(19) 削器



図Ⅲ-357 D3b・c区の石器(20) 錐形石器・二次加工ある剥片・石刀

131~154は石刃素材のもの。131~137は大型の石刃素材で器体背面を広く覆う連続的な並行剥離が加えられている。こうした特徴を持つ削器は旧白滝15遺跡B・C区(直江 2011)で「ホロカ型彫器を含む石器群」に共存することが確認されており、北見市中本遺跡(G2群 山田 2006)にも類例がみられる。131・132は両側縁に刃部加工が施され、131は素材打瘤を除去するように腹面側へ調整が加えられている。136・137の加工はやや大型で粗い。136は腹面側にも並行剥離が加えられている。また、並行剥離の有無に関わらず、縁辺には不連続的な剥離が生じている。138~140は連続的な急角度調整がみられるもの。138は左側縁が薄い並行剥離、右側縁が急角度調整で、下半部は幅が半減している。141・142は下半部に連続的な平坦剥離を加え尖頭形とするもの。143~149は平坦剥離主体の連続的な調整を施すもの。144・145は素材打面が残され、146~149は打面を除去している。146・147は腹面側に打瘤を剥ぎ取る様な調整が加えられている。148・149は末端が尖頭形に加工されている。149は厚手の素材で調整はやや急角度で、表面には細かな傷が顕著に認められる。150・151は軽微な加工のもの。152・153はナイフ形石器様のもので、先端部は両面加工で尖頭形とし、背腹面への基部調整が施される。152の基部調整は素材打瘤を剥ぎ取る様に加えられている。154は粗い加工のもので、側縁が鋸歯状となっている。

155~158は剥片素材のもの。156は末端に搔器様の刃部が形成されている。157は大型剥片素材で大型剥離と小型剥離を連続させて鋭利な縁辺を形成している。158は打面を除く全縁に小型剥離が連続している。159は安山岩製で表面が摩耗し風化が著しい。背面を覆い尽くすように並行剥離が連続し、横断面は三角形を呈する。また、末端部は両面調整となっており、へら状に加工されていたと推測できる。

錐形石器(図Ⅲ-357-160-163、図版181)

錐形石器はⅡ層から5点・5個体(b区:2個体、c区:3個体)が出土し、4点を図示した(残り1点は母岩別接合資料として図Ⅲ-497-393に掲載)。石材は黒曜石(3点)と頁岩(2点)がみられる。素材は石刃と剥片があり、尖頭器の調整剥片などが利用されている。剥離面接合関係を有するものは1点のみである。

160は頁岩製で上下両端に錐形部が作出されており、上端部は腹面側への剥離で破損している。163は錐形部に摩耗が認められる。

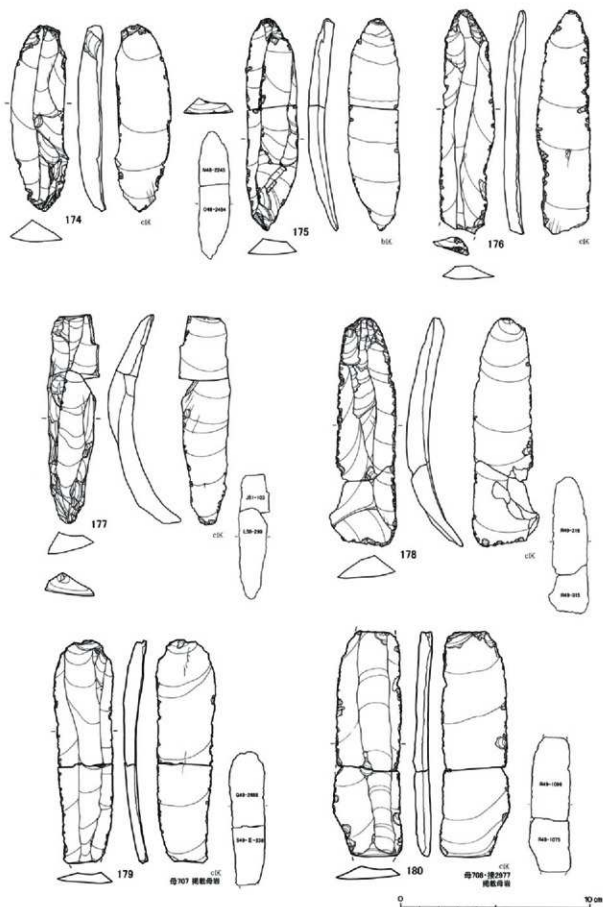
二次加工ある剥片(図Ⅲ-357-164、図版181)

二次加工ある剥片は表土・Ⅱ層を含め219点・191個体(b区:89個体、c区:104個体、両区間で接合した個体あり)が出土し1点を図示した。石材は黒曜石が大多数を占めるほか、頁岩が1点みられる。素材の大きさや形状、二次加工剥離の大きさ・部位なども多様で、まとまったものはみられない。剥離面接合関係は52点に認められ、多くが尖頭器・両面調整石器の調整剥片を素材としている。

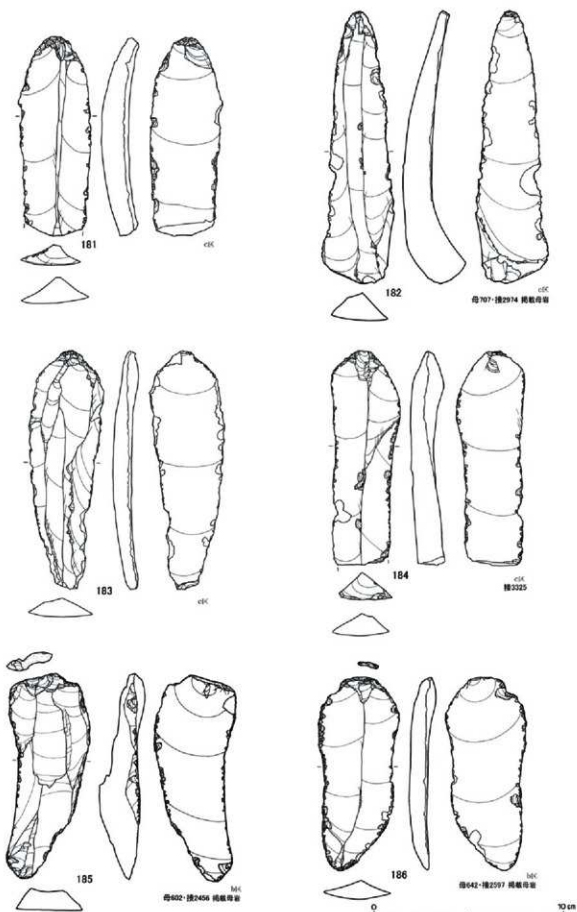
164は特徴的な加工が施されるもので、両側縁へ抉入状の剥離を6箇所加え、平面形は左右非対称となっている。

石 刃(図Ⅲ-357-165~Ⅲ-364-205、図版181~186)

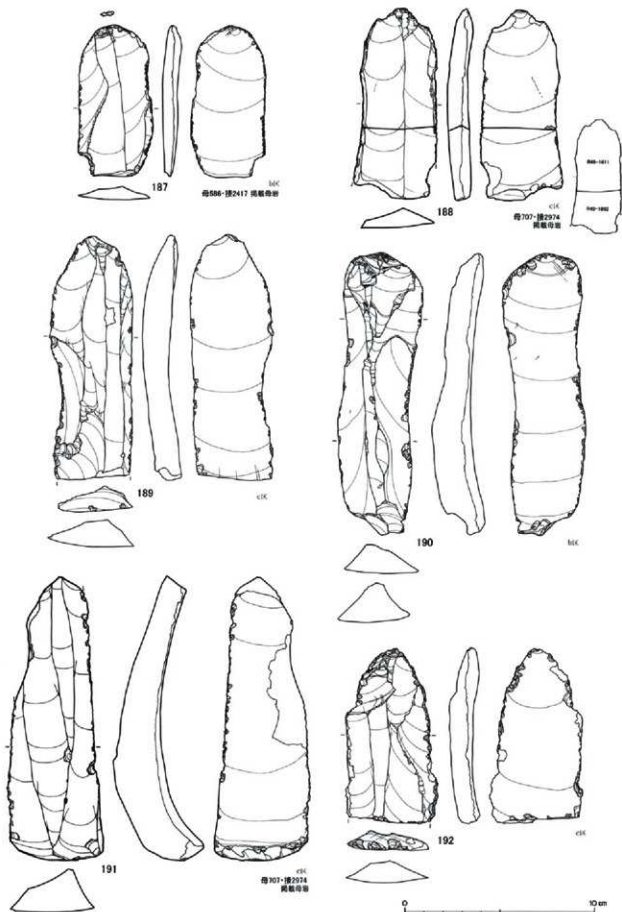
石刃は表土・Ⅱ層を含め517点・441個体(b区:146個体、c区:296個体、両区間で接合した個体あり)が出土し、44個体を図示している。石材は大多数が黒曜石で、黒曜石1が175点と最も多いが、黒曜石3・4の合計は252点と半数以上に及び、むしろ茶系の石が多数を占める。また、茶・紫の混じる黒曜石の多数がc区に分布している。黒曜石以外では頁岩・めのう・碧玉が少数みられる。剥離面接合関係を有するものは186点・134個体(b区:42個体、c区:92個体)で、全体の3割程度である。打面にはもっぱら打面調整・頭部調整が観察され、打面幅は0.5~1cm前後の小型が主体で、



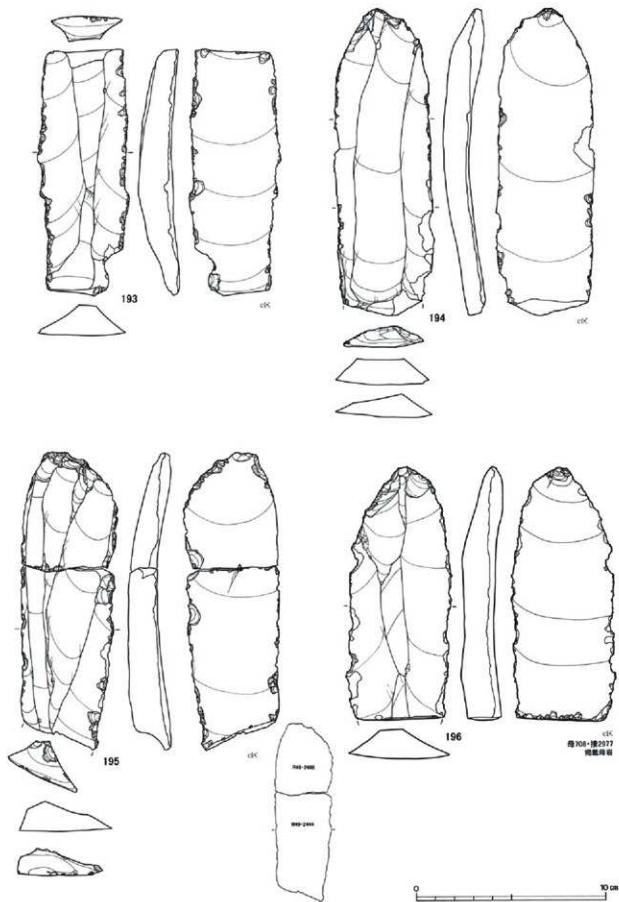
図Ⅲ-358 D3b・c区の石器(21) 石刃



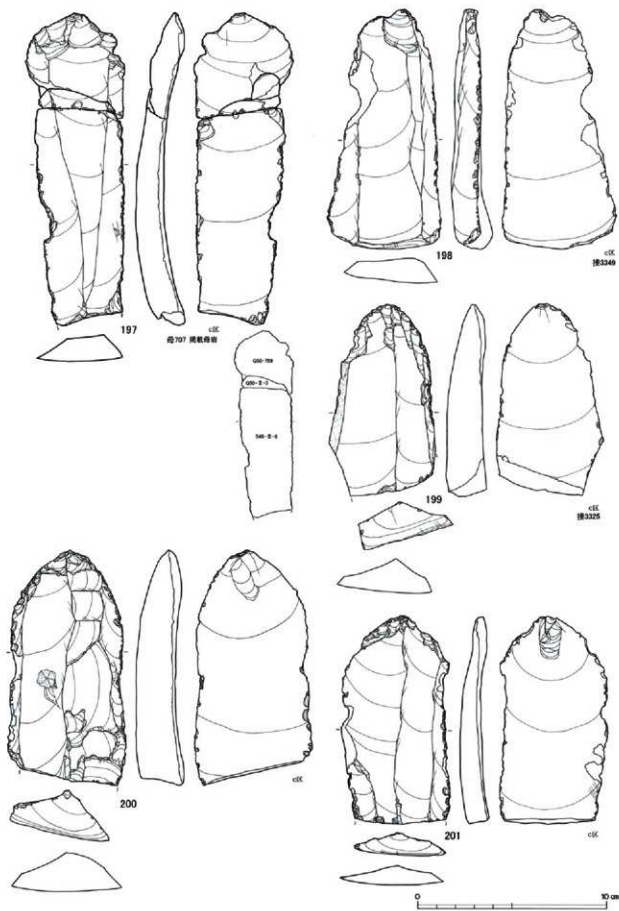
図Ⅲ-359 D3b・c区の石器(22) 石刃



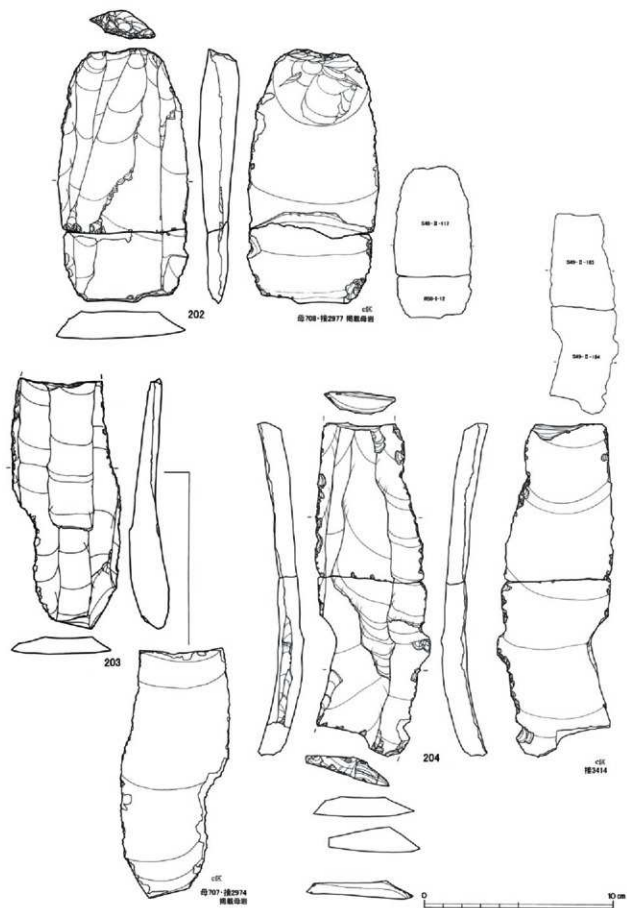
図Ⅲ-360 D3b・c区の石器(23) 石刃



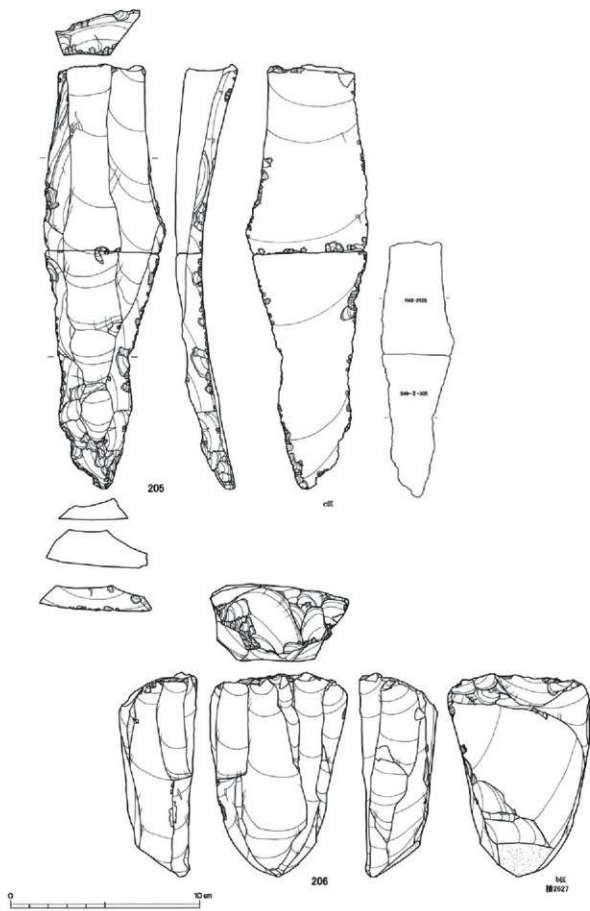
図Ⅲ-361 D3b・c区の石器(24) 石刃



図Ⅲ-362 D3b・c区の石器(25) 石刃



図Ⅲ-363 D3b・c区の石器(26) 石刃



図Ⅲ-364 D3b・c区の石器(27) 石刃・石刃核

剥離開始部はリップ状となっている。また、頭部を擦るものが散見される。大きさは長さ10cm大の小型～20cm以上の大型までみられる。背面に横方向の剥離が多くみられることから、母型形成を行う石刃核から剥離されたものが主体と考えられる。また、188～205の大型石刃は並行剥離調整ある削器やIIb類舟底形石器の分布と重複するため、ホロカ型削器を伴う石器群に属することが考えられる。以下、幅を基準とした大きさの順に記載していく。

165～173は幅2.5cm未満の小型・細身のもの。厚さは1cm未満が主体である。**165～169**は黒曜石以外の石材で、側面観の湾曲が強い。高さ8cm未満の小型石核から剥離されたと考えられる。170～172には母型形成・稜調整の横方向からの剥離が観察される。

174～177は幅2.5～3cm未満のもの。厚さは1cm前後が主体である。**174**は打面が厚く、背面にヒンジ部分を取り込んでいる。また、背面には石刃剥離過程での稜調整を示す剥離が観察される。**177**は著しく湾曲しており、石核作業面下半部を大きく取り込んだものとみられる。

178～188は幅3～4cm未満のもの。厚さは1cm弱～1.5cm程度が主体である。**178・181**は頭部が擦られ摩耗している。**185**はやや大型の自然面打面である。

189～195は幅4～5cm以下のもの。厚さは1.5～2cm程度と厚手で、側面観は全体に直線的となる。欠損品が殆どだが、長さは15cmを超えるものが主体とみられる。また打面の大きさは幅1.5cm程度である。189の背面には母型形成時の横方向の剥離がみられる。

196～205は幅5cmを超えるもの。長さは204・205の状況から20cmを大きく超えると推測される。厚さが1.5～2cm程度で側面観が全体に直線的、打面幅1.5cm程度となる状況は幅4～5cmのものと同じである。200・205の背面には母型形成時の横方向の剥離がみられる。**202**は掲載母岩708の資料で、打面が大きく打楯の発達が目立つ点、特異である。

なお、**186**は石刃核209、**187**は石刃核212、**180・196・202**は石刃核210と接合関係を持つ。

石刃核(図Ⅲ-364-206～図Ⅲ-369-217、図版186～189)

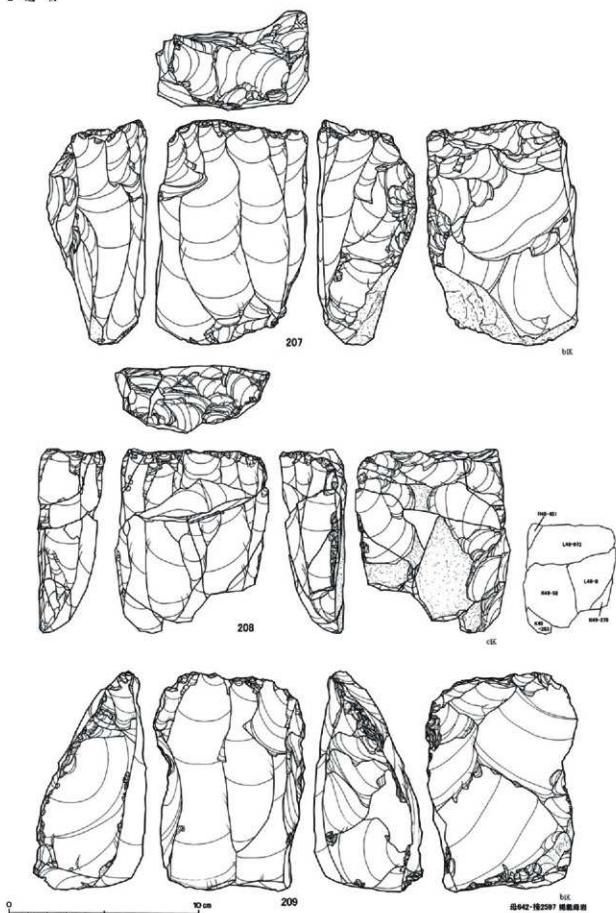
石刃核は表土・II層を含め44点・21個体(b区:14個体、c区:7個体)が出土し、12点を図示した。石材は全て黒曜石で黒曜石1が11個体と多く、主にb区から出土している。c区は黒曜石3・4・5の茶・紫が入るものが主体である。剥離面接合関係を有するものは12個体で、母型形成を行い打面調整・頭部調整を施すものが主体である。石刃核の大きさは6～7cmの小型、11cm前後の中型、20cmを大きく超える大型があり、それぞれ石核形状や打面に特徴がみられる。

206～215は調整打面のもので、内**206～210**は背部を平坦に加工している。また**206～209**は高さ11cm前後、厚さ3～5cmとやや扁平なもので、207・209には背部から側面への石核調整(母型形成)剥離が認められる。これら中型背部平坦石刃核の類例はホロカ沢I遺跡A2地区で認められ(坂本2010)、有舌尖頭器石器群と判断されている。**210**は高さ20cmを越す大型型で、作業面中央部に複数回に渡る激しいヒンジがみられる。**211～214**は背部に粗い剥離を加えるが、一定の形状に整形されないものである。石刃剥離以前の石核調整剥離と、石刃剥離過程で剥離されたものがある。高さは11cm前後、厚さは6～9cmとやや分厚い。**215**は背稜を形成するもので、作業面の高さは11cm程である。背稜は中央部まで作出されるが、下半部は自然面を残したままである。

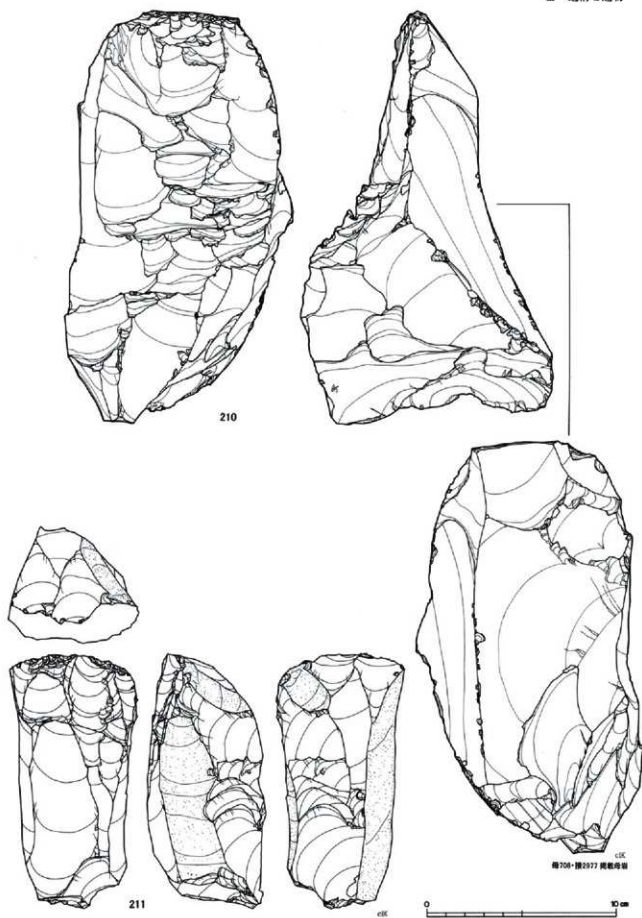
216・217は高さ8cm未満の小型で、平坦打面に頭部調整を施すものである。石材は茶の強い黒曜石4を使用している。**217**は裏面でも縦長志向の剥離作業が正面に先行して行われている。**216・217**は小型舟底形石器石器群のものと考えられる。

石核(図Ⅲ-369-218～図Ⅲ-370-221、図版189)

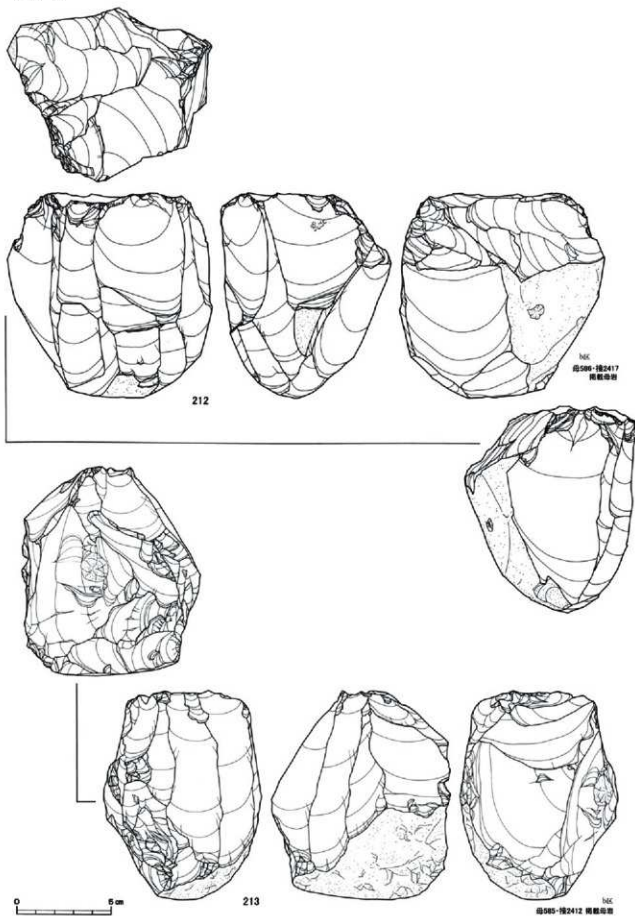
石核は表土・II層を含め87点・58個体(b区:19個体、c区:40個体、両区間で接合した個体あり)



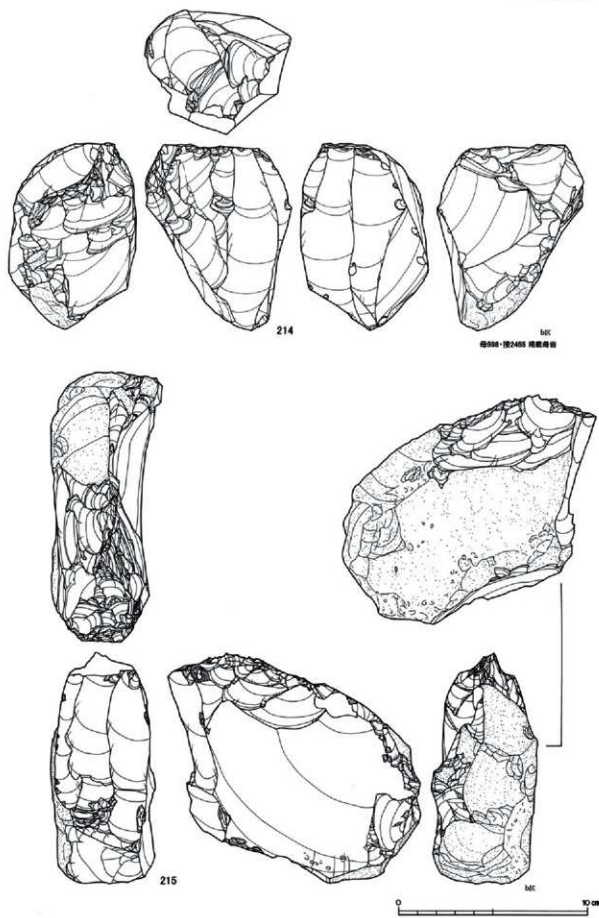
図Ⅲ-365 D3b・c区の石器(28) 石刃核



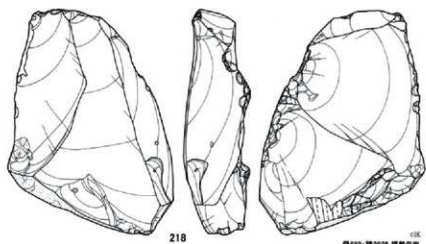
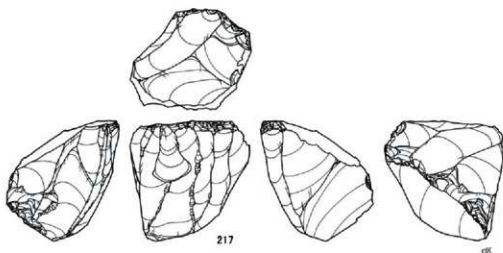
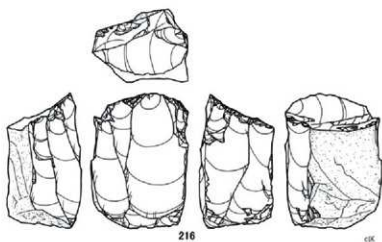
図Ⅲ-366 D3b・c区の石器(29) 石刃核



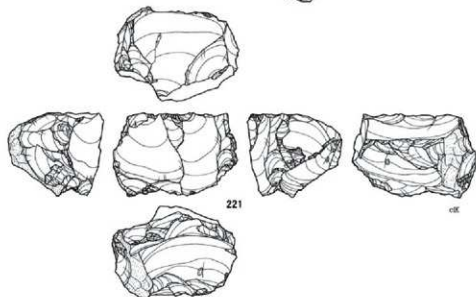
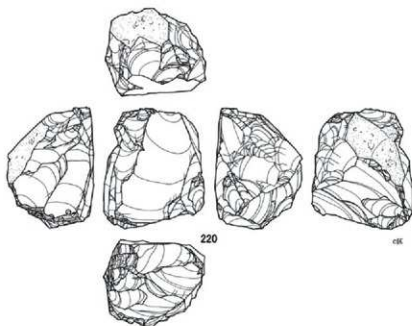
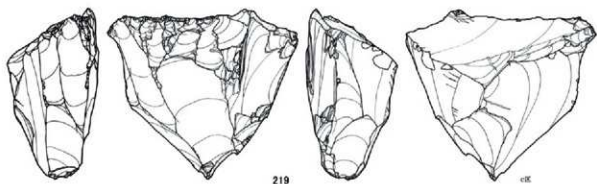
図Ⅲ-367 D3b・c区の石器(30) 石刃核



図Ⅲ-368 D3b・c区の石器(31) 石刃核



図Ⅲ-369 D3b・c区の石器(32) 石刃核・石核



図Ⅲ-370 D3b・c区の石器(33) 石核

が出土し、4個体を図示した。石材は全て黒曜石である。剥離面接合関係を有するものは25個体で、接合内容は石刃技法の最終段階で幅広い剥離などにより石核化したもの、作業面と打面を固定し一定方向に作業する石刃技法的なものなどが主体的に認められる。また非接合資料では多面・多方向の剥離作業を行うもの、剥片素材のものがみられた。

218は分割礫素材で、正面で縦長志向の作業が行われた後、裏面へ横方向の大型剥離を加えている。219の側面の作業は下方から交互剥離状に行われ、縦長志向の剥片を剥離している。220・221は多面・多方向の作業面がみられ、また作業面のネガのバルブの発達が顕著である。こうした特徴は白滝Ia群のサイコロ状石核に類似する。

③ 母岩別接合資料

1) D3b区の母岩別接合資料

D3b区では49,645点が出土し接合作業の結果、439個体、3,143点の剥離面接合資料を得ることができた。接合率は6.3%である。さらに母岩分類作業によって、母岩別資料78個体(遺物点数4,222点、内剥離面接合資料241個体・2,589点)と非母岩別剥離面接合資料198個体(遺物点数554点)に整理され、この内27個体を挿図と写真図版、4個体を写真図版のみの掲載とした。

母岩別接合資料を作業内容別にみると、尖頭器・両面調整石器製作58個体(1,811点)、石刃技法10個体(293点)、剥片生産12個体(156点)が認められる。個体比率では尖頭器・両面調整石器製作が72.5%、石刃技法が12.5%、剥片生産が15.0%で、尖頭器・両面調整石器製作が主体的な作業と認められる。なお、上記した母岩別資料の個体数と点数は、2種類以上の剥離技術類型に属する場合はそれぞれの類型で集計されており、その合計は実数よりも多く算出される。D3b区では単体遺物の内容から有舌尖頭器石器群とホロカ型彫器を伴う石器群の存在が指摘されたが、母岩別接合資料で判別できたものは白滝I群(剥片生産:1個体)と有舌尖頭器石器群(尖頭器・両面調整石器製作:11個体)であった。

母岩別資料の掲載は尖頭器・両面調整石器製作(図Ⅲ-371~415)、石刃技法・剥片生産(図Ⅲ-416~431)の順序とした。また一部の資料は写真図版のみの掲載とした。各作業の中で剥離技術内容で大別し、その中で概ね母岩番号順としたが、挿図割付の関係上若干の前後がある。母岩・接合番号により図版を検索する場合は章末に掲載の表Ⅲ-19「母岩番号順挿図・図版一覧表」を参照願いたい。

尖頭器・両面調整石器製作の母岩別資料(D3b区)(図Ⅲ-371~415、図版190~208)

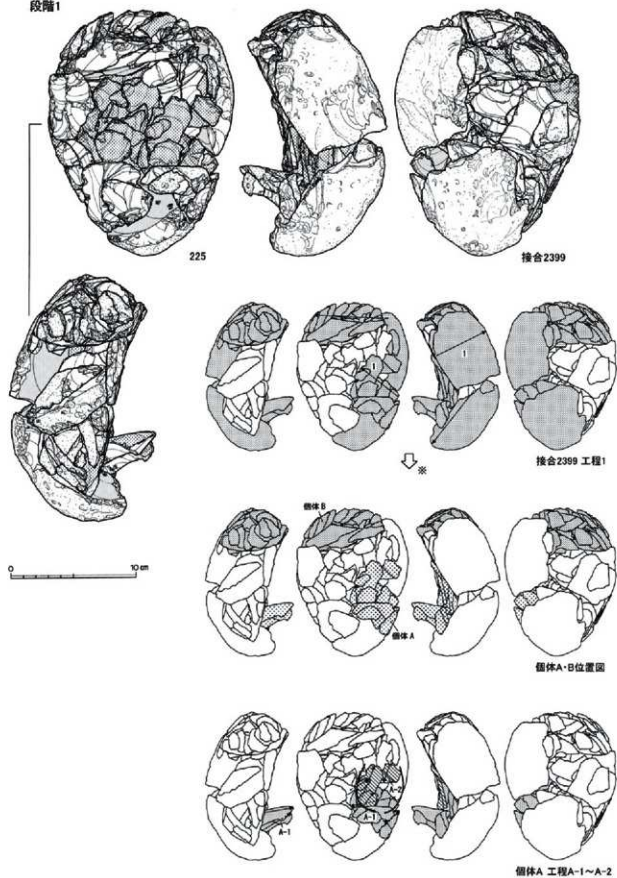
尖頭器・両面調整石器製作母岩は、①転礫を素材とし一母岩から複数個体を製作するもの(図Ⅲ-371~388・408~409・414、母岩583・584・587・601・604・639・655・656)、②転礫を素材とし単体を製作するもの(図Ⅲ-389~391・414、母岩597・603・605・641)、③角礫を素材とし一母岩から複数個体を製作するもの(図Ⅲ-398・399・413、母岩616・619)、④角礫を素材とし単体を製作するもの(図Ⅲ-392・400~405、母岩617・620・621・624・644)、⑤剥片を素材とするもの(図Ⅲ-393~397・410、母岩643・657)、⑥石刃核・石核を素材とするもの(図Ⅲ-411・412、母岩615)、⑦両面調整石器を搬入し単体を製作するもの(図Ⅲ-406・407、母岩659)がみられる。特に①の母岩は有舌尖頭器石器群に属することが考えられる。

母岩別資料583、接合資料2399・2401(図Ⅲ-371~373、図版190)

母岩別資料583は接合資料2399~2407、折れ接合資料60836・60837および非接合剥片1点で構成され、総点数は177点、総重量は1,693.0gである。

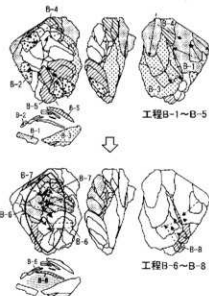
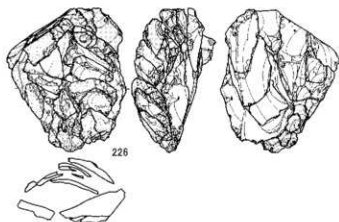
母岩583 接合2399・2401

段階1

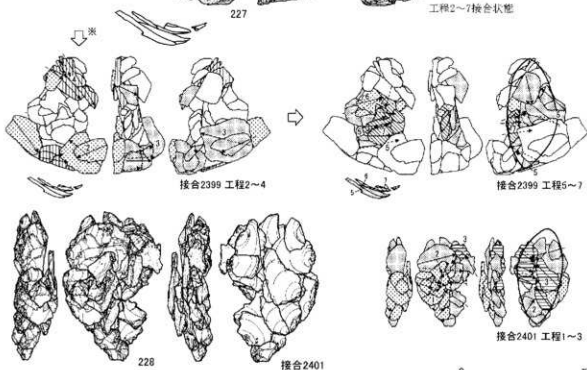
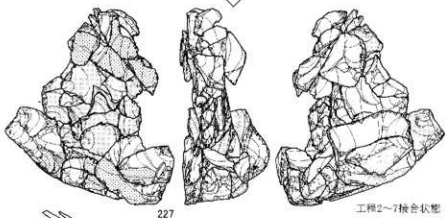


図Ⅲ-371 D3b区の石器(1) 母岩583 接合2399・2401(1)

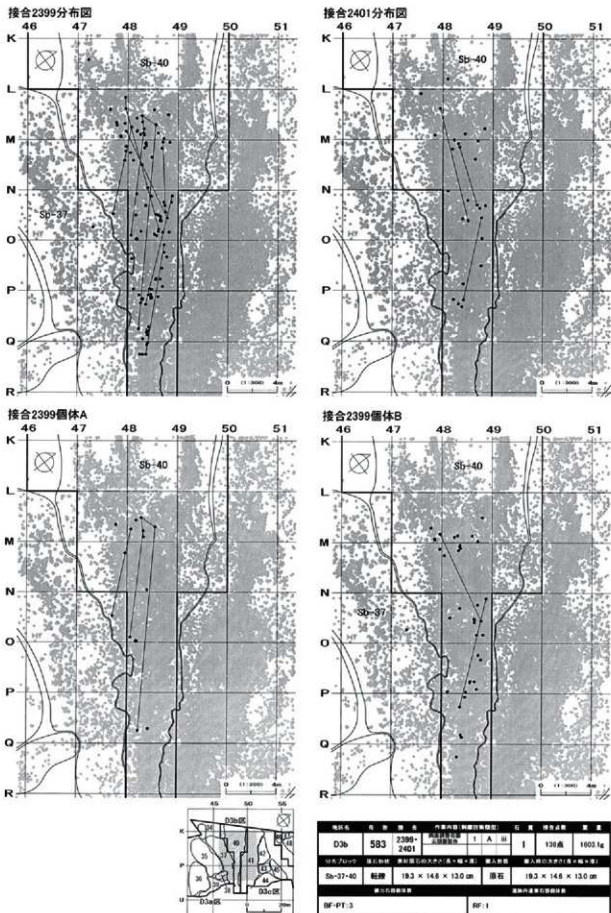
個体B (素材:工程I FK)



段階2



図Ⅲ-372 D3b区の石器(2) 母岩583 接合2399・2401(2)



図Ⅲ-373 D3b区の石器(3) 母岩583 接合2399・2401(3)

素材 225は接合資料2399、228は接合資料2401で、二つ合計で138点(113個体)が接合し、重量は1,603.1gである。石質は黒曜石1で、転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を粗割し、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。以下、接合2399を主体に観察していく。

段階1(原石の粗割)

【工程1】正面・上面・右側面に大型剥片剥離を加える。剥片は大きさ10~15cmで、背面が自然面に覆われ半楕円状を呈する。これら剥片を素材に、個体A・B、接合2401で、尖頭器・両面調整石器の製作が行われている。工程1剥離後の核は平面が三角、断面が半円状を呈している。

【個体A】正面側で剥離された剥片を素材とし、尖頭器・両面調整石器を製作している。背面側に大型打面で厚手の剥離を加えて自然面除去を行い、腹面側には薄手の平坦剥離を行っている。製作石器は欠落しており、接合状況から復元された大きさは、長さ7cm以上・幅11.6cmである。

【個体B】226は個体B接合状態で、尖頭器・両面調整石器を製作している。上面で剥離された横長剥片を素材とし、長い横軸を石器の長軸に設定する。工程B-1~5では自然面や凹凸の強い素材面を厚手の剥離で除去し、併せて側面部の角張った形状を除いて側縁を形成している。工程B-6~8は薄型の平坦剥離に移行して徐々に器体の扁平化を進め、横断面を凸レンズ状に整形している。製作石器は欠落するが、大きさは長10.6×幅5.7×厚2.2cmと復元される。

【接合2401】接合2399の工程1正面側で剥離された剥片が素材と考えられ、尖頭器・両面調整石器を製作している。工程1で打瘤の発達するやや厚手の剥離で素材の高まりを除去した後、工程2では平坦剥離で面的に厚みを除去して器体を扁平に加工し、工程3で薄型の剥離により器面を整えている。製作石器は欠落するが、大きさは長12.7×幅5.7cm程度と推測される。

段階2(核個体尖頭器の製作)

【工程2~5】227は工程2~7接合状態である。工程2~4は素材石核正面の平坦面への剥離、工程3・5は正面を打面とした膨らみの強い裏面への剥離である。正面側への剥離は平坦だが大型打面で、側面を取り込むように加えられる。裏面への剥離は厚手・急角度に加えられ、自然面と器体の厚みを急激に除去している。

【工程6~7】薄手の平坦剥離で、器体の扁平化を進めている。工程7の打面は点状となっている。製作尖頭器は欠落し、他の個体石器と同様に遺跡外への搬出が推測される。接合資料から復元された尖頭器の大きさは長14.6×幅6.7×厚1.5cm前後である。

分布 Sb-37・40に分布し、主にSb-40のLラインから南東側の広い範囲に出土している。折れ接合距離には16mを超えるものがみられるが、沢状地形の影響によって遺物が傾斜方向に移動したものと考えられる。

母岩別資料584、接合資料2408(図Ⅲ-374~378、図版191・192)

母岩別資料584は接合資料2408~2411および非接合剥片18点で構成され、総点数は86点、総重量は5,112.7gである。

素材 229は接合資料2408で、58点(36個体)が接合し、重量は4,786.1gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

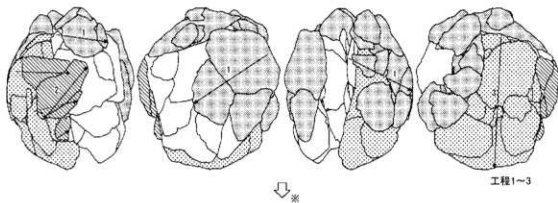
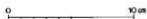
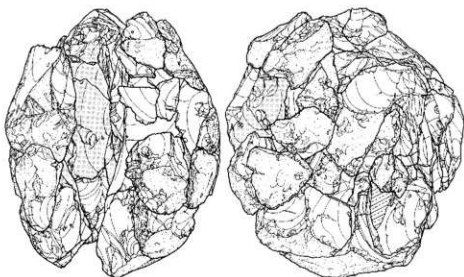
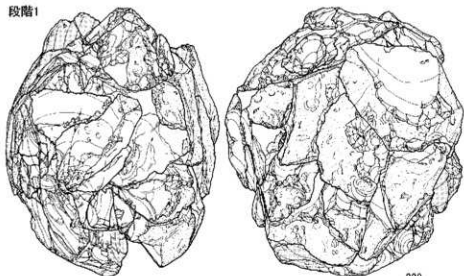
剥離工程 転礫原石を粗割し、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。球状の原石を使用している。

段階1(原石の粗割りと分割)

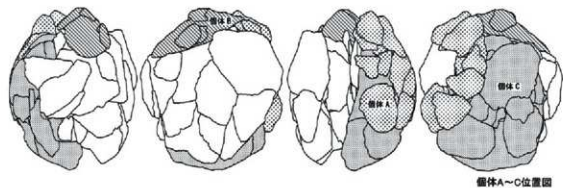
【工程1~3】工程1では原石の正面・上面・裏面を粗割りして13~15cm程の分厚い剥片を剥離して

母岩584 接合2408

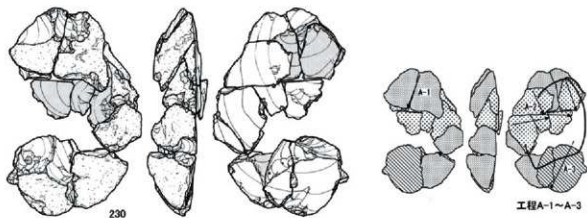
段階1



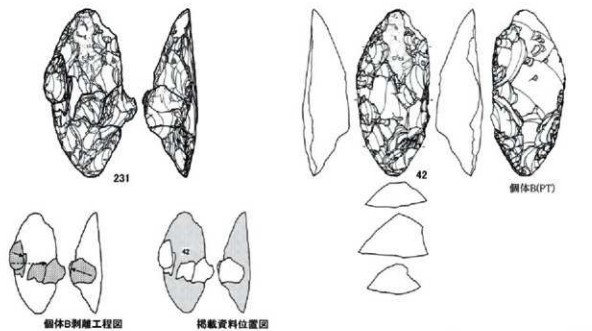
図Ⅲ-374 D3b区の石器(4) 母岩584 接合2408(1)



個体A(素材:工程1 FK)

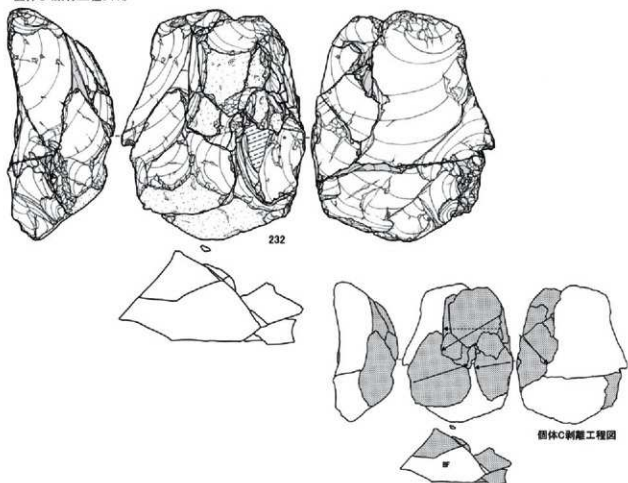


個体B(素材:工程1 FK)

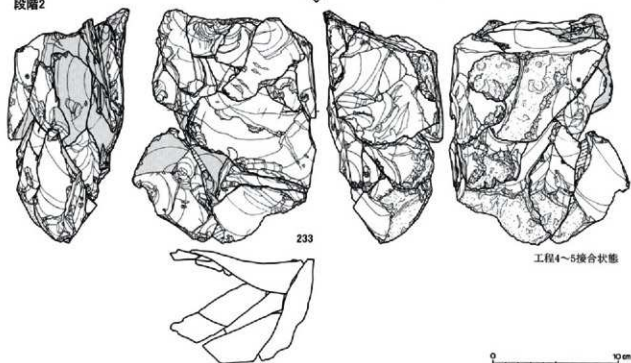


図Ⅲ-375 D3b区の石器(5) 母岩 584 接合 2408(2)

個体C (素材工程3 FK)

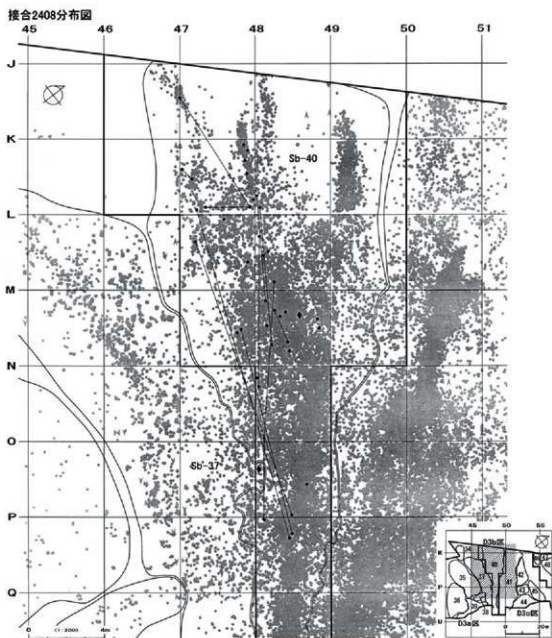
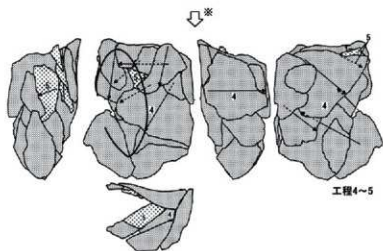


段階2

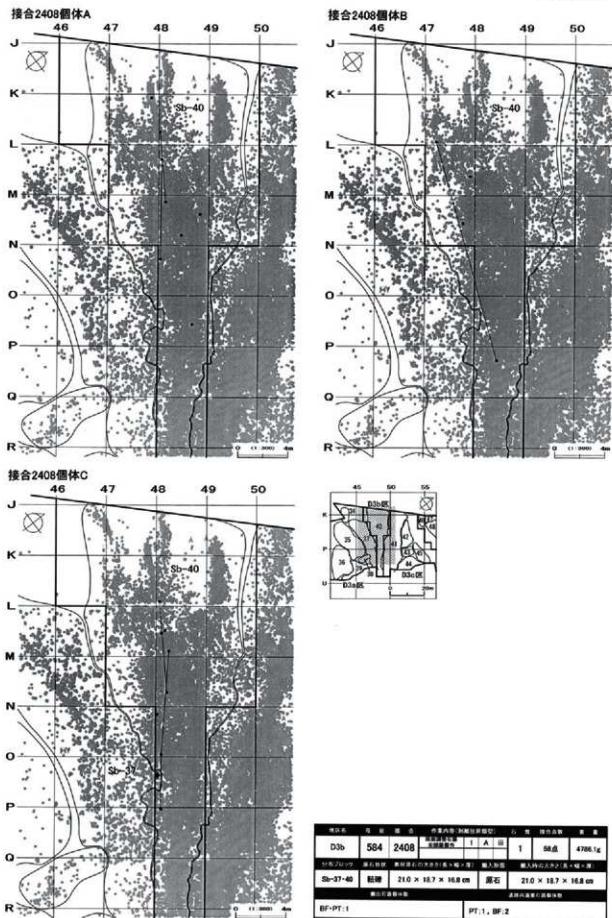


図Ⅲ-376 D3b区の石器(6) 母岩 584 接合 2408(3)





図Ⅲ-377 D3b区の石器(7) 母岩 584 接合 2408(4)



図Ⅲ-378 D3b区の石器(8) 母岩584 接合2408(5)

いる。これら剥片は個体A・Bの素材となっている。工程2で若干の石核整形を行い、工程3では石核を半割する。得られた剥片は個体Cの素材に使用されている。

【個体A】230は個体A接合状態で尖頭器・両面調整石器を製作している。長軸17cmの剥片を素材とする。背腹両面に打面部が厚く末端部の薄い剥離を加えて側縁を形成している。製作石器は欠落するが、長12.2×幅8.2×厚2.5cm程度と復元される。

【個体B】231は個体B接合状態で、尖頭器に調整剥片が接合している。加工は腹面に平坦剥離、背面に厚手の剥離を加えるが、自然面・素材面と器体の厚みを大きく残したまま尖頭器を遺棄している。

【個体C】232は個体C接合状態で尖頭器・両面調整石器を製作している。素材背面側へ大型で非常に粗い剥離を加えている。左側面側から加えた剥離が原因で破損し、遺棄されている。

段階2(核素材尖頭器の製作)

【工程4~5】233は工程4~5接合状態である。工程4は正裏両面を大型剥離で粗く加工している。正面側へは剥片全体が分厚い剥離、裏面側へは打面部が厚く末端部はやや薄手となる剥離を加えて、全体の厚みと側面の角張った形状を除去している。工程5ではやや薄型化した剥離に移行し、側縁辺を形成している。製作両面調整石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。復元された大きさは、長14.2×幅6.4×厚4.0cm程である。

分布 Sb-37・40に分布し、主にSb-40のK~Pラインの範囲で出土している。折れ接合距離には18mを超えるものがみられるが、沢状地形の影響によって遺物が傾斜方向に移動したものと考えられる。

母岩別資料601、接合資料2447(図Ⅲ-379・380、図版193)

母岩別資料601は接合資料2447~2455、折れ接合資料60881・60882および非接合剥片56点で構成され、総点数は138点、総重量は1,278.3gである。

素材 234は接合資料2447で、55点(42個体)が接合し、重量は1,036.3gである。石質は黒曜石3で、転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

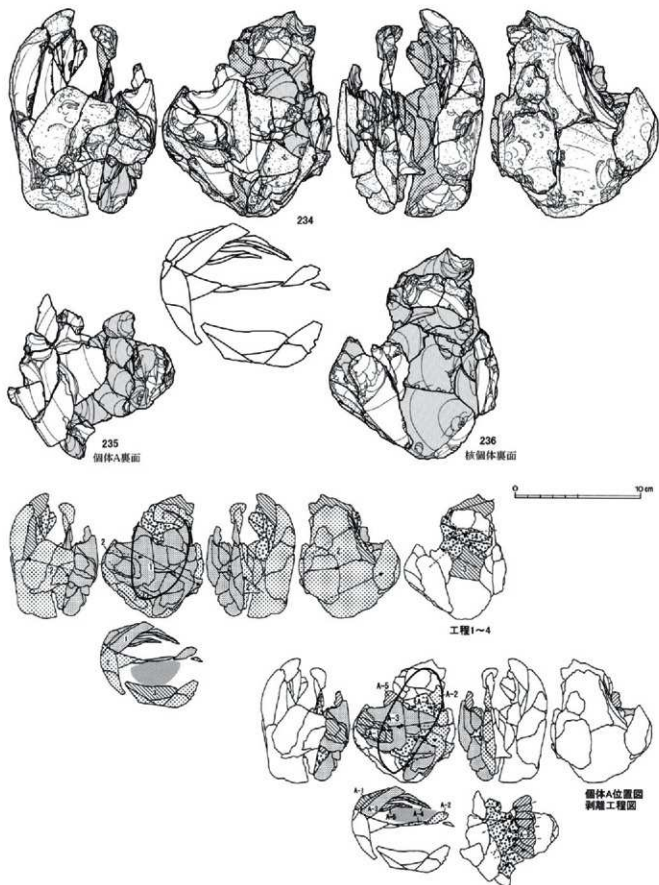
剥離工程 転礫原石を分割し、剥片および石核を素材に2個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiv類に分類される。

【工程1~4】工程1で素材原石を半割し、長16.0×幅12.0×厚4.0cmの素材を2個体(剥片・石核)得る。剥片は個体Aの製作に使用される。工程2では半割面と側面を打面として粗割りを加え、自然面と器体全体の厚みを除去する。また半割面側には打面部が分厚く末端部が薄い縦断面三角形の剥離を加え、側面部の厚みを除いている。工程3では石器中軸を大きく越える幅広の剥離を加え、工程4では石器中軸に達する程度の平坦剥離に移行し、器体の扁平化を進めている。製作両面調整石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは長14.5×幅6.0×厚3.1cmである。

【個体A】尖頭器・両面調整石器を製作している。工程1で得られた横長剥片を素材とし、長い横軸を石器長軸に設定している。工程A-1・3は素材打面部背面側、工程A-2は素材末端部腹面側に錯向状に剥離が加えられている。工程A-1・3は厚手の剥離で自然面を除去し、工程A-2は打面部が分厚く末端部が薄い断面三角形の剥離を加えている。これにより横断面が三角形から平行四辺形へと変更されている。工程A-4では中軸を越える幅広の平坦剥離を面的に加えて器体を扁平化し、工程A-5では線状打面の薄型剥離となり、横断面形は薄い凸レンズ状に整形されている。製作石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは長11.9×幅7.5×厚1.9cmである。

分布 Sb-40に分布し、主にJ47~M48区の範囲でまとまって出土している。

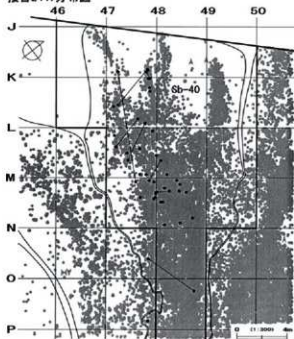
母岩601 接合2447



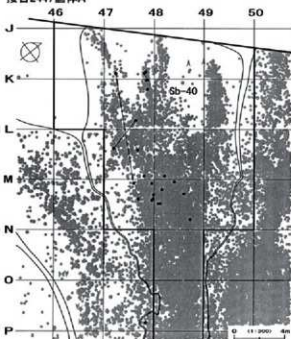
図Ⅲ-379 D3b区の石器(9) 母岩601 接合2447(1)

2 遺物

接合2447分布図



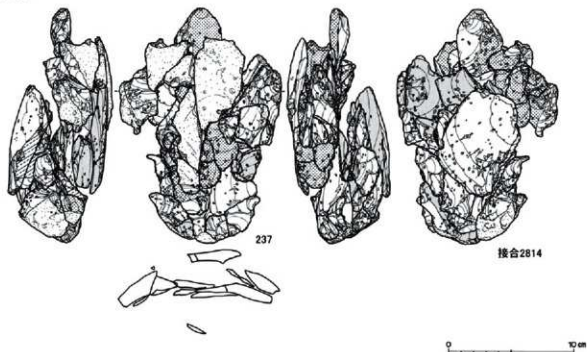
接合2447層体A



地区名	調査年度	調査区画	調査内容	調査方法	調査回数	調査日	調査者
D3b	601	2447	接合2447層体A	1	A	3	35点 1036.3g
Sb-40	鉛弾	16.2 × 13.4 × 11.8 mm	銅管	16.2 × 13.4 × 11.8 mm			
調査内容(調査区画)				調査内容(調査区画)			
BF-PT:2							

母岩656 接合2814・2816

段階1



図Ⅲ-380 D3b区の石器(10) 母岩 601 接合 2447(2)、母岩 656 接合 2814・2816(1)

母岩別資料 656、接合資料 2814・2816(図Ⅲ-380~383、図版 194・195-1)

母岩別資料 656 は接合資料 2814~2819・2855・2856、折れ接合資料 61343・61344 および非接合剥片 47 点で構成され、総点数は 144 点、総重量は 949.0 g である。

素材 237 は接合資料 2814、240 は接合資料 2816 で、二つ合計で 82 点 (64 個体) が接合し、重量は 751.4 g である。石質は夾雑物の多い黒曜石 1 で、転礫を素材とし、両面調整石器の状態で見跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類される。

段階 1 (原石の分割)

【工程 1~3】正裏面に大型剥片を加えて粗い両面調整を形成する。剥離された剥片は個体 A~C の素材に使用される。接合 2816 も同工程内の大型剥片が素材と考えられる。

【個体 A~C】工程 1~3 で剥離された 10~13cm 大の剥片を素材とし、10cm 前後の小型の尖頭器・両面調整石器が製作されている。石器は個体 B・C では欠落するが、個体 A の製作尖頭器は折損した下半部が接合している。238 は個体 A 接合状態である。個体 A の製作工程は、横長剥片の長い横軸を石器長軸に設定し、素材末端部折断後、打撃の発達するやや平坦な剥離を加えて器形を整え、薄型平坦剥離へと移行している。個体 A の尖頭器は長 12.0 × 幅 5.4 × 厚 1.1cm 前後と観察できる。

段階 2 (尖頭器の製作)

【工程 4~6】239 は工程 4~9 接合状態である。粗い両面調整に加えて厚手の大型剥離を加えて自然面や粗割り稜線を除去し、器体の歪な表面形状を整形している。長軸方向の剥離や石器中軸を大きく越える剥離のため、器体が大きく扁平化している。

【工程 7~9】石器中軸に達する程度の平坦剥離に移行して器体を徐々に扁平化し、横断面凸レンズ状に整形している。製作尖頭器は欠落し、見跡外への搬出が推測される。尖頭器の大きさは、長 15.0 以上 × 幅 6.6 × 厚 1.8cm と復元できる。工程全体で 5 個体以上の尖頭器・両面調整石器が製作されている。

分布 Sb-37・40 から出土し、主に Sb-40 の K ラインから南東側の広い範囲に分布している。折れ接合距離には 18 m を超えるものがみられるが、状況地形の影響によって遺物が傾斜方向に移動したものと考えられる。

母岩別資料 639、接合資料 2592(図Ⅲ-384~387、図版 195-2)

母岩別資料 639 は接合資料 2592・2593、折れ接合資料 61050 および非接合剥片 43 点で構成され、総点数は 124 点、総重量は 2,027.8 g である。

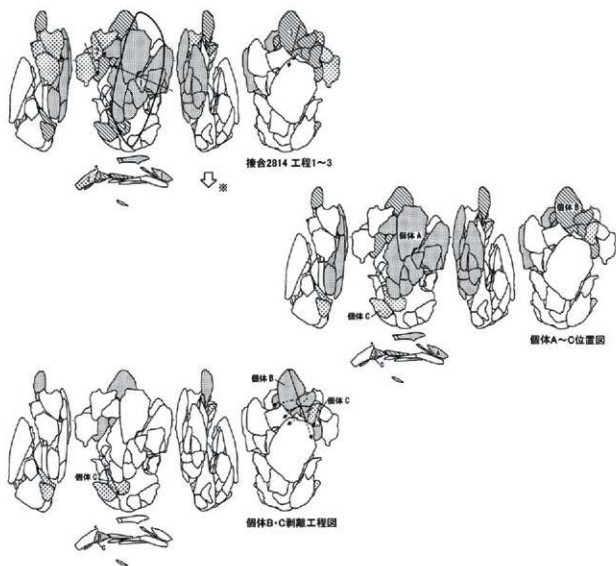
素材 241 は接合資料 2592 で、77 点 (37 個体) が接合し、重量は 1,745.3 g である。石質は黒曜石 5 で、転礫を素材とし、原石の状態で見跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類される。

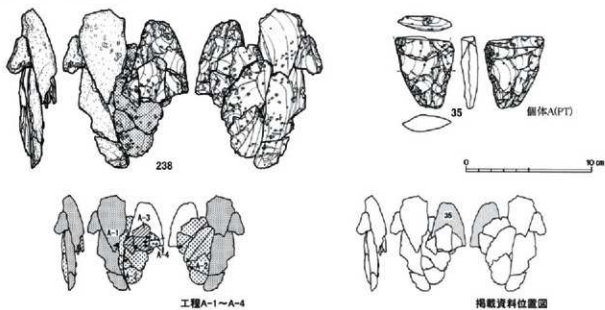
【工程 1~4】分厚い大型剥離による粗割りの段階である。工程 1 では正裏と両側面に大型剥離を加えて歪な自然面形状を除去し、石核を概ね立方体状に加工する。工程 2 では裏面に逆側縁まで達する厚手の剥離を加え、広い平坦面を形成する。工程 3・4 では両側面の自然面や平坦面を取り込む剥離で厚みを除去し側縁を形成している。また、工程 1 の剥片が個体 A・B、工程 2 の剥片が個体 C の素材に使用されている。

【工程 5~6】石器長軸を越える平坦剥離に移行し、器体を薄く調整して扁平化を進めている。先行の

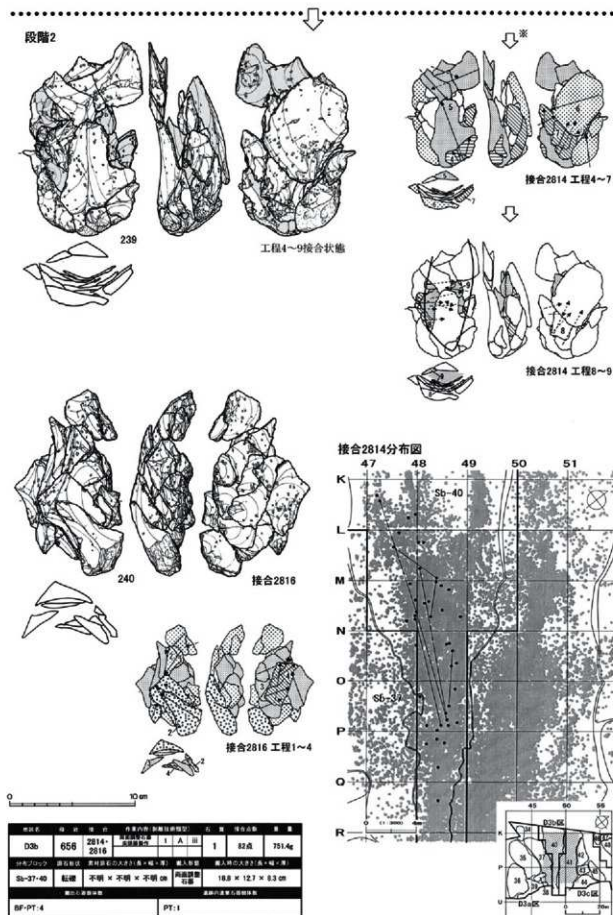
2 遺物



個体A (素材: 工程1 FK)



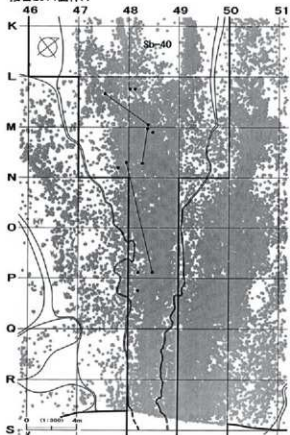
図Ⅱ-381 D3b区の石器(11) 母岩 656 接合 2814・2816(2)



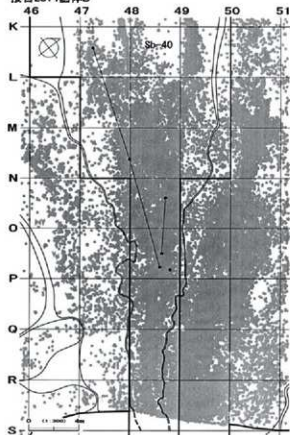
図Ⅲ-382 D3b区の石器(12) 母岩 656 接合 2814・2816(3)

2 遺 物

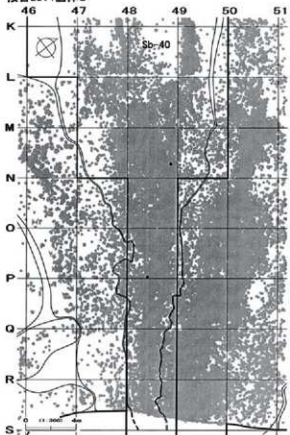
接合2814個体A



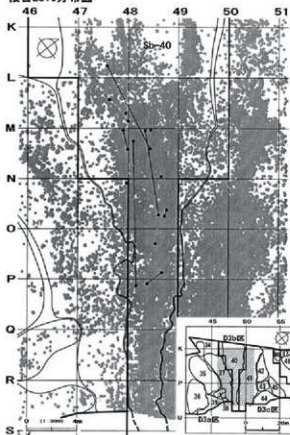
接合2814個体B



接合2814個体C



接合2816分布図



図Ⅲ-383 D3b区の石器(13) 母岩 656 接合 2814・2816(4)

工程と比べ、調整剥片の打面が著しく小型化している。製作尖頭器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された尖頭器の大きさは、長17.4×幅10.9×厚3.3cmである。

【個体A～C】個体A・Bは工程1で剥離された13cm前後の大型剥片を素材に、尖頭器・両面調整石器を製作している。個体Aでは背面側調整剥片のみが接合し、背面側への加工が主体的に行われたと考えられる。両個体とも製作石器が欠落し、遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは個体Aが長10.0以上×幅8.0×厚2.1cm、個体Bが不明である。個体Cは工程2の剥片を素材とし、二次加工ある剥片を製作している。

分布 Sb-40から出土し、J49区からS48区にかけての広範囲に分布が認められる。折れ接合のほとんどが沢状地形に沿った傾斜方向で確認されている。

母岩別資料587、接合資料2419(図Ⅲ-387・388、図版198)

母岩別資料587は接合資料2419のみで構成され、総点数は20点、総重量は1,555.4gである。

素材 242は接合資料2419で、20点(18個体)が接合している。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1AⅢ類に分類される。工程1～3は粗割りの作業で、打痕が著しく発達する大型剥離により自然面除去と側縁形成を行い、横断面形を菱形に整形している。工程1で剥離された剥片を素材として、243の削器と244の両面調整石器が製作されている。工程4では長軸を越える平坦剥離に移行しており、器体の扁平化を進めたものと考えられる。製作両面調整石器は出土がなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは長17.1×幅8.8×厚4.8cmである。

分布 Sb-40の西部、J47区からN48区にかけて主に分布している。

母岩別資料603、接合資料2461(図Ⅲ-389、図版196-1)

母岩別資料603は接合資料2461-2464・2854、折れ接合資料61542および非接合剥片30点と縦長剥片1点で構成され、総点数は85点、総重量は786.5gである。

素材 245は接合資料2461で、43点(28個体)が接合し、重量は693.1gである。石質は黒曜石3で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1AⅠ類に分類される。原石長軸を石器長軸に設定している。工程1で裏面側に大型剥離を加えて広い平坦面を形成し、工程2では裏面平坦面を打面として、正面側へやや急角度で厚手の剥離を加えて自然面を除去する。この剥離で幅が大きく減少している。工程3では長軸方向への剥離を主体に器体中央部の厚みを除去し、工程4では小型・薄型中心の平坦剥離に移行し、器体の扁平化を進めている。246・247は正裏調整剥片の腹面側を図示したものである。製作石器は出土がなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された大きさは長12.8×幅7.6×厚2.5cmである。

分布 Sb-40の北西部から東部、J49区からQ48区にかけて主に分布し、特にK49区周辺にまとまりが認められる。折れ接合は沢状地形に沿った傾斜方向で主に確認されている。

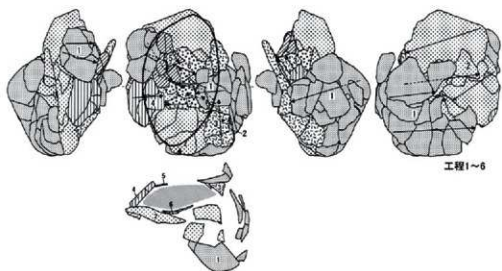
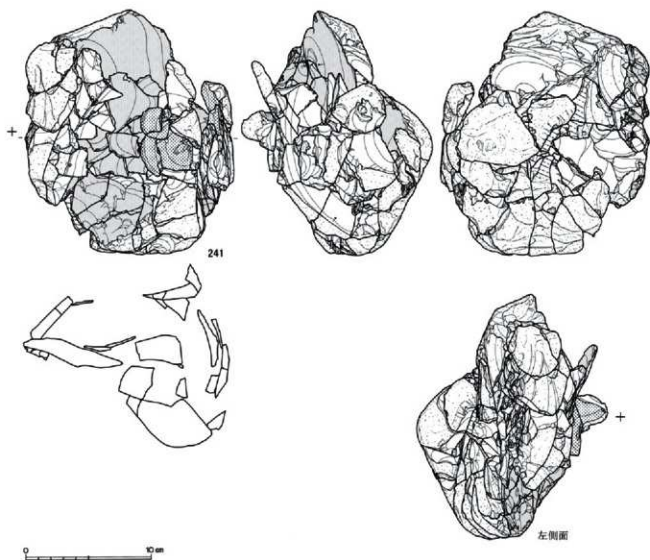
母岩別資料605、接合資料2471(図Ⅲ-390、図版196-2・図版197-1)

母岩別資料605は接合資料2471、折れ接合資料60888・60889および非接合剥片1点で構成され、総点数は39点、総重量は1,489.7gである。

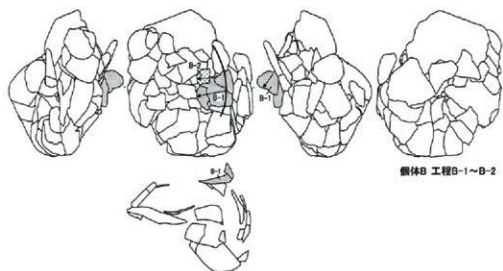
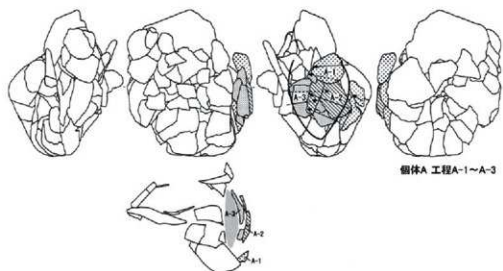
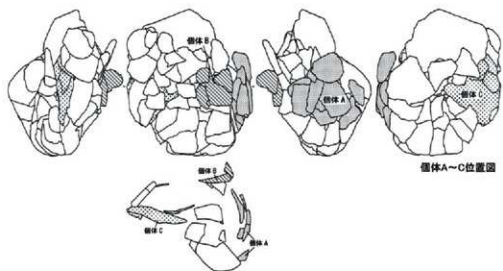
素材 248は接合資料2471で、33点(28個体)が接合し、重量は1,450.8gである。石質は黒曜石3で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1AⅠ類に

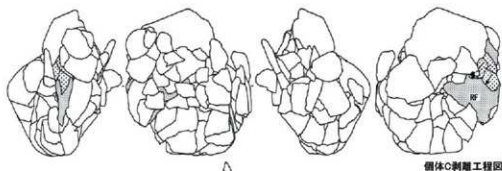
母岩639 接合2592



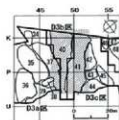
図Ⅲ-384 D3b区の石器(14) 母岩639 接合2592(1)



図Ⅲ-385 D3b区の石器(15) 母岩639 接合2592(2)



個体C剥離工程図

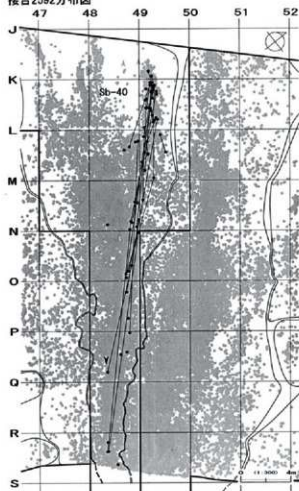


個体ID	母岩	重量	片断数	剥離工程	石	種	用途	重量
D3b	639	2592		I A 出	S	77点	1745.5g	
母岩の大きさ (長×幅×厚) 剥離工程の大きさ (長×幅×厚)								
Sb-40	結核	19.3 × 18.4 × 15.2 cm			原石	19.3 × 18.4 × 15.2 cm		
剥離工程の大きさ (長×幅×厚)								
母岩の大きさ (長×幅×厚)								

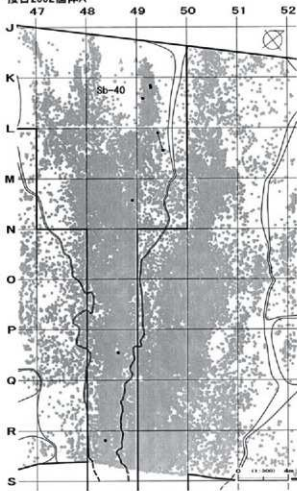
BF-PT-3

図1、(同一位置 RF-1)

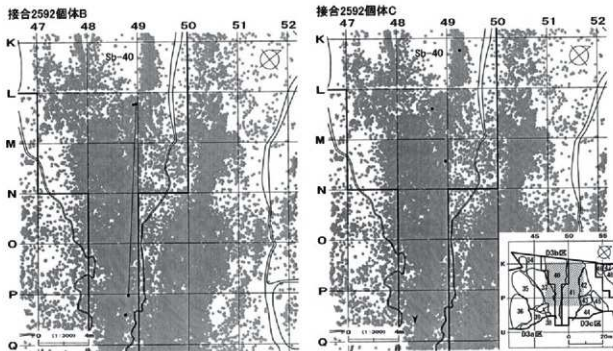
接合2592分布図



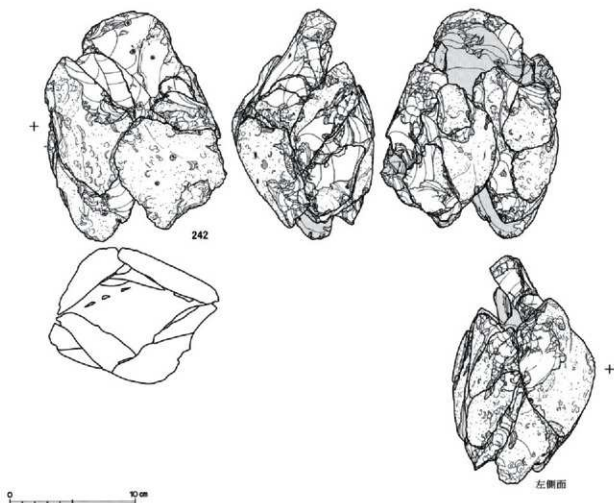
接合2592個体A



図Ⅲ-386 D3b区の石器(16) 母岩639 接合2592(3)

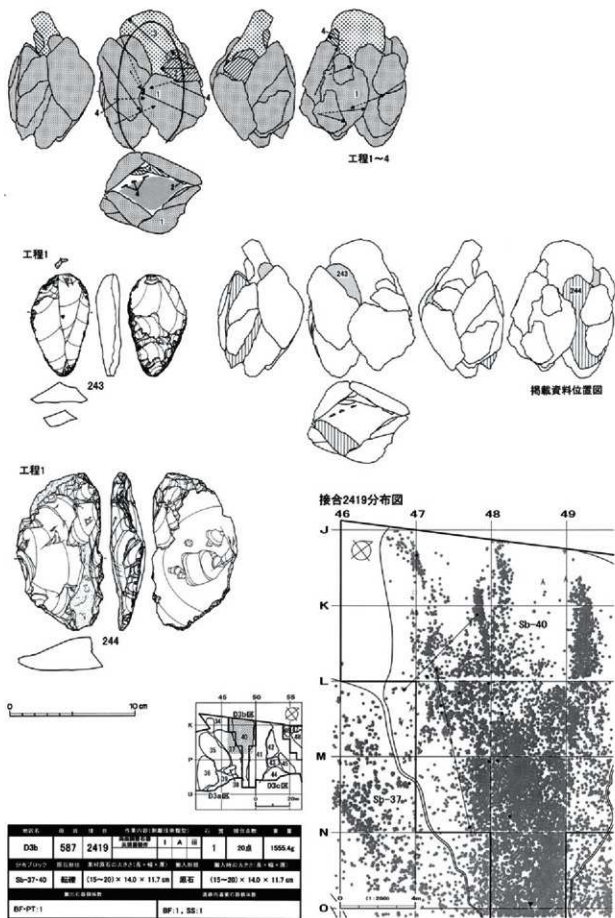


母岩587 接合2419



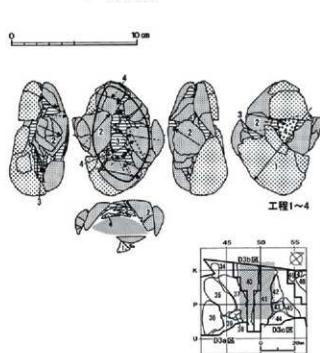
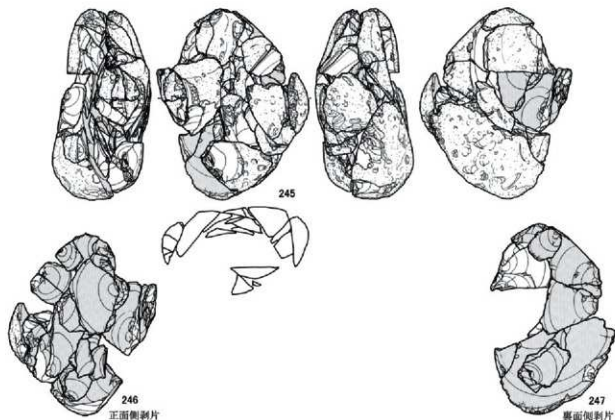
図Ⅲ-387 D3b区の石器(17) 母岩639 接合2592(4)、母岩587 接合2419(1)

2 遺物

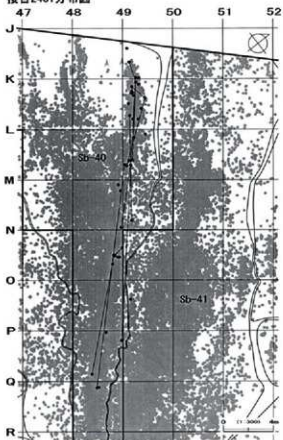


図Ⅲ-388 D3b区の石器(18) 母岩587 接合2419(2)

母岩603 接合2461



接合2461分布図

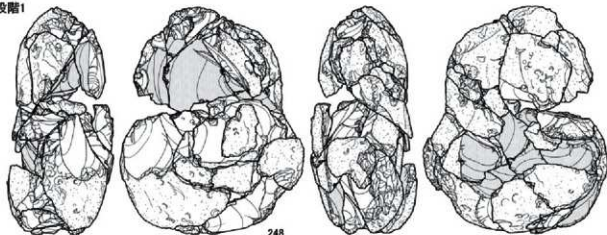


遺物名	発見地	遺物番号	出土層	出土位置	出土状況	出土時期	出土層	出土位置	出土状況	出土時期	出土層
D3b	603	2461	1	A	1	3	43点	093.1g			
Sb-40-41	軽糖	14.8 × 7.8 × 7.7 mm	重糖	14.8 × 7.8 × 7.7 mm							

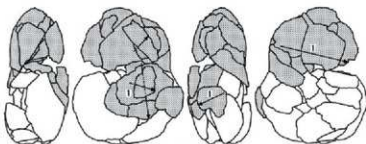
図Ⅲ-389 D3b区の石器(19) 母岩603 接合2461

母岩605 接合2471

段階1

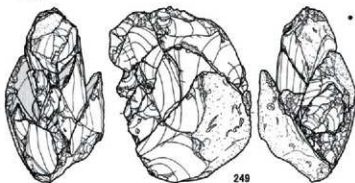


248

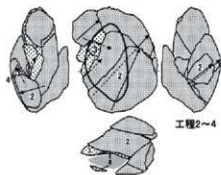


工程1

段階2

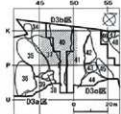
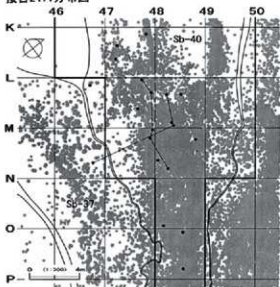


249



工程2~4

接合2471分布図



地区名	母岩	接合	中核内径(縦横)mm	口径	厚さmm	重量
D3b	605	2471	110 × 110	1	3	30g
母岩の産地	産地不明	母岩産地不明	産地不明	産地不明	産地不明	産地不明
接合の産地	産地不明	産地不明	産地不明	産地不明	産地不明	産地不明
接合の形状	板状	板状	178 × 145 × 8.3mm	厚石	178 × 145 × 8.3mm	
接合の用途						
接合の用途						

図Ⅲ-390 D3b区の石器(20) 母岩605 接合2471

分類される。工程1では両面を粗削りして自然面を除去し、楕円形の粗い両面調整を形成する。段階2の249は248を90°回転して図示している。工程2ではもっぱら正面側へ分厚い大型剥離を連続的に加えて大きく厚みを除去している。工程3は大型打面でやや厚手の剥離、工程4は点状・線状打面の薄型平坦剥離に移行し、器体の扁平化を進めている。製作石器は出土がなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された大きさは長10.4×幅5.8×厚2.2cmである。

分布 Sb-40の北西部、K47区からO48区にかけて主に分布している。

母岩別資料641、接合資料2596(図III-391、図版197-2)

母岩別資料641は接合資料2596および非接合剥片8点で構成され、総点数は33点、総重量は1.167.6gである。

素材 250は接合資料2596で、25点(17個体)が接合し、重量は1.146.0gである。石質は黒曜石5で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A*i*類に分類される。工程1~4は分厚い大型剥離を両面に加えて自然面と全体の厚みを除去しており、粗く扁平に加工された両面調整を形成する。工程5では端部から長軸方向の剥離を加えて尖頭形への整形を行う。工程6・7はやや打縮の発達する薄型平坦剥離に移行している。製作石器は出土がなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは長14.6×幅6.4×厚2.2cmである。

分布 Sb-40のL48区からP48区にかけて分布している。

母岩別資料644、接合資料2602(図III-392、図版197-3)

母岩別資料644は接合資料2602のみで構成され、総点数は8点、総重量は208.5gである。

素材 251は接合資料2602で、8点(7個体)が接合している。石質は黒曜石5で角礫を素材とし、粗い加工の両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。素材原石は幅8cm・厚さ3cm前後の板状礫である。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A*i*類に分類される。工程1・2では裏面を打面として大型打面で厚手の剥離を加えており、側面の角張った形状を除去し平面形を整えている。工程3はやや打縮の発達する平坦な剥離で側縁辺を形成し、さらに自然面と厚みを面的に除去している。工程3の剥離により石器が破損し、遺棄されている。252は製作尖頭器である。

分布 Sb-40のM48区からQ48区にかけて、傾斜方向に連なるように分布している。

母岩別資料657、接合資料2820(図III-393~397、図版200~202)

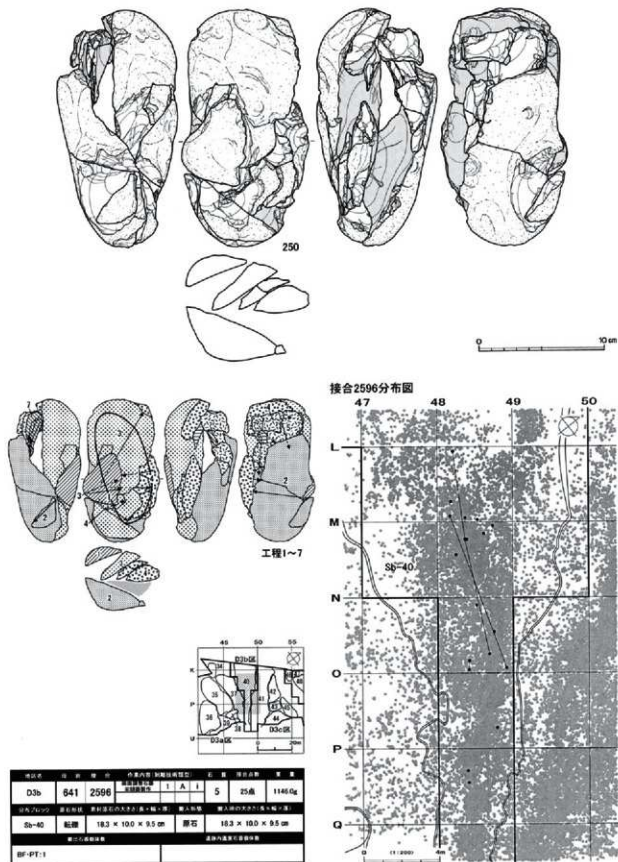
母岩別資料657は接合資料2820~2825、折れ接合資料61347~61349および非接合剥片1点で構成され、総点数は95点、総重量は3,436.4gである。

素材 253は接合資料2820で、71点(46個体)が接合し、重量は2,893.6gである。石質は黒曜石1で、転礫を素材とし、石核の状態で遺跡内に搬入している。素材原石は長さ35cm・厚さ30cmを越える非常に大型のものが使用されている。

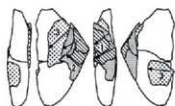
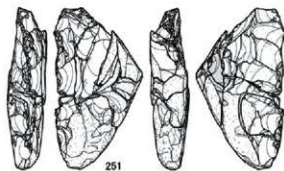
剥離工程 転礫原石から剥離された大型剥片を素材として尖頭器を製作した資料で、剥離技術類型は5E類に分類される。不規則に打面と作業面を入れ替えて大型剥片剥離を行っているが、接合が断片的なため全体の様子は不明である。尖頭器製作個体が良好に復元されたため、尖頭器・両面調整石器製作関連の母岩として扱った。

【工程1~3】大型剥片を剥離する工程で、長さ30cm・幅10cmを越える縦長剥片剥離が含まれる。工程1では上面を打面として正面で、工程2・3では正裏面を打面として右側面と下面で、剥離作業が

母岩641 接合2596



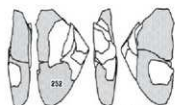
母岩644 接合2602



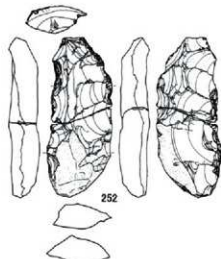
工程1~3

遺物名	母岩	接合	位置(内線)	層位	出土層位	数量
D3b	644	2602	1 A I	5	8点	208枚
母岩の寸法	長さ約20×22×厚1~4cm		層位の厚さ		長さ約10×22×厚1~4cm	
5b-40	内線	平側×(5~10)×3.2cm	内線幅		12.7×6.5×3.2cm	
遺物の出土状況			遺物の出土層位(遺物層位)			

PF:1

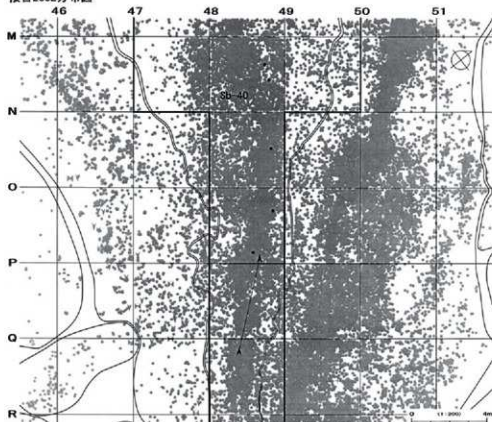


掲載資料位置図

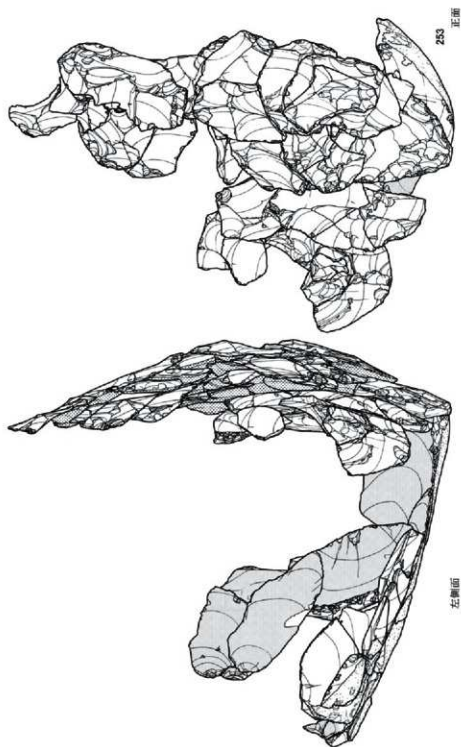


0 10cm

接合2602分布図



図III-392 D3b区の石器(22) 母岩644 接合2602



図Ⅲ-393 D36区の石器(23) 母岩657 接合2820(1)

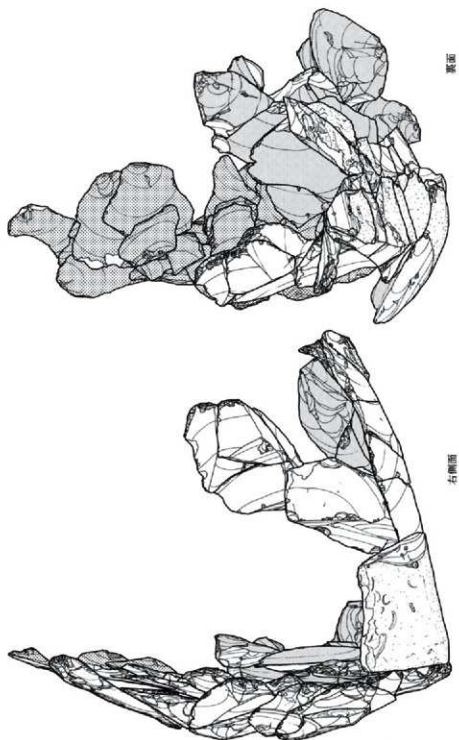
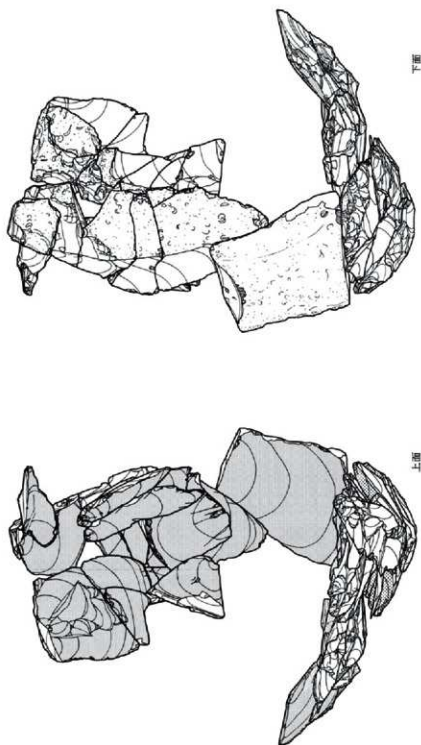


図 III-394 D36区の石器(24) 母源 657 番号 2820(2)





下面

上面

D36		657		2820		D36区(25)		母岩657		接合2820(3)	
品名	石	種別	石	種別	石	種別	石	種別	石	種別	石
数量	1	数量	1	数量	1	数量	1	数量	1	数量	1
重量	101.6g	重量	101.6g	重量	101.6g	重量	101.6g	重量	101.6g	重量	101.6g
寸法	(10-1) × (10-1) × (10-1) cm	寸法	(10-1) × (10-1) × (10-1) cm	寸法	(10-1) × (10-1) × (10-1) cm	寸法	(10-1) × (10-1) × (10-1) cm	寸法	(10-1) × (10-1) × (10-1) cm	寸法	(10-1) × (10-1) × (10-1) cm
備考		備考		備考		備考		備考		備考	
D36区(25) 母岩657 接合2820(3)											
D36区(25) 母岩657 接合2820(3)											

図 III-395 D36区(25) 母岩657 接合2820(3)

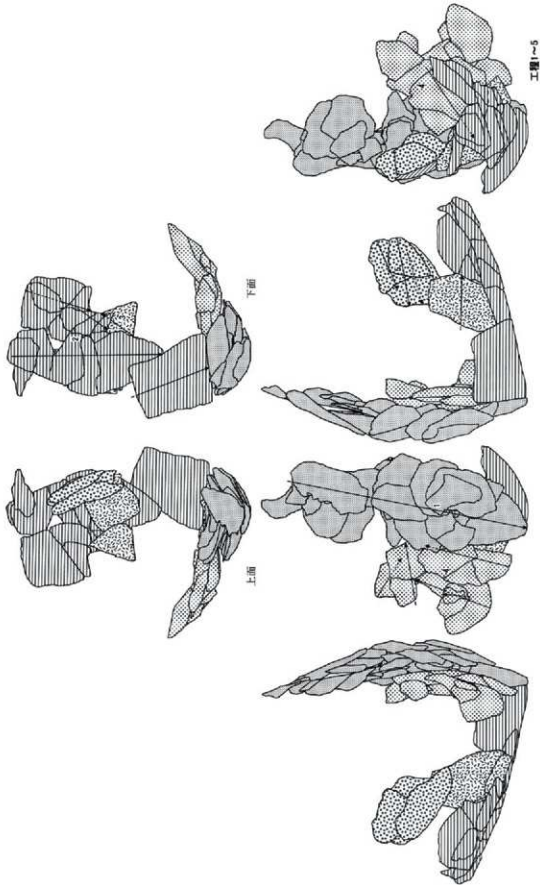
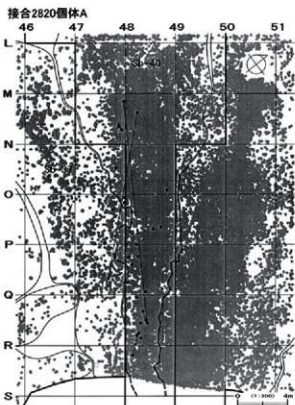
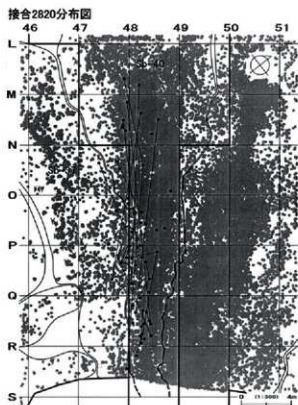
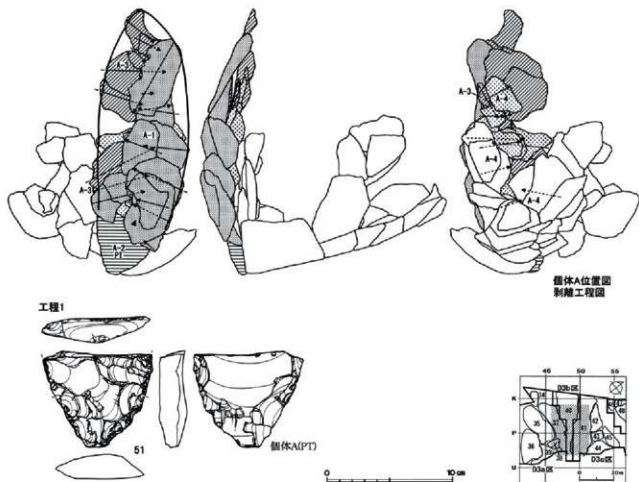


図 III-396 D36区の石片(26) 母源 657 撮合 2820(4)



図Ⅲ-397 D3b区の石器(27) 母岩657 接合2820(5)

行われている。工程1の大型縦長剥片が個体Aの素材となっている。

【工程4～5】工程4では左側面と下面を打面として正面で幅広剥片剥離を、工程5では裏面を打面として右側面で剥片剥離を行っている。

【個体A】工程1で剥離された長さ35cmを越える縦長剥片を素材とし、尖頭器を製作している。加工は主に背面側へ施されており、打瘤が発達し石器中軸を大きく越える大型の剥離が加えられる。これにより素材背面の剥離面稜線や厚みが大きく取り除かれ、平坦な器面が形成されたようである。尖頭器の下端が破損した後、上部個体に再加工が加えられている。再生を受けた上半部は欠落しており遺跡外へ搬出されたと推測される。製作尖頭器の大きさは破損前で長さ35.1cm・幅12.3cmと復元される。51は破損した尖頭器下端部で、広く素材裏面が残置している。

分布 Sb-40のL47・48区からR48区にかけての範囲と、Sb-37の東部に分布している。折れ接合は沢状地形に沿った傾斜方向で主に確認されている。

母岩別資料616、接合資料2508(図Ⅲ-398・399、図版199-1)

母岩別資料616は接合資料2508～2510、折れ接合資料60920および非接合剥片84点で構成され、総点数は144点、総重量は941.4gである。

素材 254は接合資料2508で、52点(39個体)が接合し、重量は726.1gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、粗割り原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 角礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。

段階1(粗割段階)

【工程1～4】工程1～2は粗割りの工程で、打瘤が著しく発達する分厚い剥離を加えて自然面や先行の粗割面を取り除いている。これにより側面部が取り除かれて側縁辺が形成され、また器体の幅と厚さが大きく減少する。さらに工程3では折断で長さが減少しているが、破損の可能性もある。工程2の剥片は個体A、工程3の折断部は個体Bの素材に使用されている。工程4では主に両端部を加工して厚みを除き、収斂形状を形成している。段階1で木葉形の両面調整器が準備される。

【個体A・B】255は個体A接合状態で彫器が製作されている。工程2の幅広剥片を素材とし、左側縁に彫刀面を2回以上作出している。彫刀面打面は素材打面が使用されている。個体Bは工程3の折断部を素材とし、打瘤が発達する厚手の剥離を加えて折れ面を除去している。個体Bの石器は欠落するが、両面調整石器を製作したと推測される。

段階2(平坦剥離による尖頭器製作)

【工程4～7】258は工程4～7接合状態である。小打面・薄型の平坦剥離に移行し、器体の扁平化を進めている。製作尖頭器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。尖頭器の大きさは、長さ15cm前後・幅7.3cm・厚さ1.2cm程と考えられる。

分布 Sb-40の西部から中央部、J47区からP48区にかけて主に分布し、M48区周辺にまとまった出土がみられる。

母岩別資料617、接合資料2511(図Ⅲ-400・401、図版203-2・図版204-1)

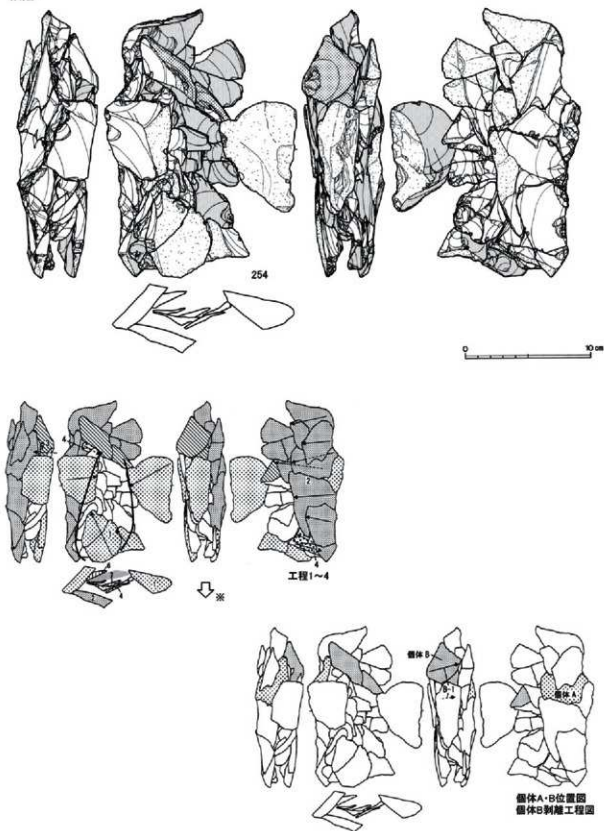
母岩別資料617は接合資料2511～2513および非接合剥片26点で構成され、総点数は114点、総重量は601.8gである。

素材 259は接合資料2511で、84点(63個体)が接合し、重量は541.4gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

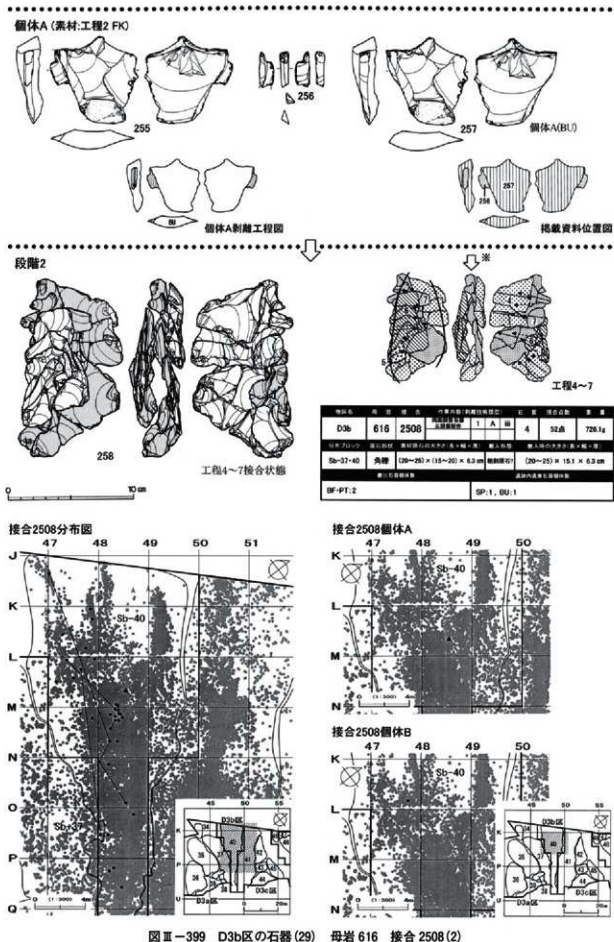
剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に

母岩616 接合2508

段階1

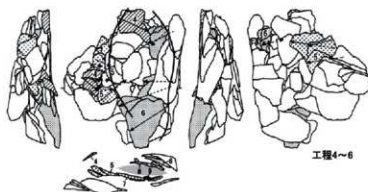
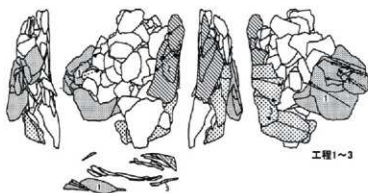
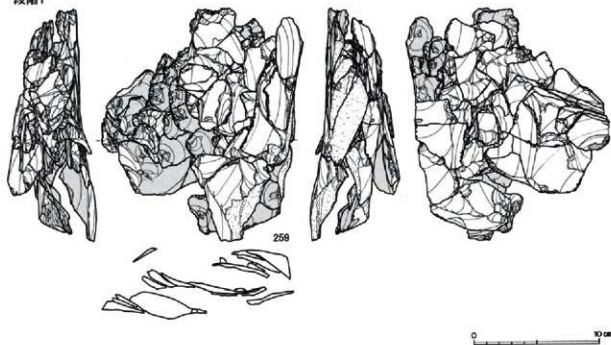


図Ⅲ-398 D3b区の石器(28) 母岩616 接合2508(1)

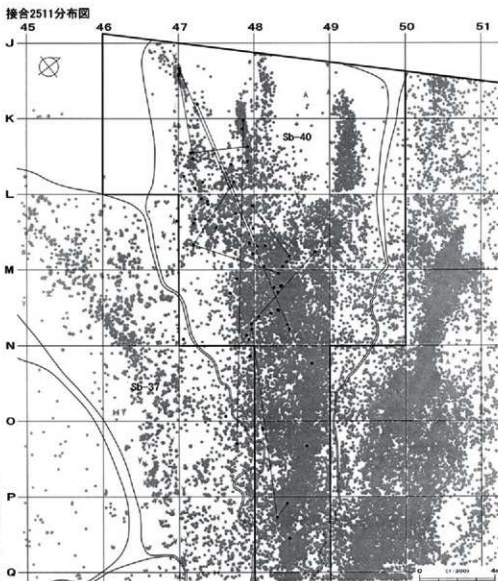
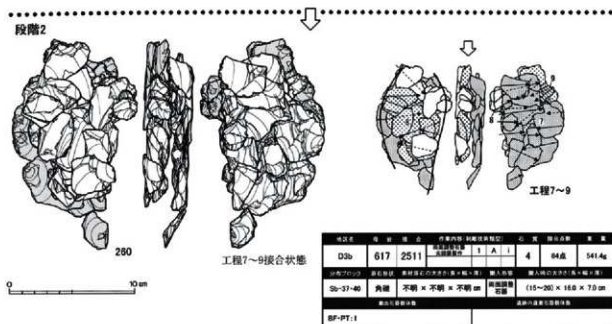


母岩617 接合2511

段階1

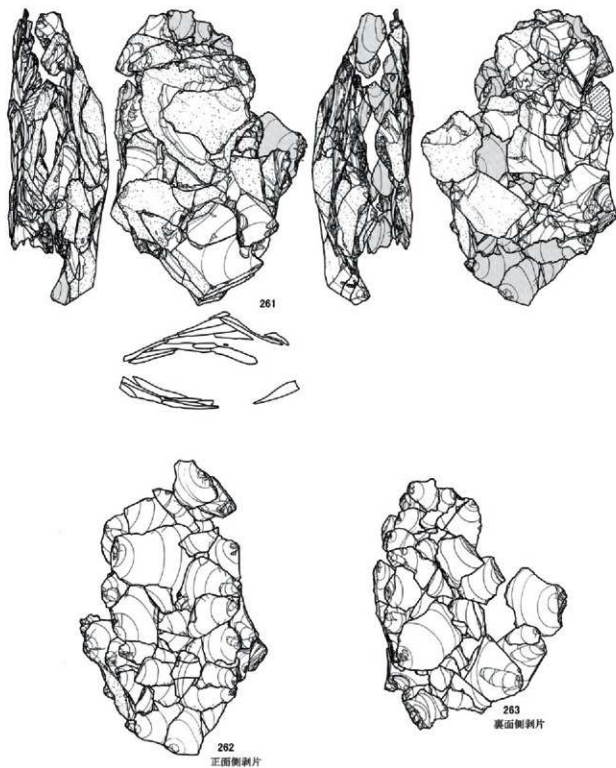


図Ⅲ-400 D3b区 of 石器(30) 母岩617 接合2511(1)



図Ⅲ-401 D3b区の石器(31) 母岩617 接合2511(2)

母岩620 接合2518



図Ⅲ-402 D3b区の石器(32) 母岩620 接合2518(1)

分類される。

段階1（自然面と粗割剥離面の除去・側縁の形成・平面形の整形）

【工程1~3】打瘤の発達する厚い大型剥離を両側面へ錯向状に加え、側面自然面の角張った形状を取り除いて側縁を形成する。また、広い面的な剥離で粗割り時の剥離面を除去する。

【工程4~6】工程4・5は左側縁側への加工で、打瘤の発達するやや小型の剥離を正裏面に交互状に加え、大きく器体幅を減少させて平面形を整えている。工程6は右側縁からのやや厚手の剥離で、自然面や粗割りの剥離面を取り除いている。

段階2（器体の扁平化）

【工程7~9】260は工程7~9接合状態である。石器中軸部まで取り込み平坦剥離に移行し、器体の扁平化を進める。工程7では器体の厚みが残る部分を狙って剥離し、器面の凹凸を解消している。工程8ではやや打瘤の発達した剥離が含まれ、側縁を薄く加工している。製作尖頭器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。尖頭器の大きさは長20.0前後×幅8.9×厚1.5cm程度と考えられる。

分布 Sb-40の西部から中央部、J47区からP48区に主に分布している。特にK47区からM48区にかけて多数が出土している。

母岩別資料 620、接合資料 2518 (図Ⅲ-402・403、図版 205)

母岩別資料620は接合資料2518、折れ接合資料60929および非接合剥片37点で構成され、総点数は135点、総重量は922.8gである。

素材 261は接合資料2518で、96点(67個体)が接合し、重量は834.7gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、粗く加工した両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。262・263は正裏調整剥片の腹面を図示している。

【工程1~3】やや打瘤の発達する剥離で側面の角張った形状の除去と、正裏両面の自然面と粗割面を広く面的な剥離で除去している。これにより側縁が形成され、木葉形を呈する両面調整体となる。

【工程4~5】大型幅広の平坦剥離で全体の厚みを除去し、大きく扁平化している。

【工程6~7】工程6は引き続き幅広の薄型剥離で面的に加工して扁平化を進め、工程7ではやや小型化した剥離で微整形を行っている。製作尖頭器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは、長25.0以上×幅10.1×厚3.4cmである。

分布 Sb-40の中央部、J48区からN48区にかけて主に分布している。特にK48区には密な分布が認められる。

母岩別資料 621、接合資料 2519 (図Ⅲ-404、図版 199-2)

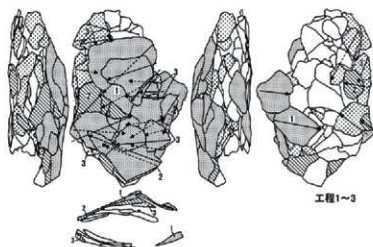
母岩別資料621は接合資料2519および非接合剥片38点で構成され、総点数は71点、総重量は371.3gである。

素材 264は接合資料2519で、33点(26個体)が接合し、重量は306.2gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

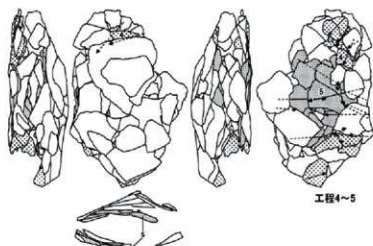
剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。工程1は主に自然面と粗割り剥離面の除去で、器体中央部に達する剥離を連続させ、長軸上の厚みを減じている。工程2は幅広の面的な剥離で、器体の扁平化を進めて横断面を凸レンズ状に近づけている。工程3は薄型の剥離で器面の平坦化を行ったとみられる。製作尖頭器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された尖頭器の大きさは、長さ不明・幅10.4cm・厚2.2cmである。

分布 Sb-40の北西部、J47・48区からM48区にかけてまとまった分布が認められる。

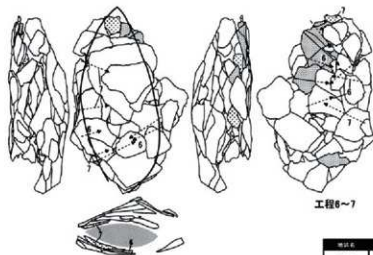
2 遺物



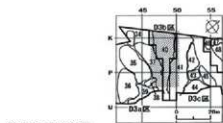
工程1~3



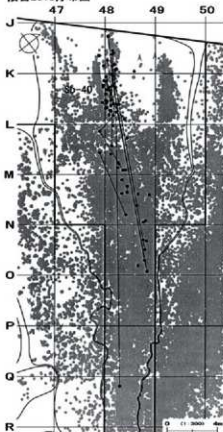
工程4~5



工程6~7



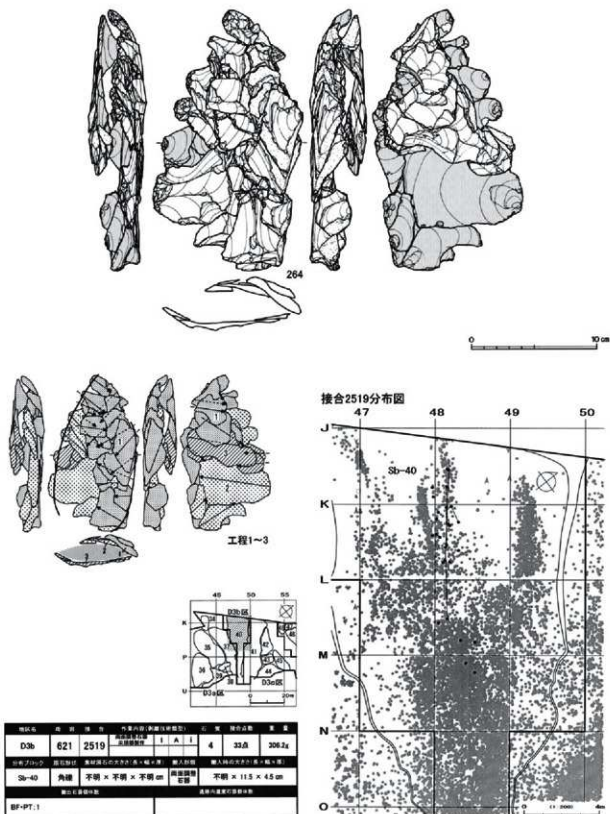
接合2518分布図



遺物名	母岩	種別	作製時期(推定)	数量	出土位置	重量	
D3b	620	2518	縄文時代前期(前期)	1	A	4	96点 834.7g
5b-40	角礫	不明	(15~20) × 8.0 cm	数量不明	(20~25) × 13.3 × 8.0 cm		
<small>調査者: 佐藤 浩二 調査日: 2007年10月27日 調査場所: 佐賀県佐賀市佐賀区</small>							

図Ⅲ-403 D3b区の石器(33) 母岩620 接合2518(2)

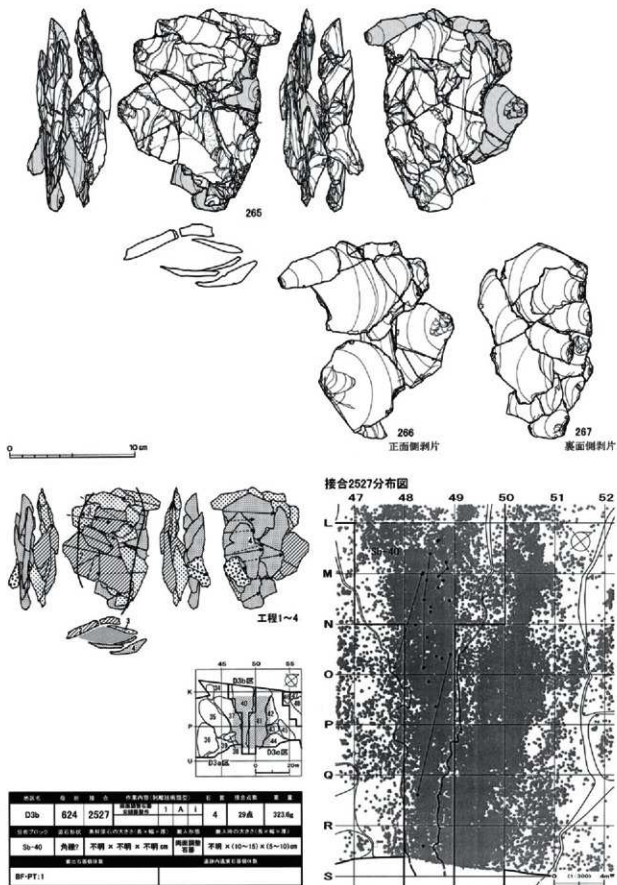
母岩621 接合2519



図Ⅲ-404 D3b区の石器(34) 母岩621 接合2519

2 遺物

母岩624 接合2527



図Ⅲ-405 D3b区の石器(35) 母岩624 接合2527

母岩別資料 624、接合資料 2527(図Ⅲ-405、図版 204-2)

母岩別資料 624 は接合資料 2527~2534、折れ接合資料 60942~60945 および非接合剥片 35 点で構成され、総点数は 91 点、総重量は 584.3 g である。

素材 265 は接合資料 2527 で、29 点 (20 個体) が接合し、重量は 323.6 g である。石質は黒曜石 4 で角礫素材とみられ、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料と考えられ、剥離技術類型は 1A_i 類に分類した。工程 1・2 はやや打瘤の発達する剥離、工程 3 は小打面・薄型の剥離である。全体を通じて逆側縁付近まで達する大型・幅広の平坦剥離が繰り返し加えられ、器体の扁平化を進めている。製作尖頭器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは、長さは不明で、幅 9.5cm・厚 2.2cm である。

分布 Sb-40 の中央 L48 区から R48 区にかけて分布している。

母岩別資料 659、接合資料 2831・2832(図Ⅲ-406・407、図版 206-1)

母岩別資料 659 は接合資料 2831~2836、折れ接合資料 61389~61391 および非接合剥片 28 点で構成され、総点数は 145 点、総重量は 1,084.5 g である。

素材 268 は接合資料 2831、269 は接合資料 2832 で、二つ合計で 102 点 (58 個体) が接合し、重量は 905.4 g である。石質は黒曜石 4 で、素材原石形状は不明、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料と考えられ、剥離技術類型は 1A_i 類に分類した。接合 2831・2832 は剥離面や石器表面の模様から正裏の関係と判断できるが、正確な位置関係は不明である。兩個体とも工程の前半で打瘤の発達する厚手の大型剥離を加えており、器体全体の厚さと粗削面を除去して器面を平坦に整えている。工程後半では小打面の平坦剥離に移行し、薄く器面を剥離して平坦化を進めている。製作尖頭器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の大きさは、長さは概ね 25cm 前後で、幅 12.4cm 程度とみられる。

分布 Sb-40 北東部から南東部の K49 区から P48 区にかけて主に分布している。

母岩別資料 655、接合資料 2801(図Ⅲ-408・409、図版 203-1)

母岩別資料 655 は接合資料 2801~2811・2846・2847・4111、折れ接合資料 61339~61342 および非接合剥片 48 点で構成され、総点数は 221 点、総重量は 1,543.6 g である。

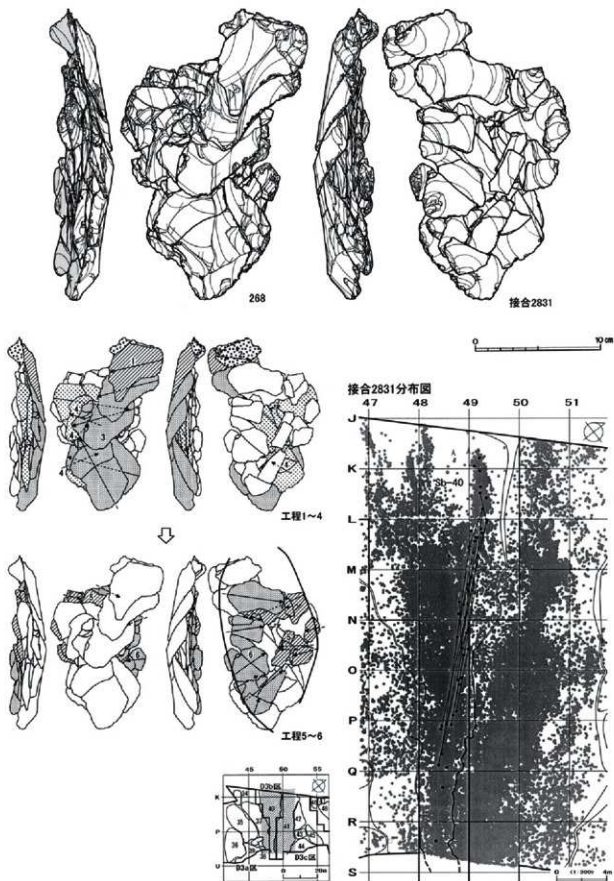
素材 270 は接合資料 2801 で、70 点 (48 個体) が接合し、重量は 788.3 g である。石質は黒曜石 1 で角礫を素材とし、粗削りした両面調整石器の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 角礫原石を粗削りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料とみられ、剥離技術類型は 1A_{iii} 類に分類している。接合 2801 の工程に先行して 20cm 前後の大型剥片剥離が行われており、これを素材とした尖頭器製作個体が同一母岩資料中に確認されている。また、図示した 58 も調整剥片を素材とした両面調整石器である。

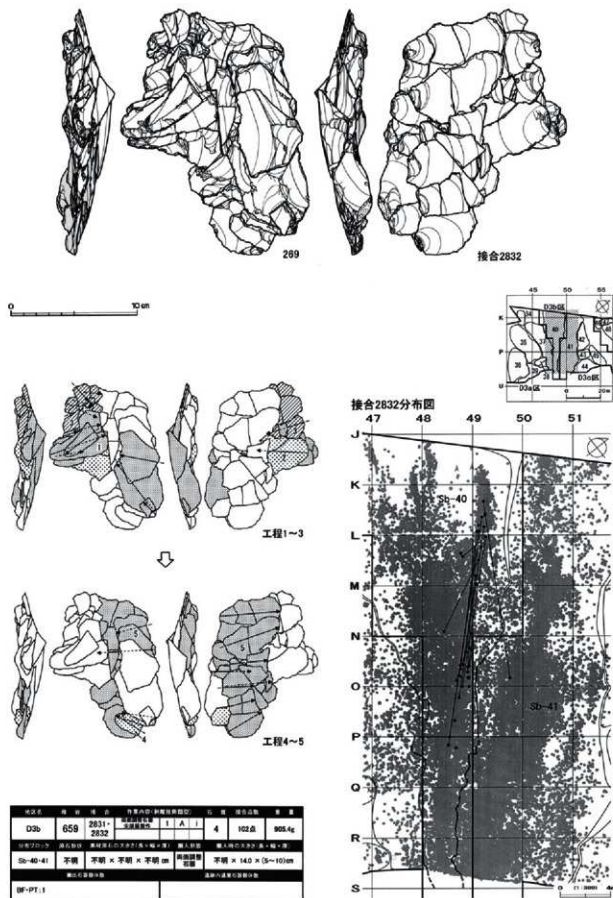
【工程 1~3】工程 1~2 では著しく打瘤の発達した分厚い剥離が正裏面に加えられ、自然面と粗削り面の除去を行っている。また側面平坦面に大型打面の剥離を連続的に加えてこれを除去し、側縁を形成している。工程 3 では打瘤の発達する剥離を右縁辺部に連続的に加えて自然面を除去し、側縁辺を整形している。これら一連の剥離により器体幅が大きく減少している。また、工程 1 の分厚い剥片が個体 A の素材に使用されている。個体 A 調整剥片は打瘤が発達し縦断面三角形を呈するもので、その特徴から両面調整石器を製作したと考えられる。

【工程 4~6】平坦剥離に移行する。石器中軸を大きく越える剥離を主体として器体の扁平化を進めている。製作尖頭器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された尖頭器の

母岩659 接合2831・2832

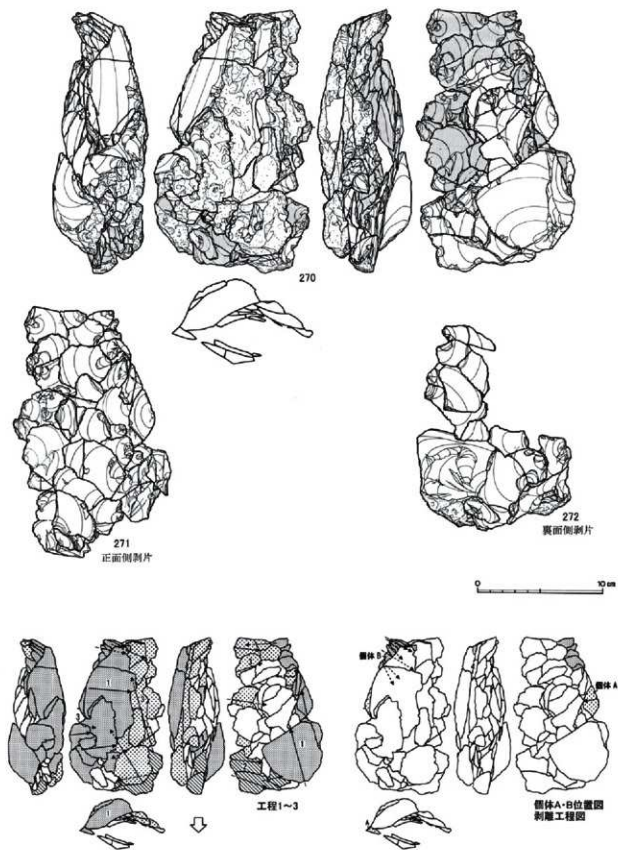


図Ⅲ-406 D3b区の石器(36) 母岩659 接合2831・2832(1)



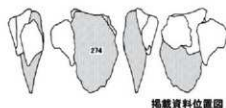
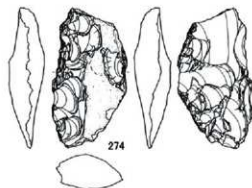
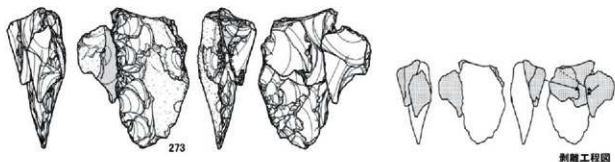
図Ⅲ-407 D3b区の石器(37) 母岩659 接合2831・2832(2)

母岩655 接合2801

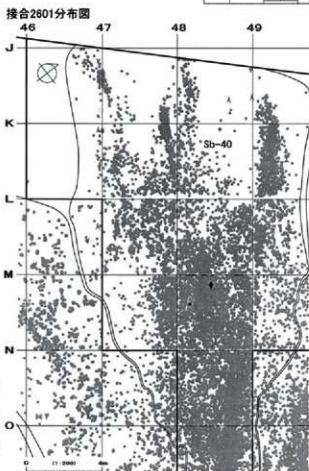
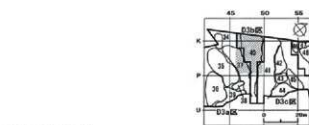


図Ⅲ-408 D3b区の石器(38) 母岩655 接合2801(1)

母岩643 接合2601



標識名	種	種	種	作業の順序(剥離法別)				石	種	数量
				1	A	B	S			
03b	643	2601								226.3g
母岩	角礫*	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
<small>剥離工程図</small> <small>剥離工程図</small>										
SF: 1										



図Ⅲ-410 D3b区の石器(40) 母岩643 接合2601

大きさは、長20.9×幅7.3×厚2.5cmである。

分布 Sb-40の中央部、K47区からP48区にかけて分布している。

母岩別資料643、接合資料2601(図III-410、図版206-2)

母岩別資料643は接合資料2601および非接合剥片13点で構成され、総点数は17点、総重量は255.8gである。

素材 273は接合資料2601で、4点(4個体)が接合し、重量は226.9gである。石質は黒曜石5で、角礫もしくは亜角礫から剥離された剥片を素材とし、剥片の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 剥片素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aii類に分類される。腹面側に打瘤の発達する分厚い剥離を加えて、素材打瘤の膨らみや不要な素材末端部を除去している。その後背面側に調整を加え平面を木葉形に整えている。しかし裏面左側縁に発生したヒンジを除去できないまま、作業を終了している。274は製作両面調整石器で、自然面と素材腹面を広く残置している。

分布 Sb-40中央部、M48区に分布している。

母岩別資料615、接合資料2507(図III-411・412、図版207)

母岩別資料615は接合資料2507および非接合剥片11点で構成され、総点数は30点、総重量は2,901.7gである。

素材 275は接合資料2507で、19点(10個体)が接合し、重量は2,773.4gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、原石の状態ですべて遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 角礫原石から形成された石刃核を素材に単体の両面調整石器を製作した資料で剥離技術類型は前半を4F類、後半を1Ai類に分類している。角礫原石の長軸方向を作業方向とし、工程1で自然面から縦長志向の剥離を開始する。自然面除去後連続して石刃剥離に至ると観察されるが、その後上端部を大きく剥離している。工程3は両面調整石器の加工作業で、素材石核背部に横方向の大型剥離を行い、器体を扁平に加工している。自然面を広く残置した粗い剥離のまま作業は終了している。製作石器276の裏面は節理面により不整な剥離面となっており、これが原因で遺棄されたことが考えられる。

分布 Sb-40の北部から南東部、K49区からR48区にかけて分布している。

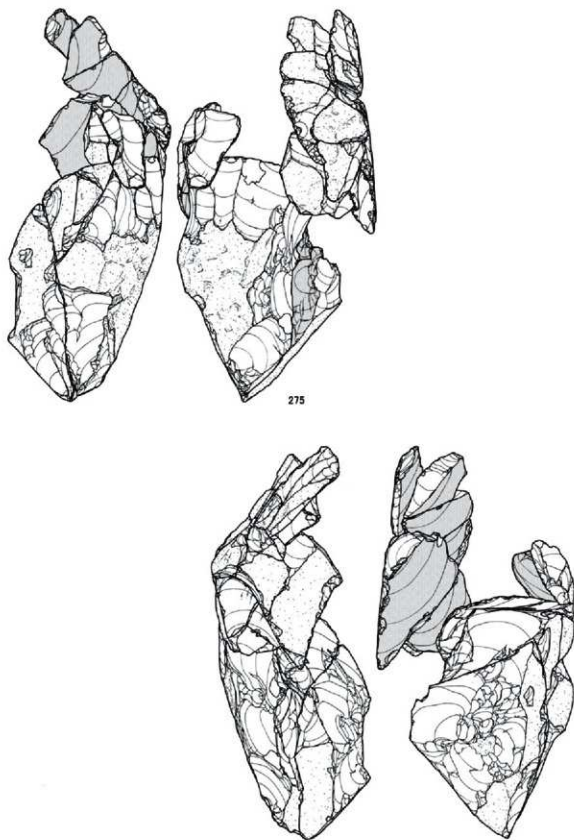
母岩別資料619、接合資料2517(図III-413、図版208-1)

母岩別資料619は接合資料2517および非接合剥片19点と二次加工ある剥片1点で構成され、総点数は29点、総重量は170.2gである。

素材 277は接合資料2517で、9点(8個体)が接合し、重量は136.3gである。石質は黒曜石4で、角礫を素材とし、粗割りした両面調整石器の状態ですべて遺跡内に搬入したとみられる。

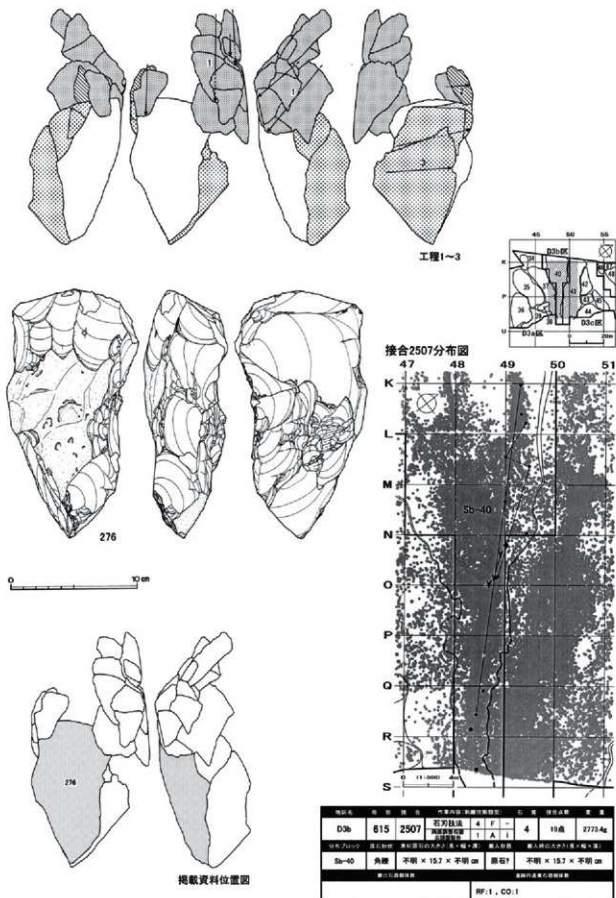
剥離工程 角礫原石から剥離された厚手の剥片を素材に両面調整石器を製作した資料で、本体の作業も両面調整石器製作を行ったとみられる。よって剥離技術類型は1Aiii類に分類した。工程1で厚手の剥片を剥離し、工程2では薄手の平坦剥離に移行している。同一母岩資料には所謂ポイントフレイクが多く認められ、工程2以降は尖頭器・両面調整石器の器面調整を行ったと考えられる。工程1の剥片は個体Aの素材に使用されている。個体Aでは正裏面に長軸・横方向の剥離を加えて器体の扁平化と側縁の形成を行っている。278は製作両面調整石器で、裏面左側に瘤状の厚みが残っており、これが遺棄の原因になったと推測される。

分布 Sb-40のL47区からQ48区にかけて散発的に分布している。



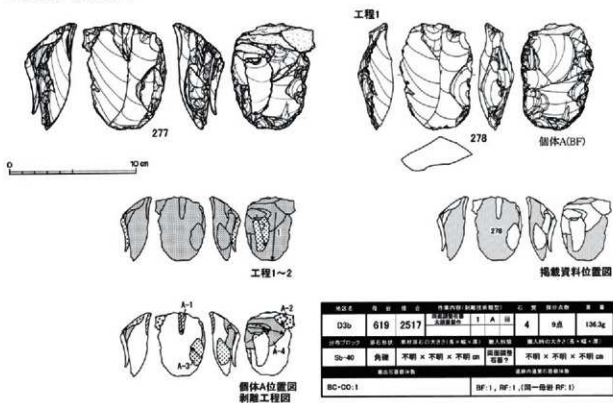
275

図Ⅲ-411 D3b区 of 石器 (41) 母岩 615 接合 2507 (1)

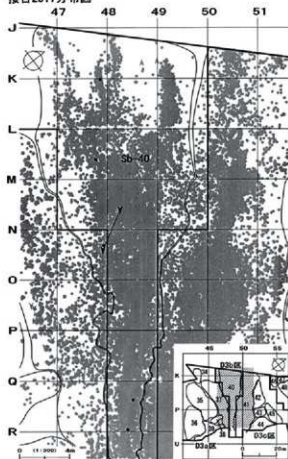


図Ⅲ-412 D3b区の石器(42) 母岩615 接合2507(2)

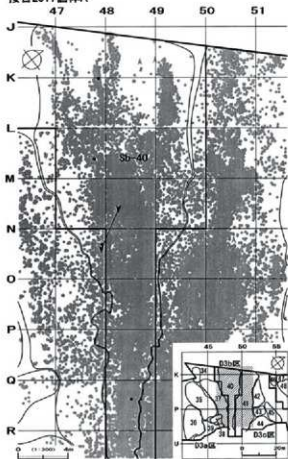
母岩619 接合2517



接合2517分布図

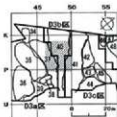
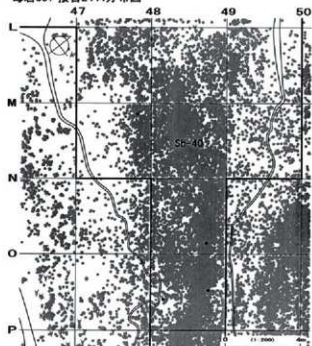


接合2517個体A



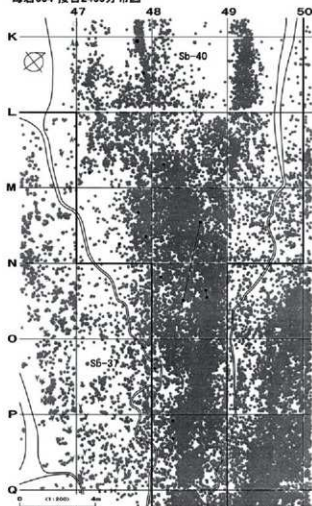
図Ⅲ-413 D3b区の石器(43) 母岩619 接合2517

母岩597 接合2444分布図



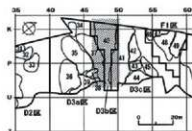
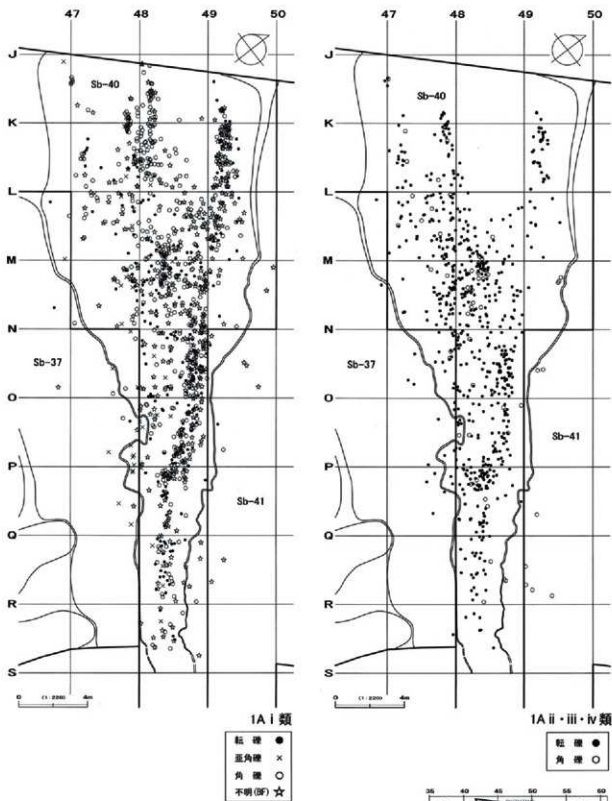
地区名	母岩番号	接合番号	出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期
D3b	597	2444	不明	不明	I	A	I	7点	359.5g		
出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期
Sb-40	石器	不明 × 8.4 × 不明 cm	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
出土層位						出土層位					

母岩604 接合2465分布図



地区名	母岩番号	接合番号	出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期
D3b	604	2465	不明	不明	I	A	III	3	16点	236.5g	
出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期	出土層位	出土状況	出土時期
Sb-37-40	石器	不明 × 不明 × 不明 cm	原石?	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
出土層位						出土層位					

図Ⅲ-414 D3b区の石器(44) 尖頭器・両面調整石器関連写真掲載資料



図Ⅲ-415 D3b区の石器(45) 尖頭器・両面調整石器製作母岩別接合資料分布図

尖頭器・両面調整石器製作母岩・写真図版掲載資料(図Ⅲ-414、図版208-2・3)**母岩別資料 597、接合資料 2444(図Ⅲ-414、図版208-2)**

母岩別資料 597 は接合資料 2444 および非接合剥片 2 点で構成され、総点数は 9 点、総重量は 404.2 g である。

素材 416 は接合資料 2444 で、7 点 (7 個体) が接合し、重量は 359.5 g である。石質は黒曜石 1 で、転礫を素材とし、粗割り原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 転礫原石から単体の両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1A*i* 類に分類される。打痕の発達する大型の剥離を正裏両面に加えて自然面と粗割り剥離面を除去し、横断面を菱形に整形している。製作石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。接合状態から復元された両面調整石器の大きさは、長さ不明・幅 5.1cm・厚さ 2.5cm である。

分布 Sb-40 の中央部から南東側に分布している。

母岩別資料 604、接合資料 2465(図Ⅲ-414、図版208-3)

母岩別資料 604 は接合資料 2465~2470 および非接合剥片 16 点で構成され、総点数は 57 点、総重量は 366.9 g である。

素材 417 は接合資料 2465 で、16 点 (14 個体) が接合し、重量は 238.8 g である。石質は黒曜石 3 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。接合 2465 自体は剥片を素材とした個体で、このほか同一母岩中に別個体を示す接合資料が認められる。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料とみられ、剥離技術類型は 1A*iii* 類に分類した。接合が断片的なため全体の状況は不明だが、長 12.0 × 幅 7.5 × 厚 3.5cm 程度の剥片を複数剥離し、これを素材にした両面調整石器製作が主体的に行われた様である。調整剥片は 4cm 以下のものが多数を占めている。製作石器は出土がなく、搬出されたと考えられ、大きさは長 9.5 × 幅 6.0 × 厚 2.0cm 前後に復元できる。

分布 Sb-40 のやや西部側、K47区から P48区にかけて分布している。

尖頭器・両面調整石器製作資料の分布状況について

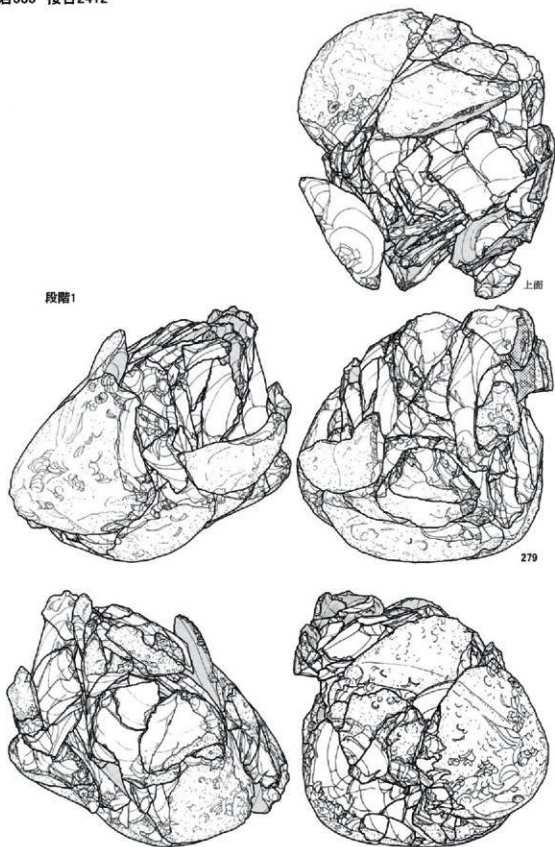
図Ⅲ-415 に尖頭器・両面調整石器製作に関連する母岩別接合資料の分布状況を示した。製作内容により図を分け、左に一母岩から単体を製作するもの (1A*i* 類)、右に複数個体を製作するもの (1A*ii*・*iii*・*iv* 類) を載せている。また、原石形状をシンボルで表示した。区域全体に各作業と各原石形状が混在して分布し、特定の種類が分離される要素は見出せない。ソリフラクションや沢状地形の影響による遺物の移動を考慮する必要があるが、尖頭器・両面調整石器関連の母岩は、その多くが同一石器群である可能性が指摘できる。

石刃技法の母岩別資料(D3b区)(図Ⅲ-416~431、図版209~215)

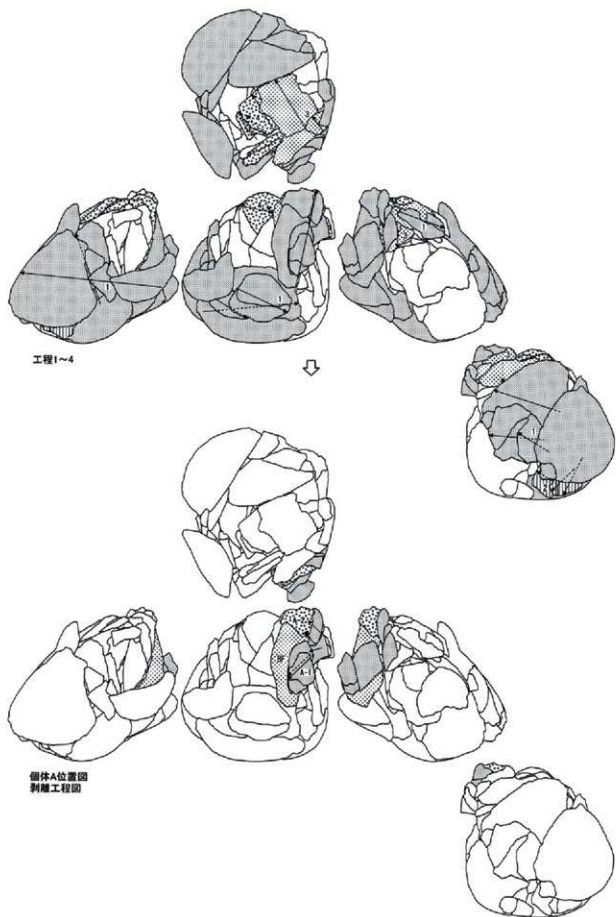
石刃技法母岩は、①母型形成があり打面調整・頭部調整が施されるもの (図Ⅲ-416~422・424・425・427~430、母岩 585・598・599・606・642、4C*ii* 類)、②母型形成があり打面調整が施されるが頭部調整はみられないもの (図Ⅲ-425~427、母岩 602、4B*i* 類)、③母型形成がなく打面調整・頭部調整が施されるもの (図Ⅲ-422~424、母岩 586、4C*iv* 類)、に区分できる。①の 4C*ii* 類母岩は有舌尖頭器石器群に属する可能性がある。

母岩別資料 585、接合資料 2412(図Ⅲ-416~422、図版209~211-1)

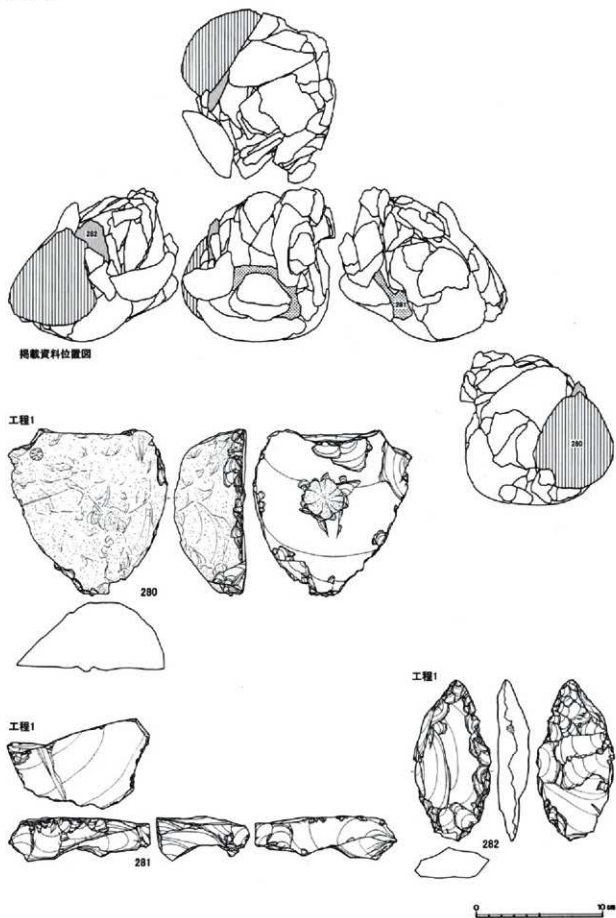
母岩別資料 585 は接合資料 2412~2416、折れ接合資料 60841 および非接合剥片 38 点で構成され、



図Ⅲ-416 D3b区の石器(46) 母岩 585 接合 2412(1)

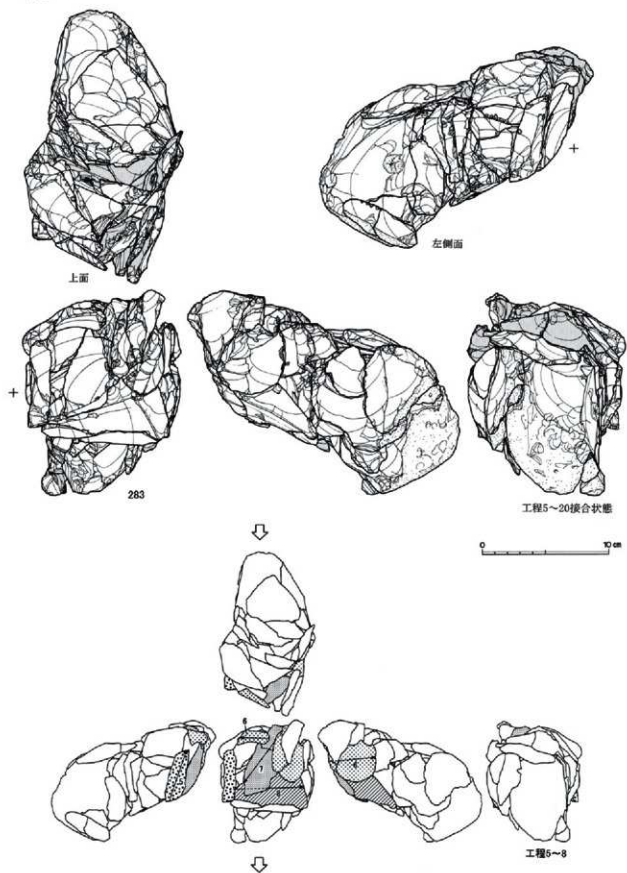


図Ⅲ-417 D3b区の石器(47) 母岩585 接合2412(2)

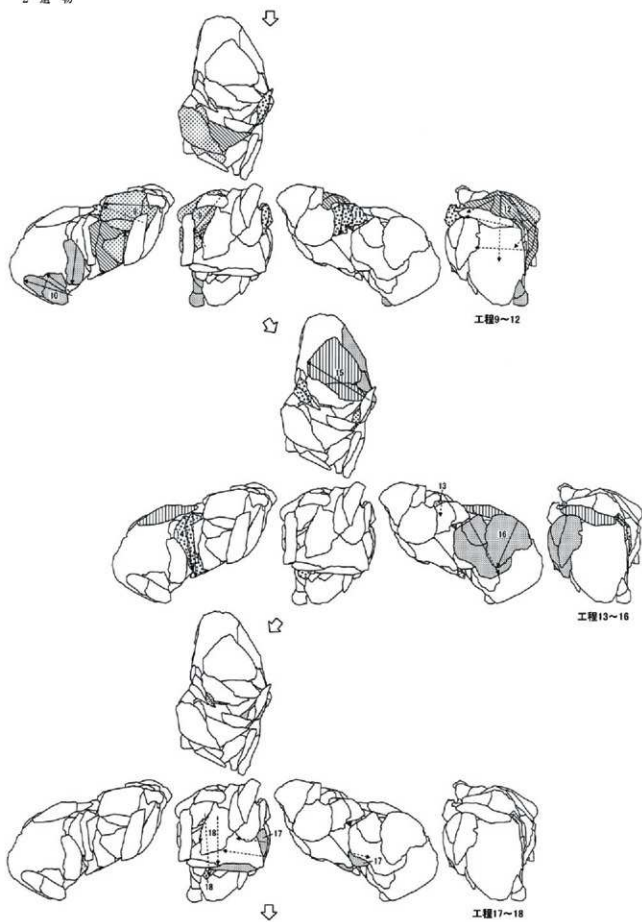


図Ⅲ-418 D3b区の石器(48) 母岩585 接合2412(3)

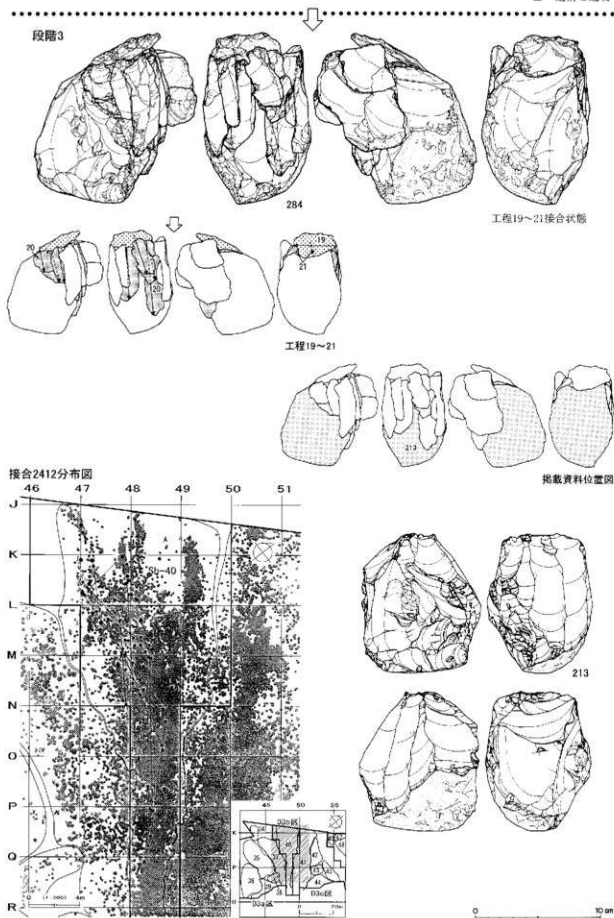
段階2



図Ⅲ-419 D3b区の石器(49) 母岩585 接合2412(4)



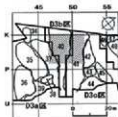
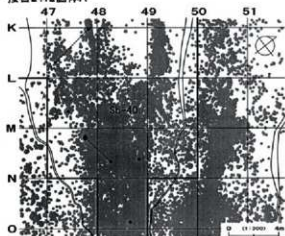
図Ⅲ-420 D3b区 of 石器 (50) 母岩 585 接合 2412 (5)



図Ⅲ-421 D3b区の石器(51) 母岩585 接合2412(6)

2 遺物

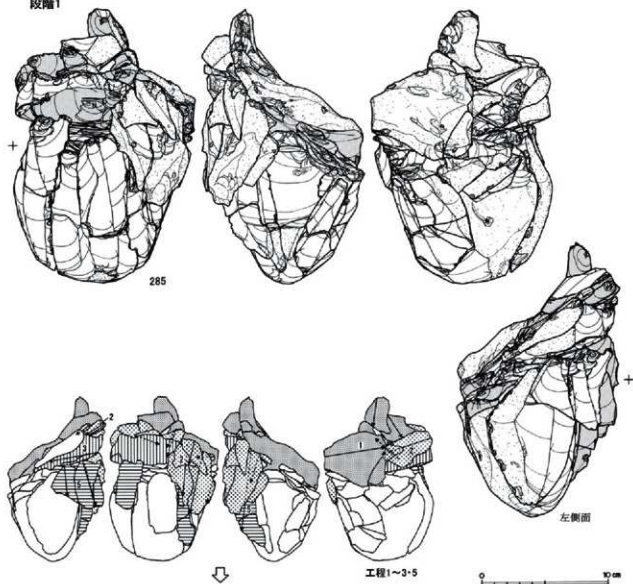
接合2412個体A



発見地	発掘層	発掘区画	発掘日付	石	種別	重量		
D3b	585	2412	石片残片	4	C	1	93点	6696.8g
D3b-37-40		軽種	20.1 × 20.2 × 22.2 cm	原形	20.1 × 20.2 × 22.2 cm			
出土位置関係図 断面: 58-2, CO-1, BC-1								

母岩586 接合2417

段階1



図Ⅲ-422 D3b区の石器(52) 母岩585 接合2412(7)、母岩586 接合2417(1)

総点数は142点、総重量は6,058.6gである。

素材 279は接合資料2412である。93点(68個体)が接合し、重量は5,696.8gである。石質は黒曜石1で、転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型は背部平坦面を形成し、石刃剥離では打面調整・頭部調整が認められる。剥離技術類型は4CⅡ類に分類される。また、母型形成時の剥片を使用して石器製作が行われている。

段階1(粗割り母型形成)

【工程1~4】工程1・2では正・両側・上・下面に大型で分厚い剥離を加え、丸みを帯びる自然面を除去する。工程3・4では上面と右側面に幅広く大型の母型整形剥離を行い、粗割りの歪な形状を除去し平坦面を作出している。これにより裏面を除く5面が平坦となった、概ね直方体状の母型が粗く形成される。工程1で剥離された剥片が個体A、削器280、石核281、両面調整石器282の素材となっている。個体Aは両面を粗く加工する過程で球類の影響により破損している。

段階2(母型形成・石刃剥離)

【工程5~8】283は工程5以降の接合状態である。工程5~8では主に作業面調整を行っている。工程6は横方向の剥離で稜調整を行い、工程7で稜付石刃様の縦長剥片が剥離される。工程8では作業面下部に横方向の大型剥離を加えて、先行剥離の不整な稜線を取り除いている。

【工程9~12】工程9・10では主に正面から側面方向への剥離を加え、作業面稜を再整形している。工程11の石核整形を経て、工程12で横方向から加えられた剥離が分厚く且つ幅広く生じ、作業面を平坦に変更してしまう。工程12ではさらに大型剥離を加え、作業面を全面的に平坦化させている。

【工程13~18】工程13では打面調整と側面調整が施され、工程14で作業面左側縁の稜から縦長剥片が剥離される。工程16・17の石核整形の後、工程18で石刃剥離が開始される。

段階3(石刃剥離)

【工程19~21】284は工程19以降の接合状態である。打面調整・再生、頭部調整を加えながら連続的に石刃を剥離している。石刃は長さ10cm、幅2~3cm程度で、若干の欠落が認められる。213は残核で、作業面左下端部には節理による不整な剥離面が生じている。工程1~17までは粗い剥離で、母型も整った形状を作り出せているとは捉えがたい。しかし、工程18以降は連続的な石刃剥離に成功している。

分布 Sb-40北西部のJ47区からQ48区にかけて分布し、主にブロック北西部のK47区からM48区にまとまって出土している。

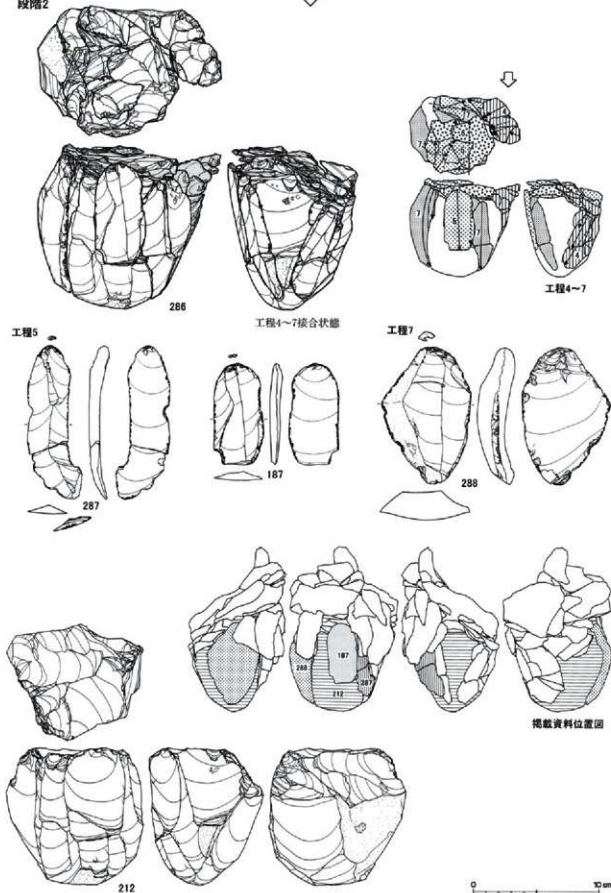
母岩別資料586、接合資料2417(図Ⅲ-422~424、図版211~2・図版212)

母岩別資料586は接合資料2417・2418、折れ接合資料60842および非接合剥片42点と縦長剥片1点で構成され、総点数は106点、総重量は2,636.0gである。

素材 285は接合資料2417で、59点(46個体)が接合し、重量は2,393.3gである。石質は黒曜石1で、角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

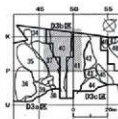
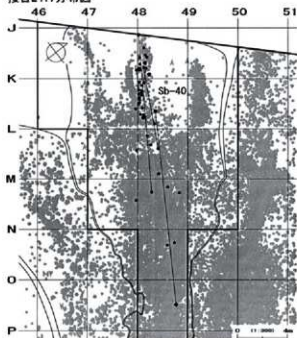
剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型形成はなく、打面調整・頭部調整が施される。剥離技術類型は4CⅣ類に分類される。工程1では多方向から複数回に渡り打面作出の剥離が行われる。工程2は剥片・縦長剥片剥離による正面・側面の自然面除去で、これにより石刃作業面を形成する。以降は打面再生・調整を頻繁に加えながら連続的な石刃剥離を行う。また石刃剥離過程の中で、両側面に厚手幅広い剥離を加えて側面と作業面が直交するような石核整形が行われており、これにより生じた稜線から石刃剥離が再開されたと観察できる。288はこうした石核整形の剥片である。石刃は長12.0×幅3.0×厚0.8cm前後で、打面は厚さ2mm以下と小型、剥離開始部はリップ状主体の特徴がある。287・

段階2



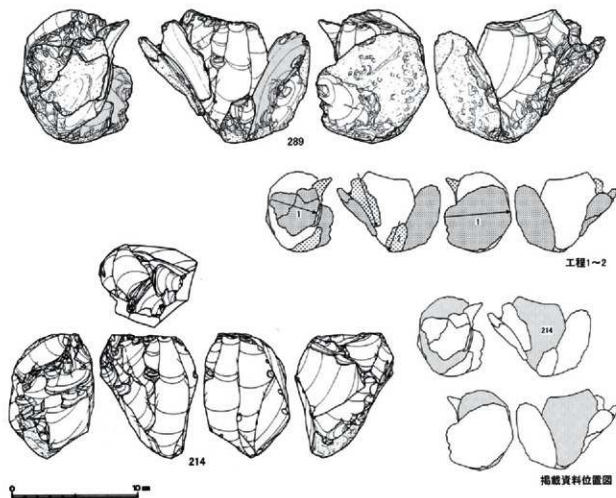
図Ⅲ-423 D3b区の石器(53) 母岩586 接合2417(2)

接合2417分布図



地区名	母岩名	接合名	作製方法	材質	工種	出土位置	数量
D3b	586	2417	石刃技法	4 C 砂	1	98点	2393.3g
母岩名	母岩種別	母岩産地(石刃技法)石刃幅×厚	最大刃幅	最大刃厚	最大刃長	最大刃幅×厚	
Sb-40	内蔵	21.7 × (10~15) × 12.8 cm	厚石	21.7 × (10~15) × 12.8 cm			
備註(調査内容)							
D3b-1							

母岩598 接合2445



図Ⅲ-424 D3b区の石器(54) 母岩586 接合2417(3)、母岩598 接合2445(1)

187は工程5で剥離された石刃である。212は残核で、右側面上部に顕著なバンチ痕が観察できる。打面再生を目的に加撃したが剥離に至らなかったものと考えられる。

分布 Sb-40の中央北西側J48区からO48区にかけて分布し、J・K48区からまとまって出土している。
母岩別資料598、接合資料2445(図Ⅲ-424・425、図版213-1)

母岩別資料598は接合資料2445のみで構成され、総点数は7点、総重量は8523gである。

素材 289は接合資料2445で、7点(5個体)が接合している。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型は背部平坦面を形成し、石刃剥離では打面調整・頭部調整が認められる。剥離技術類型は4Cii類に分類される。工程1は母型形成の剥離で、正裏面から側面、側面から裏面に大型の剥離が加えられ、背部に平坦面を形成している。工程2は正面への縦長剥離で作業面を形成し、石刃剥離に至っている。残核214の打面からは、頻繁に打面調整剥離が施されたと観察される。生産石刃は長さ9cm、幅2~3cm程度とみられ、そのほとんどが欠落している。

分布 Sb-40中央部のM48区にまとまっている。

母岩別資料602、接合資料2456(図Ⅲ-425~427、図版213-2・図版214-1)

母岩別資料602は接合資料2456~2460、折れ接合資料60886および非接合剥片18点で構成され、総点数は44点、総重量は1,522.7gである。

素材 290は接合資料2456で、16点(13個体)が接合し、重量は1,099.8gである。石質は黒曜石3で亜角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、背部稜を有する母型が形成された可能性がある。また複剥離打面で頭部調整はみられない。剥離技術類型は4Bi類に分類している。工程1~2では背部から分厚い大型剥離を連続的に加えており、この剥離が背稜を形成したと考えられる。工程1の大型剥片を素材として個体Aの粗い加工の両面調整石器291が製作されている。工程3では図示した292・185のような長さ10cm前後、幅2~4cm程の石刃を連続的に剥離している。石刃打面は幅1.5~3.0cm、厚さ0.5~1.0cmと大型で、剥離開始部の状況などは川西型石刃石器群のものに類似している。しかし、母型形成と調整剥片素材の石器製作は川西型石刃石器群にはみられない内容である。

分布 Sb-40北東部のK49区からQ48区にかけて分布する。個体AがK49区にまとまり、工程2・3がM・N48区から主に出土している。

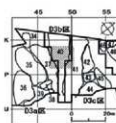
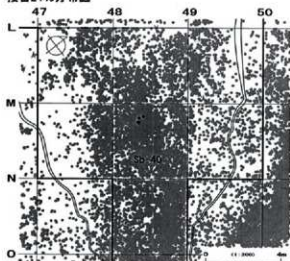
母岩別資料606、接合資料2472(図Ⅲ-427・428、図版215-1)

母岩別資料606は接合資料2472~2477、折れ接合資料60894および非接合剥片34点、石刃4点で構成され、総点数は119点、総重量は623.5gである。

素材 293は接合資料2472で、65点(46個体)が接合し、重量は416.6gである。石質は黒曜石3で角礫素材とみられ、母型の状態では遺跡内に搬入したと観察される。

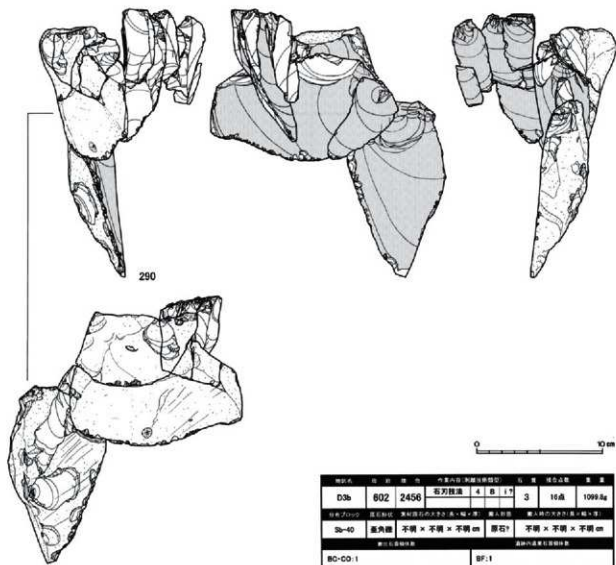
剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型は背部に平坦面を有し、打面調整・頭部調整が認められる。剥離技術類型は4Cii類に分類している。工程1は母型形成の剥離で、背部に大型剥離を加えて平坦面を形成している。工程1の大型剥片を素材として個体Aが製作されている。工程2は打面作出、工程3は石刃剥離が開始され、以降は打面調整・再生の剥離を頻繁に加えて石刃が剥離されたと観察される。打面調整は加撃点をずらしながら打瘤の発達する剥離を行っている。また、打面作出時は背面部とはほぼ同角度で剥離されたが、再生剥離は徐々に傾き、最終的に背面部とはほぼ直行方向に剥離されている。石刃の剥離方向も打面の作出角度に伴い変化したことが考えられる。剥離された石刃は大半が欠落し、また石刃核も出土していない。

接合2445分布図



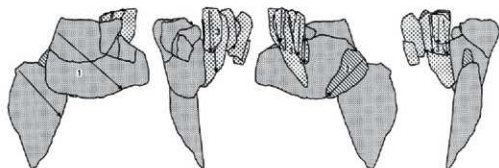
種別名	図号	番号	作業内容・測量経緯等	位置	埋没深度	重量		
D3b	598	2445	石刃残片	4	C	1	7点	852.3g
図号・F100	図名	測量経緯のF100・E・N・W	埋没深度	埋没深度	埋没深度のF100・E・N・W			
30-40	距離	不明 × 不明 × 不明 cm	層石?	不明	不明 × 不明 × 不明 cm			
資料の保存状態							SF:1	

母岩602 接合2456

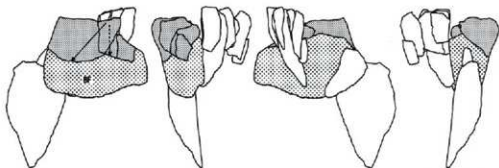


種別名	図号	番号	作業内容・測量経緯等	位置	埋没深度	重量			
D3b	802	2456	石刃残片	4	E	1	3	16点	1099.8g
図号・F100	図名	測量経緯のF100・E・N・W	埋没深度	埋没深度	埋没深度のF100・E・N・W				
30-40	距離	不明 × 不明 × 不明 cm	層石?	不明	不明 × 不明 × 不明 cm				
資料の保存状態							SF:1		

図Ⅲ-425 D3b区 of 石器(55) 母岩598 接合2445(2)、母岩602 接合2456(1)

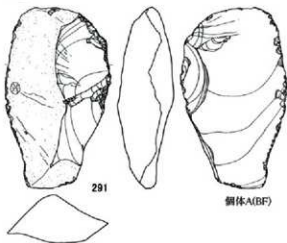


工程1~3

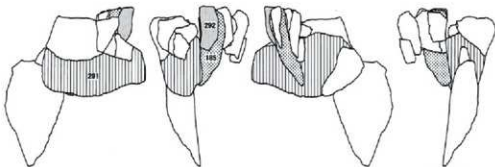
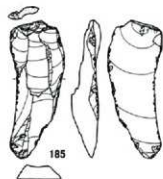


個体A位置図
剥離工程図

工程1



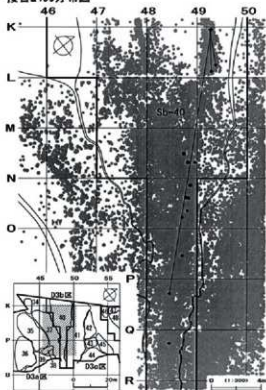
工程3



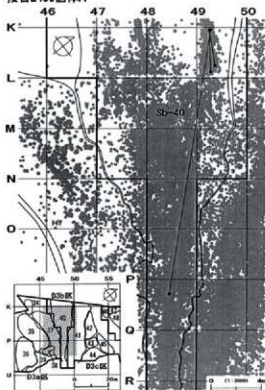
掲載資料位置図

図Ⅲ-426 D3b区の石器(56) 母岩602 接合2456(2)

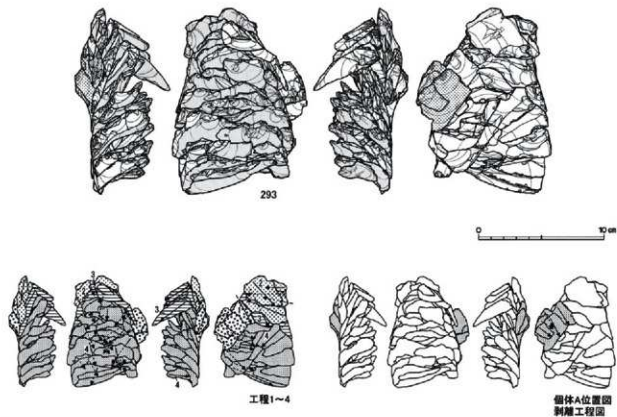
接合2456分布図



接合2456躯体A



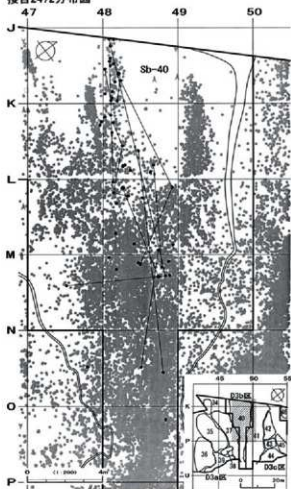
母岩606 接合2472



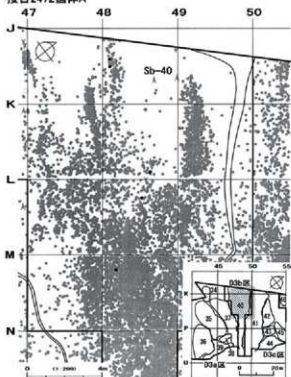
図Ⅲ-427 D3b区の石器(57) 母岩 602 接合 2456(3)、母岩 606 接合 2472(1)

2 遺物

接合2472分布図

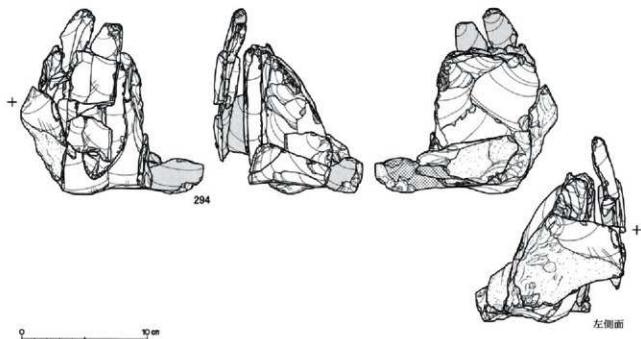


接合2472個体A

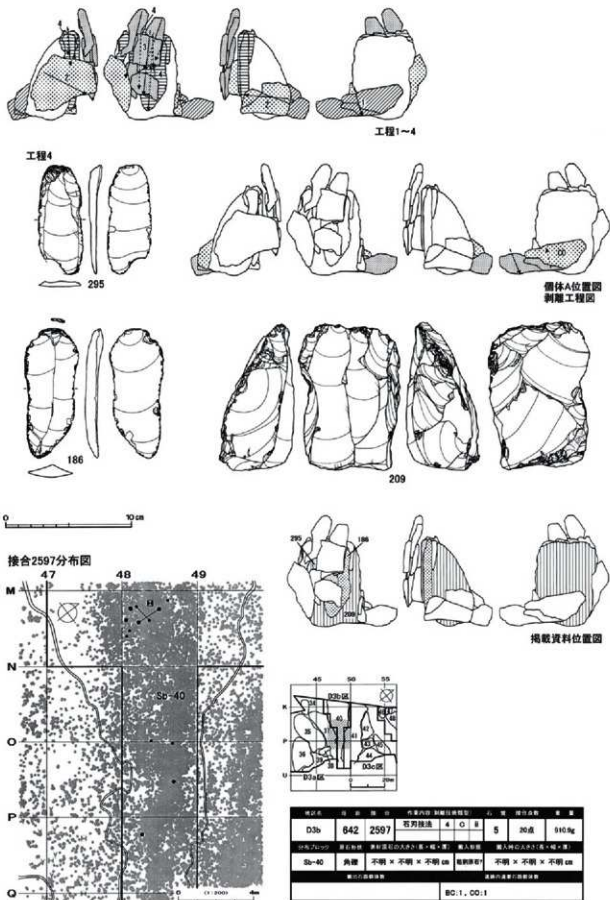


地域名	調査年度	調査区画	作業内容(調査地点番号)	品目	個体番号	重量
D3b	606	2472	石刀様遺	4 C 1	3	銅点 418.8g
母岩	642		角礫?	不明 × 不明 × 不明 08	母岩?	不明 × 不明 × 不明 08
調査員: 藤田 隆夫						
調査日: 2003年10月10日						
調査場所: 東京都葛飾区新小岩 2-1-1						
調査機関: 東京都立考古学研究所						
調査員: 藤田 隆夫						

母岩642 接合2597



図Ⅲ-428 D3b区の石器(58) 母岩 606 接合 2472(2)、母岩 642 接合 2597(1)



図Ⅲ-429 D3b区 of 石器 (59) 母岩 642 接合 2597 (2)

分布 Sb-40中央の北西部、J48区からO48区にかけて分布し、主にブロック北西部のJ48区からM48区にまとまっている。

母岩別資料642、接合資料2597(図Ⅲ-428・429、図版214-2)

母岩別資料642は接合資料2597~2600、折れ接合資料61052・61053および非接合剥片21点と縦長剥片1点で構成され、総点数は56点、総重量は1,333.9gである。

素材 294は接合資料2597で、20点(15個体)が接合し、重量は910.9gである。石質は黒曜石5で角礫素材とみられ、粗削原石の状態で見跡内に搬入したと観察される。

剥離工程 石刃技法の接合資料であり、母型は背部平坦面を有し、打面調整・頭部調整が認められる。剥離技術類型は4Cii類に分類している。

工程1では背部に大型剥離を加えて平坦面を形成しており、この剥片を個体Aの素材に使用している。個体Aは石核と剥片の接合と捉えたが、両面調整石器の製作を目的とした可能性がある。工程2では背部平坦面を打面として側面に母型形成剥離が加えられる。工程3・4では打面調整・頭部調整を施して石刃剥離が行われており、頭部が研磨を受けるものも観察される。工程3と工程4の間で作業面高が大きく減少しており、頻繁な打面調整もしくは打面再生が行われたと考えられる。また、この間の石刃が多く欠落している。石刃は長さ12cm、幅2.5~4.0cmのものを主体に剥離している。295・186は工程4の石刃、209は残核である。

分布 Sb-40中央部、M48区からP48区にかけて分布し、主にM48区にまとまって出土している。

石刃技法及び剥片生産母岩・写真図版掲載資料(図Ⅲ-430・図版215-2・3)

母岩別資料599、接合資料2446(図Ⅲ-430、図版215-2)

母岩別資料599は接合資料2446のみで構成され、総点数は7点、総重量は291.4gである。

素材 420は接合資料2446で、7点(5個体)が接合している。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、石核の状態で見跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型は背部平坦面を有し、打面調整・頭部調整が認められる。剥離技術類型は4Cii類に分類している。背部に大型剥離を加えて平坦面を作出し、これを打面として側面に母型形成剥離を施している。その後打面調整を加えながら石刃剥離を行ったとみられる。最終段階の剥離石刃は厚手・幅広となり、また作業面をヒンジで潰している。石刃剥離の後、背部には石核再整形の粗い剥離が加えられ、歪な剥離面が生じている。421は残核で、打面・裏面などに顕著なパンチ痕が観察される。これら最終段階で受けた粗い剥離により石核が破損している。

分布 Sb-40の中央北西部、K47区からM48区にかけて主に分布している。

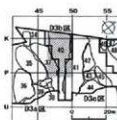
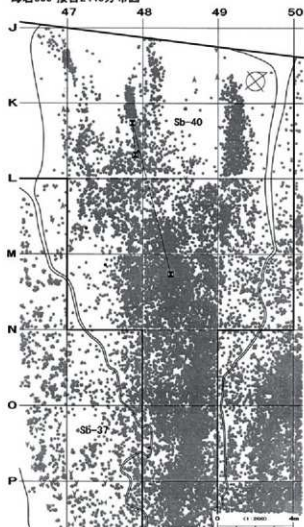
母岩別資料600、接合資料2623(図Ⅲ-430、図版215-3)

母岩別資料600は接合資料2623~2625および非接合剥片4点で構成され、総点数は13点、総重量は182.6gである。白滝I群の母岩と考えられる。

素材 422は接合資料2623で、5点(5個体)が接合し、重量は123.0gである。石質は黒曜石1で亜角礫を素材とし、石核の状態で見跡内に搬入したと考えられる。

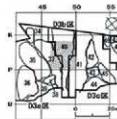
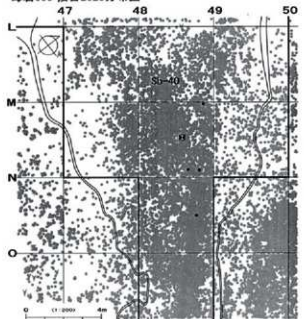
剥離工程 頻繁な打面と作業面の転移を行う資料で、3面の作業面で交互剥離状に作業を行い残核の最終形態は舟底形を呈する。剥離技術類型は5Diii類に分類される。上面から正裏面へ下端自然面を取り込む幅広の剥離を加え、その後上面への剥離、正裏面への剥離が繰り返される。石核423には多面多方向の剥離が認められる。剥片の打楯・コーンの発達が顕著であること、パンチ痕が顕著に観察されることなどから、白滝I群の母岩と判断している。

母岩599 接合2446分布図



地誌名	母岩	接合	石器の種別	数量	石種	保存点数	重量
D3b	599	2446	石刃技法	4	C Ⅲ	1	7点 291.4g
<small>石刃技法</small> 石刃技法 石刃技法のタイプ(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ) 個人別数 個人別タイプ(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ)							
Sb-37-40	磐盤	不明 × 不明 × 不明	石核				100 × 7.3 × 0.2 cm
<small>個人別保存点数</small>							
							図1:1

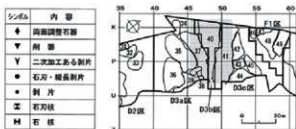
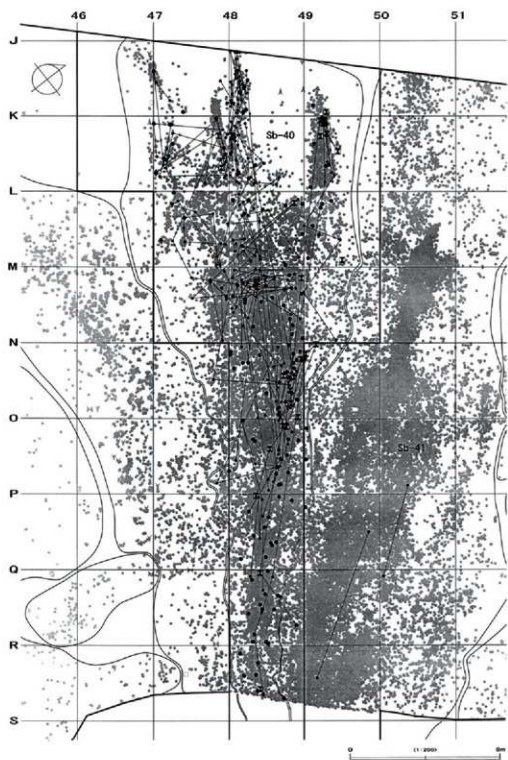
母岩600 接合2623分布図



地誌名	母岩	接合	石器の種別	数量	石種	保存点数	重量
D3b	600	2623	剥片生産	5	D Ⅲ	1	5点 123.0g
<small>剥片生産</small> 剥片生産 剥片生産のタイプ(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ) 個人別数 個人別タイプ(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ)							
Sb-40	磐盤	不明 × 不明 × 不明	石核				3.7 × 0.2 × 不明 cm
<small>個人別保存点数</small>							
							図2:1

図Ⅲ-430 D3b区の石器(60) 石刃技法・剥片生産関連写真掲載資料

2 遺物



図Ⅲ-431 D3b区の石器(61) 石刃技法母岩別接合資料分布図

分布 Sb-40 中央部の M・N48区にまとまって分布している。

石刃技法資料の分布状況について

図Ⅲ-431に石刃技法に関連する母岩別接合資料の分布状況を示した。D3b区に石刃技法は、母型形成を行い打面調整・頭部調整を施すものが主体である。分布は区域内全体にみられ、特に集中範囲等は見出せない。尖頭器・両面調整石器製作母岩と同様の分布傾向にあり、両者の共伴関係が指摘できる。

2) D3c区の母岩別接合資料

D3c区では72,663点が出土し接合作業の結果、668個体、4,683点の剥離面接合資料を得ることができた。接合率は6.4%である。さらに母岩分類作業によって、母岩別資料107個体(遺物点数5,924点、内剥離面接合資料366個体・3,813点)と非母岩別剥離面接合資料302個体(遺物点数870点)に整理され、この内44個体を挿図と写真図版、18個体を写真図版のみの掲載とした。

母岩別接合資料を作業内容別にみると、尖頭器・両面調整石器製作87個体(2,678点)、石刃技法16個体(367点)、剥片生産10個体(108点)が認められる。個体比率では尖頭器・両面調整石器製作が77.0%、石刃技法が14.2%、剥片生産が8.8%で、尖頭器・両面調整石器製作が主体的な作業と認められる。なお、上記した母岩別資料の個体数と点数は、2種類以上の剥離技術類型に属する場合はそれぞれの類型で集計されており、その合計は実数よりも多く算出される。D3c区では単体遺物の内容から有舌尖頭器石器群、ホロカ型彫器を伴う石器群、小型舟底形石器石器群の存在が指摘されたが、母岩別接合資料で判別できたものは有舌尖頭器石器群(尖頭器・両面調整石器製作:27個体)であった。

母岩別資料の掲載は尖頭器・両面調整石器製作(図Ⅲ-432~518)、石刃技法・剥片生産(図Ⅲ-519~531)の順序とした。各作業の中では剥離技術内容で大別し、その中で概ね母岩番号順としたが、挿図割付の関係上若干の前後がある。母岩・接合番号により図版を検索する場合は章末に掲載の表Ⅲ-19「母岩番号順挿図一覧表」を参照願いたい。

尖頭器・両面調整石器製作の母岩別資料(D3c区)(図Ⅲ-432~518・図版216~256)

尖頭器・両面調整石器製作母岩は、①主に20cm以下の転礫を素材とし一母岩から複数個体を製作するもの(図Ⅲ-432~472・513・514・516、母岩662・663・665・666・667・679・681・682・685・688・692・724・726・749・750・751・753・757・758)、②20cm未満の原石から単体を製作するもの(図Ⅲ-473~484・513~515・517、母岩664・669・670~674・676~678・683・686・687・690・748・754)、③25cmを越える大型角礫から複数個体を製作するもの(図Ⅲ-485・486、母岩721)、④25cmを越える大型角礫から単体を製作するもの(図Ⅲ-487~502・506~512、母岩680・709~711・717・722・723・727・747)、⑤25cmを越える大型両面調整石器を搬入し単体を製作するもの(図Ⅲ-502~506、母岩719・746)がみられる。特に①の母岩は有舌尖頭器石器群に属することが考えられる。

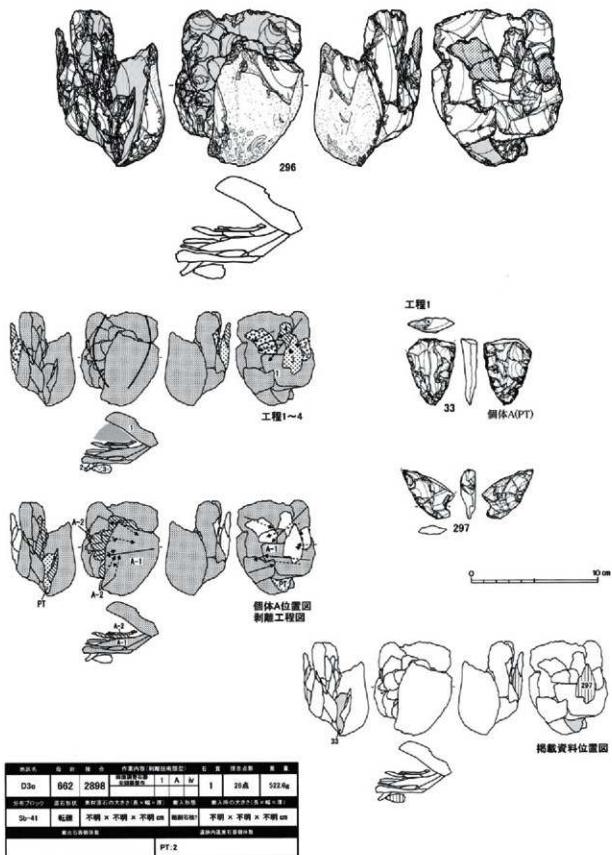
製作された尖頭器・両面調整石器は、①・②が10~15cmの小型主体、④・⑤が25~35cmの大型主体、③が小型と大型の両者であった。大型尖頭器は細長い形状のものが特徴的に復元されている。

母岩別資料662、接合資料2898(図Ⅲ-432・433、図版216-1)

母岩別資料662は接合資料2898および非接合剥片3点で構成され、総点数は29点、総重量は529.6gである。

素材 296は接合資料2898で、26点(24個体)が接合し、重量は522.6gである。石質は黒曜石1で

母岩662 接合2898



図Ⅲ-432 D3c区の石器(1) 母岩662 接合2898(1)

転礫を素材とし、粗割りした石核の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 素材を半割りし、2個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiv類に分類される。半割後の素材の大きさは長12.0×幅10.5×厚6.0cm前後とみられる。

【工程1~4】本体(核個体)は厚手・粗割りの調整剥片の出土がなく、薄手剥離から作業が開始されたとみられる。工程2で平坦剥離により尖頭器を製作し、破損後、工程4で再加工を加えている。297は製作尖頭器の破損した末端部である。球顆が原因で折損している。

【個体A】尖頭器を製作している。工程A-1で両面に分厚い大型剥離を加えて自然面・素材面を除去し、厚みを大きく減少させている。工程A-2では大型打面で行う打縮の発達する剥離を連続させて側縁を形成し、小打面の平坦剥離に移行して器体の扁平化を行っている。33は製作尖頭器の破損部で、球顆が原因で折損している。尖頭器は長さ12cm・幅4cm前後に復元が可能である。

分布 Sb-41 中央部 P50区付近にややまとまって分布する。

母岩別資料 663、接合資料 2899 (図III-433~435、図版 216-2)

母岩別資料 663 は接合資料 2899・2900、折れ接合資料 62248 および非接合剥片 11 点で構成され、総点数は 59 点、総重量は 1,012.6 g である。

素材 298 は接合資料 2899 で、44 点 (34 個体) が接合し、重量は 903.2 g である。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 原石を半割りし、2個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiv類に分類される。半割後の素材の大きさは長17.0×幅12.0×厚5.5cm前後とみられる。

【工程1~2】本体(核個体)は出土剥片数が少なく、若干の粗割りの後に遺跡外へ搬出された可能性がある。工程2では打縮の発達する厚手の剥離で両面を加工している。

【個体A】尖頭器を製作している。工程A-1で打縮の発達する分厚い剥離を両面に加え、自然面・素材面を除去して厚みを大きく減じている。工程A-2では器体中軸を大きく越える、やや厚手で幅広の剥離を加えて器体の扁平化を進める。図示した299は工程A-2後半以降の接合状態である。粗く木葉形の両面調整体が形成されている。工程A-3ではやや打縮の発達する平坦剥離、工程A-4では小型・薄型の剥離に移行し、扁平化と器面整形を行っている。48は個体A製作尖頭器で、裏面に素材面が広く残置している。加工が主に正面側に加えられた半両面加工の状態で破損している。破損前の尖頭器の大きさは長16.0×幅5.5×厚1.2cm前後と観察される。

分布 Sb-41の北西から南東部にかけて広く分布している。

母岩別資料 666、接合資料 2904 (図III-435~438、図版 217・218-1)

母岩別資料 666 は接合資料 2904 および非接合剥片 5 点で構成され、総点数は 49 点、総重量は 1,596.8 g である。

素材 300 は接合資料 2904 で、44 点 (36 個体) が接合し、重量は 1,566.7 g である。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

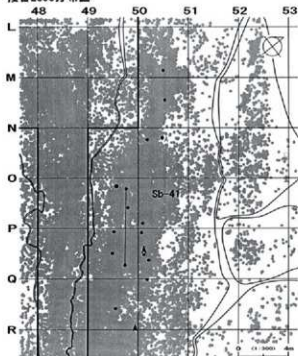
剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。

段階1 (原石の粗割)

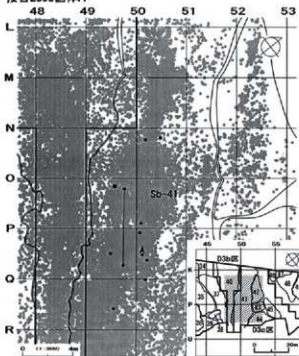
【工程1~3】正裏に分厚い大型剥離を加え、原石を「三枚下ろし」様に分割している。また正面側にも大型剥片を剥離した面が観察される。

【個体A】工程1で剥離された長15.0×幅10.5×厚5.0cm前後の大型剥片を素材とし、両面調整石器を製作している。工程A-1で大型打面の剥離を背面側に加え、自然面の除去と平面形を粗く整えて

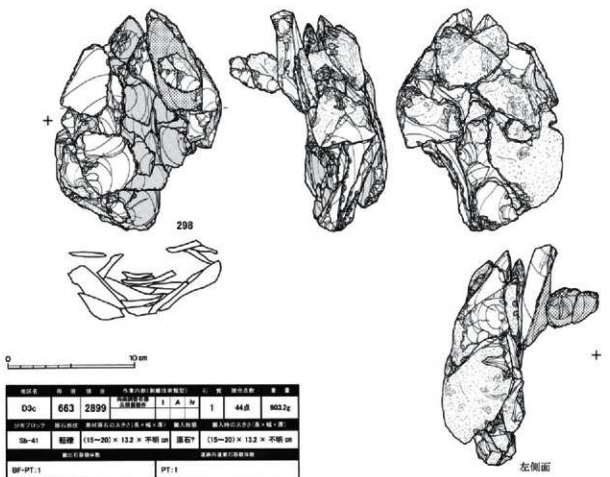
接合2898分布図



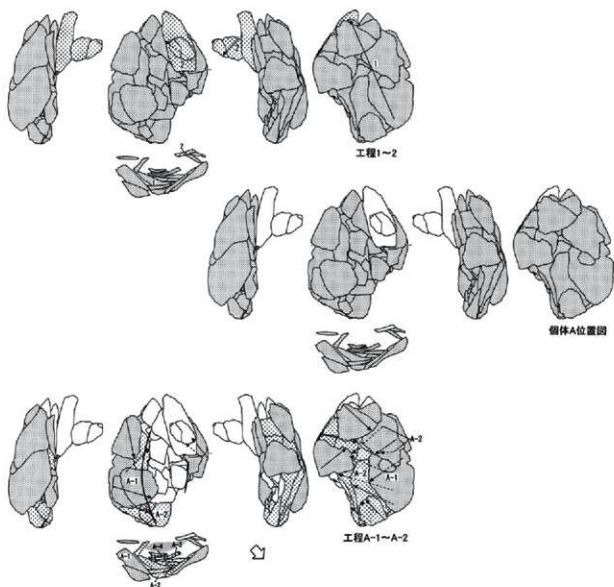
接合2898個体A



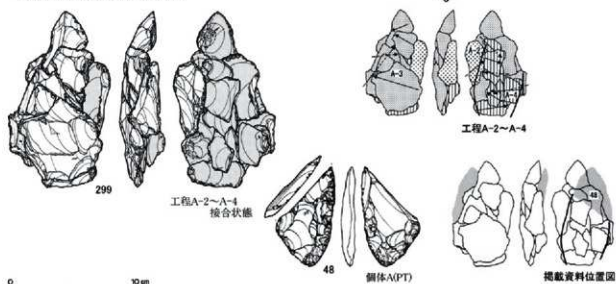
母岩663 接合2899



図Ⅲ-433 D3c区の石器(2) 母岩662 接合2898(2)、母岩663 接合2899(1)



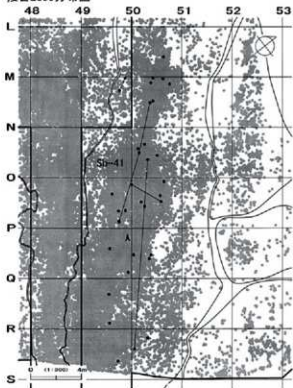
.....
 個体A分割状態 (素材工程1 FK)



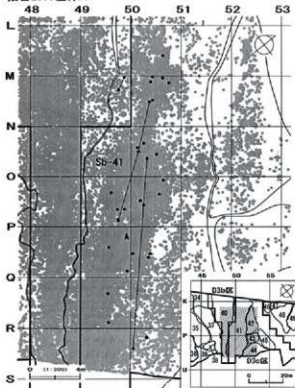
図Ⅲ-434 D3c区の石器(3) 母岩663 接合2899(2)

2 遺 物

接合2899分布図

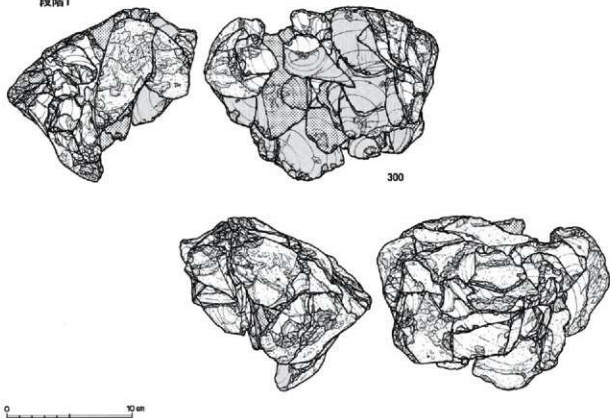


接合2899個体A

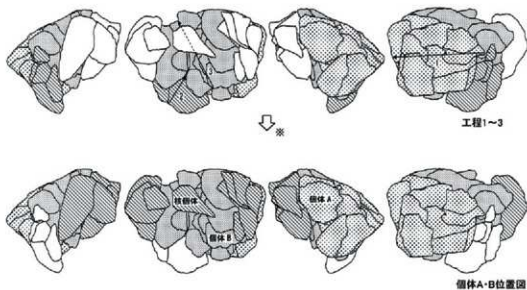


母岩666 接合2904

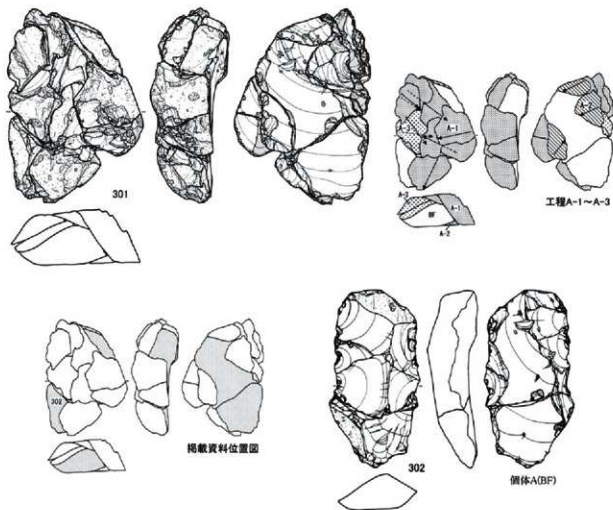
段階1



図Ⅲ-435 D3c区の石器(4) 母岩663 接合2899(3)、母岩666 接合2904(1)

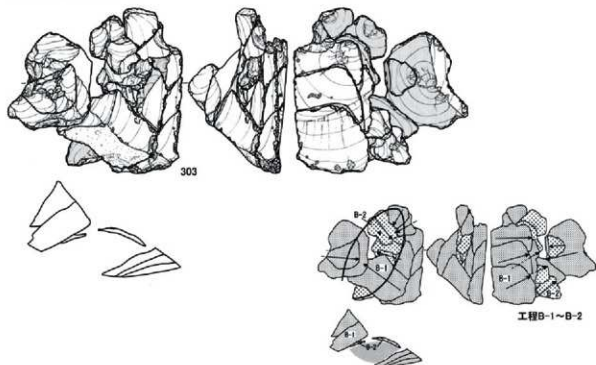


個体A(素材:工程1 FK)

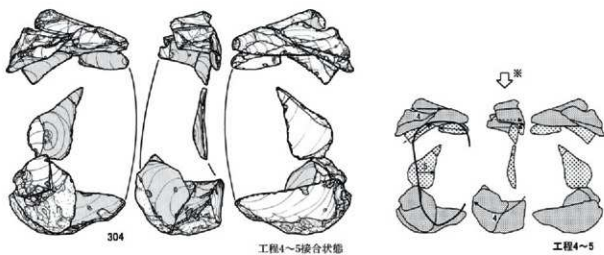


図Ⅲ-436 D3c区の石器(5) 母岩666 接合2904(2)

個体B (素材: 工程3 FK)

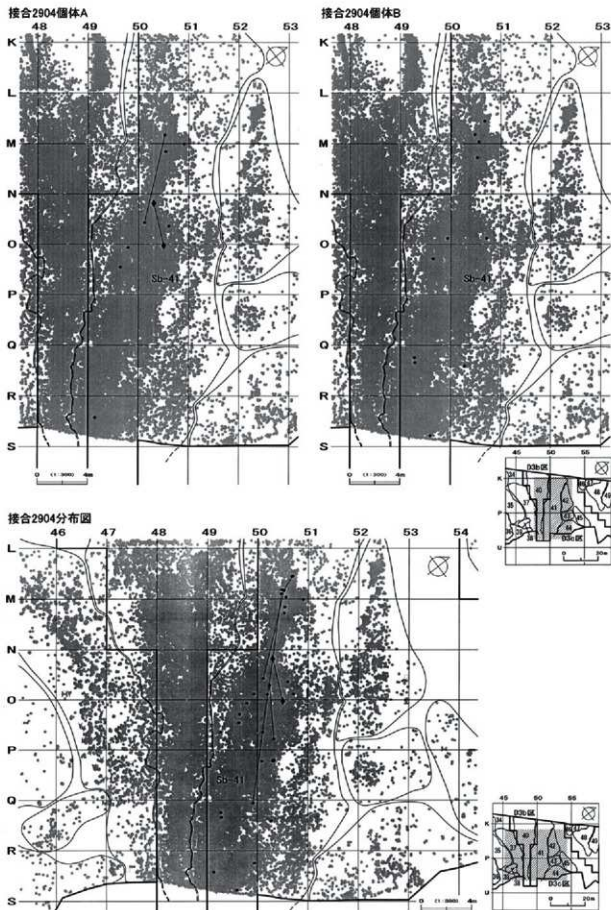


段階2



地区名	区	群	作業内容	調査年度	調査日	調査時間	調査者	調査場所	調査方法	調査結果
D3c	666	2904	母岩666の石器2904の調査	1	1	1	44点	1566.7g		
調査内容	調査結果	調査内容	調査結果	調査内容	調査結果	調査内容	調査結果	調査内容	調査結果	調査内容
50-41	瓶腫	18.2 × 13.7 × 不明 cm	母岩	18.2 × 13.7 × 不明 cm						
調査内容					調査結果					
調査内容					調査結果					

図Ⅲ-437 D3c区の石器(6) 母岩666 接合2904(3)



いる。工程 A-2 は腹面側に平坦な剥離を加え、主に素材打瘤の除去を行っている。工程 A-3 で背面側へのやや平坦な剥離に移行するが、破損が生じ作業を終了している。302 は製作された両面調整石器である。

【個体 B】工程 3 で剥離された、長 11.5 × 幅 13.0 × 厚 5.0cm 前後のやや扁平な剥片を素材とし、尖頭器を製作している。平面長方形を呈する横長剥片の対角線を石器長軸に設定している。工程 B-1 では打瘤の発達する分厚い大型剥離を両面に加え、自然面・素材面を除去して厚みを大きく減じている。工程 2 では器体長軸を大きく越える、やや厚手で幅広の剥離を加えて器体の扁平化を進めている。製作尖頭器は出土がなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された尖頭器の大きさは長 13.0 以上 × 幅 6.4 × 厚 3.0cm である。

段階 2 (核個体の両面調整石器製作)

【工程 4~5】素材石核の大きさは長 17.0 × 幅 11.0 × 厚 5.0cm 前後で、扁平な楕円形を呈している。工程 4 では両端部に急角度の分厚い剥離を加えて自然面を除去し、工程 5 で横方向の平坦な剥離に移行している。側面には大型打面 で打瘤の発達する剥片が認められ、側縁を整形したものと理解される。製作された両面調整石器は出土していない。接合が断片的なため製作石器の詳細は不明である。

分布 Sb-41 の北西から南東部にかけて広く分布している。個体 A の分布が Sb-41 の北西部にややまとまって認められる。

母岩別資料 667、接合資料 2905 (図 III-439・440、図版 218-2)

母岩別資料 667 は接合資料 2905 のみで構成され、総点数は 17 点、総重量は 1,510.6 g である。

素材 305 は接合資料 2905 で、17 点 (16 個体) が接合している。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態 で遺跡内に搬入している。306・307 は正裏面の調整剥片腹面を图示している。

剥離工程 原石を半割し、2 個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiv 類に分類される。

【工程 1~4】工程 1~3 は粗割りの段階で、工程 2 では粗割原石を半割し個体 A の素材を得ている。半割後の核の大きさは長 13.0 × 幅 12.0 × 厚 5.0cm 前後である。工程 3 では打瘤の発達する分厚い大型剥離を左右側面から両面に加え、粗い両面調整体を形成する。工程 4 は長軸方向の剥離と石器中軸を取り込む平坦剥離で、側縁を整形し器体を扁平化させている。製作両面調整石器は欠落し、搬出が推測される。復元された大きさは長 11.9 × 幅 7.2 × 厚 4.5cm である。

【個体 A】308 は個体 A 接合状態である。素材打瘤の剥ぎ取りと自然面除去の分厚い剥離が加えられるが、早い段階で形状を損ない遺棄されている。

分布 Sb-41 の北西から南東部にかけて広く分布している。P ライン付近で分布が途切れ、北西部と南東部に分かれる様にも認められる。

母岩別資料 679、接合資料 2924 (図 III-441・442、図版 219)

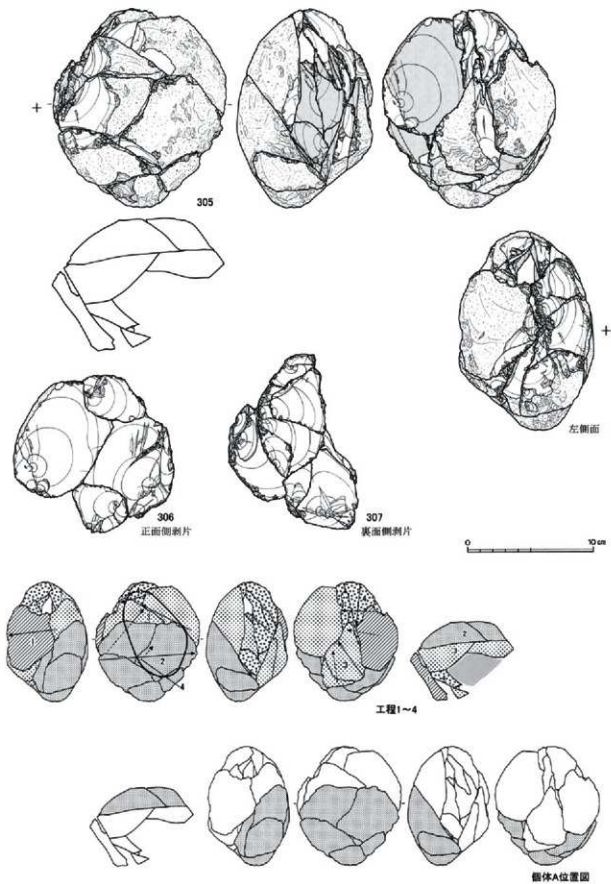
母岩別資料 679 は接合資料 2924 および非接合剥片 9 点で構成され、総点数は 43 点、総重量は 1,081.5 g である。

素材 309 は接合資料 2924 で、34 点 (28 個体) が接合し、重量は 1,042.7 g である。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態 で遺跡内に搬入している。

剥離工程 原石を半割し、2 個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiv 類に分類される。半割後の素材の大きさは長 16.0 × 幅 10.5cm 前後で、厚さは核個体が 7.5cm、個体 A が 4 cm と差がある。

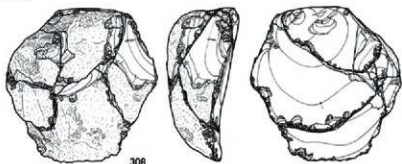
【工程 1~5】工程 1 で素材原石を大きく横割りする様に剥離し、個体 A の素材を得ている。段階 2

母岩667 接合2905

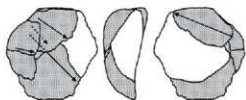


図Ⅲ-439 D3c区の石器(8) 母岩667 接合2905(1)

個体A (素材工程2 FK)



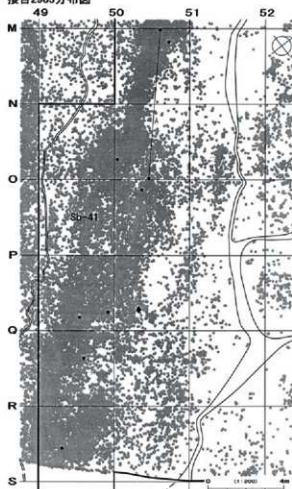
306



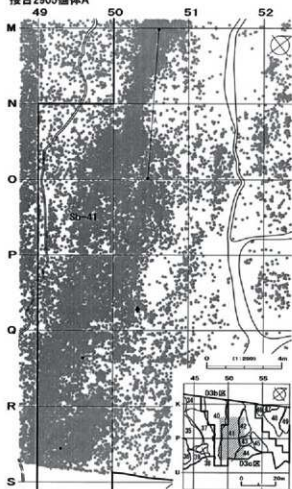
個体A剥離工程図

地区名	発掘番号	母岩番号	作製工程	剥離工程	台数	投石台数	重量
D3c	667	2905	1	A	IV	1	17.6g
D3c-41							
母岩	形状	155 × 136 × 107 mm	厚さ	155 × 136 × 107 mm			
D3c-41							
D3c-41				D3c-41			

接合2905分布図



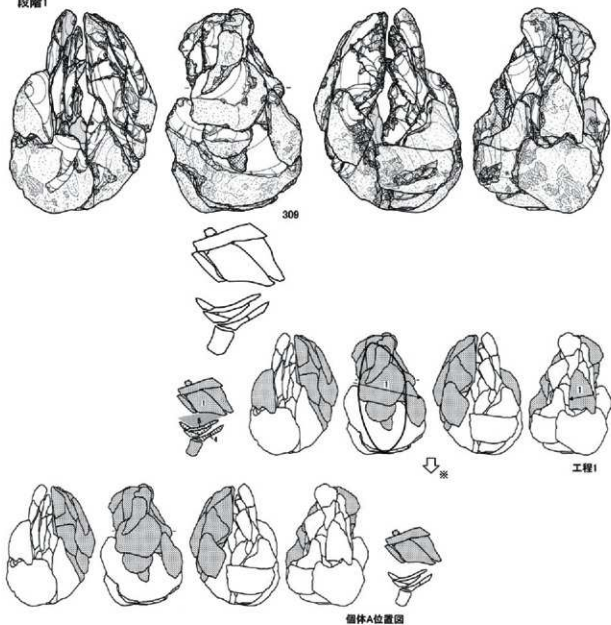
接合2905個体A



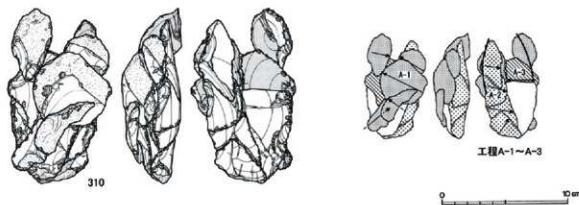
図Ⅲ-440 D3c区の石器(9) 母岩667 接合2905(2)

母岩679 接合2924

段階I

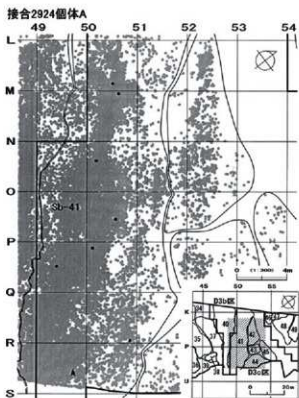
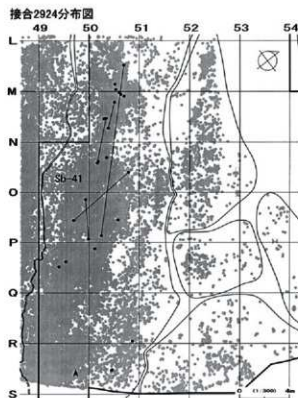
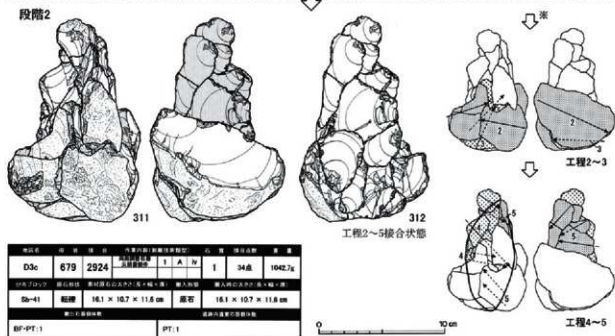
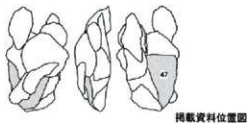
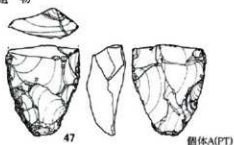


個体A (素材工程I FK)



図Ⅲ-441 D3c区の石器(10) 母岩679 接合2924(1)

2 遺物



図Ⅲ-442 D3c区の石器(11) 母岩679 接合2924(2)

に図示した 311 は工程 2 以降の接合状態である。工程 2 では正裏面に分厚い大型剥離を加えて自然面と素材面の除去を行う。312 は工程 2 の大型剥片を取り除いた状態を図示している。工程 3 は打窟の発達する大型打面の剥離で、主に下半部を尖鋭形に加工している。工程 4・5 では細かな側縁調整を伴う小打面の平坦剥離が器体中軸を大きく越えるように施され、器体を扁平化している。製作尖頭器は出土がなく、遺跡外へ搬出されたと考えられる。復元された尖頭器の大きさは、長 14.5 × 幅 6.4 × 厚 1.8cm である。

【個体 A】310 は個体 A 接合状態である。剥片側縁から正裏面に打窟の発達する幅広の剥離を加えて自然面を除去し、横断面を菱形に整形している。A-3 の剥離が原因で器体を折損している。47 は破損した尖頭器で上半部は出土していない。

分布 Sb-41 の北西から南東部にかけて広く分布している。Q ライン付近で分布が途切れ、北西部と南東部に分かれる様にも認められる。

母岩別資料 681、接合資料 2927 (図Ⅲ-443~446、図版 220・221-1)

母岩別資料 681 は接合資料 2927 のみで構成され、総点数は 46 点、総重量は 2,305.7 g である。

素材 313 は接合資料 2927 で、46 点 (39 個体) が接合している。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石形状は球状に近い。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類される。

段階 1 (原石の粗割)

【工程 1】正面と下面へ分厚い大型剥離を加え個体 A~C の素材を得ている。これにより半円形を呈する粗割り石核が形成される (段階 2 の 317)。大型剥片は長 13.0 × 幅 10.0~13.0 × 厚 3.5~6.0cm 程度のもので剥離されている。

【個体 A】両面調整石器を製作している。背面側への剥離を主体として自然面を除去し、大型打面に素材縁辺を取り込んで平面形を整えている。断片的な接合ではあるが、製作石器は幅 7cm 以上・厚さ 1.5cm 程度に復元できる。

【個体 B】尖頭器・両面調整石器を製作している。工程 B-1 での背面側自然面・節理面除去の剥離後、工程 B-2 で右側面を裁ち落すように急角度の大型剥離が加えられ、同部位に平坦面を形成する。工程 B-3 では主に右側面を打面として、打窟の発達した平坦剥離が施されている。製作石器は欠落するが、長さ 13.0cm 前後、厚さ 1.8cm 程度と考えられる。

【個体 C】尖頭器・両面調整石器を製作している。素材長軸を石器長軸に設定している。工程 C-1 では打窟の発達する分厚い大型剥離を正裏面に加えて自然面・素材面を除去し、厚みを大きく減少させている。また、大型打面に取り込まれて器体幅が順次減少している。工程 C-2 では打窟の発達する幅広剥離が加えられ、側縁辺が形成されている。製作石器は欠落するが、長 13.0 × 幅 4.0 × 厚 3.0cm 程度と考えられる。

段階 2 (両面調整石器の製作)

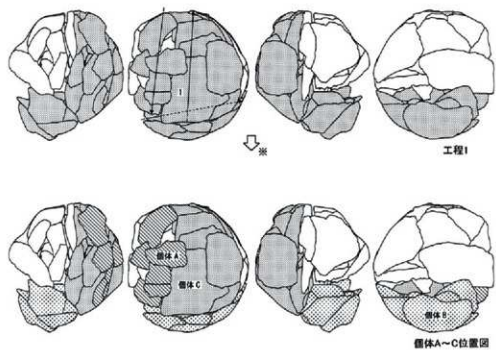
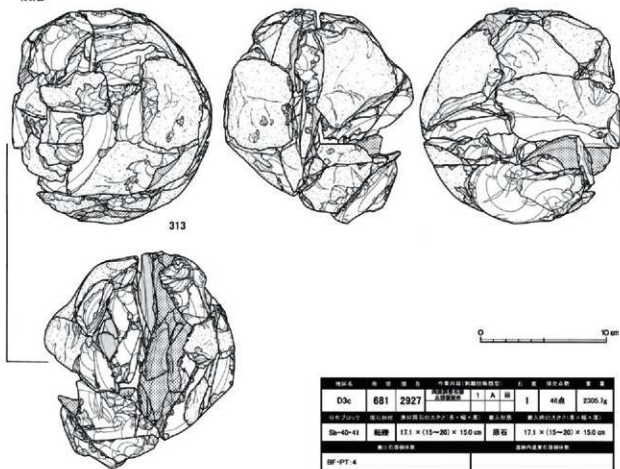
【工程 2~7】工程 2~6 では打窟の著しく発達する分厚い剥離を加え、自然面と粗割り剥離面を除去し、厚みを大きく減少させている。また側縁を形成し横断面を菱形に整形している。工程 7 では小打面の平坦剥離に移行し、側縁辺の整形と器体の扁平化を進めたと考えられる。製作した両面調整石器は欠落し、遺跡外への搬出が推測される。大きさは、長 15.0 以上 × 幅 7.5 × 厚 2.2cm 程度と復元できる。

分布 Sb-41 の中央部、N50区から P49区にかけて分布している。

母岩別資料 751、接合資料 3211 (図Ⅲ-446・447、図版 221-2)

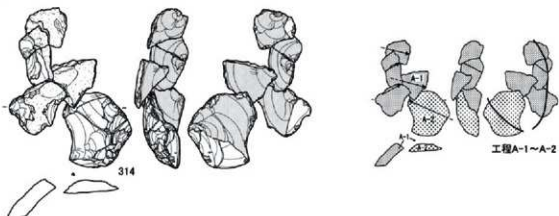
母岩681 接合2927

段階I

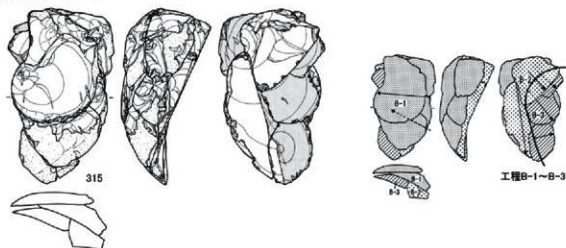


図Ⅲ-443 D3c区の石器(12) 母岩681 接合2927(1)

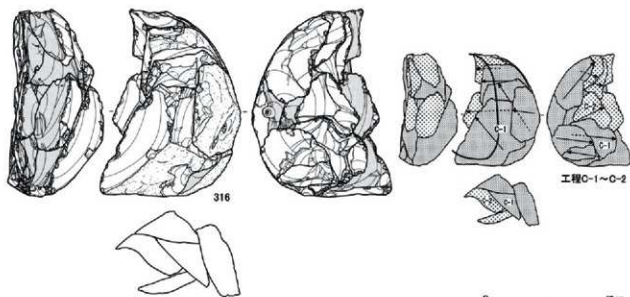
個体A (素材:工程I FK)



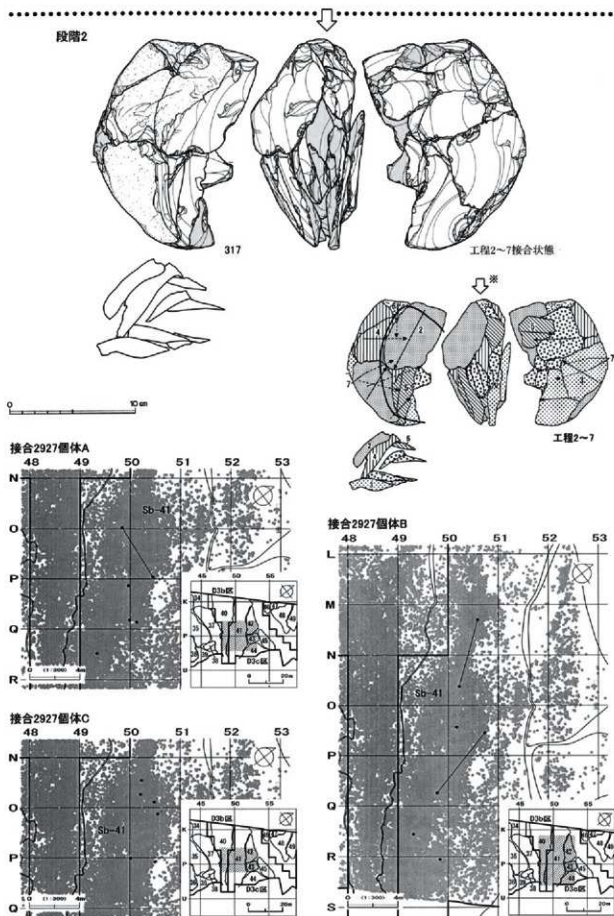
個体B (素材:工程I FK)



個体C (素材:工程I FK)

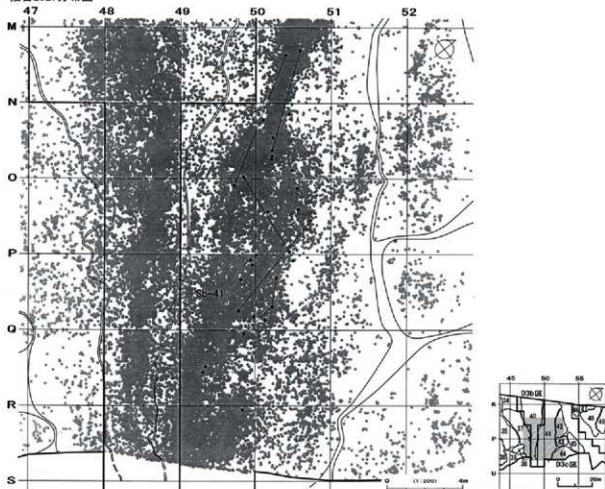


図Ⅲ-444 D3c区の石器(13) 母岩681 接合2927(2)

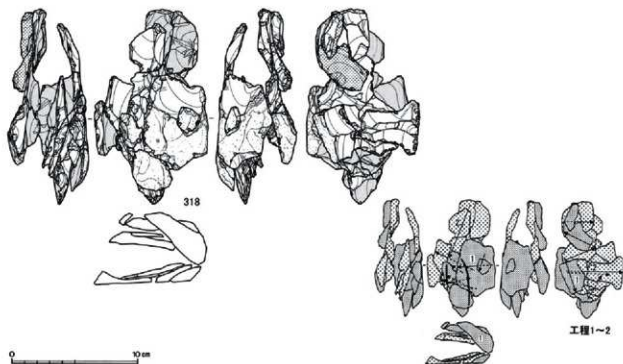


図Ⅲ-445 D3c区の石器(14) 母岩681 接合2927(3)

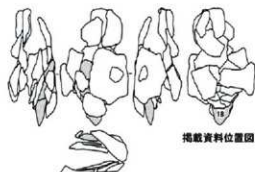
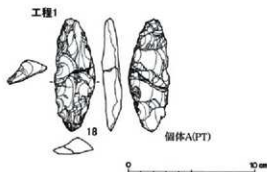
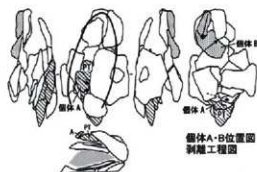
接合2927分布図



母岩751 接合3211

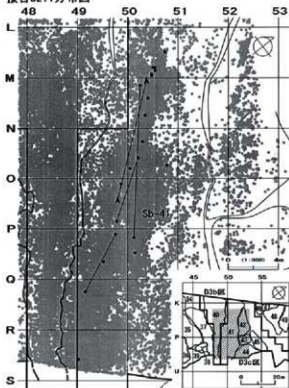


図Ⅲ-446 D3c区の石器(15) 母岩681 接合2927(4)、母岩751 接合3211(1)

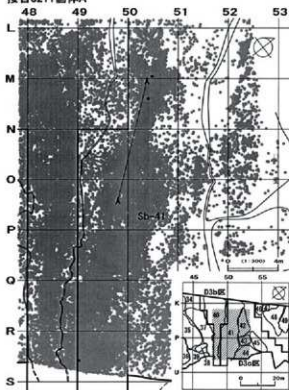


地区名	遺 跡 名	発掘内容	発掘日	品名	品目	数量	重量
D3c	751	3211	1977.12.12	1	A	5	27g
母岩: 玄武岩 発掘層: 第1層(表層) 発掘者: 菅原浩一 発掘場所: 東京都葛飾区新小岩 発掘面積: 約10m ²							
Sb-41		経緯	不明 × 不明 × 不明	測定日時	16.5 × 9.0 × 6.3 cm		
BF-PT:1		PT:1					

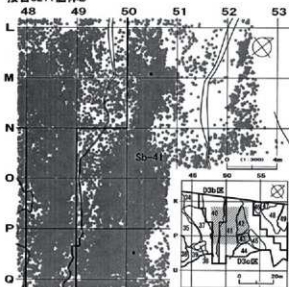
接合3211分布図



接合3211個体A



接合3211個体B



図Ⅲ-447 D3c区の石器(16) 母岩751 接合3211(2)

母岩別資料 751 は接合資料 3211～3215、折れ接合資料 62112・62113 および非接合剥片 13 点で構成され、総点数は 63 点、総重量は 422.0 g である。

素材 318 は接合資料 3211 で、27 点 (19 個体) が接合し、重量は 280.0 g である。石質は黒曜石 5 で転礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類される。

【工程 1～2】工程 1 では正裏両面に厚手の大型剥離を加えて自然面を除去し、器体の厚みを減少させている。工程 1 の剥片が個体 A・B の素材となっている。工程 2 では細かな側縁調整が開始されて小打面で薄手の平坦剥離に移行する。これにより器体の扁平化が行われている。

【個体 A・B】尖頭器・両面調整石器を製作している。個体 A は正面側で剥離された横長剥片を素材とし、長い横軸を石器長軸に設定している。平坦剥離を加えて自然面・素材面を除去し、長さ 9 cm 程度の小型尖頭器 18 を製作している。個体 B は裏面側で剥離された、恐らく平面長方形を呈する横長剥片を素材とし、対角線を石器長軸に設定したと観察される。

分布 Sb-41 の L50 区から P49 区にかけて主に分布し、個体 A・B などが L・M50 区からややまとまって出土している。

母岩別資料 682、接合資料 2928 (図Ⅲ-448・449、図版 222)

母岩別資料 682 は接合資料 2928 のみで構成され、総点数は 28 点、総重量は 1,247.7 g である。

素材 319 は接合資料 2928 で、28 点 (26 個体) が接合している。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態ですべて遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類している。

段階 1 (原石の粗割り)

【工程 1】原石に複数回粗い剥離を加え、核個体には広い平坦な剥離面が形成されている。これにより得られた長 10.5 × 幅 13.0 × 厚 5.5 cm 前後の大型剥片を個体 A の素材に使用している。

【個体 A】尖頭器・両面調整石器を製作している。横長剥片の長い横軸を石器長軸に設定している。工程 A-1・2 では打窟の発達する厚手の剥離を加え、素材打窟部・自然面を除去している。工程 A-3 では大型打面中で中軸を大きく越える幅広剥離により器体の厚みを大幅に減少させ、横断面を菱形に整形している。また平面形も整えられたようである。工程 A-4 は小打面の平坦剥離に移行している。製作石器の出土はないが、大きさは長 13.0 以下 × 幅 7.5 × 厚 3.0 cm 程度と考えられる。

段階 2 (両面調整石器製作)

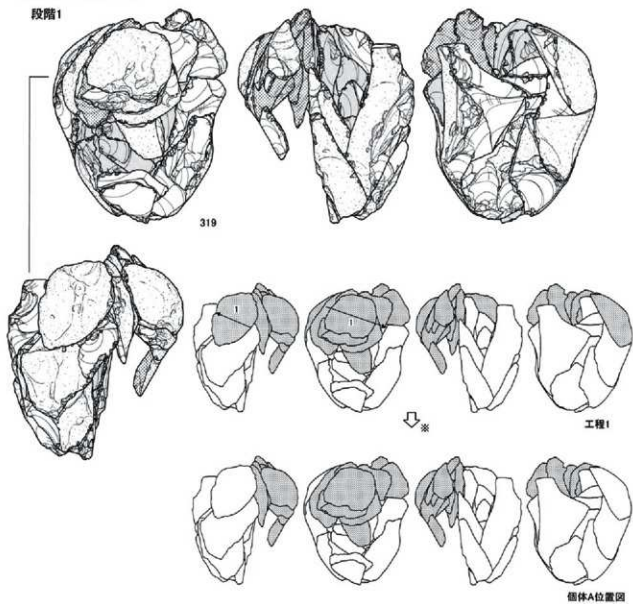
【工程 2～4】工程 2 では打窟の発達する幅広大型剥離を加えて自然面と粗割り剥離面を除去し、器体の厚さを大きく減じている。特に素材平坦面側には縦断面が三角形となる剥離を加えて、側縁を形成している。工程 3 ではやや平坦化した剥離で先行剥離面の高い稜線を除去し、工程 4 では小打面化した薄型平坦剥離で器体の扁平化を進めている。製作石器の出土はないが、長 15.0 以下 × 幅 8.5 × 厚 3.0 cm 程度の両面調整石器と考えられる。

分布 全体では Sb-41・42 の広い範囲に分布するが、個体 A を含む工程 1・2 が N50 区周辺と Sb-42 に、最終段階の工程 4 が P50 区周辺にまとまって認められる。

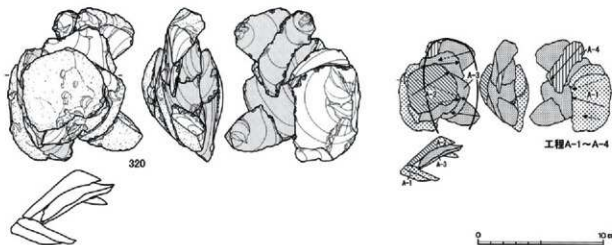
母岩別資料 688、接合資料 2935 (図Ⅲ-450～454、図版 223・224)

母岩別資料 688 は接合資料 2935～2937 および非接合剥片 47 点で構成され、総点数は 141 点、総重量は 2,084.1 g である。

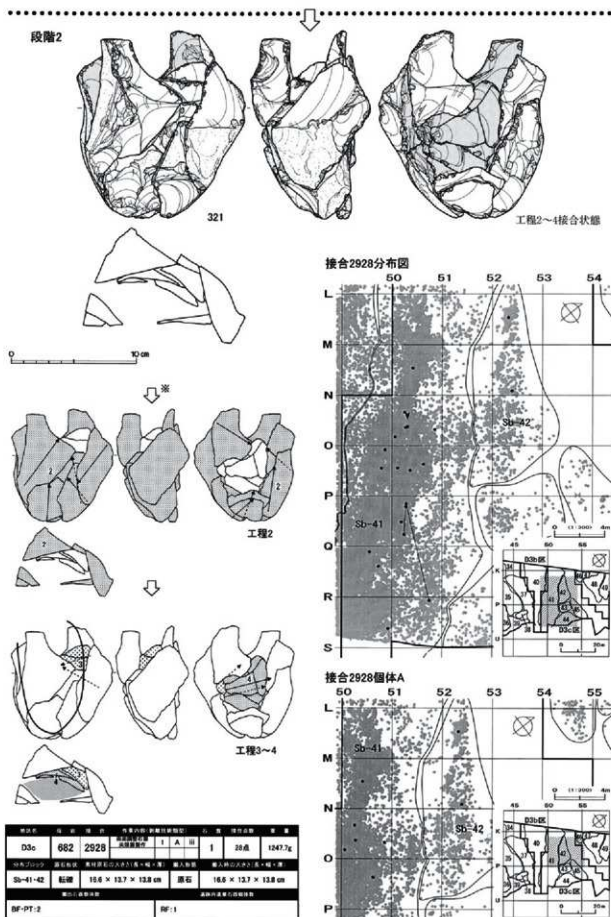
段階1



個体A (素材工程1 FK)



図Ⅲ-448 D3c区の石器(17) 母岩682 接合2928(1)



図Ⅲ-449 D3c区の石器(18) 母岩682 接合2928(2)

素材 322は接合資料2935で、90点(78個体)が接合し、重量は1,890.8gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。

段階1(原石の粗割)

【工程1~2】原石の正裏面に大型剥片剥離を加え、粗い両面調整体を形成する。工程2では大型打面で行う打瘤が発達する剥離を左側面側に連続的に加えて器体の幅を大きく除去し、平面木葉形への整形を行っている。工程1で剥離された剥片が個体A~Fの素材に使用される。

【個体A】323は個体A接合状態である。長15.5×幅13.0×厚4.5cm前後の大型剥片を素材とし、尖頭器を製作している。工程A-1・2では打瘤の発達する厚手の剥離を加え、素材打瘤部・自然面を除去している。工程A-3は素材腹面側への加工で、打瘤部が厚く末端部が薄い剥離を側面に連続的に加え、側縁を形成している。これにより横断面は菱形に整形される。工程A-4は打瘤の発達するやや大型打面の剥離で側縁を整形する。工程A-5では細かい側縁調整が開始され、小打面化した薄型平坦剥離で器体を扁平に加工し、横断面が凸レンズ状に近づいている。製作石器は欠落するが、大きさは長15.0以下×幅7.2×厚2.2cmの尖頭器と復元される。

【個体B】324は個体B接合状態で、尖頭器を製作している。長8.5×幅10.0×厚2.0cm前後の横長剥片を素材とし、長い横軸を石器長軸に設定し、素材末端縁を尖頭器の側縁に利用している。工程B-1で素材打面を折断し、折断面の右側面からは折れ面除去の厚手剥離、素材縁側の左側縁からは平坦剥離を加えて整形を行う。最終的に右側縁からの剥離で折損が生じ作業を終了している。325は製作尖頭器である。

【個体C】326は個体C接合状態で、尖頭器・両面調整石器を製作している。長9.0×幅4.5×厚2.5cm前後の剥片を素材とするが、素材は剥離時の衝撃で半分に折損しているため、加工開始時の幅は半分ほどである。加工は折れ面を除去する様に施されている。製作石器の大きさ等は不明である。

【個体D】327は個体D接合状態で、尖頭器・両面調整石器を製作している。長8.5×幅9.0×厚4.5cm前後の厚手の剥片を素材としている。分厚い剥離で歪な自然面形状を除去した後、器体中軸を越える剥離を加えて器体の厚さを減少させている。製作石器の大きさは幅5.1×厚2.7cm前後と観察される。

【個体E】328は個体E接合状態で、尖頭器を製作している。長9.5×幅10.0×厚2.5cmの平面長方形剥片の対角線を石器長軸に設定している。工程E-1で素材末端部を斜めに載ち切るように折断し、工程E-2で折れ面・自然面除去の厚手の剥離を加えている。工程E-3はやや平坦化した剥離で器体の厚みを除いている。製作尖頭器は、長10.0以下×幅6.0以下×厚1.8cm程度と推測される。

【個体F】素材の大きさ等は不明だが、自然面除去と縁辺形成を行う大型打面の剥離が加えられている。両面調整石器を製作したものと推測される。

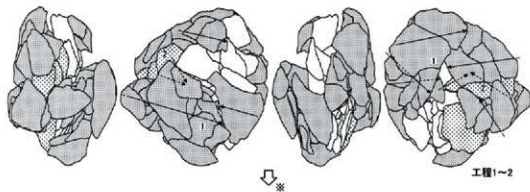
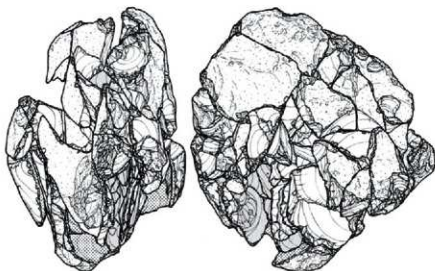
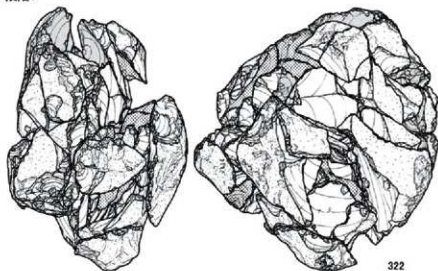
段階2(尖頭器製作)

【工程3~4】329は工程2後半と工程3以降の接合状態である。工程3では打瘤の発達する厚手大型打面の剥離を加え、自然面・粗割り剥離面の除去、平面形・側縁の整形を行う。工程4では剥片打面がやや小型化して平坦な剥離となり、器体の整形を行う。これにより横断面が凸レンズ状で平面が整った木葉形へと調整される。

【工程5~6】細かい側縁調整が開始され、縁辺を擦った痕跡も認められる。小型打面で薄型の平坦剥離が器体中軸を越えるように加えられ、石器の扁平化を進めている。製作尖頭器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された尖頭器の大きさは長19.0以下×幅7.3以下×厚2.1cmと推測

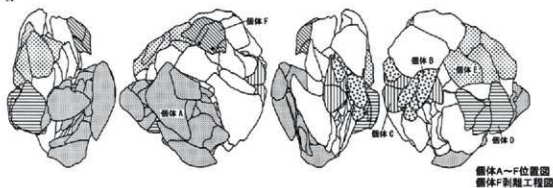
母岩688 接合2935

段階1

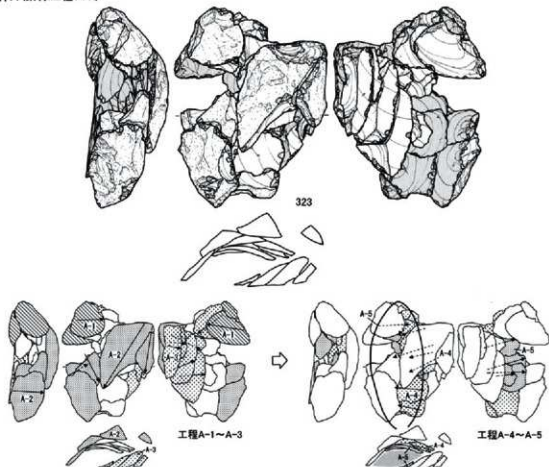


図Ⅲ-450 D3c区の石器(19) 母岩688 接合2935(1)

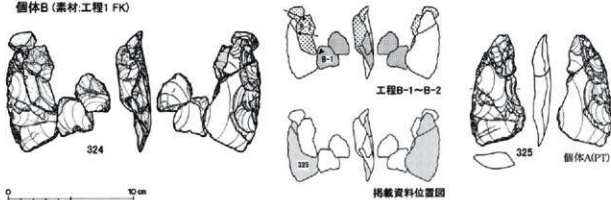
2 遺物



個体A(素材:工程1 FK)

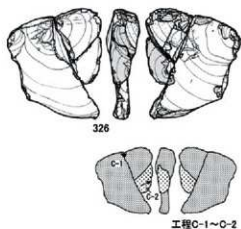


個体B(素材:工程1 FK)

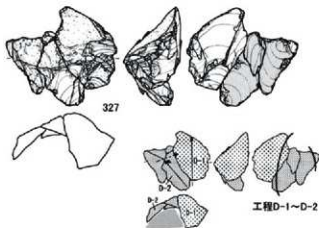


図Ⅲ-451 D3c区の石器(20) 母岩688 接合2935(2)

個体C (素材:工程1 FK)



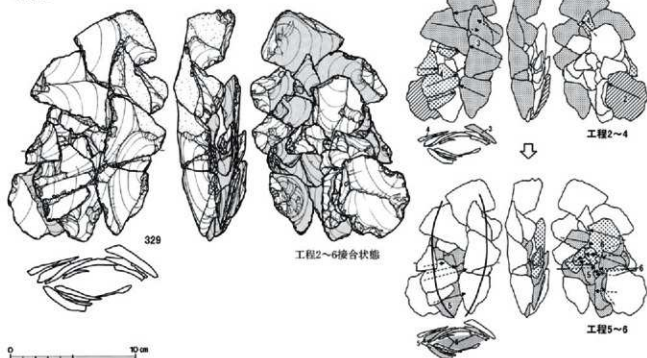
個体D (素材:工程1 FK)



個体E (素材:工程1 FK)



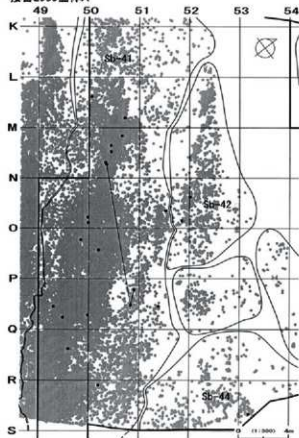
段階2



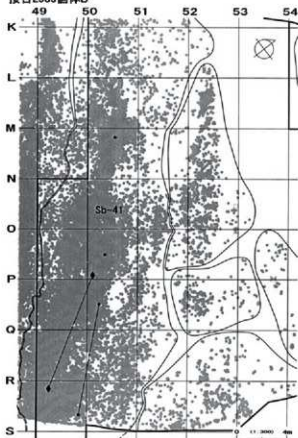
図Ⅲ-452 D3c区 of 石器(21) 母岩 688 接合 2935(3)

2 遺物

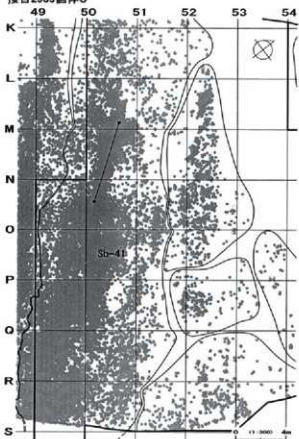
接合2935個体A



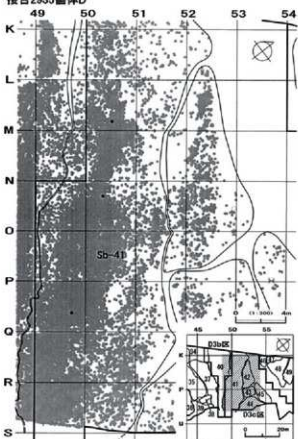
接合2935個体B



接合2935個体C

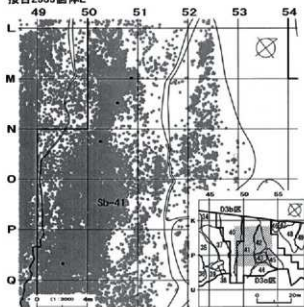


接合2935個体D



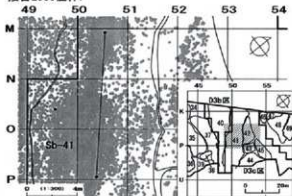
図Ⅲ-453 D3c区の石器(22) 母岩688 接合2935(4)

接合2935個体E

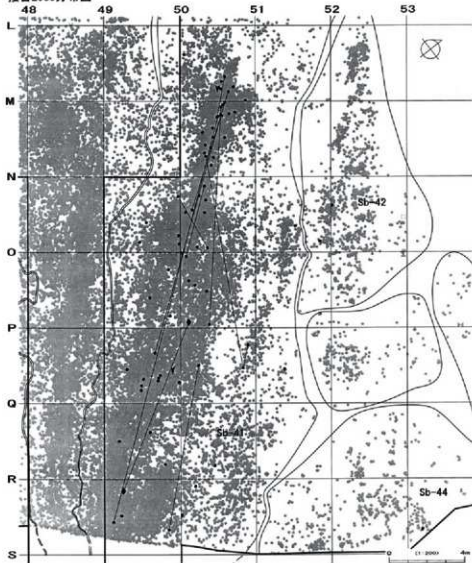


地区名	母岩	品目	作業内容・採取日時等	図番	埋没点数	備考
D3c区	688	2935	2008.12.22 2009.1.15	I A Ⅲ	1	90点
採取ポイント	採取地区	採取層位(土層名・幅・深)	埋入方向	埋入時の天寸(長×幅×厚)		
Sb-41-42-44	転機	20.8 × 19.2 × 14.2 cm	厚石	20.8 × 19.2 × 14.2 cm		
資料目録参照先				資料目録番号		
BF-PT.5				BF.1, ⅡF.3		

接合2935個体F

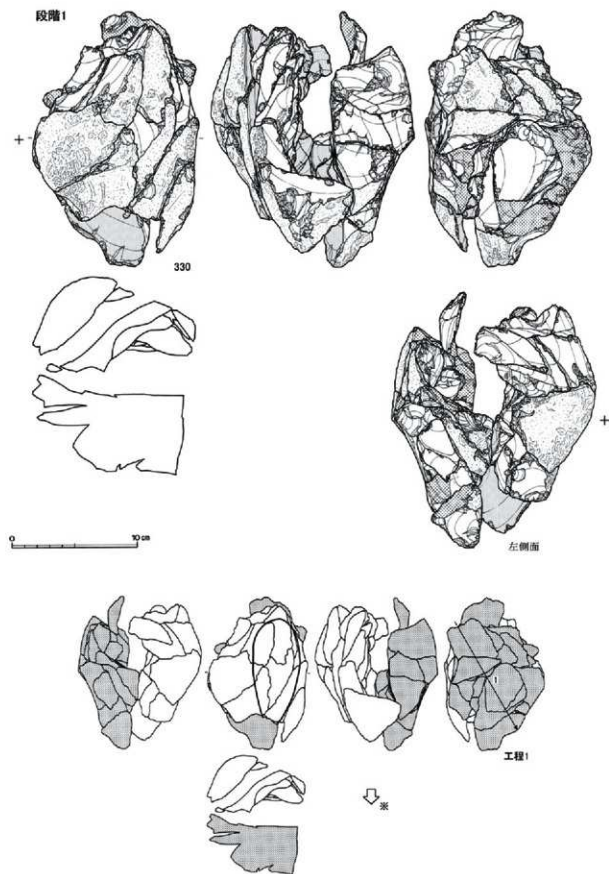


接合2935分布図



図Ⅲ-454 D3c区の石器(23) 母岩688 接合2935(5)

母岩692 接合2943



図Ⅲ-455 D3c区の石器(24) 母岩692 接合2943(1)

される。

分布 Lライン南東側Sb-41・42・44の広範囲に分布する。特にL50区からN50区にかけて高い密度で認められる。Sb-42・44に分布するのは個体A後半の工程で剥離された調整剥片である。

母岩別資料 692、接合資料 2943(図Ⅲ-455~458、図版 225・226-1)

母岩別資料 692 は接合資料 2943 および非接合剥片 34 点、尖頭器 1 点で構成され、総点数は 81 点、総重量は 2,672.5 g である。

素材 330 は接合資料 2943 で、46 点 (36 個体) が接合し、重量は 2,113.7g である。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石を粗割りした状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を半割し、複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiv 類に分類される。

【工程 1~4】工程 1 で素材を半割し、331 と 332 に分離される。331 は個体 A・B の素材に使用される。332 は大きさ長 17.5 × 幅 11.5 × 厚 10.5cm の核個体である。工程 2 で自然面・分割剥離面を除去する厚手の剥離を加え、厚さを大きく除いている。また節理による不整な割れが左側面側に生じ、器体幅を減少させている。工程 3 では打瘤の発達する幅広剥離で側縁の形成と器体の扁平化を進める。工程 4 では細かな側縁調整が施され、小打面・薄型の剥離に移行している。製作尖頭器は欠落するが、長 13.0 以下 × 幅 6.4cm と復元される。

【個体 A・B】尖頭器・両面調整石器を製作している。331 は個体 A・B 接合状態で、素材の大きさは長 19.0 × 幅 14.0 × 厚 6.0cm 前後である。節理割れにより半割され、各剥片が個体 A・B の素材となっている。個体 A は折断面を除去する厚手の剥離を加えた後、先行の粗割面を除去する平坦剥離に移行している。製作石器の大きさは、長 13.0 × 幅 7.5 × 厚 2.0cm 前後とみられる。個体 B は工程 B-1・2 で打瘤の発達する大型打面の剥離を加えて上面を除去し、工程 B-3 でも下部から正裏面へ同様の剥離が連続し、不整な両面調整体が残されている。或いは石核(剥片生産工程)と理解するべきかもしれない。

分布 Sb-41 南東部の広い範囲に分布している。

母岩別資料 724、接合資料 3081(図Ⅲ-458~461、図版 226-2・図版 227)

母岩別資料 724 は接合資料 3081 および非接合剥片 19 点で構成され、総点数は 52 点、総重量は 1,488.0 g である。

素材 333 は接合資料 3081 で、33 点 (27 個体) が接合し、重量は 1,380.3g である。石質は黒曜石 4 で転礫を素材とし、原石の状態を遺跡内に搬入している。

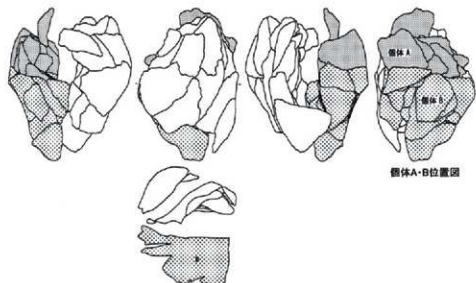
剥離工程 転礫原石を分割し、複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類される。

段階 1 (分割段階)

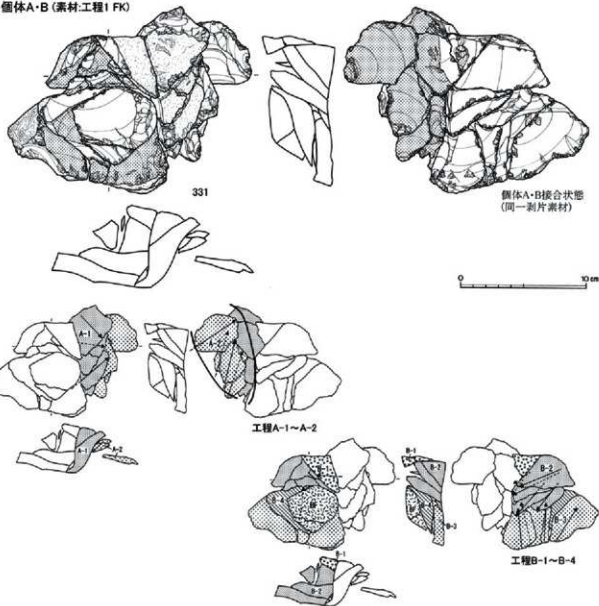
【工程 1】正面側で大型剥離を 2 回行う。最初に剥離した分厚い剥片を個体 A、2 回目に剥離した扁平な剥片を個体 B の素材に使用している。本体の核個体には広く平坦な剥離面が形成される。

【個体 A】334 は個体 A 接合状態で両面調整石器を製作している。長 15.0 × 幅 12.0 × 厚 5.0cm 前後の分厚い剥片を素材とする。主に背面側に大型打面の分厚い剥離を加えて自然面と厚みを除去し、平面形を整えている。その後折損が生じて器体が半割されるが、工程 A-2・3 で各個体に再加工作の剥離が加えられている。335 は製作両面調整石器で、裏面右側縁に再加工作の剥離が認められる。

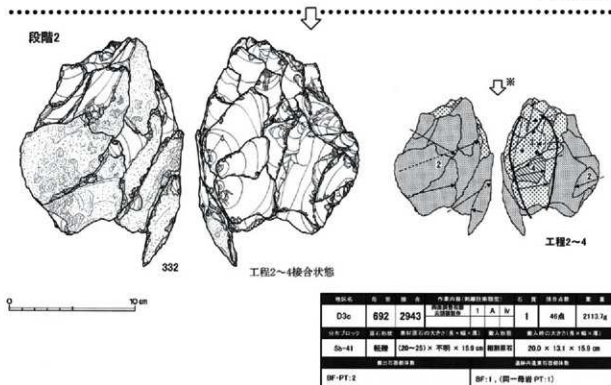
【個体 B】尖頭器・両面調整石器を製作している。剥離工程模式図は段階 2 に図示した。長 12.0 × 幅 17.0 × 厚 2.5cm 前後の横長剥片を素材とする。加工は大型打面で急角度の剥離から、徐々に平坦で鋭



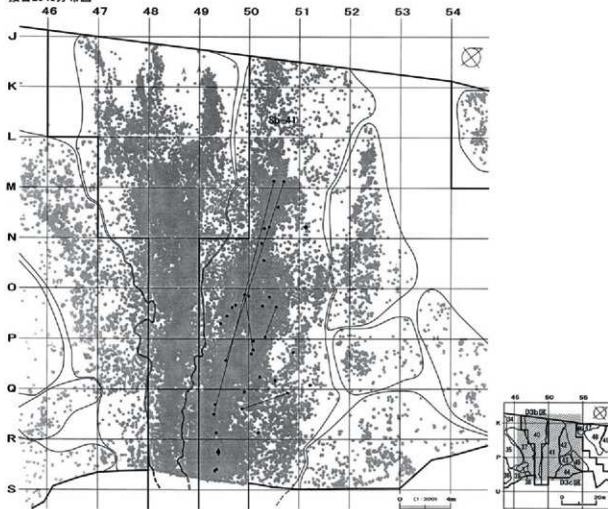
個体A・B (素材: 工程1 FK)



図Ⅲ-456 D3c区の石器(25) 母岩692 接合2943(2)



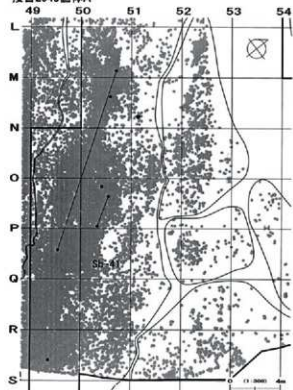
接合2943分布図



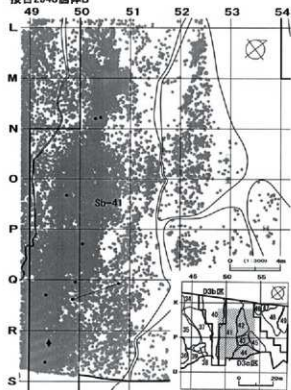
図Ⅲ-457 D3c区の石器(26) 母岩692 接合2943(3)

2 遺物

接合2943個体A

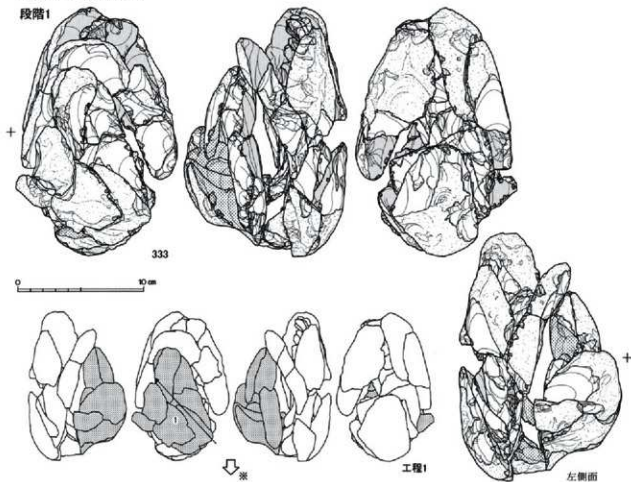


接合2943個体B

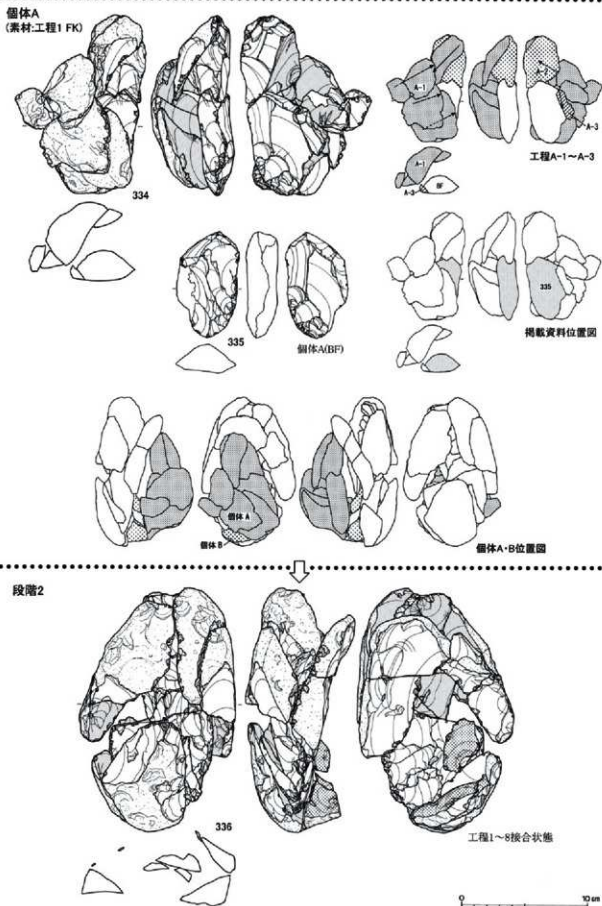


母岩724 接合3081

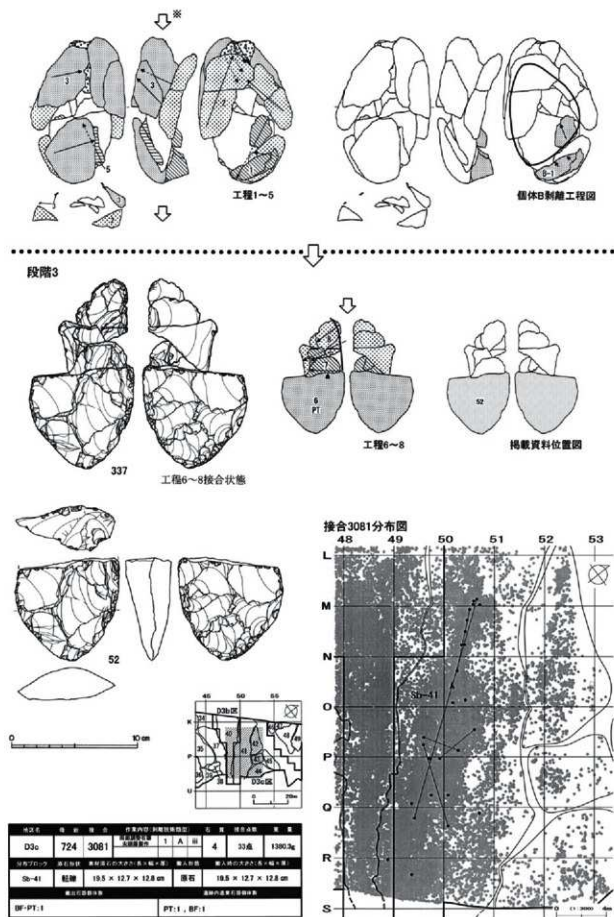
段階1



図Ⅲ-458 D3c区の石器(27) 母岩692 接合2943(4)、母岩724 接合3081(1)



図Ⅲ-459 D3c区の石器(28) 母岩724 接合3081(2)



図Ⅲ-460 D3c区の石器(29) 母岩724 接合3081(3)

角に剥離されるものへ移行したようである。

段階2 (尖頭器製作)

【工程2~5】工程2では平坦面側へ打瘤が発達し末端が薄く抜ける縦断面三角形の剥離が求心的に加えられ、工程3では分厚い大型剥離で自然面を除去している。これにより側縁面を形成し、横断面は菱形に整形される。工程4では上端部から長軸方向の剥離を加えて尖頭形への整形を行い、工程5で平坦剥離調整に移行する。

段階3 (再加工)

【工程6~8】337は工程6~8接合状態である。工程6で折損が生じ器体がほぼ半分に折れてしまう。工程7・8は上半部個体に再加工を行っている。52は折損した下半部の尖頭器である。

分布 全体はSb-41のM50区周辺からQ49区の広い範囲に分布するが、個体A・Bを含む工程1・2の大型剥片がO・P49・50区周辺にまとまって認められる。

母岩別資料726、接合資料3089(図Ⅲ-461~463、図版228)

母岩別資料726は接合資料3089および非接合剥片9点で構成され、総点数は55点、総重量は1.137.4gである。

素材 338は接合資料3089で、46点(41個体)が接合し、重量は1.106.1gである。石質は黒曜石4で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を半割し、2個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiv類に分類される。

段階1 (原石の分割)

【工程1】分割を行い、長11.0×幅11.0×厚3.5cmの剥片と、長14.0×幅10.5×厚6.5cmの核に分離する。剥片は個体Aの素材に使用される。

【個体A】339は個体Aの接合状態で尖頭器・両面調整石器を製作している。工程A-1~3では打瘤の発達する厚手の剥離を加えて素材面・自然面を除去し、厚みを大きく減少させている。また調整剥片の大型打面に器体幅を取り込むことにより、平面形を整えている。工程A-4では細かな縁辺剥離が施され、小打面の平坦剥離に移行する。製作石器は長10.5×幅5.7×厚1.8cmと復元される。

段階2 (両面調整石器製作)

【工程2~5】340は工程2~7接合状態である。工程2~5は素材核側面の自然面を加撃して、正裏両面に打瘤の発達する剥離を加えている。これにより自然面・分割面を除去して器体の厚みを大きく減少させている。また側面部を調整剥離に取り込んで側縁面を形成し、横断面を菱形に整形している。

【工程6~7】工程6では細かい側縁調整が開始され、やや厚手の幅広剥離で器体を平坦化している。工程7は小打面化した薄型の剥離で、器体を薄く加工し横断面を凸レンズ状に整形している。製作石器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された大きさは長11.5×幅7.0×厚1.8cmである。
分布 Sb-41の広範囲に分布するが、N50区を境としてL・M50区のみと、O49・50区からR49区のみとに区分できる。しかし分布の各まとまりと剥離工程の間に特別な関係性は見出せない。

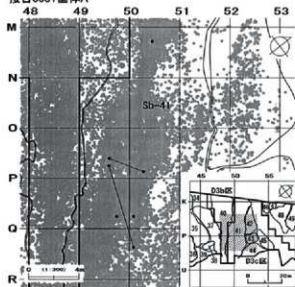
母岩別資料750、接合資料3210(図Ⅲ-464・465、図版229)

母岩別資料750は接合資料3210および非接合剥片3点で構成され、総点数は45点、総重量は1.258.8gである。

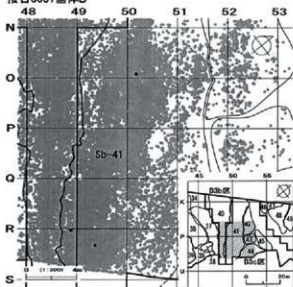
素材 341は接合資料3210で、42点(36個体)が接合し、重量は1.254.8gである。石質は黒曜石5で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

2 遺物

接合3081個体A

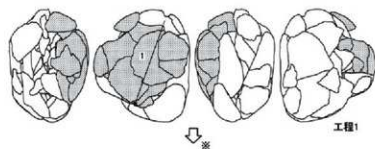
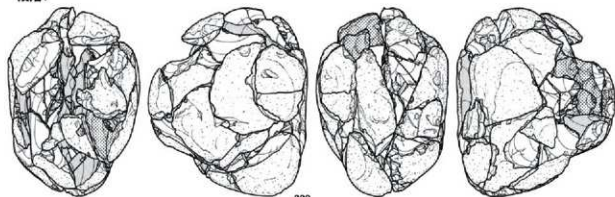


接合3081個体B

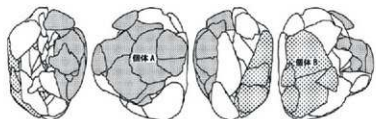


母岩726 接合3089

段階1



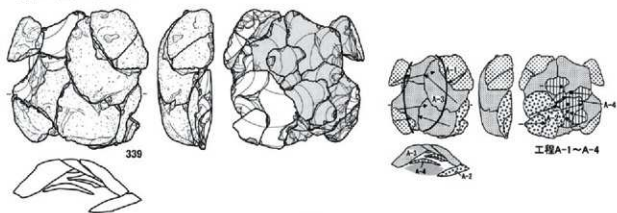
↓ ※



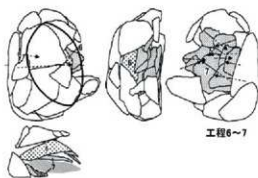
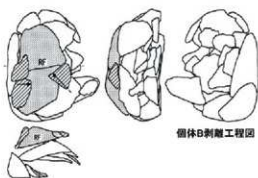
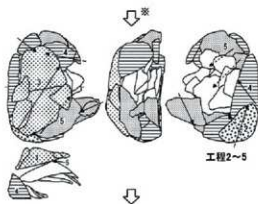
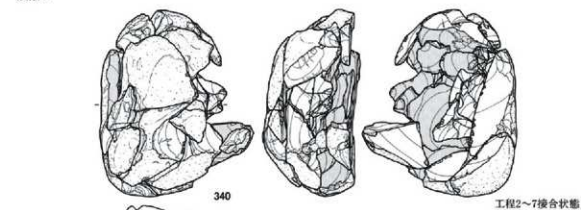
0 10 cm

図Ⅲ-461 D3c区の石器(30) 母岩724 接合3081(4)、母岩726 接合3089(1)

個体A(素材工程1 FK)



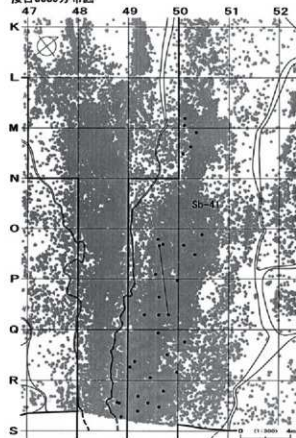
段階2



図Ⅲ-462 D3c区の石器(31) 母岩726 接合3089(2)

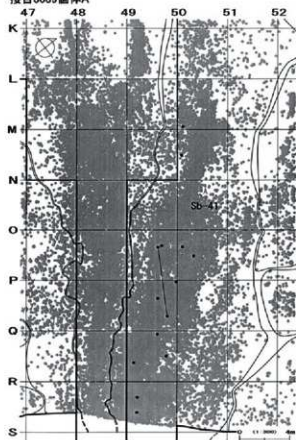
2 遺物

接合3089分布図

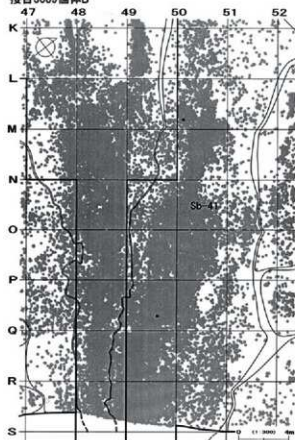


検出区	母岩	接合	内容物	数量	重量
D3c	726	3089	1 A 3a	4	46点 1106.1g
母岩の種類	母岩の長さの平均値(幅×厚)		検出位置	検出位置の長さ(幅×厚)	
Sb-41	結核	14.9 × 12.5 × 10.4 cm	層石	14.9 × 12.5 × 10.4 cm	
資料目録番号			資料目録番号		
D3c-12			D3c-1		

接合3089個体A

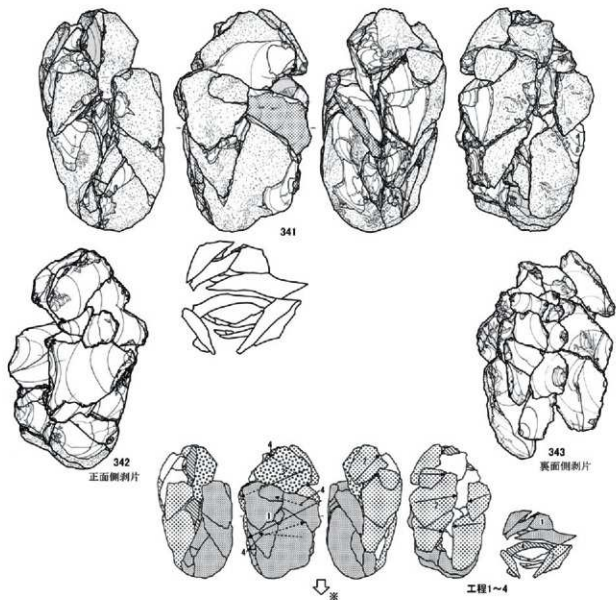


接合3089個体B

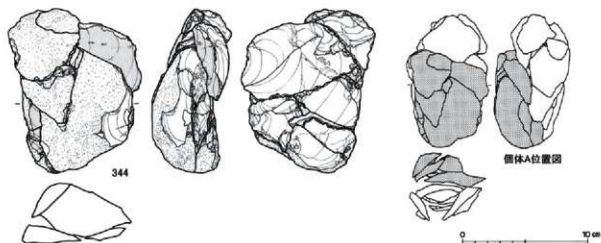


図Ⅲ-463 D3c区の石器(32) 母岩726 接合3089(3)

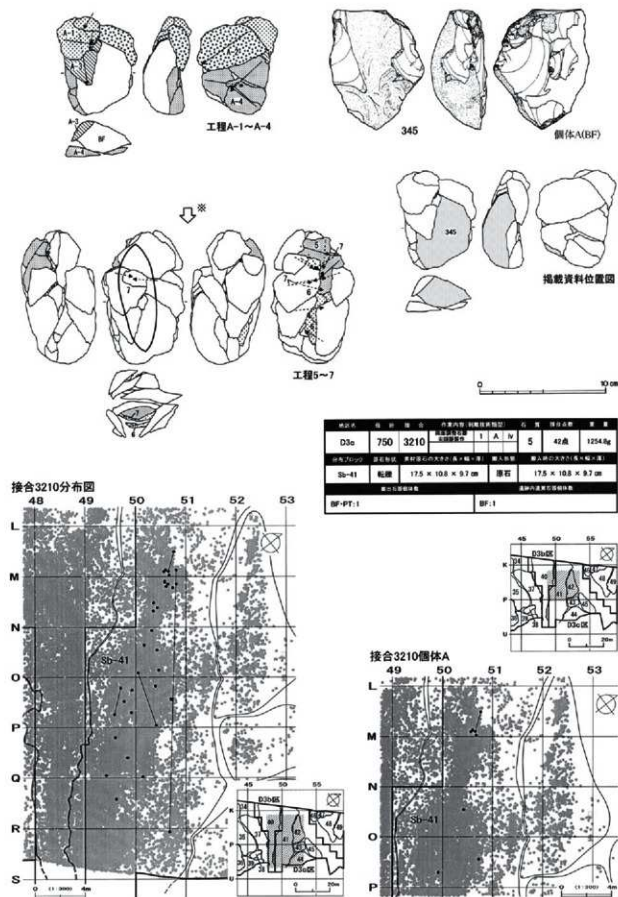
母岩750 接合3210



個体A (素材:工程1 FK)



図Ⅲ-464 D3c区の石器(33) 母岩750 接合3210(1)



図Ⅲ-465 D3c区の石器(34) 母岩750 接合3210(2)

剥離工程 転礫原石を半割し、2個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiv類に分類される。

【工程1~4】工程1で原石を半割して、長15.0×幅10.0×厚5.0cm前後の素材を2個体(核個体と剥片個体)作出する。核個体の工程2・3では打瘤の発達する分厚い大型剥離を加えて自然面と分割面を除去し、器体の厚さを大きく減じている。また調整剥片の大型打面に器体幅を取り込み、平面を整形している。工程4では石器中軸を大きく越える幅広の剥離を加え、器体の扁平化を進めている。

【工程5~7】工程5は端部の厚みを除去する厚手の剥離が行われる。工程6ではやや打瘤の発達する平坦な剥離で側縁を整える。工程7では細かな側縁調整が施され、小打面・薄型の平坦剥離調整を行って横断面を凸レンズ状に整形している。製作石器は欠落するが、長14.2×幅4.8×厚1.6cmの尖頭器が製作されたと観察される。

【個体A】344は個体A接合状態で尖頭器・両面調整石器を製作している。正裏両面へ打瘤の発達する厚手の粗い剥離を加えるが、自然面を広く残置した歪な形状のまま作業を終了している。345は製作両面調整石器で、上端部は球顆が原因して破損している。

分布 Sb-41のL50区から南東側R50区にかけての広範囲に分布する。個体Aの調整剥片がL50区にまとめて認められる。

母岩別資料753、接合資料3222(図III-466~468、図版230)

母岩別資料753は接合資料3222~3224および非接合剥片17点で構成され、総点数は71点、総重量は1,037.3gである。

素材 346は接合資料3222で、41点(37個体)が接合し、重量は863.1gである。石質は黒曜石4で、転礫を素材とし、原石を粗割りした状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を分割し、複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。

段階1(原石の分割)

【工程1】上面および正裏面に大型剥離を加えている。上面・正面で剥離された剥片が個体A~Cの素材に使用されている。個体Aは調整剥片が1点接合しているのみで詳細は不明である。

【個体B】347は個体B接合状態で尖頭器・両面調整石器を製作している。長10.0×幅14.0×厚4.5cmの剥片を素材とする。工程B-1・2では打瘤が著しく発達する分厚い剥離を両側面から背面に加え、自然面と器体の厚みを大きく除去する。工程B-3では腹面側に打瘤部が厚く末端が薄い縦断面三角形の剥離を加えて側縁辺を形成する。これにより横断面は菱形に整形される。工程B-4では細かな側縁調整を伴う小型打面の平坦剥離に移行し、器面の平坦化を行っている。石器は出土していないが、大きさは長9.5×幅7.3×厚1.8cm程度と観察される。

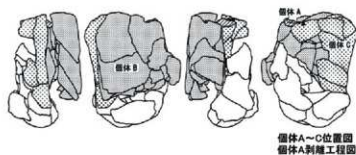
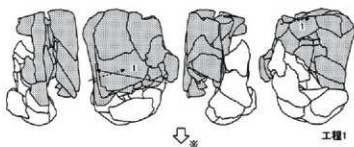
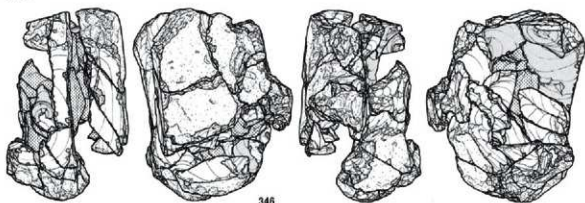
【個体C】両面調整石器を製作した個体である。個体Cの剥離工程模式図は段階2で図示している。長12.0×幅8.5×厚3.0cm程度の剥片を素材とし、側面の厚みを除去して縁辺を形成する剥離などが加えられている。接合が断片的なため詳細は不明だが、製作石器の大きさは長8.2×幅5.4×厚1.8cmと観察される。

段階2(大型剥片剥離・尖頭器製作)

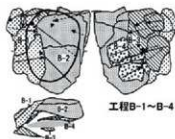
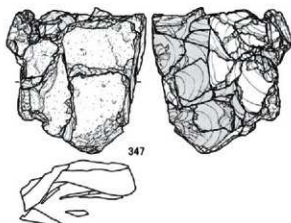
【工程2~3】348は工程1後半~3の接合状態で個体Cが含まれている。工程2では打瘤の発達する厚手の剥離で自然面を除去し、併せて器体の厚みを減じている。工程3では小打面の平坦剥離に移行し、器体を扁平に加工している。製作石器は出土していないが、長8.2×幅5.4×厚1.8cmの両面調整石器と考えられる。

母岩753 接合3222

段階1

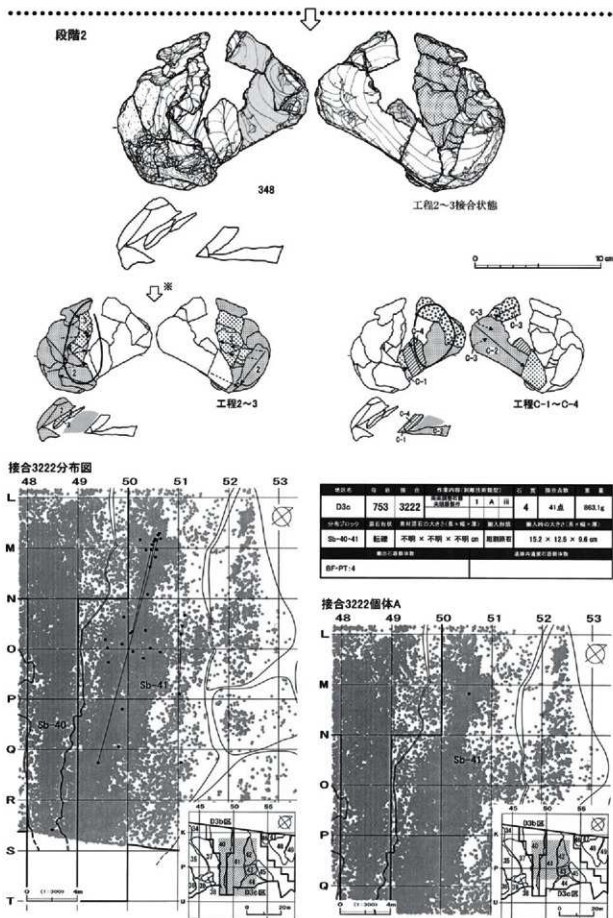


個体B (素材:工程1 FK)



0 10 cm

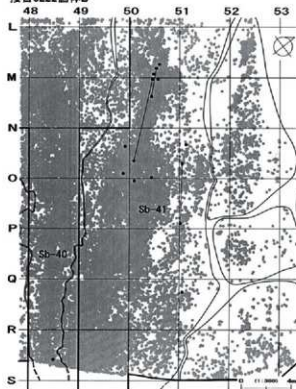
図Ⅲ-466 D3c区の石器(35) 母岩753 接合3222(1)



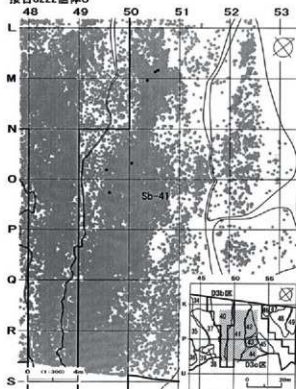
図III-467 D3c区の石器(36) 母岩753 接合3222(2)

2 遺物

接合3222個体B

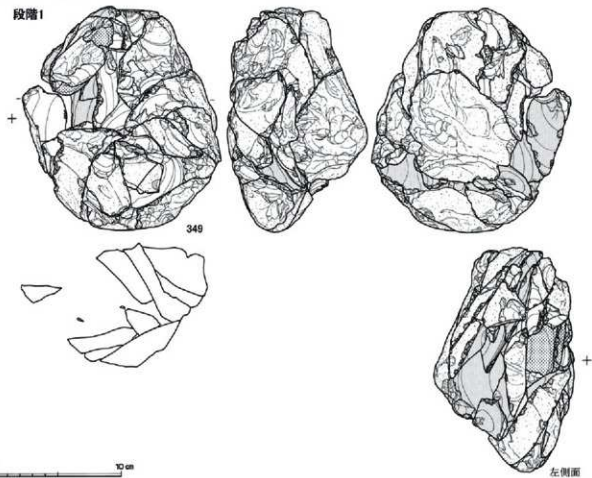


接合3222個体C

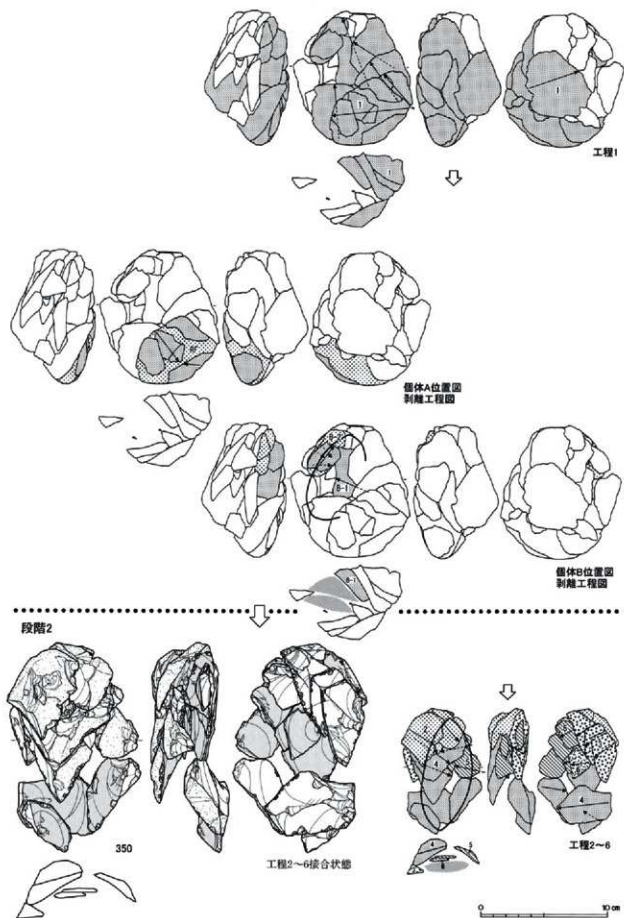


母岩757 接合3233

段階I



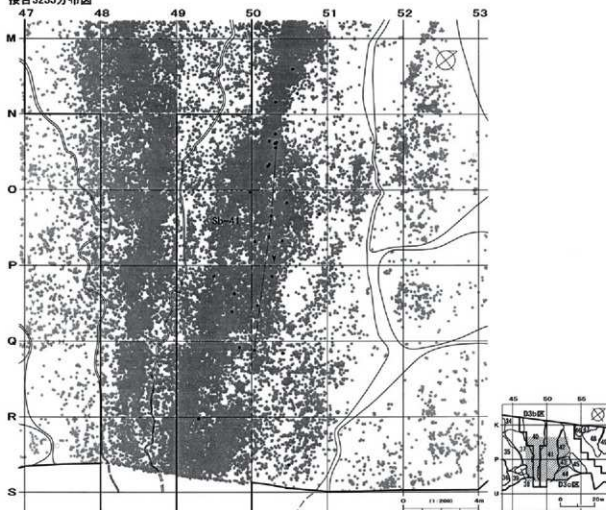
図Ⅲ-468 D3c区の石器(37) 母岩753 接合3222(3)、母岩757 接合3233(1)



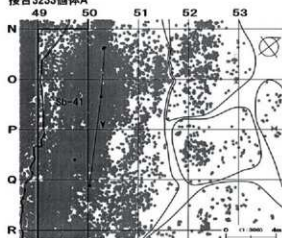
図Ⅲ-469 D3c区の石器(38) 母岩 757 接合 3233(2)

2 遺物

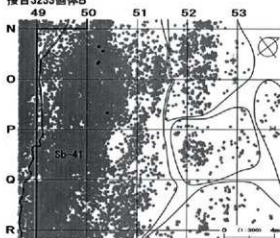
接合3233分布図



接合3233個体A



接合3233個体B



標記名	母岩	母岩	内装内容(表裏法併記)	穴	接合点数	重量
D3c	757	3233	母岩面(表裏法併記)	1 A 面	5	34点 1620kg
3233-41	船體	15.7 × 17.7 × 11.0 cm	裏面	15.7 × 17.7 × 11.0 cm		

標記名: D3c-PT.2 母岩: 757

図Ⅲ-470 D3c区の石器(39) 母岩757 接合3233(3)

分布 Sb-41のL・M50区およびN・O49～51区周辺にまとまって分布している。

母岩別資料 757、接合資料 3233 (図III-468～470、図版 231)

母岩別資料 757 は接合資料 3233 および非接合剥片 2 点で構成され、総点数は 36 点、総重量は 1,629.4 g である。

素材 349 は接合資料 3233 で、34 点 (29 個体) が接合し、重量は 1,620.9g である。石質は黒曜石 5 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を分割し、複数個体の尖頭器・両面調整器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類される。

段階 1 (原石の粗割)

【工程 1】正裏面に大型剥離を複数回加えて個体 A・B の素材を得ている。

【個体 A】素材腹面を打面として背面側に自然面除去の剥離を加えているが、節理により器体が破損し遺棄されている。片面側への粗雑な剥離のため製作石器は二次加工ある剥片とした。

【個体 B】両面調整器を製作した個体である。長 9.0 × 幅 12.5 × 厚 4.5cm の横長剥片を素材とし、長い横軸を石器長軸に設定している。打瘤の発達する大型剥離を背面に加えて一次剥離面を除去し、断面を菱形に整形している。接合が断片的なため詳細は不明だが、製作石器の大きさは長 11.9 × 幅 7.0 × 厚 2.4cm 前後と観察できる。

段階 2 (尖頭器製作)

【工程 2～6】350 は工程 2～6 の接合状態で、粗い両面調整器が形成されている。工程 2～4 では大型打面で打瘤の発達する厚手の剥離を正裏面に加えて自然面・粗割り時の剥離面を除去し、厚みを減少させている。また側縁が形成され断面が菱形に整形されている。工程 5 以降は小打面で薄型の平坦剥離に移行し器体を扁平に加工する。工程 6 では細かい側縁調整に擦りを加えて縁辺を整形している。製作石器の出土はなく遺跡外への搬出が推測される。石器は長 14.9 × 幅 6.6 × 厚 1.5cm 前後の尖頭器と観察される。

分布 Sb-41 の M50 区から R50 区にかけての広範囲に分布している。個体 A・B が N・O50 区にまとまって認められる。

母岩別資料 758、接合資料 3234 (図III-471・472、図版 232)

母岩別資料 758 は接合資料 3234～3236 および非接合剥片 15 点で構成され、総点数は 61 点、総重量は 1,389.3 g である。

素材 351 は接合資料 3234 で、35 点 (28 個体) が接合し、重量は 1,172.7g である。石質は黒曜石 5 で転礫を素材とし、原石を粗割りした状態で遺跡内に搬入している。正面側原石表面には泡状に盛り上がる歪な面が認められる。

剥離工程 転礫原石を分割し、複数個体の尖頭器・両面調整器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類される。

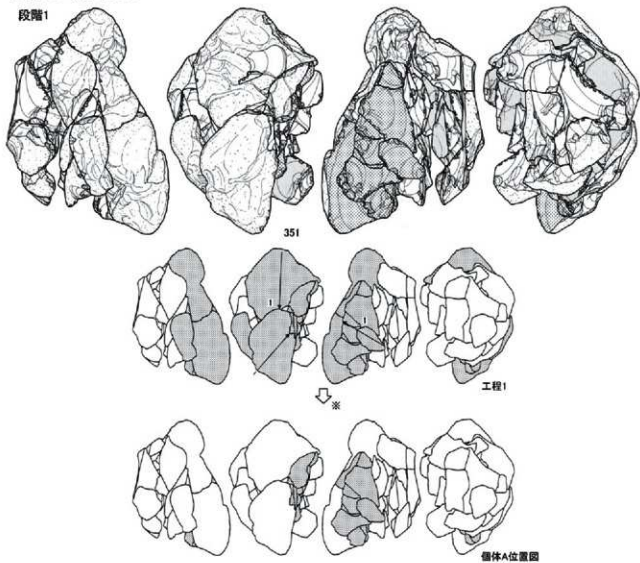
段階 1 (原石の粗割)

【工程 1】正面・右側面に粗割りを加えて歪な自然面を除去している。右側面側の大型剥片が個体 A の素材に使用されている。

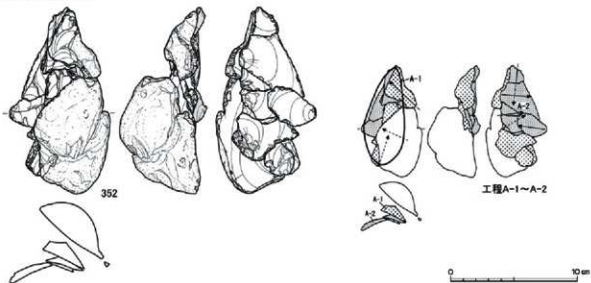
【個体 A】352 は個体 A 接合状態で、尖頭器を製作している。正面下部に大型剥片一点が誤って接合した状態で作図している。工程 A-1 では打瘤の発達する大型打面の剥離で側縁の厚みを除いて縁辺を整形し、また自然面や粗割り剥離面を除去して器体を扁平に加工している。工程 A-2 ではやや軽微な側縁辺への調整が施され、薄型の平坦剥離に移行している。製作石器の出土はないが、大きさ

母岩758 接合3234

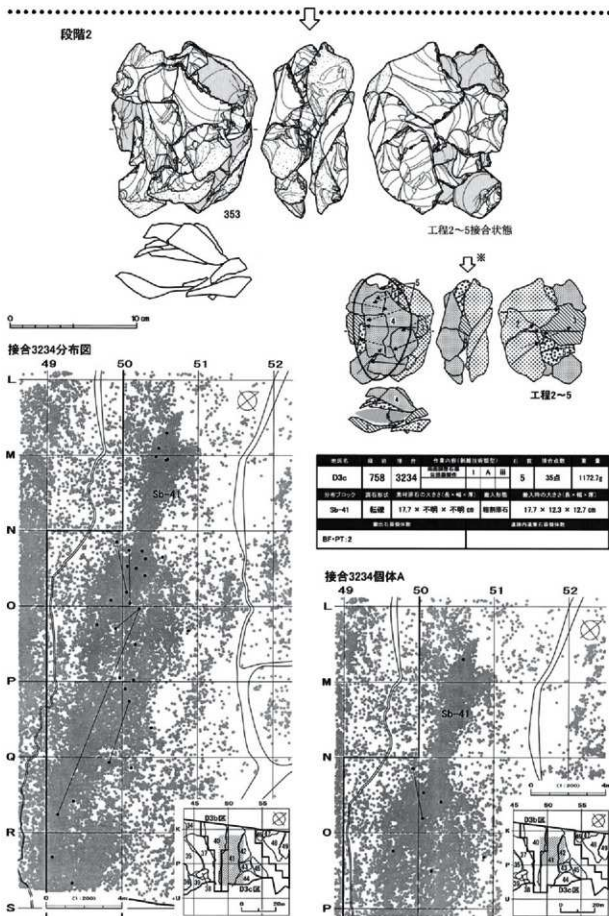
段階1



個体A (素材工程1 FK)

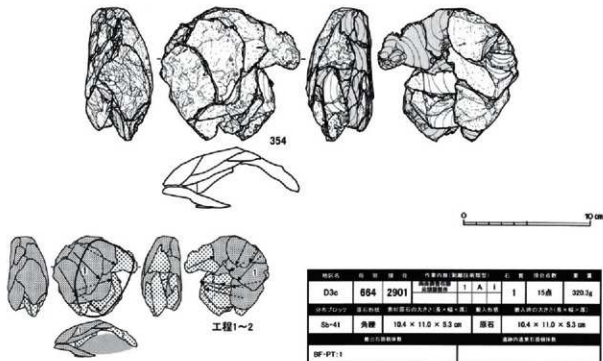


図Ⅲ-471 D3c区の石器(40) 母岩758 接合3234(1)



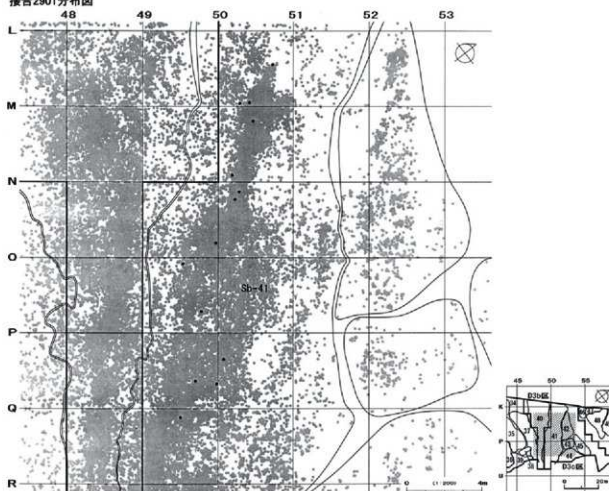
図Ⅲ-472 D3c区の石器(41) 母岩758 接合3234(2)

母岩664 接合2901



地区	期	層	内装内容	発掘日付	調査者	面積	重量
D3c	664	2901	母岩664 接合2901	1971.10.1	山本 隆夫	15点	3029.2g
母岩664	母岩664の最大寸法×幅×高		接合2901	接合2901の最大寸法×幅×高			
Sb-41	角礫	10.4 × 11.0 × 5.3 cm	原石	10.4 × 11.0 × 5.3 cm			
母岩664の重量				接合2901の重量			
母岩664の重量				接合2901の重量			

接合2901分布図



図Ⅲ-473 D3c区の石器(42) 母岩664 接合2901

は長 13.1 × 幅 5.5cm 前後と観察される。

段階 2 (両面調整石器の製作)

【工程 2～5】 353 は工程 2～5 接合状態である。全体図 351 とは正裏が逆で図示されている。工程 2・3 では平坦な裏面側に打縮の発達する大型剥離を加えて側面付近の厚みを減じ、側縁を形成している。工程 4 では正面側へ器体中軸を越える幅広剥離を加えて自然面と厚みを除去し、器体を扁平に整形している。工程 5 は平坦剥離に移行し器面を平坦に整えている。製作石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。石器は長 13.9 × 幅 7.9 × 厚 2.1cm 前後の両面調整石器と観察される。

分布 Sb-41 の L50 区から R49 区の広範囲に分布し、L・M50 区および N・O49・50 区周辺のまとまりが認められる。後者には個体 A がまとまってみられる。

母岩別資料 664、接合資料 2901 (図 III-473、図版 234-1)

母岩別資料 664 は接合資料 2901 および非接合剥片 1 点で構成され、総点数は 16 点、総重量は 325.0 g である。

素材 354 は接合資料 2901 で、15 点 (14 個体) が接合し、重量は 320.3 g である。石質は黒曜石 1 で角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Ai 類に分類される。原石は半球状を呈する。工程 1 では打縮の発達する幅広剥離を正裏面に加えて自然面を除去し厚みを減じている。特に平坦な裏面側には打縮部が厚く末端部が薄い剥離が連続的に加えられて側縁が形成され、横断面が凸レンズ状に加工される。工程 2 では小打面の平坦剥離に移行し器体を薄く扁平に整形している。製作石器は出土していないが、長 10.0 × 幅 6.9 × 厚 2.5cm 前後の両面調整石器と観察される。

分布 Sb-41 の L50 区から Q49 区にかけて散発的に分布する。

母岩別資料 669、接合資料 2910 (図 III-474、図版 235-1)

母岩別資料 669 は接合資料 2910 および非接合剥片 2 点で構成され、総点数は 21 点、総重量は 438.3 g である。

素材 355 は接合資料 2910 で、19 点 (19 個体) が接合し、重量は 412.1 g である。石質は黒曜石 1 で角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石は裏面が平坦でやや扁平な形状を呈する。356・357 は正裏面調整剥片の腹面側を図示している。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Ai 類に分類される。工程 1～3 では打縮の発達する幅広の剥離で自然面を除去している。正面側への剥離は厚手に加えられる主に厚みを除去し、裏面側の剥離では側縁の整形がなされている。これにより木葉形の平面と菱形の横断面が形成される。工程 4 では細かな側縁調整と縁辺への擦りが観察されるようになり、小打面で薄型の平坦剥離に移行して器体を扁平に加工している。製作石器の出土はみられないが、長 12.2 × 幅 6.1 × 厚 1.5cm 前後の尖頭器と観察される。

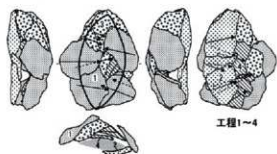
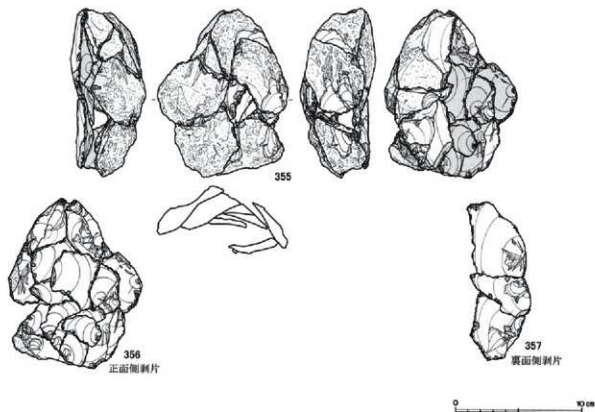
分布 Sb-41 の L50 区から P49 区にかけて分布し、L・M50 区に小規模なまとまりが認められる。

母岩別資料 670、接合資料 2911 (図 III-475、図版 233-1)

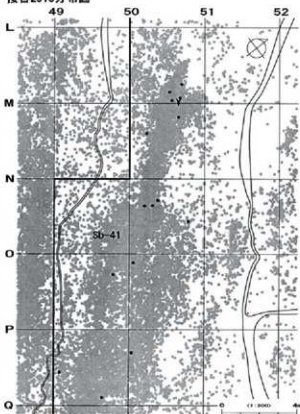
母岩別資料 670 は接合資料 2911 および非接合剥片 6 点で構成され、総点数は 30 点、総重量は 605.8 g である。

素材 358 は接合資料 2911 で、24 点 (23 個体) が接合し、重量は 579.4 g である。石質は黒曜石 1 で角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石は裏面が平坦なやや扁平なもので、平面は正方形に近い。359・360 は正裏面調整剥片の腹面側を図示している。

母岩669 接合2910



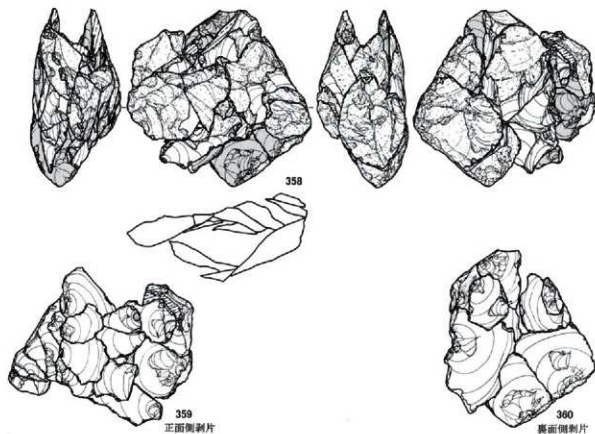
接合2910分布図



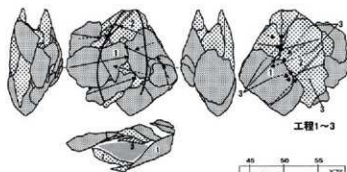
地区名	遺 址 名	発見年代	発見場所			土 質	厚さ	重量
			I	A	1			
D3c	669	2910			1	19度		412.1g
寸法(中心) 長さ(mm) 厚さ(mm) 重量(g) 長さ(mm) 幅(mm) 高さ(mm) 重量(g)								
	35-41	角板	13.3 × 10.4 × 3.9 cm	厚板	13.3 × 10.4 × 3.8 cm			
製法(土器製法) 製法(土器製法)								
BF-PT:1			RF:1					

図Ⅲ-474 D3c区の石器(43) 母岩669 接合2910

母岩670 接合2911



0 10 cm

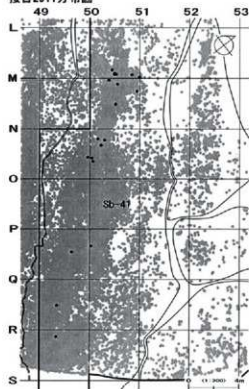


工程1~3

地区名	区	遺構名	遺物名	遺物種別	数量	材質	重量
D3c	670	2911	石片	1	A	1	24点 579.4g
D3c-41 片断 13.9 × 14.5 × 7.1 cm 厚さ 13.9 × 14.5 × 7.1 cm							
D3c-41 片断 13.9 × 14.5 × 7.1 cm 厚さ 13.9 × 14.5 × 7.1 cm							
D3c-41 片断 13.9 × 14.5 × 7.1 cm 厚さ 13.9 × 14.5 × 7.1 cm							

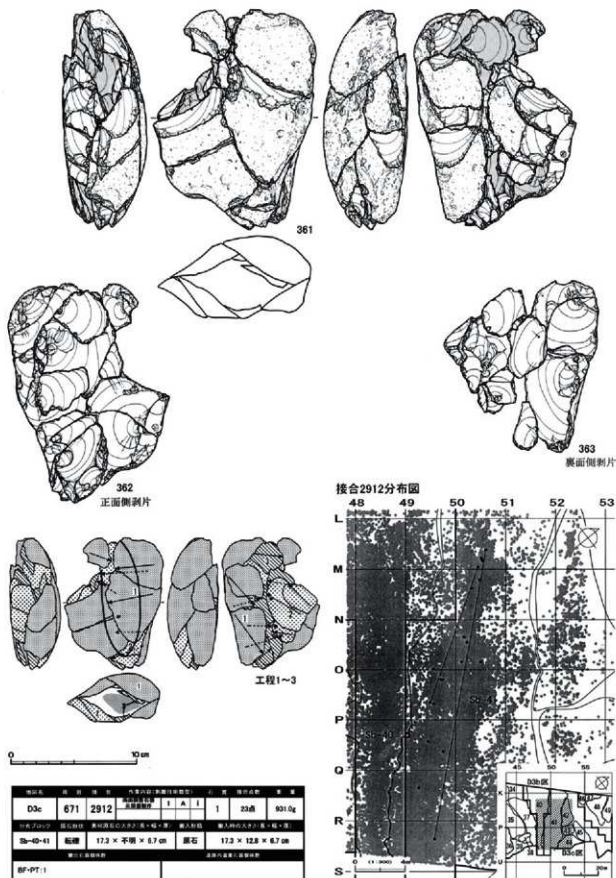
BF-PT:1

接合2911分布図



図III-475 D3c区の石器(44) 母岩670 接合2911

母岩671 接合2912



図Ⅲ-476 D3c区の石器(45) 母岩671 接合2912

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。原石平面正方形の対角線を石器長軸に設定している。工程1では大型打面で打瘤の発達する厚手の剥離を加えて、主に側面に張り出す角形状を除去する。これにより側面自然面が取り去られ外湾する側縁辺が形成される。工程2では引き続き打瘤の発達する厚手の剥離を面的に加えて自然面を除去し、器体の厚みを減少させている。工程3では小打面でリップ状の剥離開始部となり、薄手の平坦剥離が加えられる。器体は扁平化が進められ、横断面は凸レンズ状に整形されている。製作尖頭器は出土がなく、遺跡外への搬出が推測される。復元された尖頭器の大きさは、長14.0×幅7.5×厚2.7cm前後である。

分布 Sb-41のL50区からR49区にかけて分布するが、特にL~N50区にまとまりが認められる。

母岩別資料 671、接合資料 2912(図Ⅲ-476、図版 233-2)

母岩別資料671は接合資料2912および非接合剥片6点で構成され、総点数は29点、総重量は974.7gである。

素材 361は接合資料2912で、23点(21個体)が接合し、重量は931.0gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石は裏面が平坦でやや扁平である。362・363は正裏面調整剥片の腹面側を図示している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。原石長軸を石器の長軸に設定している。工程1では打瘤の発達する厚手幅広の剥離を、両側面から正裏面に加える。工程2では引き続き打瘤部の厚い大型の剥離を加えて、器体と側縁の厚みを除去している。これにより平面が木葉形、横断面が菱形の粗い両面調整器が形成される。工程3では平坦剥離に移行し、器体の扁平化を進めている。製作石器の出土はみられないが、長15.0×幅5.1×厚2.7cm前後のやや細身の尖頭器と観察される。

分布 Sb-41のL50区からR49区にかけて分布する。L・M50区およびN50・O49区周辺にまとまりが認められる。

母岩別資料 673、接合資料 2915(図Ⅲ-477、図版 234-2)

母岩別資料673は接合資料2915、折れ接合資料62036および非接合剥片21点で構成され、総点数は52点、総重量は530.2gである。

素材 364は接合資料2915で、29点(24個体)が接合し、重量は480.4gである。石質は黒曜石1で角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石は平面が長楕円形で横断面は菱形を呈する。365・366は正裏面調整剥片の腹面側を図示している。

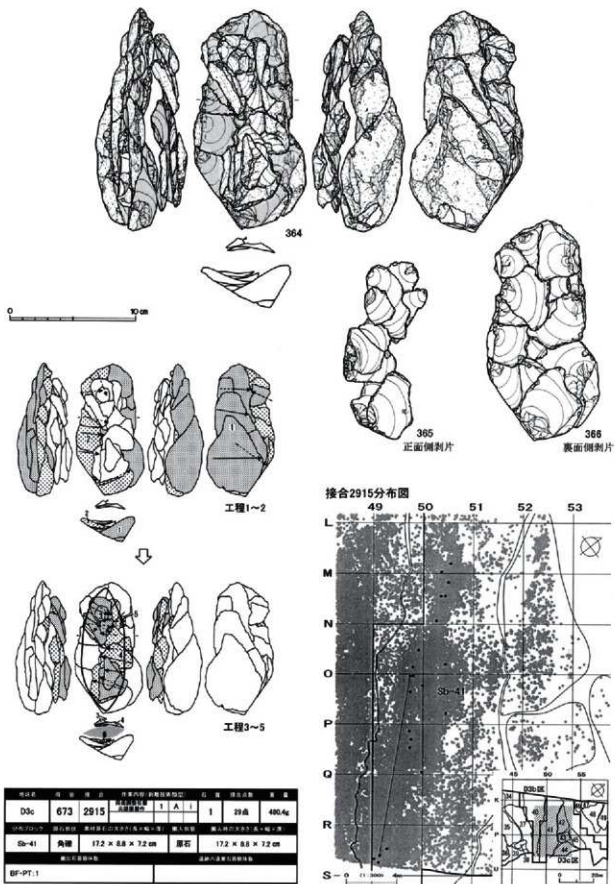
剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。原石長軸を石器の長軸に設定している。

【工程1~2】工程1~2は裏面側への剥離である。工程1は打瘤の発達する厚手・大型の剥離を左側面から連続的に加えて自然面の高い稜線を除去し、裏面を平坦に加工する。工程2は左側面に大型打面で打瘤の発達する剥離を連続的に加え、縁辺形成を行っている。

【工程3~5】工程3~4は正面側への剥離で、剥離が先行のものに比べ小型化している。工程3~4とも器体長軸を取り込む剥離により、自然面稜を除去して器体を扁平化している。工程5では細かな縁辺調整が加えられるようになり、薄手の平坦剥離で器面を平坦に加工している。製作石器の出土はみられないが、長16.4×幅6.0×厚1.8cm前後の尖頭器と観察される。

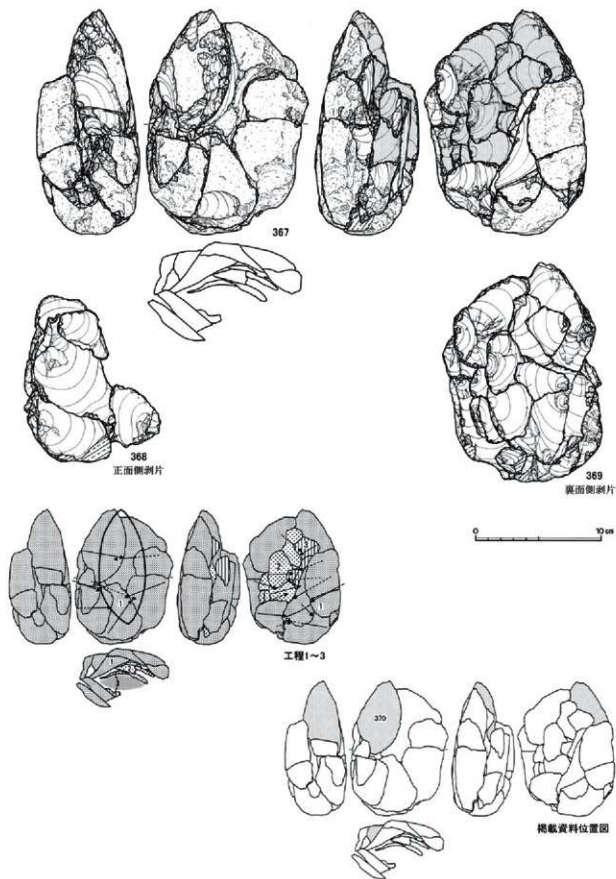
分布 Sb-41のL50区からR49区にかけての広範囲に分布する。分布はQ49区で途切れるがR49区に小規模なまとまりがみられる。

母岩673 接合2915

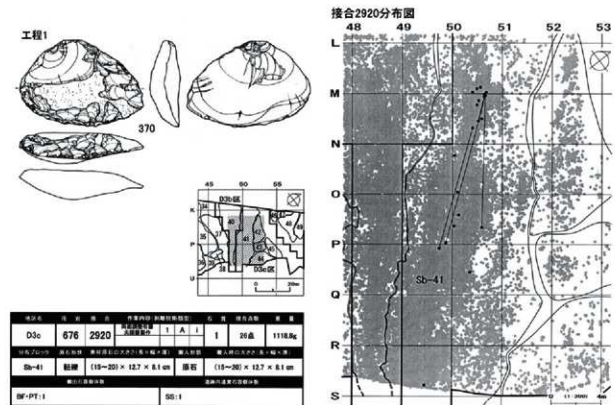


図Ⅲ-477 D3c区の石器(46) 母岩673 接合2915

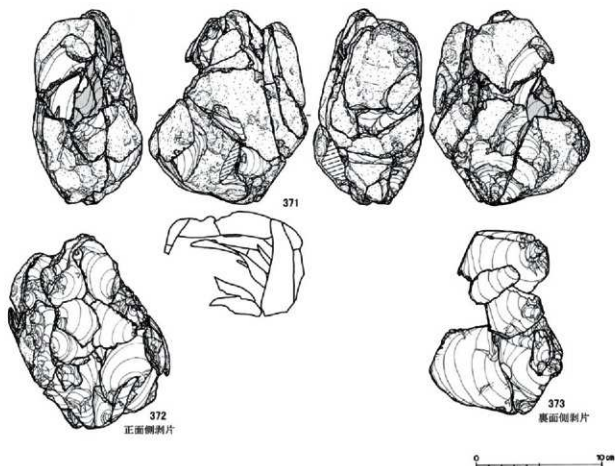
母岩676 接合2920



図Ⅲ-478 D3c区の石器(47) 母岩676 接合2920(1)



母岩677 接合2922



図Ⅲ-479 D3c区の石器(48) 母岩676 接合2920(2)、母岩677 接合2922(1)

母岩別資料 676、接合資料 2920 (図Ⅲ-478・479、図版 236-1)

母岩別資料 676 は接合資料 2920・2921 および非接合剥片 12 点で構成され、総点数は 46 点、総重量は 1,377.9 g である。

素材 367 は接合資料 2920 で、26 点 (21 個体) が接合し、重量は 1,118.8 g である。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。368・369 は正裏面調整剥片の腹面側を图示している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1A*i* 類である。但し調整剥片で削器が製作されている。工程 1 では打瘤の発達する厚手幅広の剥離を両側面から正裏面に加えて自然面を広く除去し、器体と側縁の厚さを減じている。これにより平面が木葉形、横断面が菱形の粗い両面調整体が形成される。工程 1 の剥片を素材に削器 370 が製作されている。工程 2 以降、細かな側縁の調整と縁辺への擦りが行われて調整剥片打面が小型化する。工程 2 はやや打瘤が発達する剥離で縁辺から中央にかけての厚みを除去し、主に側縁を整形する。工程 3 では打瘤の発達のない薄い平坦剥離となり、器面を平坦に整形したことが考えられる。製作石器の出土はみられないが、長 14.9 × 幅 6.3 × 厚 2.2cm 前後の尖頭器と観察される。

分布 Sb-41 の L50 区から R49 区の広範囲に分布するが、主に L・M50 区でまとまりが認められる。

母岩別資料 677、接合資料 2922 (図Ⅲ-479・480、図版 235-2)

母岩別資料 677 は接合資料 2922 および非接合剥片 4 点で構成され、総点数は 38 点、総重量は 1,100.2 g である。

素材 371 は接合資料 2922 で、34 点 (24 個体) が接合し、重量は 1,081.1 g である。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。372・373 は正裏面調整剥片の腹面側を图示している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1A*i* 類に分類される。

【工程 1~2】原石を粗削りする段階である。工程 1 では裏面から両側面に打瘤の発達する厚手の剥離を加えて自然面を除去し、やや正面側に傾く平坦面を形成する。工程 2 では側面の平坦面を打面として正裏面に分厚い大型剥離を加え、自然面と器体の厚みを大きく取り除いている。これにより粗い両面調整体が形成される。

【工程 3~6】工程 3・4 では打瘤の発達する厚手の剥離が加えられ、器体中央部の稜線や粗削り剥離面の高い稜線部を除去している。併せて側縁部が形成され、平面形も木葉形を呈す様に整えられる。工程 5 以降は細かい側縁調整と縁辺に擦りが加えられ、器体への剥離は小打面で打瘤の発達が弱いものとなる。工程 5 は工程 4 に引き続き粗削り稜線を除去して器面を平坦に加工し、工程 6 では薄型の平坦剥離に移行して器体の扁平化を進めている。製作石器の出土はみられないが、長 13.4 × 幅 5.8 × 厚 1.9cm 前後の尖頭器と観察される。また、工程 3 の剥片を素材として削器 374 が製作されている。

分布 Sb-41 の L50 区から R50 区にかけての広範囲にやや散発的に分布している。

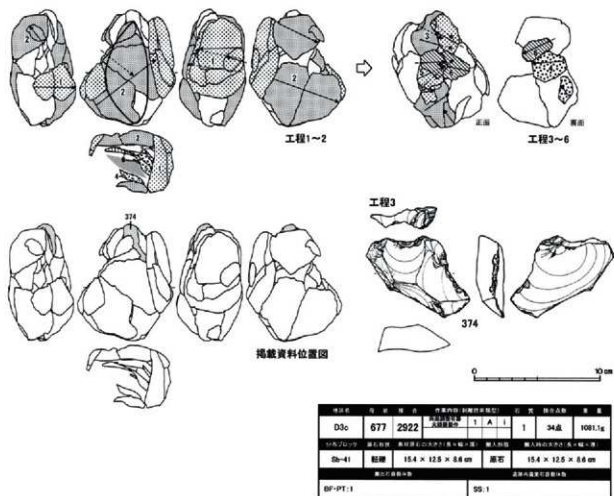
母岩別資料 683、接合資料 2929 (図Ⅲ-481、図版 236-2)

母岩別資料 683 は接合資料 2929 および非接合剥片 3 点で構成され、総点数は 20 点、総重量は 311.2 g である。

素材 375 は接合資料 2929 で、17 点 (16 個体) が接合し、重量は 301.3 g である。石質は黒曜石 1 で角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石は裏面が平坦でやや扁平な形状である。

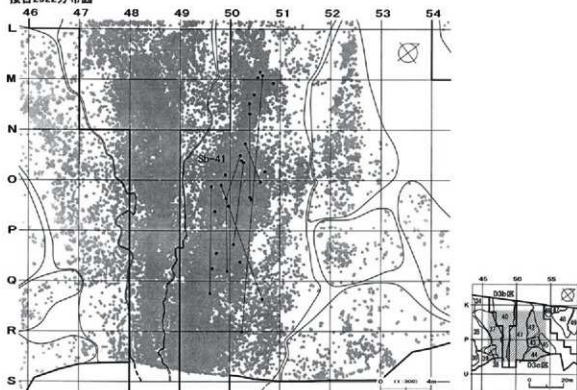
剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1A*i* 類に

2 遺物



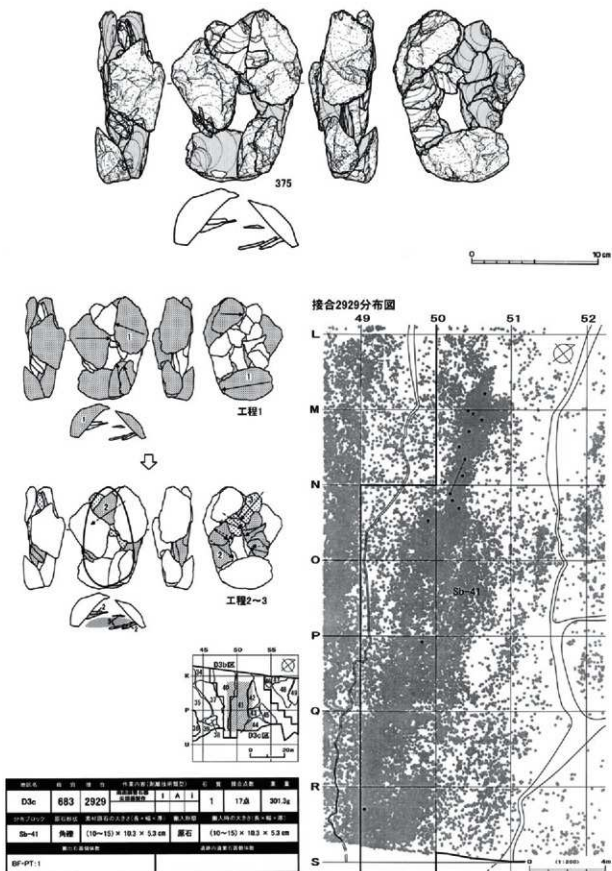
地区名	母岩	接合	母岩内径(縦横)単位(mm)	接合径(縦横)単位(mm)	接合点数	重量
D3c	677	2922	1	A	1	34点 1001.1g
11号(1)1号	母岩径(縦横)単位(mm)	接合径(縦横)単位(mm)	接合径(縦横)単位(mm)	接合径(縦横)単位(mm)	接合径(縦横)単位(mm)	接合径(縦横)単位(mm)
5b-41	縦横	15.4 × 12.5 × 8.8 cm	厚さ	15.4 × 12.5 × 8.8 cm		
備考1/母岩名		2号母岩D3c母岩				
5b-PT:1		5b:1				

接合2922分布図



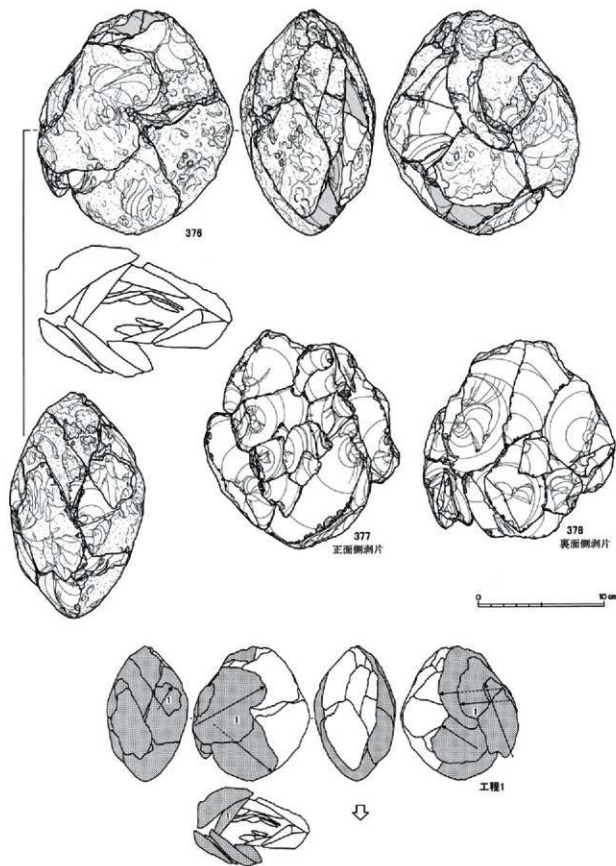
図Ⅲ-480 D3c区の石器(49) 母岩677 接合2922(2)

母岩683 接合2929

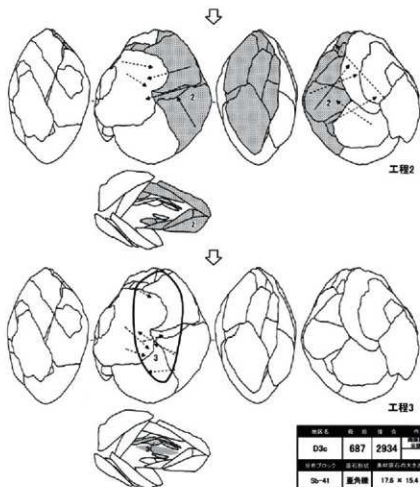


図Ⅲ-481 D3c区の石器(50) 母岩683 接合2929

母岩687 接合2934



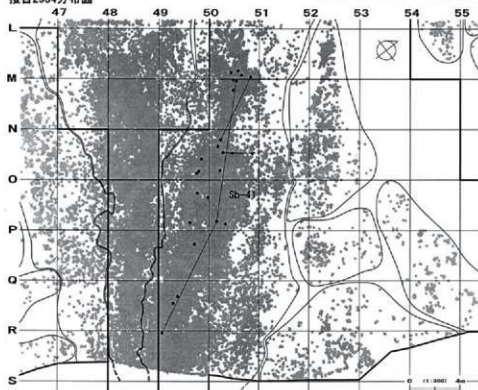
図Ⅲ-482 D3c区の石器(51) 母岩687 接合2934(1)



母岩名	種別	種名	外周寸法	内周寸法	重量	出土位置	備考
D3c	687	2934	17.6 × 15.4 × 10.2 cm	17.6 × 15.4 × 10.2 cm	2079 kg	1	33点
D3c-41	母岩類		17.6 × 15.4 × 10.2 cm				

資料提供元: 国史館 東京分館 東京府立総合資料館 東京都立総合資料館 東京都立考古学研究所 東京都立歴史民俗学館 東京都立博物館 東京都立総合資料館 東京都立総合資料館

接合2934分布図



図Ⅲ-483 D3c区の石器(52) 母岩687 接合2934(2)

分類される。14cm大の小型原石の長軸を石器長軸に設定している。

【工程1】工程1では打瘤の発達する厚手大型の剥離を正裏面に加えて自然面の除去を行い、器体の厚みを大きく減じている。

【工程2~3】工程2では打瘤の発達する剥離が側縁付近を中心に加えられ、縁辺部の形成と自然面・粗割り剥離面の除去が行われている。これにより横断面菱形の粗い両面調整体が形成される。工程3では細かな側縁調整が加えられるようになり、小打面で薄手の平坦剥離に移行する。器面の整形と器体の扁平化が進められたと観察される。製作石器の出土はみられないが、長13.1×幅7.0×厚1.3cm前後の尖頭器と観察される。

分布 Sb-41のL50区からN50区にかけてまとまって分布している。

母岩別資料687、接合資料2934(図Ⅲ-482・483、図版237-1)

母岩別資料687は接合資料2934のみで構成され、総点数は33点、総重量は2079.9gである。

素材 376は接合資料2934で、33点(24個体)が接合している。石質は黒曜石1で、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石は円形だが表面は岩屑面(蜂の巣状)と風化剥離面に覆われているため、亜角礫と認識した。

剥離工程 亜角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。工程1・2では打瘤の発達する分厚い大型剥離を両面に加えて自然面と厚さを大きく除去する。これにより粗い加工の両面調整体が形成され、横断面は厚い楕円形から凸レンズ状に、平面は円形から木葉形に整形されている。工程3では細かな側縁調整が施され、小型打面で薄体化した平坦剥離に移行する。器体の扁平化や縁辺の整形が行われたと観察される。製作石器は出土していないが、長14.6×幅6.7×厚0.9cm前後の尖頭器と観察される。

分布 Sb-41のL50区からR49区にかけての広範囲に分布する。L・M50区やN49・50区にややまとまった分布がみられる。

母岩別資料748、接合資料3207(図Ⅲ-484、図版237-2)

母岩別資料748は接合資料3207および非接合剥片1点で構成され、総点数は10点、総重量は507.9gである。

素材 379は接合資料3207で、9点(8個体)が接合し、重量は505.2gである。石質は黒曜石5で、転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。380・381は正裏面調整剥片の腹面側を図示している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。14cm大の小型原石の長軸を石器長軸に設定している。工程1・2では打瘤の発達する大型剥離を正裏面に加え、自然面と厚みを大きく除去している。工程3では左側面へ裏面打面で正面側を大きく取り込む剥離を加えて側縁を形成している。これにより横断面が変形となる粗い両面調整体が形成されている。製作石器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された両面調整石器の大きさは、長13.0×幅7.5×厚3.7cm前後である。

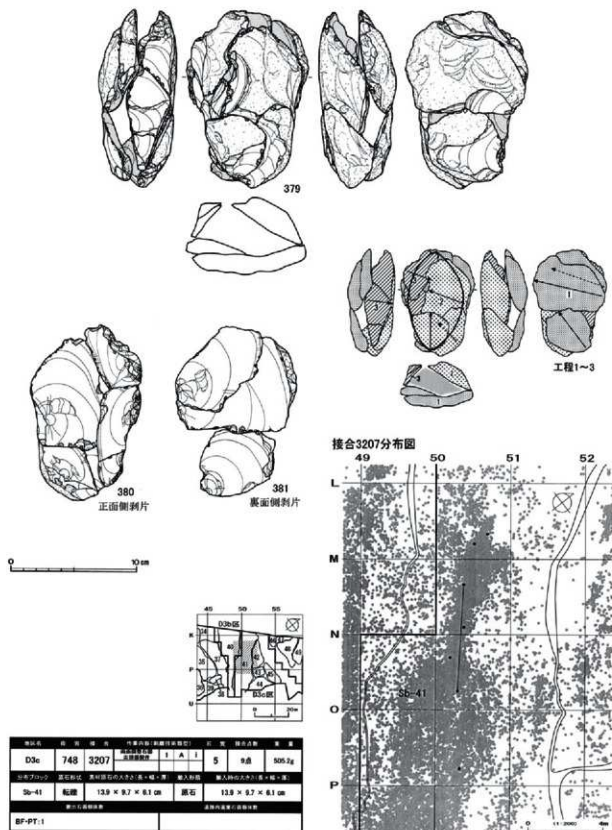
分布 Sb-41の中央部、L50区からO50区にかけて散発的に分布する。

母岩別資料721、接合資料3055(図Ⅲ-485・486、図版238)

母岩別資料721は接合資料3055~3060、折れ接合資料62070~62079および非接合剥片34点と縦長剥片1点で構成され、総点数は119点、総重量は1,389.2gである。

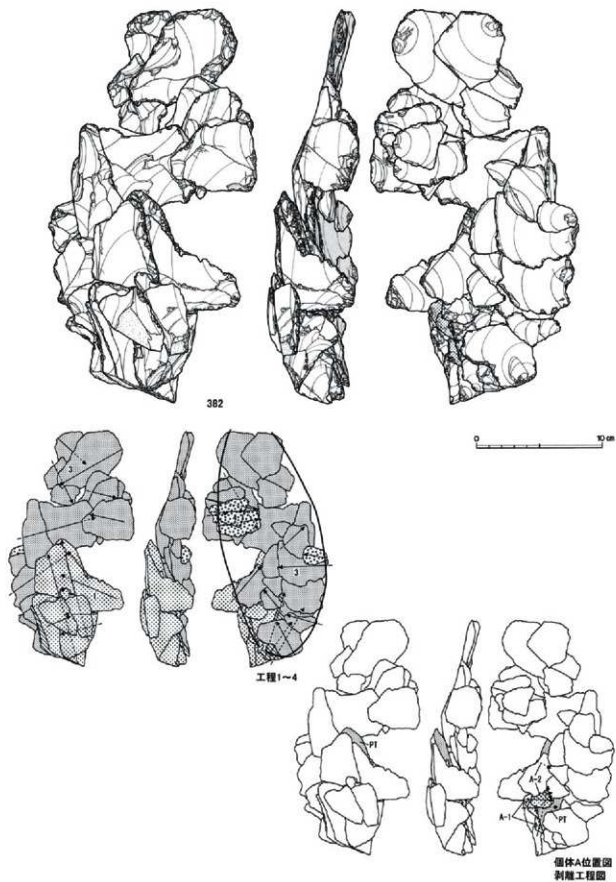
素材 382は接合資料3055で、44点(35個体)が接合し、重量は895.5gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態では遺跡内に搬入している。

母岩748 接合3207

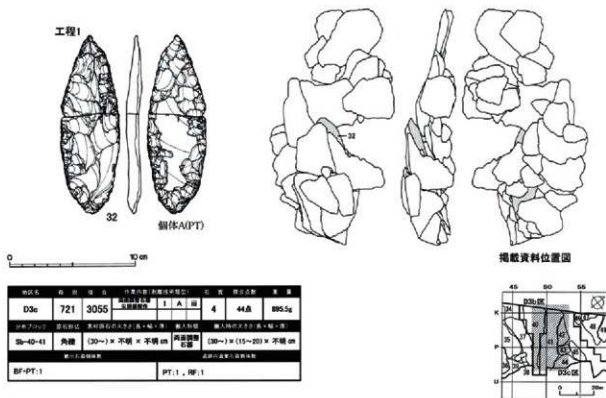


図Ⅲ-484 D3c区の石器(53) 母岩748 接合3207

母岩 721 接合 3055

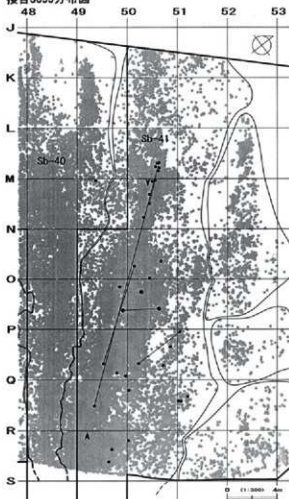


図Ⅲ-485 D3c区 of 石器 (54) 母岩 721 接合 3055 (1)

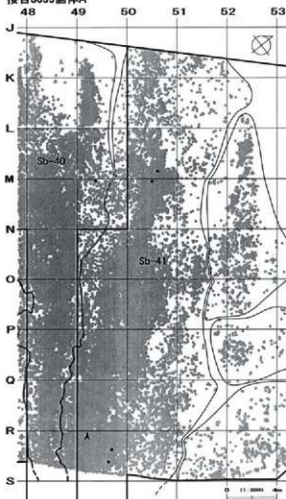


地区名	調査年度	調査区画	調査内容	調査時期	調査者	調査日	調査時間
D3c	721	3055	付帯調査(副体A(PT)の調査)	I A 期	4	44点	895.5g
調査方法	調査経緯	調査範囲(長さ×幅×高さ)	調査内容	調査時期	調査者	調査日	調査時間
掘-40-41	角掘	(30~)×不明×不明 cm	両面調査(石室)	(30~)×(15~20)×不明 cm			
調査実施場所				調査実施時期			
掘-PF:1				PT:1, 掘:1			

接合3055分布図

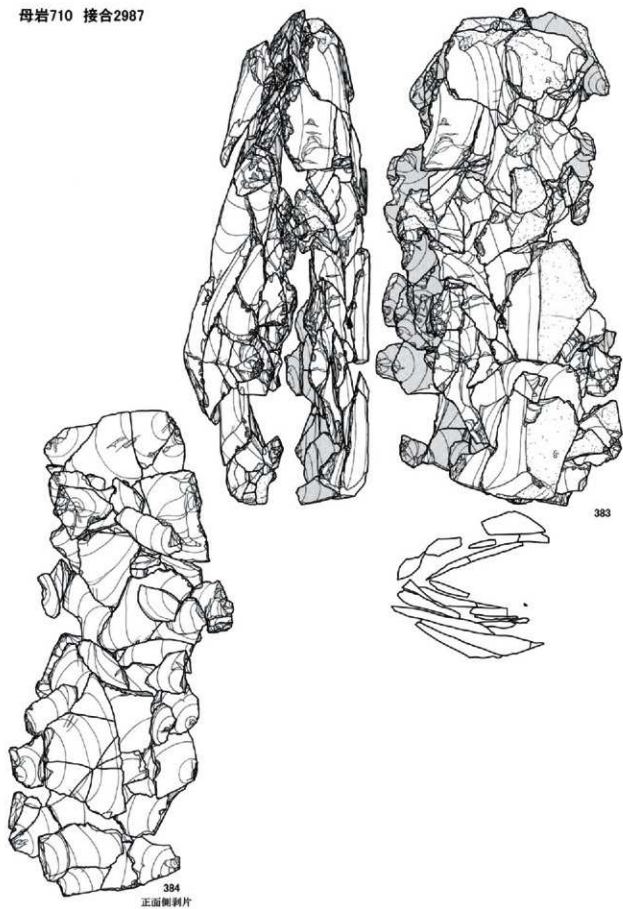


接合3055副体A

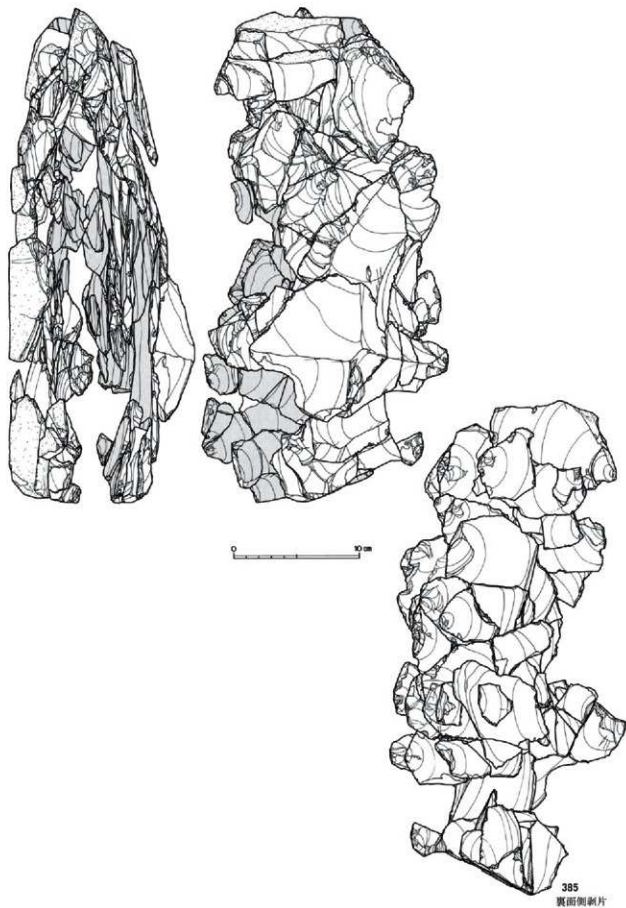


図Ⅲ-486 D3c区の石器(55) 母岩721 接合3055(2)

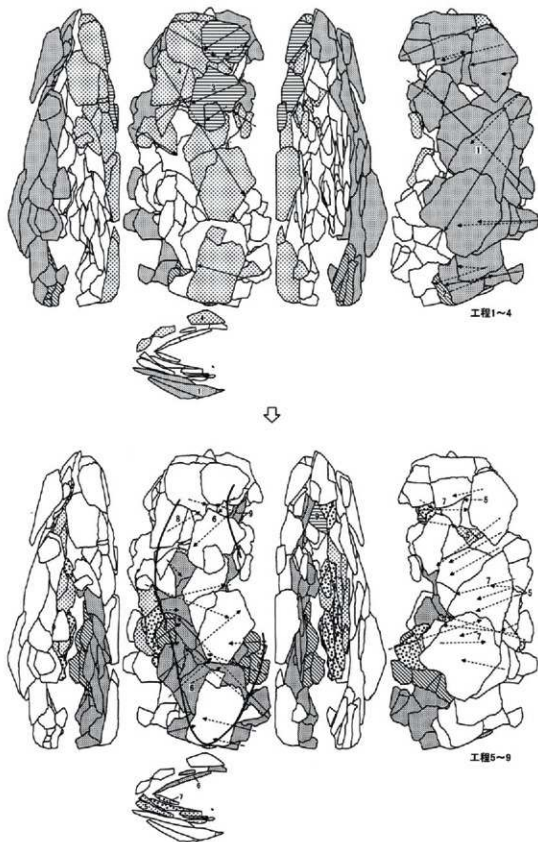
母岩710 接合2987



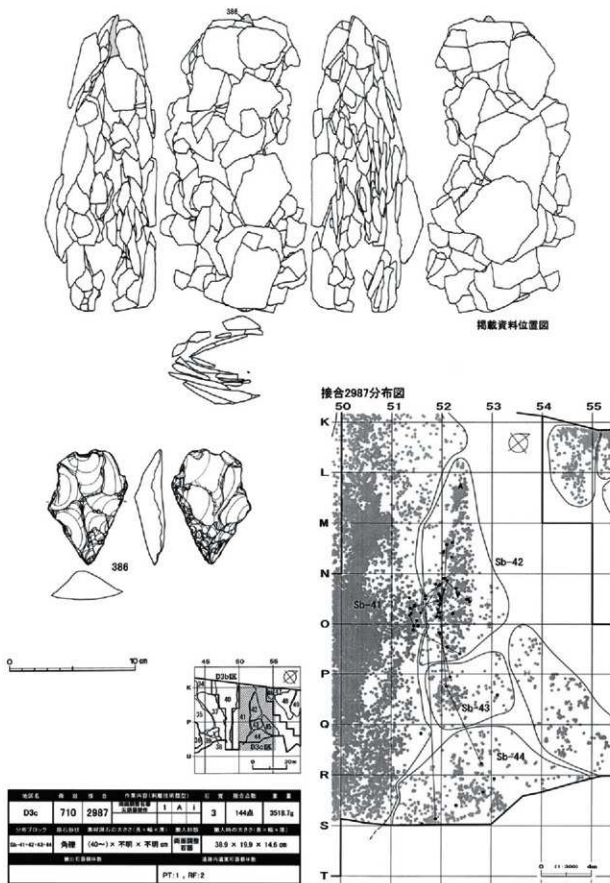
図Ⅲ-487 D3c区の石器(56) 母岩710 接合2987(1)



図Ⅲ-488 D3c区の石器(57) 母岩710 接合2987(2)



図Ⅲ-489 D3c区の石器(58) 母岩710 接合2987(3)



図Ⅲ-490 D3c区の石器(59) 母岩710 接合2987(4)

剥離工程 角礫原石から複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1AⅢ類に分類される。核素材尖頭器は30cm前後の大型、調整剥片素材尖頭器は15cm前後の小型である。

【工程1~4】工程1・2は下半部への剥離で、厚手の剥離を主に長軸方向に加えて端部の自然面と粗割り剥離面の稜線を除去している。工程1の大型剥片が個体Aの素材に使用されている。工程3では細かな側縁調整剥離が開始され、器体には打瘤の発達する幅広の剥離を面的に加えて扁平化を進め、側縁の厚みを減少させたと観察される。工程4は打瘤の発達の弱い平坦な剥離に移行し、引き続き器体の扁平化を行ったとみられる。製作石器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された両面調整石器の大きさは、長32.0×幅13.4cm前後である。

【個体A】工程1で端部から長軸方向に剥離された、長17.0×幅5.5cm前後の縦長剥片を素材とし、尖頭器を製作している。素材には縦断面形の直線的なものが選択されている。縁辺から薄い平坦剥離で加工するが球類の影響で破損している。32は製作尖頭器である。裏面に広く素材腹面を残置しているが、平面・側面形とも整った状態まで調整が進んでいる。

分布 Sb-41のL50区からR49区にかけての広範囲に分布する。L・M50区ではやや密度の高いまとまりが認められるが、N50区より南東側では散発的な分布となる。また個体AはM50区周辺とR49区に離れて分布している。

母岩別資料710、接合資料2987(図Ⅲ-487~490、図版239・240)

母岩別資料710は接合資料2987~2997および非接合剥片35点で構成され、総点数は290点、総重量は4.055.3gである。

素材 383は接合資料2987で、144点(66個体)が接合し、重量は3.518.7gである。石質は黒曜石3で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。384・385は正裏面調整剥片の腹面側を図示している。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1AⅠ類に分類される。40cmを越えるとみられる非常に大型の原石が選択されている。

【工程1~4】長軸を大きく越える非常に大型で厚手の剥離で粗割り剥離面・自然面を全面的に除去し、長軸上の厚みを大きく減じている。特に工程1・4の長さ15cmを越える大型剥離は器体を斜行する様に加えられ、広く扁平化を行っている。また、打瘤の発達する剥離により側縁の厚みが除去されている。

【工程5~8】工程5・6では打瘤が発達する幅広剥離を、器体中軸を大きく越える様に加え、広く面的に器体の扁平化を進めている。工程7・8では平坦剥離となり、器面が平坦となるような反りの少ない縦断面が直線的な剥離を加えている。また工程8では細かい側縁調整が施される。尖頭器は破損し再加工を受けた上端部個体386が接合している。器体の大半を占める本体部分は出土がなく、遺跡外へ搬出し再加工されたことが推測される。破損以前の製作尖頭器の大きさは、長38.3×幅14.6×厚4.5cm前後と復元できる。

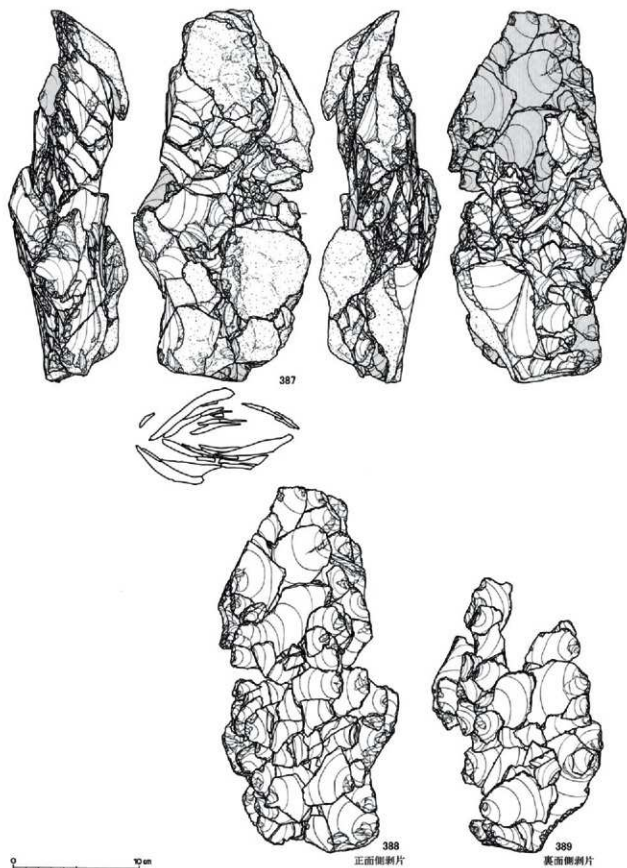
分布 Sb-41~44の広範囲に分布し、主にSb-42南東部からまとまって出土している。尖頭器386はSb-42北西部に単独で分布している。

母岩別資料723、接合資料3076(図Ⅲ-491~493、図版241)

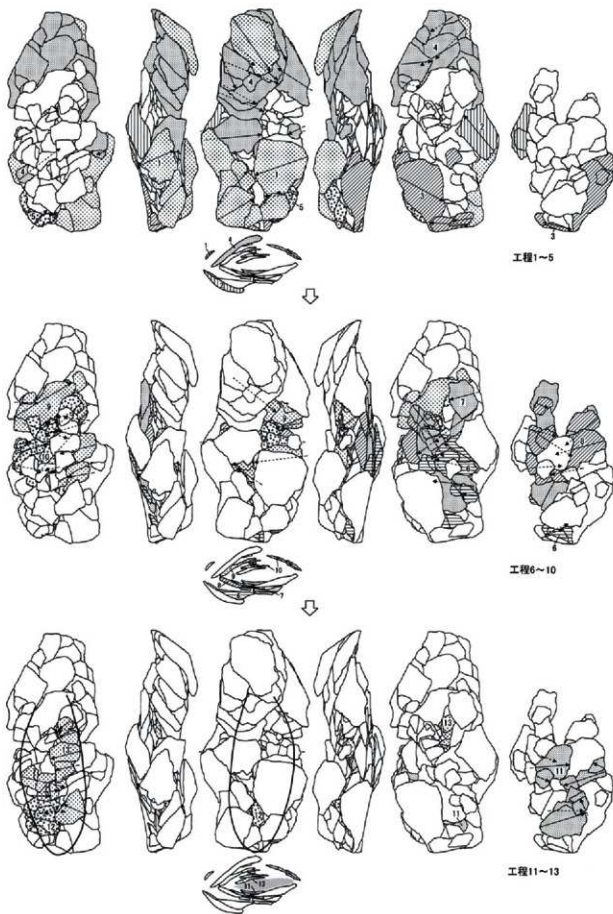
母岩別資料723は接合資料3076・3078~3080、折れ接合資料62087~62089および非接合剥片37点で構成され、総点数は188点、総重量は1.502.4gである。

素材 387は接合資料3076で、136点(90個体)が接合し、重量は1.345.5gである。石質は黒曜石4で亜角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。388・389は正裏面調整剥片の

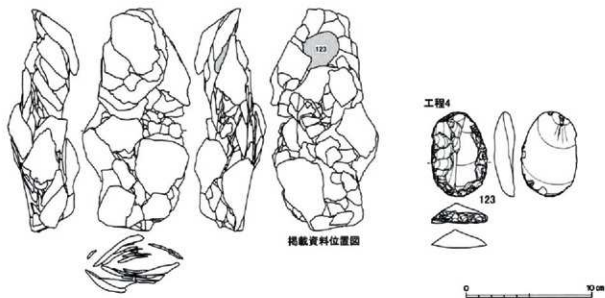
母岩723 接合3076



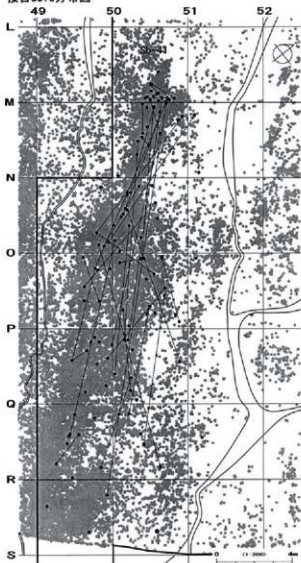
図Ⅲ-491 D3c区の石器(60) 母岩723 接合3076(1)



図Ⅲ-492 D3c区の石器(61) 母岩 723 接合 3076(2)



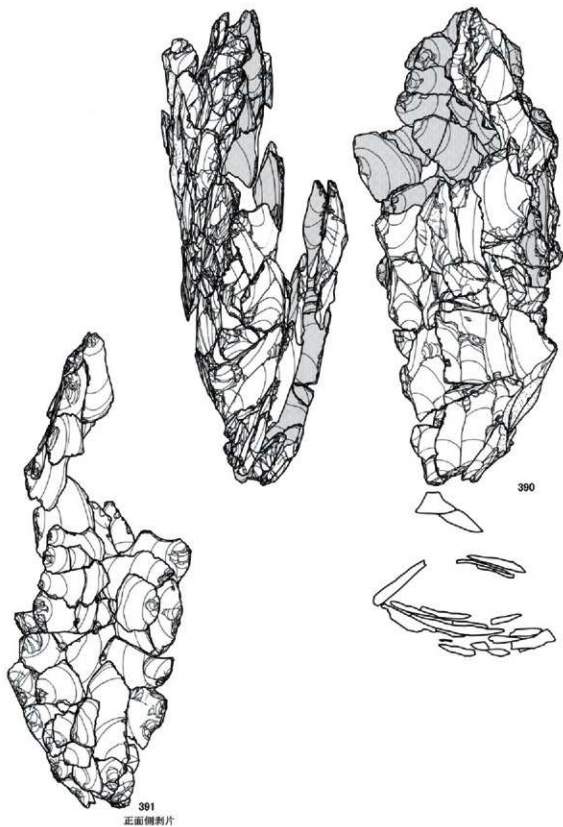
接合3076分布図



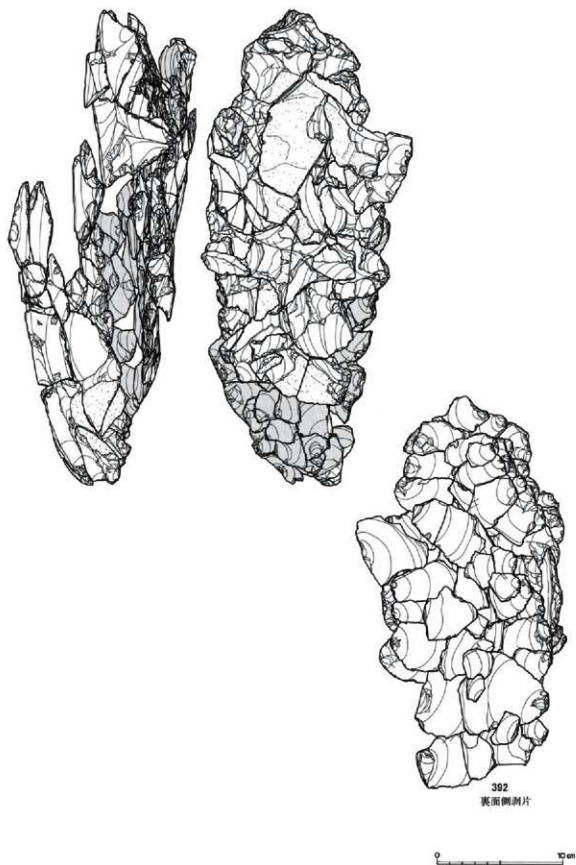
地区名	母岩番号	接合番号	作製年代(推定)	形状	用途	重量
D3c	723	3076	縄文時代	1	1	4
D3c-41		25.4 × 不明 × 不明 cm	接合部	25.4 × 14.0 × 3.8 cm		
BF-PT:1			ES:1			

図Ⅲ-493 D3c区の石器(62) 母岩723 接合3076(3)

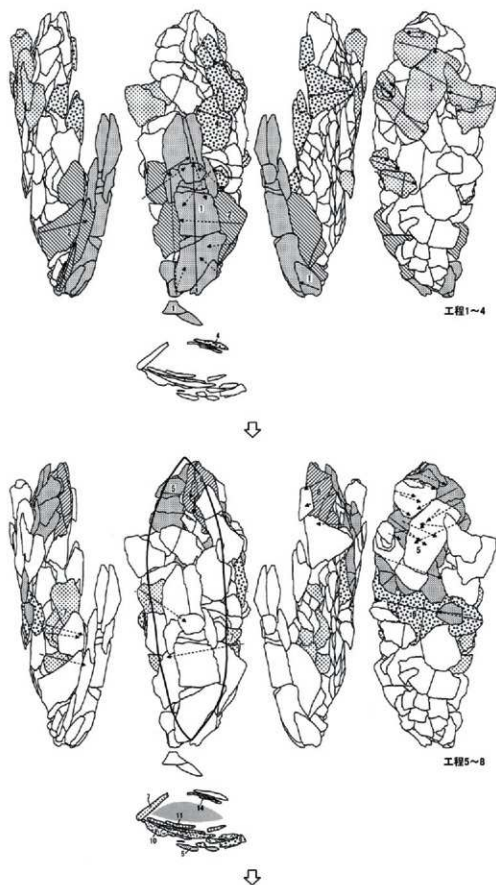
母岩727 接合3090



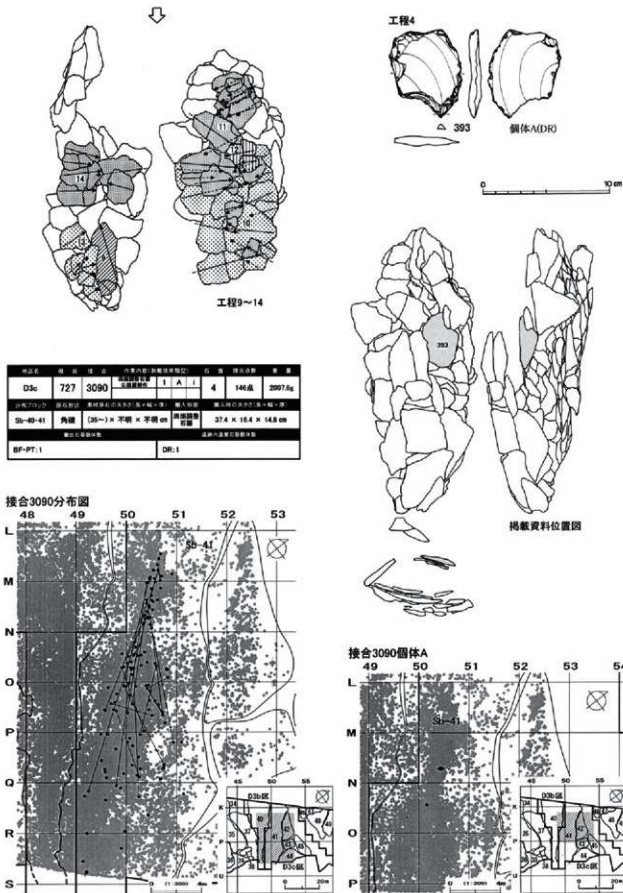
図Ⅲ-494 D3c区の石器(63) 母岩727 接合3090(1)



図Ⅲ-495 D3c区の石器(64) 母岩727 接合3090(2)

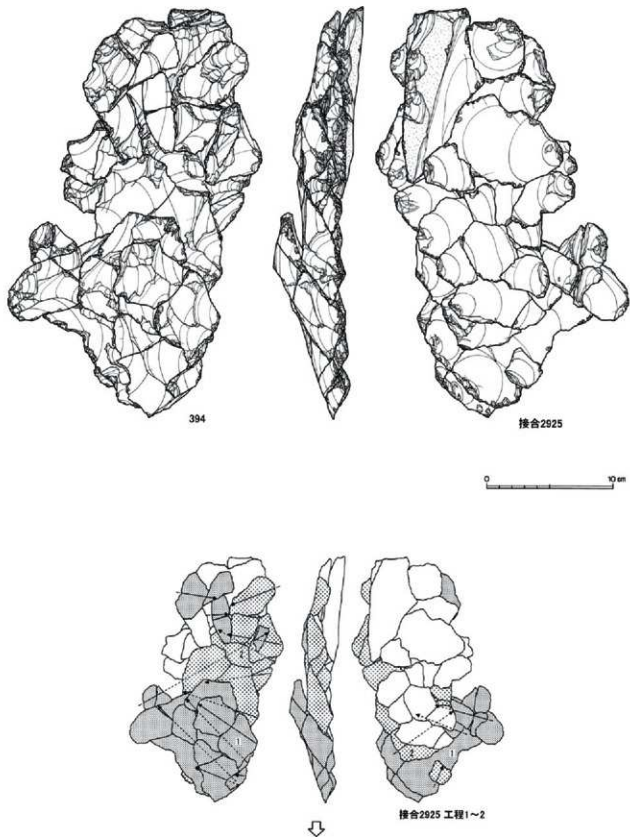


図Ⅲ-496 D3c区の石器(65) 母岩727 接合3090(3)

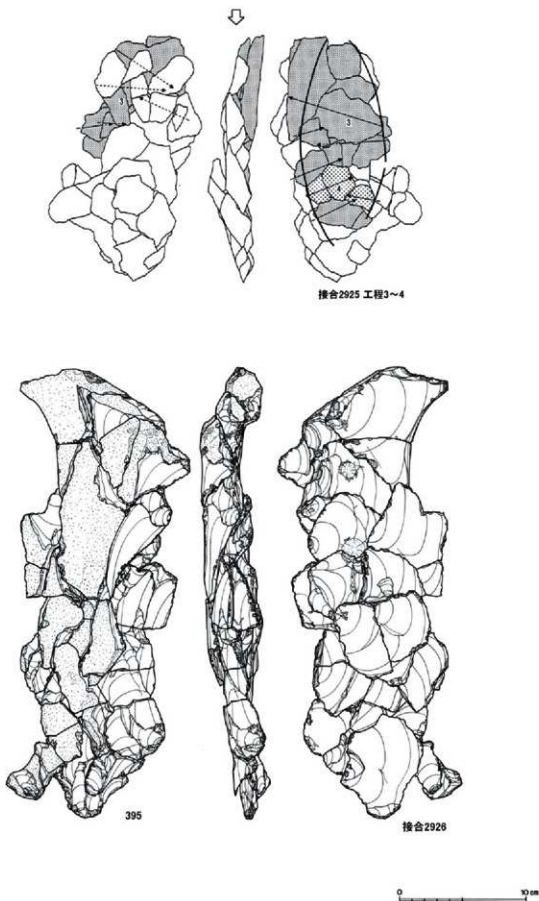


図Ⅲ-497 D3c区 of 石器 (66) 母岩 727 接合 3090 (4)

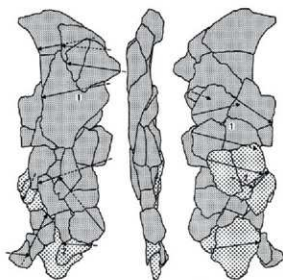
母岩680 接合2925・2926



図Ⅲ-496 D3c区の石器(67) 母岩680 接合2925・2926(1)



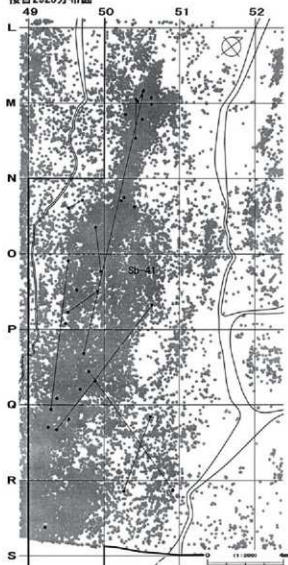
図Ⅲ-499 D3c区の石器(68) 母岩680 接合2925・2926(2)



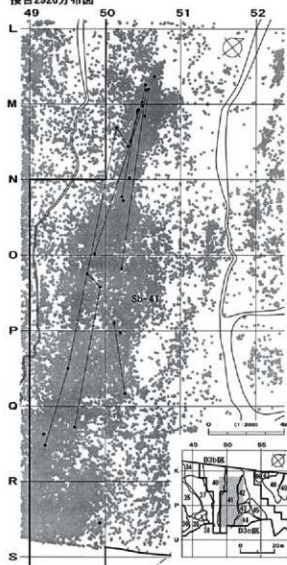
接合2926 工程1~2

検出地	期	層位	母岩(石種)	形跡(形状)	石種	検出回数	重量	
D3c	680	2925・2926		1 1 A 1 1	1	82点	2289 kg	
母岩(石種)	母岩(石種)		形跡(形状)		検出回数		重量	
D3-41	角礫	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
計							25.5 × 19.7 × 0.5~10.0cm	
調査機関				調査年度				
調査者				調査場所				

接合2925分布図



接合2926分布図



図Ⅲ-500 D3c区の石器(69) 母岩680 接合2925・2926(3)

腹面側を图示している。

剥離工程 亜角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。原石の表面形状は正面側の凹凸が激しく、ふたこぶ状となっている。

【工程1～5】打瘤の発達する厚手の剥離を加えて、自然面・粗割り剥離面の除去を行っている。正面側では上下二か所のかぶ状部分を中心に剥離が加えられ、器面が平坦となるように加工されている。また側面や下端部に残る自然面も除去され、剥離面による縁辺が形成されている。裏面右側縁中央付近にはヒンジと球顆の露出があり、これを除去する剥離が工程1～6にかけて繰り返し行われている。

工程4以降は剥離開始部がリップ状主体となり、バルブスカーや打瘤が強く発達するものは少なくなる。工程4で剥離された剥片を素材として搔器123が製作されている。

【工程6～10】工程6は裏面右側縁中央付近のヒンジ・球顆の除去と下端部を整形している。工程7～9はやや打瘤が発達する幅広剥離を正裏面へ広く面的に加え、器体の扁平化を行っている。工程10では小打面でも薄型の剥離に移行し、主に器体中央部が調整されている。

【工程11～13】薄型の平坦剥離を主体とした加工である。工程12はやや打瘤が発達する剥離が下端部に加えられて厚みを除去しており、尖鋭形への加工と理解される。工程13では中央部から下半にかけて連続的に剥離を加え、器面を平坦に整形している。製作石器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された尖頭器の大きさは、長24.0前後×幅8.6×厚1.8cmである。

分布 Sb-41のL50区からR49・50区にかけての広範囲に分布がみられる。L・M50区にはやや密な分布が認められる。

母岩別資料727、接合資料3090(図Ⅲ-494～497、図版242・243-1)

母岩別資料727は接合資料3090～3100、折れ接合資料62090～62093および非接合剥片92点で構成され、総点数は277点、総重量は2,553.1gである。

素材 390は接合資料3090で、146点(108個体)が接合し、重量は2,007.6gである。石質は黒曜石4で、角礫を素材とし、両面調整石器の状態でも遺跡内に搬入している。391・392は正裏面調整剥片の腹面側を图示している。

剥離工程 大型角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。

【工程1～4】搬入時の両面調整石器は極めて粗く打ち割った状態で、器体長軸には高い稜線が位置して三角柱様となり、厚さは14cmを超えている。工程1・2・4ではこの正面稜線を取り込む長軸方向の剥離と、分厚い横方向の大型剥離を加えて正面側の厚みを大きく除去している。工程3は平坦な裏面側への自然面除去の剥離で、打瘤の発達する幅広の剥離を主体に加えている。

【工程5～8】打瘤が発達する幅広の剥離を加えて側縁の形成と器体の扁平化を進めている。工程5・6は裏面側上半部への剥離で、側縁部の厚みを徐々に除き縁辺の整形を行っている。また工程6は逆側縁まで達する大型の剥離で器体を大きく扁平化している。工程7は左側面の粗割り剥離面を取り込むやや厚手の剥離で、側縁部の厚みを著しく減少させている。工程8は先端部への厚手の剥離で、粗割り面を除去して厚みを減じ、側面観を取収形状としている。

【工程9～14】工程10はやや打瘤の発達する幅広の剥離が加えられており、広く面的に器体の厚みを減じて扁平化を行っている。工程11・12では幅3cm程度で石器中軸に達する程度の薄型平坦剥離を広い範囲に加えており、器体の扁平化を徐々に進めている。工程9・13は下端部への剥離でやや打瘤の発達する剥離を連続的に加えて尖鋭形へと整えている。工程14は正面側中央部への薄手平坦剥離で器面を平坦に整えている。製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器

の大きさは、長 37.1 前後×幅 9.8 ×厚 2.7cmである。

分布 Sb-41 の L50区から R49区にかけての広範囲に分布する。L50区から O49・50区までは比較的分布密度は高いが、Pラインより南東側ではやや散発的となっている。

母岩別資料 680、接合資料 2925・2926(図Ⅲ-498～500、図版 244-2・図版 245-1)

母岩別資料 680 は接合資料 2925・2926、折れ接合資料 62038～62039 および非接合剥片 38 点で構成され、総点数は 124 点、総重量は 2,469.6 gである。

素材 394 は接合資料 2925、395 は接合資料 2926 である。二つ合計で 82 点(47 個体)が接合し、重量は 2,289.1 g を量る。石質は黒曜石 1 で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 大型角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Ai 類に分類される。接合 2925 と接合 2926 は自然面や剥離面の状況から正裏の関係と判断でき、大まかな位置関係を推定することができる。剥離工程は接合資料別に模式図を作成したが、大まかに次の工程にまとめることができる。

- ① 逆側縁付近まで達する幅広大型の剥離で、側面の角張った自然面や粗割り面の高い稜線などを取り込んで除去する。これにより器体の厚みが大きく減じられ、器面は平坦化する(接合 2925: 工程 1～2、接合 2926: 工程 1)。
- ② 剥離がやや平坦となる。打瘤の発達した幅広大型の剥離を広く面的に加え、側縁の整形や器体の扁平化を進めている(接合 2925: 工程 3、接合 2926: 工程 2)。
- ③ 打瘤の発達が弱い薄型の平坦剥離に移行して器面を平坦に整形する(接合 2925: 工程 4)。

製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは、長 30.0 前後×幅 11.5cmである。

分布 両接合資料とも Sb-41 の西部、L50区から Q49区にかけて主に分布する。L・M50区にややまとまった分布がみられる。

母岩別資料 709、接合資料 2983・2984(図Ⅲ-501・502、図版 243-2・図版 244-1)

母岩別資料 709 は接合資料 2983・2984・2986、折れ接合資料 62052 および非接合剥片 42 点で構成され、総点数は 98 点、総重量は 869.6 gである。

素材 396 は接合資料 2983、397 は接合資料 2984 である。二つ合計で 52 点(36 個体)が接合し、重量は 708.1 g を量る。石質は黒曜石 3 で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

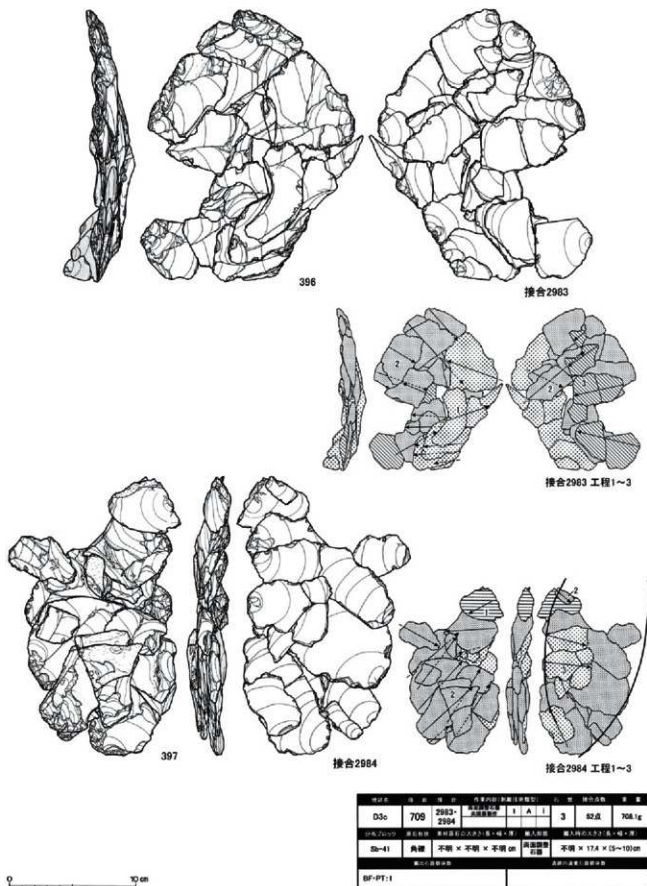
剥離工程 大型角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Ai 類に分類される。接合 2983 と接合 2984 は自然面や剥離面の状況、石質の模様から正裏の関係と判断され、大よその位置関係が推測できる。両接合資料は同じ工程内容で模式図を作成しているためまとめて記載する。工程 1 は打瘤の発達する幅広大型の剥離で、縁辺部と器体の厚みを広く除去している。縁辺部には細かな調整や擦りが観察できる。工程 2 は器体長軸を大きく越える大型の平坦剥離で、器面を平坦に整形している。工程 3 は打瘤の発達のない薄型剥離に移行する。工程 2 と工程 3 の間で器体幅が大きく減少している。製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは、長さは不明(25cm以上)、幅は 12.4cmである。

分布 Sb-41 の L50区から R49・50区にかけての広範囲に分布する。L～N50区にややまとまった分布が認められる。

母岩別資料 719、接合資料 3044・3045(図Ⅲ-502・503、図版 247)

母岩別資料 719 は接合資料 3044～3046、折れ接合資料 62069 および非接合剥片 16 点で構成され、総点数は 77 点、総重量は 684.7 gである。

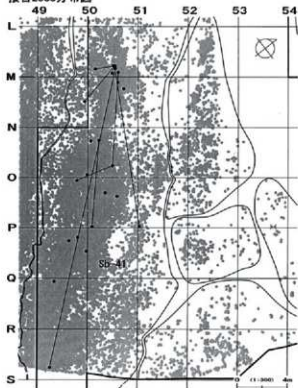
母岩709 接合2983・2984



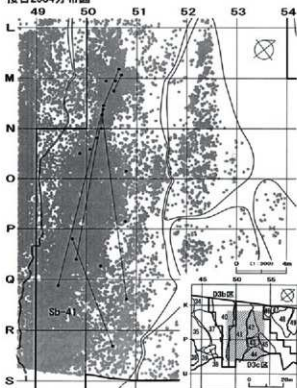
図Ⅲ-501 D3c区の石器(70) 母岩709 接合2983・2984(1)

2 遺物

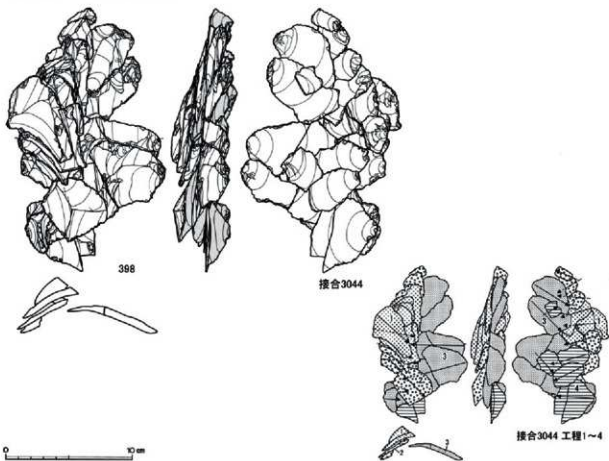
接合2983分布図



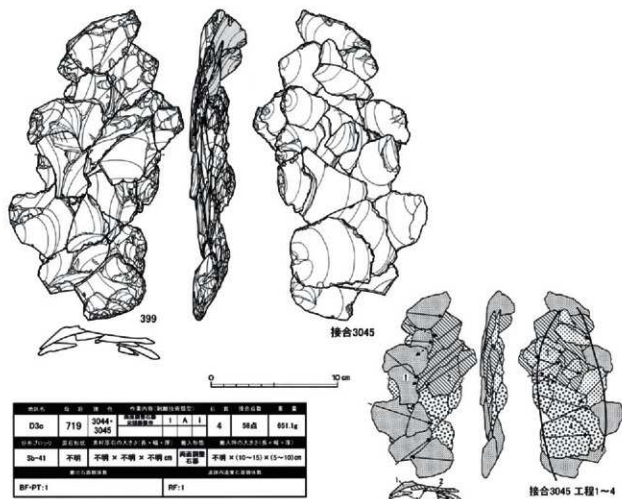
接合2984分布図



母岩719 接合3044・3045

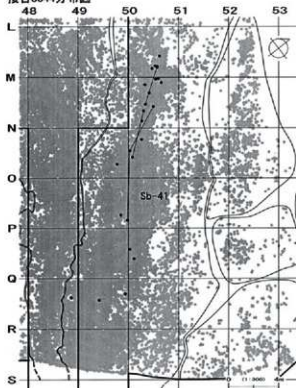


図Ⅲ-502 D3c区の石器(71) 母岩709 接合2983・2984(2)、母岩719 接合3044・3045(1)

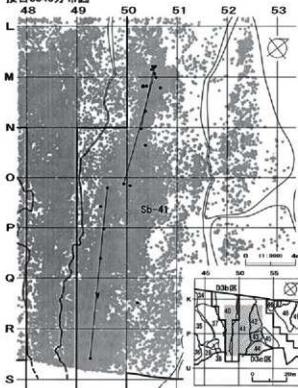


発掘区	母岩	層位	作業内容	材料	形状	用途	重量
D3c	719	3044・3045	接合	A	1	4	98点 691.1g
母岩	719	3044・3045	接合	A	1	4	98点 691.1g
Sb-41	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
BF-PT:1		RF:1					

接合3044分布図

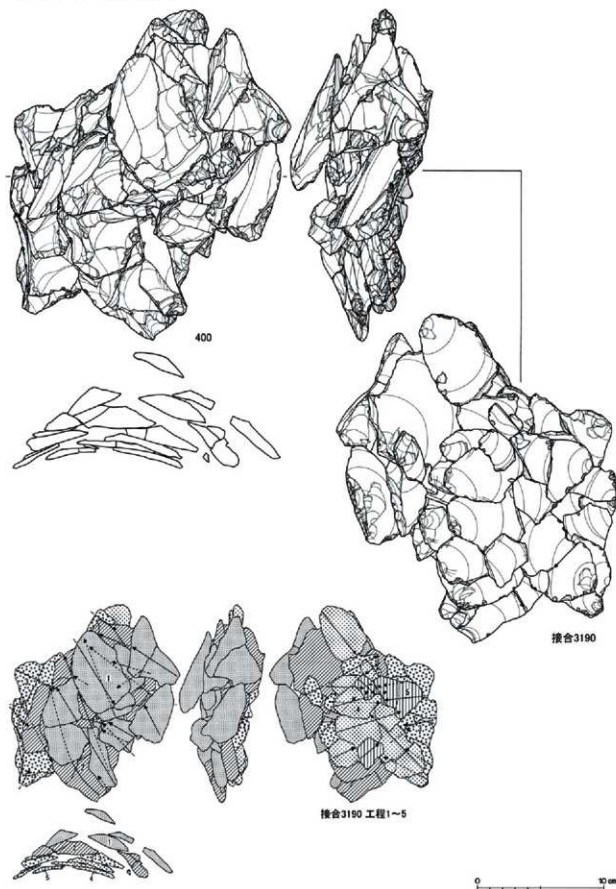


接合3045分布図

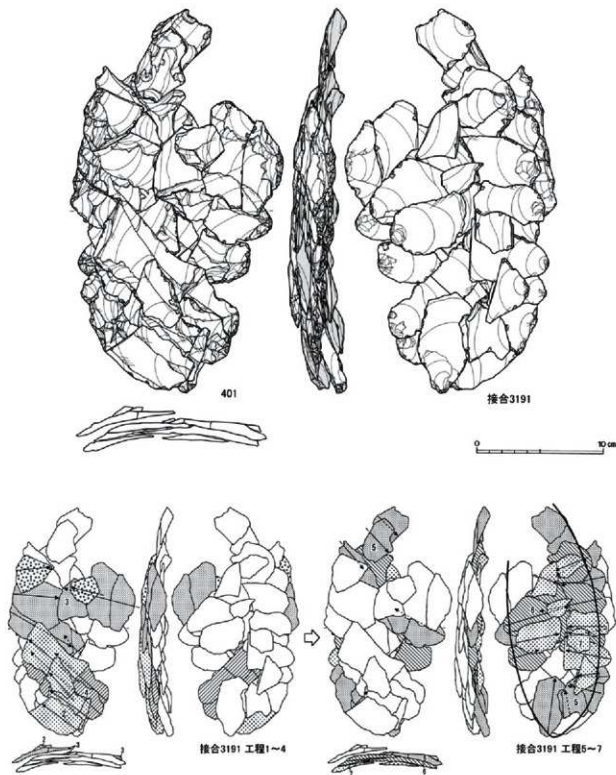


図Ⅲ-503 D3c区の石器(72) 母岩 719 接合 3044・3045(2)

母岩746 接合3190・3191



図Ⅲ-504 D3c区の石器(73) 母岩746 接合3190・3191(1)

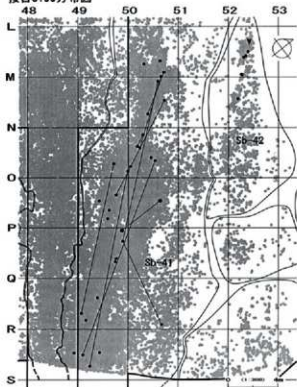


地区名	遺 跡 名	発見層	発見層の名称	土 層	出土点	重量	
D3c	746	3190・3191	1 A 1	5	111点	2333.5g	
出土層の厚	出土層の深	出土層の長さ	出土層の幅	出土層の厚	出土層の深	出土層の長さ	出土層の幅
50-60-61-62	平層	(30~) × 不明 × 不明 cm	(30~) × 21.8 × (10~15) cm				
出土層の厚			出土層の深				
RF-PT:1			RF:1, (同一編目 RF:1)				

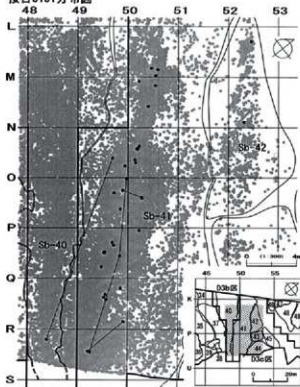
図Ⅲ-505 D3c区の石器(74) 母岩746 接合3190・3191(2)

2 遺物

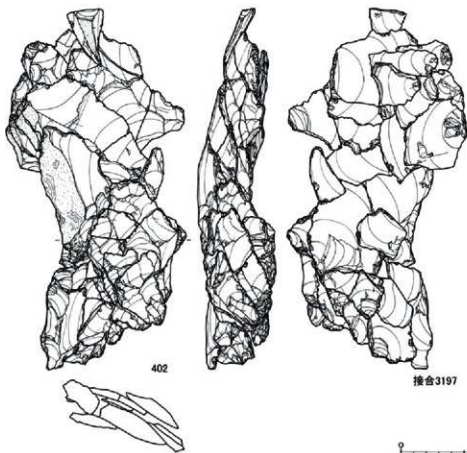
接合3190分布図



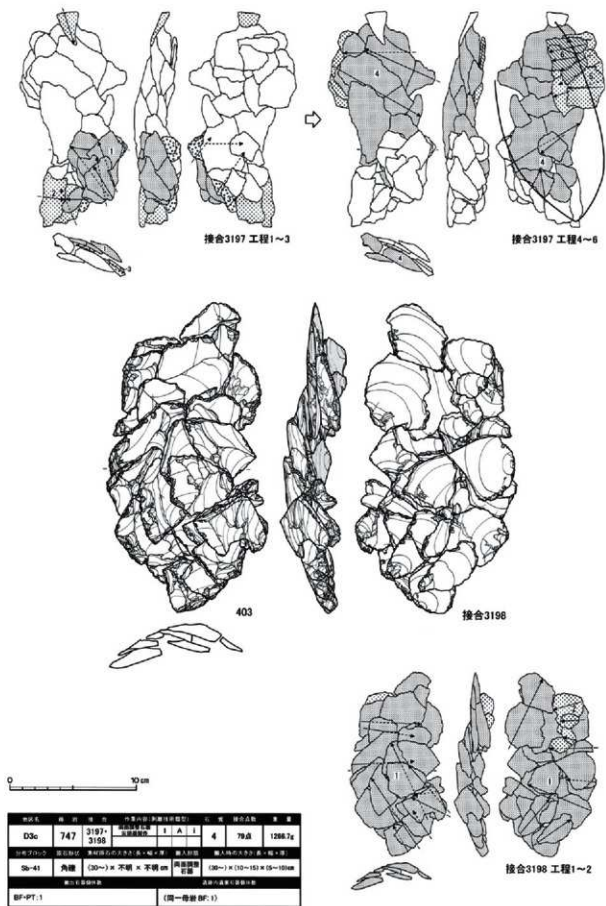
接合3191分布図



母岩747 接合3197・3198



図Ⅲ-506 D3c区の石器(75) 母岩746 接合3190・3191(3)、母岩747 接合3197・3198(1)

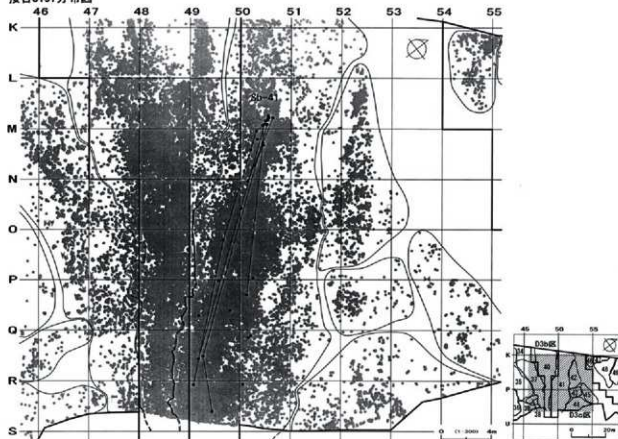


地区名	棟 号	遺 物 名	出土の層 (発掘層別記号)	出 土 位置	出土点数	重 量
D3c	747	3197・3198	中層(1) 母岩(76)	I A II	4	79点 1286.7g
出土層(1) 2	出土位置	東側壁の付いた土台の裏・幅手裏	掘削位置	掘入層(1) 2 裏・幅手裏		
50-41	内径	(30~) 径 不明 径 不明 cm	外径(最大径) 径	(30~) 径 (10~15) 径 50~100mm		
備 考 (1) 発掘状況			遺物(1) 遺物(1) 遺物(1)			
BF-PT:1			(同一発掘 BF:1)			

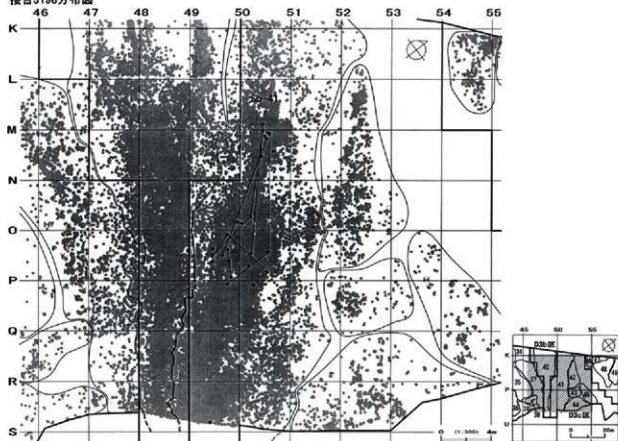
図Ⅲ-507 D3c区の石器(76) 母岩747 接合3197・3198(2)

2 遺物

接合3197分布図



接合3198分布図



図Ⅲ-508 D3c区の石器(77) 母岩747 接合3197・3198(3)

素材 398 は接合資料 3044、399 は接合資料 3045 である。二つ合計で 56 点 (42 個体) が接合し、重量は 651.1 g を量る。石質は黒曜石 4 で原石が素材と考えられ、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。素材原石の形状は不明である。

剥離工程 両面調整石器で搬入された母岩から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1A_i 類に分類される。接合 3044 と接合 3045 は剥離面の状況、石質の模様から正裏の関係を判断され、大よその位置関係が推測できる。両接合資料は同じ工程内容で模式図を作成しているため、まとめて記載する。

【工程 1・2】 やや厚手の大型剥離により粗割り面の除去を行っている。接合 3044 では長軸を取り込む厚手の剥離を連続させ、先行する粗割りの高い稜線を除去している。接合 3045 ではほぼ全面に剥離が及び、不整な稜線を取り去って平坦にしている。

【工程 3・4】 打瘤の発達した弱い平坦な大型剥離を広く面的に加えて器面を平坦化している。製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは、長さは不明 (25cm 以上)、幅は 8.8cm である。

分布 Sb-41 中央から西側に主に分布し、L-N50 区にややまとまって認められる。

母岩別資料 746、接合資料 3190・3191 (図 III-504-506、図版 245-2・図版 246)

母岩別資料 746 は接合資料 3190-3196 および非接合剥片 67 点で構成され、総点数は 197 点、総重量は 2987.5 g である。

素材 400 は接合資料 3190、401 は接合資料 3191 である。二つ合計で 111 点 (75 個体) が接合し、重量は 2,313.5 g を量る。石質は黒曜石 5 で原石素材と考えられ、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。素材原石の形状は不明である。

剥離工程 両面調整石器で搬入された母岩から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1A_i 類に分類される。接合 3190 と接合 3191 は剥離面の状況、石質の模様から正裏の関係を判断され、大よその位置関係が推測できる。剥離工程は接合資料単位で個別に記載する。

【接合 3190】 工程 1・2 では非常に大型で厚手の剥離を全面的に加えて、粗割剥離面の高まりを除去している。これにより器体の厚みが大幅に減少している。工程 3 では打瘤の発達するやや厚手の幅広剥離を主体に加え、側縁付近の角張った形状を取り除いている。工程 4・5 以降は細かい側縁調整が施されるようになり、調整剥片の打面が小型化する。薄型の平坦剥離を広く面的に加えて器体の扁平化を進めたと観察できる。

【接合 3191】 工程 1-4 ではやや打瘤の発達する大型幅広の剥離を加えて粗割り剥離面の高い稜線を除去している。工程 1 からやや粗い側縁調整剥離が加えられている。工程 1 は接合 3190 の工程 3・4 に並行すると考えられる。工程 5 以降は打瘤の発達が弱い幅広の剥離となる。工程 6・7 は湾曲の少ない剥離が主体で、器面を平坦に加工したと考えられる。

製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは、長さは不明 (30 cm 以上)、幅は 11.8cm である。

分布 Sb-41 中央から西側の L50 区から R49 区にかけて主に認められ、やや離れた Sb-42 に工程前半の剥片が分布する。

母岩別資料 747、接合資料 3197・3198 (図 III-506-508、図版 248)

母岩別資料 747 は接合資料 3197-3206 および非接合剥片 69 点で構成され、総点数は 189 点、総重量は 2,143.3 g である。

素材 402 は接合資料 3197、403 は接合資料 3198 である。二つ合計で 79 点 (44 個体) が接合し、重量

は1,266.7 gを量る。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。
剥離工程 両面調整石器で搬入された母岩から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。接合3197・3198は自然面・剥離面の状況、節理面の方向、石質の模様から正裏の関係と判断され、大よその位置関係が推測できる。剥離工程は接合資料単位で個別に記載する。

【接合3197】工程1～3はやや厚手の剥離で、器体表面の高まりや粗剥離面の高い稜線部分の除去を行っている。工程4では逆側縁まで達する厚手大型剥離が器体を斜行する様に全面的に加えられ、大きく扁平化を行っている。工程5では器体中軸に達する程度で打縮が発達する剥離となり、側縁付近を主体に厚みを減している。工程6からは細かな側縁調整が施され、小打面の薄型剥離により器面を平坦に加工している。

【接合3198】工程1では器体中軸を大きく越える厚手大型剥離が加えられ、器体を扁平に加工している。側縁にはやや粗い縁調整が認められる。接合3197の工程4に並行すると考えられる。工程2ではやや打縮が発達し器体中軸に達する程度の剥離に移行している。接合3197の工程5に並行する作業とみられる。

製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは、長さは不明(25cm以上)、幅は12.7cmである。

分布 Sb-41中央から西部、L50区からR49区にかけて分布し、特にL・M50区において高い密度で出土している。また、接合3198はM50区およびO49・50区周辺にまとまって分布している。

母岩別資料711、接合資料2998(図Ⅲ-509・510、図版250-1)

母岩別資料711は接合資料2998～3008、折れ接合資料62055～62058および非接合剥片107点で構成され、総点数は200点、総重量は1,714.8 gである。

素材 404は接合資料2998で、49点(31個体)が接合し、重量は977.3 gである。石質は黒曜石3で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 大型角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。同一母岩には逆面側の加工を示す接合資料が断片的に復元されている。搬入時の両面調整石器は15cm前後の大型剥離面で構成される非常に粗い加工を受けたもので、器体長軸には高い稜線が走っている。工程1では高い稜線部を取り込む厚手の剥離が加えられ、器面の凹凸を解消して平坦化を図っている。工程2・3では打縮の発達する幅広剥離を加え、側縁部付近の厚みの除去と器体の扁平化を進めている。工程3以降、側縁への細かな調整が入念となっている。工程4では薄型で平坦な剥離に移行し、器面を平坦に調整したと観察される。製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは、長さは不明(35cm以上)、幅は11.3cmである。

分布 Sb-41の概ね中央部、L50区からP50区にかけて主に認められ、Qラインより南東部でやや散発的な分布となっている。

母岩別資料722、接合資料3061(図Ⅲ-510・511、図版249-1)

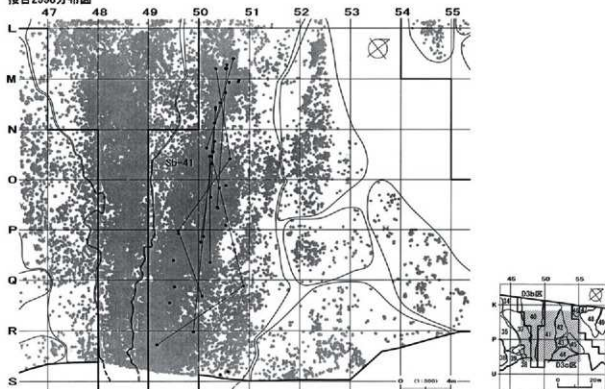
母岩別資料722は接合資料3061～3075、折れ接合資料62080～62086および非接合剥片76点で構成され、総点数は200点、総重量は1,521.6 gである。

素材 405は接合資料3061で、41点(23個体)が接合し、重量は670.2 gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

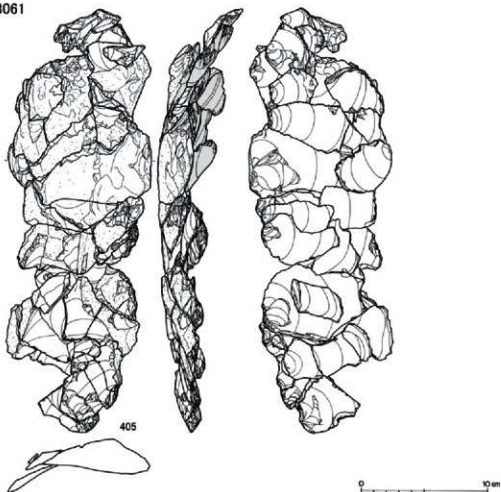
剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。同一母岩には逆面側の加工を示す接合資料が断片的に復元されている。工程1～3は逆

2 遺物

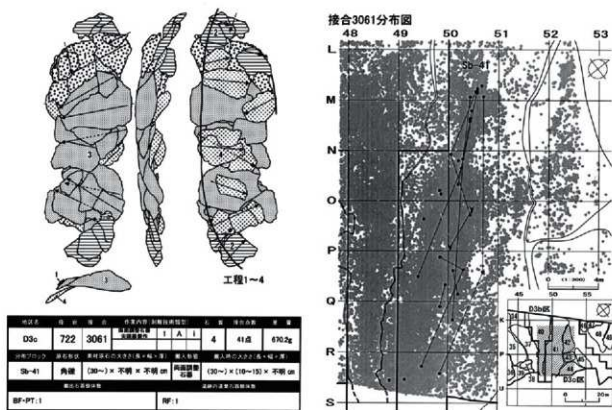
接合2998分布図



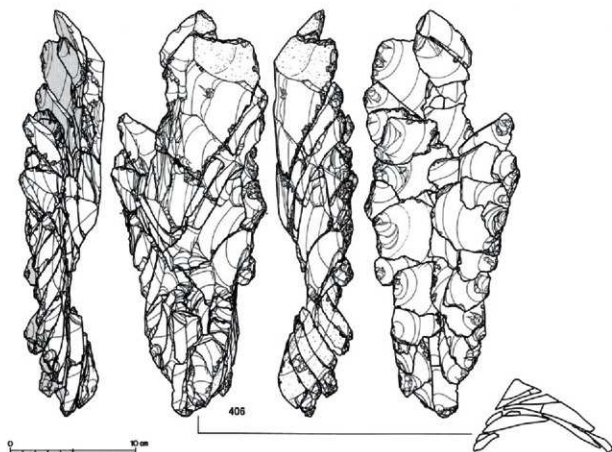
母岩722 接合3061



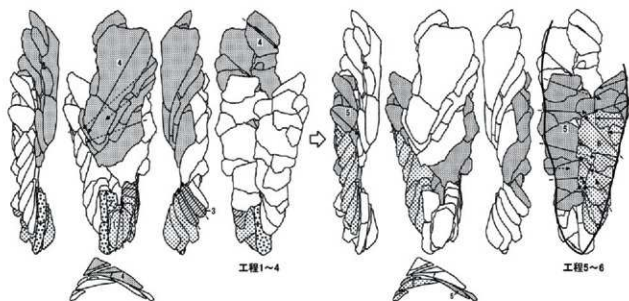
図Ⅲ-510 D3c区の石器(79) 母岩711 接合2998(2)、母岩722 接合3061(1)



母岩717 接合3024+3025



図一五11 D3c区の石器(80) 母岩722 接合3061(2)、母岩717 接合3024+3025(1)

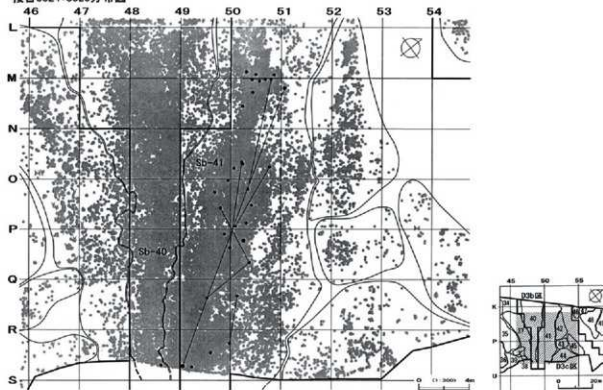


母岩名	母岩番号	接合	接合番号	片数	片の大きさ	石目	接合回数	備考
D3c	717	3024+	3025	1	A	1	4	43点 7120g
3b-40-41	片断	不明	不明	不明	不明	不明	不明	(30-) x (10~15) x 不明 cm

母岩名は推定
接合は推定

BF-PT:1

接合3024+3025分布図



図Ⅲ-512 D3c区の石器(81) 母岩717 接合3024+3025(2)

側縁付近まで達する厚手大型の剥離が全面的に加えられて自然面を除去し、器体の厚みを減じている。また剥離は著しく打瘤が発達するもので、側面を取り込んで縁辺部を形成している。工程4はやや打瘤の発達のみられる平坦な剥離で、側縁部の厚みの除去と器体の扁平化を進めたと観察される。製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは、長さは不明(35cm以上)、幅は10.0cm前後である。

分布 Sb-41のL50区からR49区にかけて分布し、L・M50区にまとまる以外は散発的な分布である。

母岩別資料717、接合資料3024 + 3025(図Ⅲ-511・512、図版249-2)

母岩別資料717は接合資料3024-3034、折れ接合資料62062-62064および非接合剥片41点と縦長剥片1点で構成され、総点数は118点、総重量は1,190.7gである。

素材 406は接合資料3024+3025で、43点(29個体)が接合し、重量は712.0gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態では遺跡内に搬入している。接合3024と接合3025は直接の接合関係は確認できていないが、自然面と剥離面の状況から位置関係を断定することが可能なため、復元組み立てを行い図示した。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。搬入時両面調整石器の正面は粗削面の高い稜線と器体上下部に高まりを有す凹凸形状となっている。工程1-4ではこの上下の高まり部分を取り込む厚手の剥離を長軸方向から斜方向に加えて凹凸を解消し、器面を平坦化している。工程5・6では打瘤の発達した弱い器体中軸に達する程度の平坦な剥離を加え、器面を緩やかな湾曲形状に整形している。剥離は右側縁を上から下へ、左側縁側に移り下から上へ、連続的に整然と加えられている。製作尖頭器は出土がなく遺跡外への搬出が推測される。復元された石器の大きさは、長さは不明(30cm以上)、幅は11.2cmである。

分布 Sb-41のL50区からR49区に主に分布し、L・M50区やN-P50区周辺にまとまりが認められる。

尖頭器・両面調整石器製作母岩・写真図版掲載資料(図Ⅲ-513-517、図版250-2-図版256)

母岩別資料665、接合資料2902(図Ⅲ-513、図版250-2)

母岩別資料665は接合資料2902・2903、折れ接合資料62249および非接合剥片4点で構成され、総点数は36点、総重量は1,219.1gである。

素材 440は接合資料2902で、27点(25個体)が接合し、重量は998.7gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態では遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 原石を半割し、2個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiv類に分類される。半割後の素材の大きさは長11.5×幅15.0×厚5.0cm前後である。自然面側には分厚い剥離を加えて厚みを除去し、分割面側には打瘤部が厚く末端部が薄い縦断面三角形の剥離が施されて側縁部を形成している。その後厚手の平坦剥離に移行している。両個体とも製作石器の出土はないが、長10×幅7.0×厚3.5cm前後の両面調整石器を製作したと観察される。

分布 Sb-41の広い範囲に散発的な分布が認められる。

母岩別資料672、接合資料2913(図Ⅲ-513、図版251)

母岩別資料672は接合資料2913・2914および非接合剥片7点で構成され、総点数は28点、総重量は605.5gである。

素材 441は接合資料2913で、19点(17個体)が接合し、重量は554.6gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態では遺跡内に搬入している。442・443は正裏面調整剥片の裏面側を掲載している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A*i*類に分類される。

作業は大きく以下の段階を踏んでいる。①自然面除去の剥離で、左右側面から正裏面に大型打面で打瘤の発達する厚手の剥離を加えて粗く両面を加工する。②やや薄手となった打瘤の発達する幅広の剥離を加えて側縁を形成する。③細かな側縁調整が施されるようになり、小打面で薄型の平坦剥離に移行して器面を平坦に加工する。

製作石器の出土はみられないが、長12.5×幅8.0×厚2.0cm前後の両面調整石器と観察される。

分布 主にSb-41西部のL50区からR49区にかけて分布し、作業②の剥片がP49区以南にまとまる。また作業③の剥片がSb-42に離れて出土している。

母岩別資料 674、接合資料 2916 (図Ⅲ-513、図版 252)

母岩別資料 674 は接合資料 2916、折れ接合資料 62037 および非接合剥片 13 点で構成され、総点数は 34 点、総重量は 1,647.3 g である。

素材 447 は接合資料 2916 で、19 点 (15 個体) が接合し、重量は 1,518.1 g である。石質は黒曜石 1 で、転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。448・449 は正裏面調整剥片の腹面側を掲載している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A*i*類に分類される。平面楕円形原石の長軸を石器長軸に設定している。

作業は大きく以下の手順で進められている。①自然面除去の剥離で、左右側面から正裏面に大型打面で打瘤の発達する厚手の剥離を加えて粗く両面を加工する。②やや薄手で打瘤の発達する幅広の剥離を加えて側縁を形成する。同一母岩中の非接合剥片に薄手で平坦な剥片が認められ、器体を薄く加工する作業が後続したと推測できる。

製作石器の出土はみられないが、長18.0×幅7.0×厚3.0cm以下の両面調整石器と観察される。

分布 Sb-41の中央から西部、L50区からR49区にかけて散発的に分布する。

母岩別資料 678、接合資料 2923 (図Ⅲ-514、図版 251)

母岩別資料 678 は接合資料 2923 および非接合剥片 8 点で構成され、総点数は 30 点、総重量は 953.0 g である。

素材 444 は接合資料 2923 で、22 点 (15 個体) が接合し、重量は 920.5 g である。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。445・446 は正裏面調整剥片の腹面側を掲載している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A*i*類に分類される。

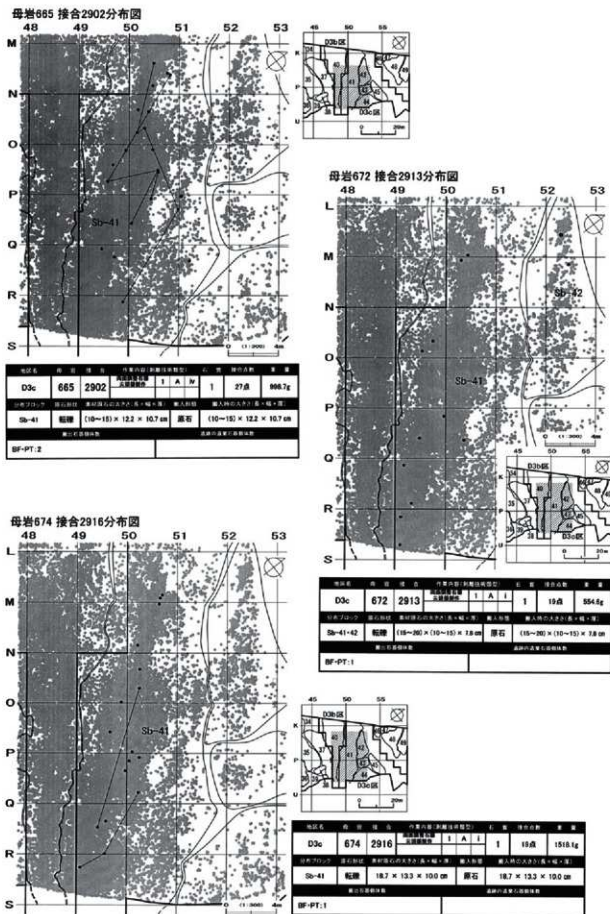
作業は大きく以下の手順で進められている。①自然面除去の剥離で、左右側面から正裏面に大型打面で打瘤の発達する厚手の剥離を加えて粗く両面を加工する。裏面側は逆側縁まで達する大型剥離が器体を斜行する様に加えられ、器体の厚みを大きく減じている。②やや薄手となった打瘤の発達する幅広の剥離を加えて側縁を形成する。③細かな側縁調整が施されるようになり、小打面で薄型の平坦剥離に移行して器面を平坦に加工する。

製作石器の出土はみられないが、長18.0×幅8.5×厚2.0cm前後の両面調整石器と観察される。

分布 Sb-42の北西部L52区と南東部N51・52区に分かれて分布している。

母岩別資料 685、接合資料 2932 (図Ⅲ-514、図版 253-1)

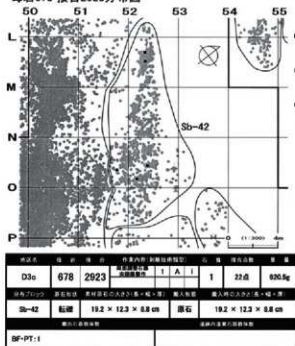
母岩別資料 685 は接合資料 2932 および非接合剥片 9 点で構成され、総点数は 35 点、総重量は



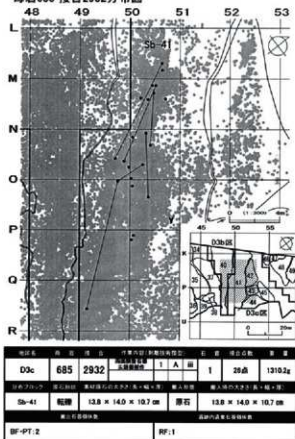
図Ⅲ-513 D3c区の石器(82) 尖頭器・両面調整石器関連写真掲載資料(1)

2 遺物

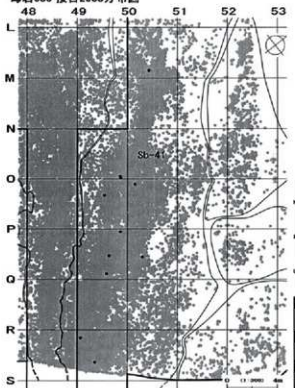
母岩678 接合2923分布図



母岩685 接合2932分布図



母岩686 接合2933分布図



図Ⅲ-514 D3c区の石器(83) 尖頭器・両面調整石器関連写真掲載資料(2)

1,339.6 gである。

素材 453は接合資料2932で、26点(19個体)が接合し、重量は1,310.2 gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石は分厚く、横断面は三角形を呈す。

剥離工程 転礫原石を分割して複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。原石の厚みを除く分厚い剥離が片面側へ集中的に加えられている。なお454は下記した②以降の工程の接合状態である。

作業は大きく以下の手順で進められる。①正面側へ厚手大型の剥離を加えて自然面を除去する。平坦な裏面側へは打瘤部が厚く末端が薄い縦断面三角形の剥離を両側面から加え、石器側縁を形成している。②器体の厚みを大きく減じるため、正面側頂部を取り込む分厚い剥離が裏面や側面から連続して加えられる。剥離が進行し、横断面が菱形を呈する粗い両面調整石器が形成される。また、この作業で生じた剥片を素材に両面調整石器が製作されている。剥片個体の製作石器は欠落し調整剥片のみが接合している。

核素材製作石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。石器は長12.5×幅5.0×厚2.5cm前後の両面調整石器と観察される。

分布 Sb-41の中央部L50区からN49・50区に主にまとまって分布している。

母岩別資料686、接合資料2933(図III-514、図版252)

母岩別資料686は接合資料2933および非接合剥片4点で構成され、総点数は19点、総重量は696.5 gである。

素材 450は接合資料2933で15点(15個体)が接合し、重量は689.9 gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石を粗割りした状態で遺跡内に搬入している。451・452は正裏面調整剥片の腹面側を掲載している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。

作業は大きく以下の手順で進められている。①裏面の粗割り剥離面を打面として、正面側に大型打面で打瘤の発達する分厚い自然面除去の剥離が両側から加えられる。これにより器体の厚みが大幅に減じられて横断面は菱形に整形される。また、器体幅を取り除き平面を木葉形に整えている。②器体中軸を取り込む平坦な剥離に移行する。側縁縁辺には細かな調整剥離が加えられ剥片は小打面となる。これにより粗割り剥離面を取り除いて器体を扁平化し、横断面は凸レンズ状に整形されている。

核素材製作石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。石器は長12.5×幅5.0×厚1.5cm前後の両面調整石器と観察される。

分布 Sb-41のL50区からR49区にかけてやや散発的に分布している。

母岩別資料690、接合資料2939(図III-515、図版253-2)

母岩別資料690は接合資料2939および非接合剥片11点で構成され、総点数は27点、総重量は1,336.7 gである。

素材 455は接合資料2939で16点(11個体)が接合し、重量は1,116.7 gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。456・457は正裏面調整剥片の腹面側を掲載している。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。素材原石の平面は概ね正方形を呈し、その対角線を石器長軸に設定している。

作業は大きく以下の手順で進められている。①自然面除去の剥離で、左右側面から正裏面に大型

打面で打瘤の発達する厚手の剥離を加え、粗く両面を加工する。これにより器体の厚みが大幅に減じられて横断面は菱形に整形される。②器体中軸を取り込むやや平坦化した剥離を加えて器体を扁平化している。大型打面で打瘤が発達するものが含まれ、器体幅や側縁部の厚みを減少させている。

製作石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。石器は長14.0×幅10.0×厚5.0cm前後の両面調整石器で、厚みを残した粗い加工段階で作業を終了したと観察される。

分布 Sb-41の広範囲から出土するが、L・M50区のみとまりとO50区以南のやや散発的な分布が認められる。

母岩別資料716、接合資料3019(図Ⅲ-515、図版255-1)

母岩別資料716は接合資料3019～3023、折れ接合資料62061および非接合剥片32点で構成され、総点数は119点、総重量は9526gである。

素材 462は接合資料3019で53点(39個体)が接合し、重量は533.2gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。463・464は正裏面調整剥片の腹面側を掲載している。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A*i*類に分類される。両面調整石器は自然面や粗割り剥離面が残されたやや粗い加工の状態での搬入されている。

作業は大きく以下の手順で進められている。①自然面と粗割面の高い稜線を除去する作業で、石器中軸を取り込む大型の剥離が主体である。側縁には細かな調整が加えられ、剥片打面は小型である。②やや打瘤の発達する幅広の平坦な剥離で側縁部が薄くなる様に調整している。③打瘤の発達する弱い薄型平坦剥離で器体を扁平に加工している。

製作石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。石器は長さが不明で、幅10.0×厚2.5cm前後の両面調整石器と観察される。

分布 Sb-41の広範囲に分布する。

母岩別資料718、接合資料3035(図Ⅲ-516、図版255-2)

母岩別資料718は接合資料3035～3043、折れ接合資料62065～62068および非接合剥片47点と縦長剥片1点で構成され、総点数は124点、総重量は798.0gである。

素材 465は接合資料3035で35点(22個体)が接合し、重量は311.3gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態での搬入している。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A*i*類に分類される。両面調整石器は、自然面や粗割り剥離面が残されたやや粗い加工の状態での搬入されている。打瘤の発達する厚手大型の剥離から開始され、自然面や粗割剥離面を除去している。その後、打瘤の発達が弱いリップ状の剥離開始部となる、平坦な剥離に移行している。製作石器は幅8cm前後の細長い尖頭器と推測される。

分布 Sb-41の西部にやや散発的に分布する。遺物はP49区以南からやや多く出土している。

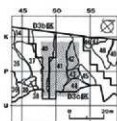
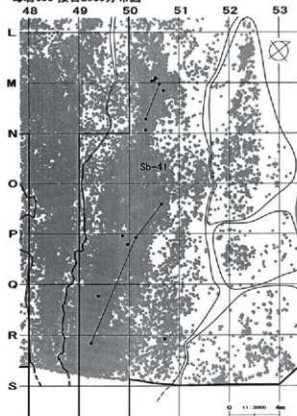
母岩別資料749、接合資料3208(図Ⅲ-516、図版256-1)

母岩別資料749は接合資料3208・3209および非接合剥片4点で構成され、総点数は14点、総重量は689.7gである。

素材 466は接合資料3208で8点(5個体)が接合し、重量は589.6gである。石質は黒曜石5で、転礫から剥離された剥片を素材とし、剥片の状態での搬入したとみられる。

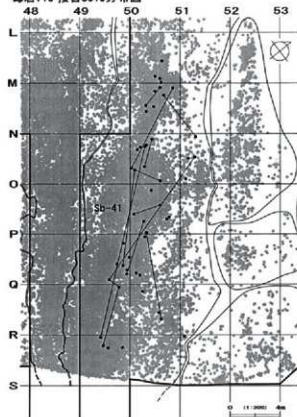
剥離工程 剥片から尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1A*ii*類に分類される。加工は背面側が主体で、自然面を除去する厚手の大型剥離が加えられている。剥離は大型打面での打瘤

母岩690 接合2939分布図



母岩名	母岩番号	接合番号	母岩の形状	母岩の寸法	母岩の重量	母岩の体積	母岩の密度
D3c	690	2939	板状	1 A 1	1	16点	1116.7g
Sb-41	板状	15.7 × (15~20) × (10~15)cm	板状	15.7 × (15~20) × (10~15)cm			
BF-PT:1							

母岩716 接合3019分布図



母岩名	母岩番号	接合番号	母岩の形状	母岩の寸法	母岩の重量	母岩の体積	母岩の密度
D3c	716	3019	板状	1 A 1	4	53点	533.2g
Sb-41	内蔵	不明 × 不明 × 不明 cm	不明	不明 × (2.5 × (5~10)cm			
BF-PT:1							

図III-515 D3c区の石器(84) 尖頭器・両面調整石器関連写真掲載資料(3)

が発達するもので、器体幅を減じて平面を整形し、併せて側縁を形成したと観察できる。腹面側へは縁辺部への剥離を主体とし、平面形を整えたものと捉えられる。60は製作両面調整石器である。正面への大型剥離が潜在割れとなり、後続の工程で破損したと観察される。

分布 Sb-41の西部に散発的に分布している。

母岩別資料 752、接合資料 3216 (図Ⅲ-516、図版 256-2)

母岩別資料 752は接合資料 3216~3221 および非接合剥片 39点と縦長剥片 1点で構成され、総点数は 81点、総重量は 760.3gである。

素材 467は接合資料 3216で 27点 (21個体) が接合し、重量は 420.2gである。石質は黒曜石5で素材は原石とみられ、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 搬入した両面調整石器を加工して尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Ai類に分類される。①打瘤の発達する厚手の大型剥離により、粗割り剥離面を除去して器体の厚みを大きく減じる作業と、②線状打面での打瘤の発達のない平坦剥離により、器面を平坦に加工する作業の順で認められる。製作石器の出土はなく遺跡外への搬出が推測される。石器は幅 9.5cm前後の尖頭器と観察される。

分布 Sb-41の中央部から西部に散発的な分布が認められる。

母岩別資料 754、接合資料 3225 (図Ⅲ-517、図版 254-1)

母岩別資料 754は接合資料 3225~3227、折れ接合資料 62117 および非接合剥片 19点で構成され、総点数は 53点、総重量は 1,669.9gである。

素材 458は接合資料 3225で 23点 (17個体) が接合し、重量は 1,534.7gである。石質は黒曜石5で転礫を素材とし、原石の状態でも遺跡内に搬入している。原石は分厚く横断面は三角形を呈した可能性がある。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Ai類に分類される。裏面に調整剥片は接合していないが、側面の剥片に残る自然面の状態から概ね平坦な自然面が広がっていたと観察できる。

作業は以下の手順で進められたと考えられる。①自然面が著しく突出する正面側に分厚い大型剥離を加え、素材形状を扁平に加工する。②側面に分厚い急角度の剥離を加えて自然面を除去する。裏面から加えられた剥離は打瘤が発達した末端部に正面側を取り込むように施され、側縁を形成している。③細かな側縁調整が加えられ、器体加工は小打面でも平坦な剥離となる。これにより器面を平坦に整形している。

製作石器の出土はなく遺跡外への搬出が推測される。石器は長 14.0 × 幅 8.0 × 厚 2.5cm前後の両面調整石器と観察される。

分布 Sb-41・43の広範囲に散発的に分布している。

母岩別資料 759、接合資料 3237 (図Ⅲ-517、図版 256-3)

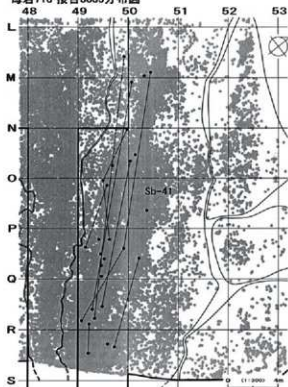
母岩別資料 759は接合資料 3237 および非接合剥片 32点で構成され、総点数は 56点、総重量は 537.5gである。

素材 468は接合資料 3237で 24点 (17個体) が接合し、重量は 377.7gである。石質は黒曜石5で原石素材とみられ、両面調整石器の状態でも遺跡内に搬入している。素材原石形状は不明である。

剥離工程 原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料とみられ、剥離技術類型は 1Ai類に分類している。搬入した両面調整石器は加工が進行した状態のものと観察される。

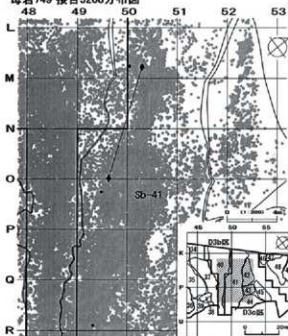
作業は以下の内容で進められている。①打瘤の発達する剥離で先行する大型剥離面の稜線を除去

母岩718 接合3035分布図



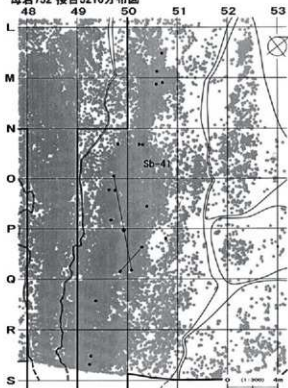
地区名	母岩番号	接合番号	作業内容(調査箇所等)	区画	調査点数	重量
D3c	718	3035	調査箇所: 1 A 1	4	35点	311.3g
母岩の状況	母岩番号	調査箇所(母岩の大きさ・幅・厚)	調査時期	調査時の状況(長さ・幅・厚)		
Sb-41	内側	不明 × 不明 × 不明 cm	調査時期不明	不明 × 不明 × 不明 cm		
調査日と調査者				調査日と調査者		
BF-PT:1						

母岩749 接合3208分布図



地区名	母岩番号	接合番号	作業内容(調査箇所等)	区画	調査点数	重量
D3c	749	3208	調査箇所: 1 A 1	5	8点	508.8g
母岩の状況	母岩番号	調査箇所(母岩の大きさ・幅・厚)	調査時期	調査時の状況(長さ・幅・厚)		
Sb-41	転覆	不明 × 不明 × 不明 cm	調査時期不明	16.5 × 不明 × 8.4 cm		
調査日と調査者				調査日と調査者		
BF:1						

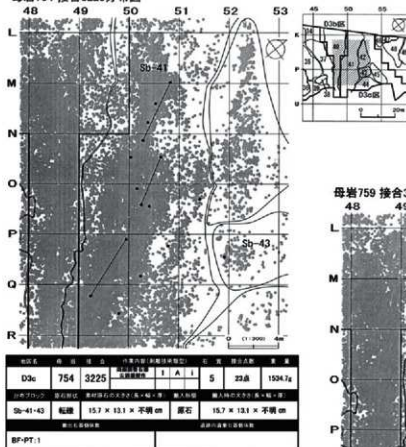
母岩752 接合3216分布図



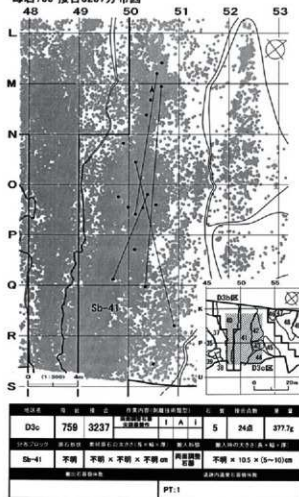
地区名	母岩番号	接合番号	作業内容(調査箇所等)	区画	調査点数	重量
D3c	752	3216	調査箇所: 1 A 1	5	27点	410.2g
母岩の状況	母岩番号	調査箇所(母岩の大きさ・幅・厚)	調査時期	調査時の状況(長さ・幅・厚)		
Sb-41	平明	不明 × 不明 × 不明 cm	調査時期不明	不明 × (10~15) × 不明 cm		
調査日と調査者				調査日と調査者		
BF-PT:1						

図Ⅲ-516 D3c区の石器(85) 尖頭器・両面調整石器関連写真掲載資料(4)

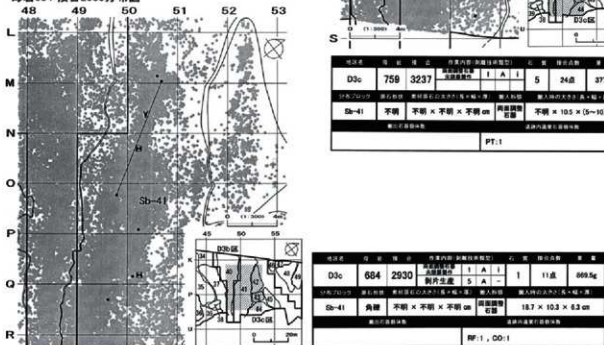
母岩754 接合3225分布図



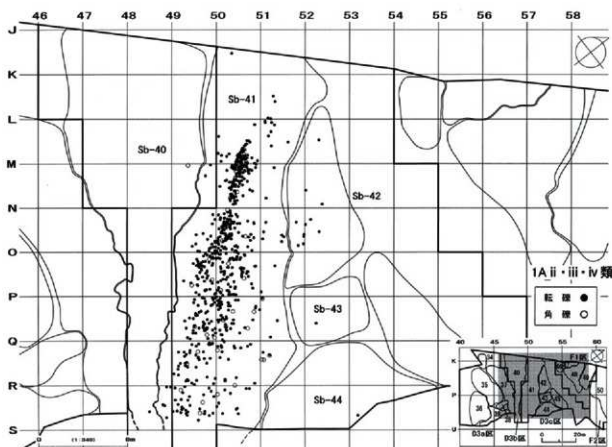
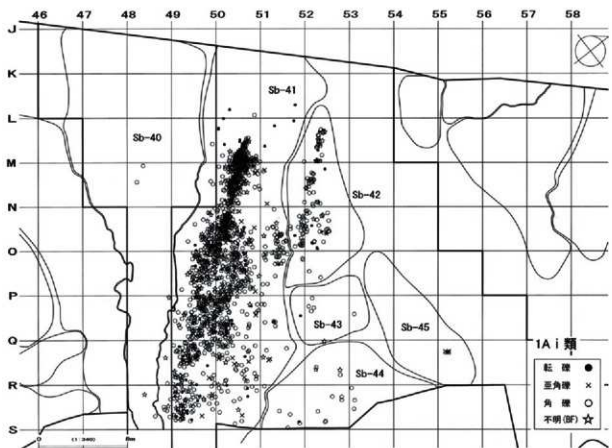
母岩759 接合3237分布図



母岩684 接合2930分布図



図Ⅲ-517 D3c区の石器(86) 尖頭器・両面調整石器関連写真掲載資料(5)



図Ⅲ-518 D3c区の石器(87) 尖頭器・両面調整石器製作母岩別接合資料分布図

し、横断面を左右対称に整形している。また厚みが大きく減じられ、器体が扁平に加工されている。

②打瘤の発達に弱い平坦な剥離が、逆側縁付近まで達する様に加えられ、器面を平坦に整形している。

製作尖頭器は破損し末端部が接合している。上半部は欠落しており搬出された可能性がある。49は製作尖頭器で、端部が尖鋭形を呈する整った形状まで加工が進んでいる。

分布 Sb-41の概ね中央から南東部にかけて散発的な分布が認められる。

母岩別資料 684、接合資料 2930 (図Ⅲ-517、図版 254-2)

母岩別資料 684は接合資料 2930・2931 および非接合剥片 3点で構成され、総点数は16点、総重量は953.1gである。

素材 459は接合資料 2930で11点(10個体)が接合し、重量は869.5gである。石質は黒曜石1で、角礫を素材とし、両面調整器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 角礫原石から単体の両面調整器を製作し、折損後は両面調整器を素材に剥片生産を行った資料で、剥離技術類型は前半が1Ai類、後半が5A類に分類される。①大型剥離による極めて粗い加工の両面調整器を搬入し、上下端部と正面側に粗い剥離を加えるが折損が生じる。②460は剥片生産個体である。素材は上半部個体で、折れ面から右側面を作業面として剥片剥離を行っている。剥片は大型打面で打瘤が著しく発達し、長さは4~7cmを測る。461は残核である。

分布 Sb-41の中央部から西部に散発的な分布が認められる。

尖頭器・両面調整器製作資料の分布状況について

図Ⅲ-518に尖頭器・両面調整器製作に関連する母岩別接合資料の分布状況を示した。製作内容を一母岩から単体を製作するもの(1Ai類、以下単体製作母岩)と複数個体を製作するもの(1Aii・iii・iv類、以下複数製作母岩)に分け、原石形状をシンボルで表示している。単体製作母岩は区域全体の全てのブロックに多数が分布する。複数製作母岩はSb-41に主体的に分布し、他のブロックでは客体的な存在である。原石形状をみると、角礫は区域全体に分布し、転礫はSb-41に主体的に分布すると捉えられる。但し、両者の最も濃密な分布はSb-41に認められ、共伴性が指摘できる。このため、大小の尖頭器を作り分けている両製作技術は、いずれも有舌尖頭器石器群に組成されるものと考えられる。

石刃技法の母岩別資料(D3c区) (図Ⅲ-519~531、図版 257~263)

石刃技法母岩は、①母型形成があり石核を素材に尖頭器が製作されるもの(図Ⅲ-519、母岩 668、4E類→1Ai類)、②母型形成があり打面調整・頭部調整が施されるもの(図Ⅲ-520~525・529、母岩 691・708・755・756、4Ci・4Cii類)、③母型形成がなく打面調整・頭部調整が施されるもの(図Ⅲ-530、母岩 725、4Civ類)、④母型形成は不明だが打面調整・頭部調整が施されるもの(図Ⅲ-525・526・529、母岩 707・715、4Cv類)、に区分できる。また剥片生産母岩には、⑤分割原石を素材に石刃技法の剥片剥離を行ったもの(図Ⅲ-526~528・530、母岩 675・689、5A類)、が認められる。

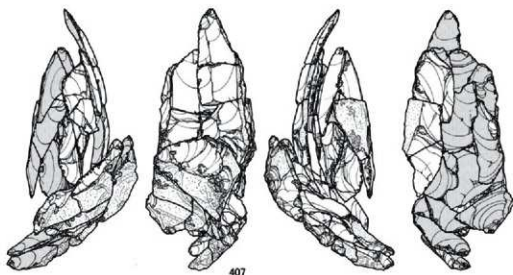
母岩別資料 668、接合資料 2906 (図Ⅲ-519、図版 257-1)

母岩別資料 668は接合資料 2906~2909・3553 および非接合剥片 7点で構成され、総点数は55点、総重量は570.5gである。

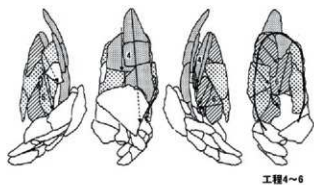
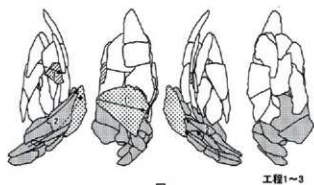
素材 407は接合資料 2906である。31点(19個体)が接合し、重量は458.6gである。石質は黒曜石1で、角礫を素材とし、母型の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 背部が平坦な母型を形成する石刃技法から、石核を素材とした尖頭器製作に移行した資料

母岩668 接合2906

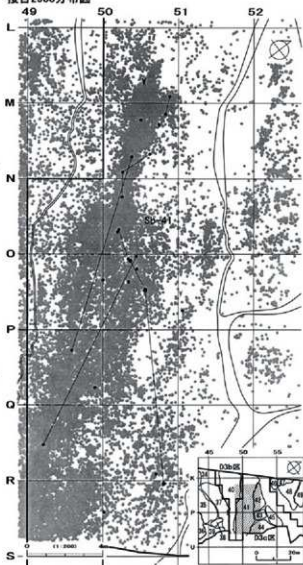


0 10 cm



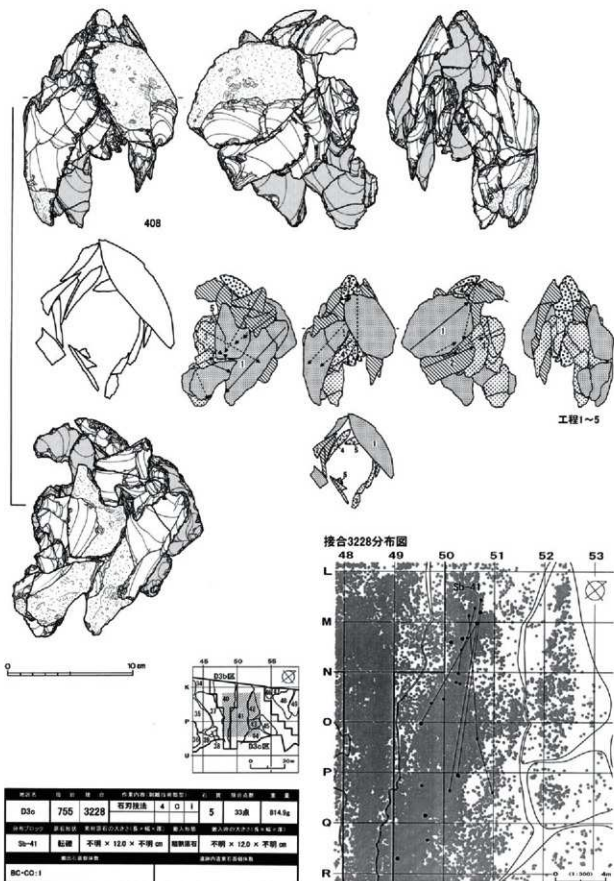
項目名	母岩	遺物	作業内容	副産物(種類)	数量	保存状態	備考
D3c	658	2906	石方技法 副産物採取	4 E - 1 A 1	1	31点	458.6g
5a-41	角礫	不明	不明	不明	不明	不明	不明
D3c-PT:1 (同一層位PT:1)							

接合2906分布図



図Ⅲ-519 D3c区の石器(88) 母岩668 接合2906

母岩755 接合3228



図Ⅲ-520 D3c区の石器(89) 母岩755 接合3228

で、剥離技術類型は前半が4E類、後半が1Ai類に分類される。

【工程1~4】母型形成から石刃剥離の工程である。工程1・2では作業面下半部へ裏面・側面から剥離を加え、作業面を調整している。工程3は背部平坦面から側面への整形剥離である。工程4では6回以上の石刃剥離が行われている。石刃の大きさは長15.0×幅3.5cm前後である。

【工程5~6】尖頭器製作の工程である。工程5では正裏面と側面の縁辺を斜め方向の剥離で厚く鎖口状に取り除き、横断面を平行四辺形に変更する。工程6では打瘤の発達する横方向の調整剥離が加えられている。同一母岩資料に尖頭器が出土しているが、石核素材のものは不明である。

分布 Sb-41の広範囲に散発的な分布が認められる。

母岩別資料 755、接合資料 3228 (図Ⅲ-520、図版 257-2)

母岩別資料 755は接合資料 3228~3231 および非接合剥片 29点と縦長剥片 1点で構成され、総点数は90点、総重量は1,725.8 gである。

素材 408は接合資料 3228で、33点(23個体)が接合し、重量は814.9 gである。石質は黒曜石5で転礫を素材とし、粗割りを加えた原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型は背稜を有し、打面調整・頭部調整が施される。剥離技術類型は4Ci類に分類される。工程1では自然面除去の粗い剥離が正裏両面から側面に加えられる。工程2では打瘤の発達した剥離が主に作業面から側面にかけて加えられ、作業面稜調整を行う。工程3は背稜形成の加工で、剥離は広く側面にまで及んでいる。工程4は作業面稜調整である。工程5では稜付石刃を剥離し、石刃剥離の作業が開始されている。石刃の大きさは長11.0×幅2.0cm前後、小打面で剥離開始部はリップ状となっている。

分布 Sb-41に広く分布するが、ブロック西北部のL~N50区付近とブロック南部P49・50区付近の二つのまとまりに区分が可能である。但し、分布と剥離工程に特定の関係性は見出せない。

母岩別資料 756、接合資料 3232 (図Ⅲ-521・522、図版 260-2)

母岩別資料 756は接合資料 3232、折れ接合資料 62118 および非接合剥片 37点で構成され、総点数は108点、総重量は1,267.0 gである。

素材 409は接合資料 3232で、69点(36個体)が接合し、重量は1,172.3 gである。石質は黒曜石5で、角礫を素材とし、母型の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型は背稜が形成されたとみられ、石刃剥離時には打面調整・頭部調整が施される。剥離技術類型は4Ci類に分類される。

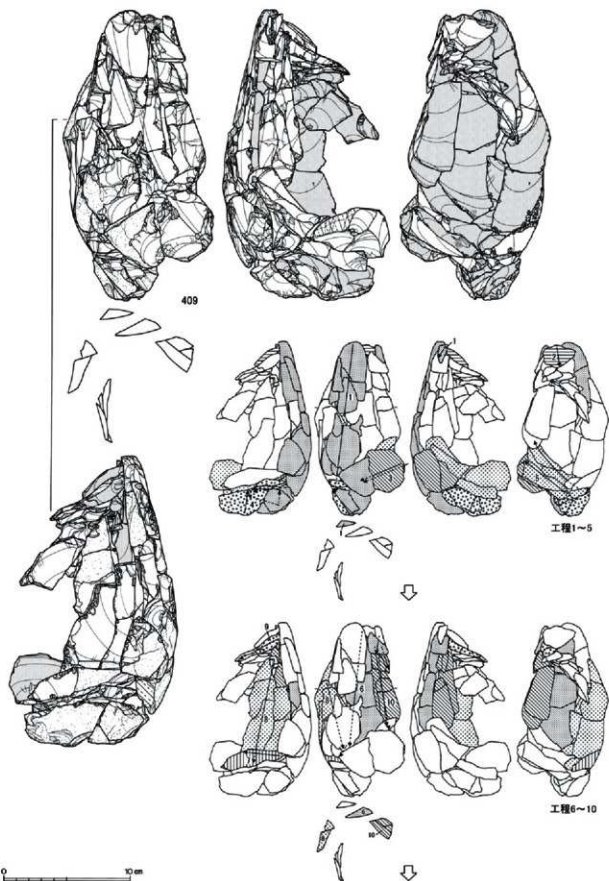
【工程1~5】母型の整形段階である。工程1では正面へ自然面・粗割り剥離面を取り込む縦長剥片剥離を行い、作業面を形成する。工程2は打面を再生し、工程3~5では母型下半部に自然面を除去する整形剥離を加えている。これにより母型下半部は収斂形状に加工される。

【工程6~10】石刃の剥離が開始される。打面調整、頭部調整が加えられ、工程9では打面再生が行われる。また、石核下部への整形剥離が石刃剥離過程の途中で施されている。石刃は長さ10~12cm、幅3cm前後、小型打面で剥離開始部はリップ状を呈する。

【工程11】石核上面へ薄型の平坦剥離が正・裏・側面から施される。剥離は左側面側に傾くように加えられており、石核の形状を大きく変更したようである。石核整形、或いは石核を素材とした両面調整石器製作が行われた可能性がある。

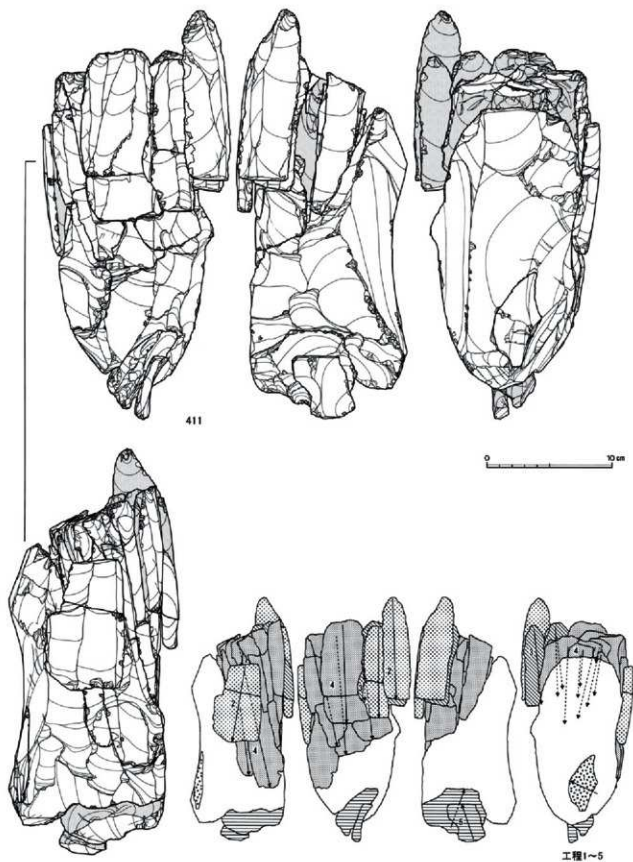
分布 Sb-41・44の広い範囲に分布している。Sb-44に単独で分布している資料は工程10で剥離された石刃素材の二次加工ある剥片である。

母岩別資料 708、接合資料 2977 (図Ⅲ-523~525、図版 258・259-1)

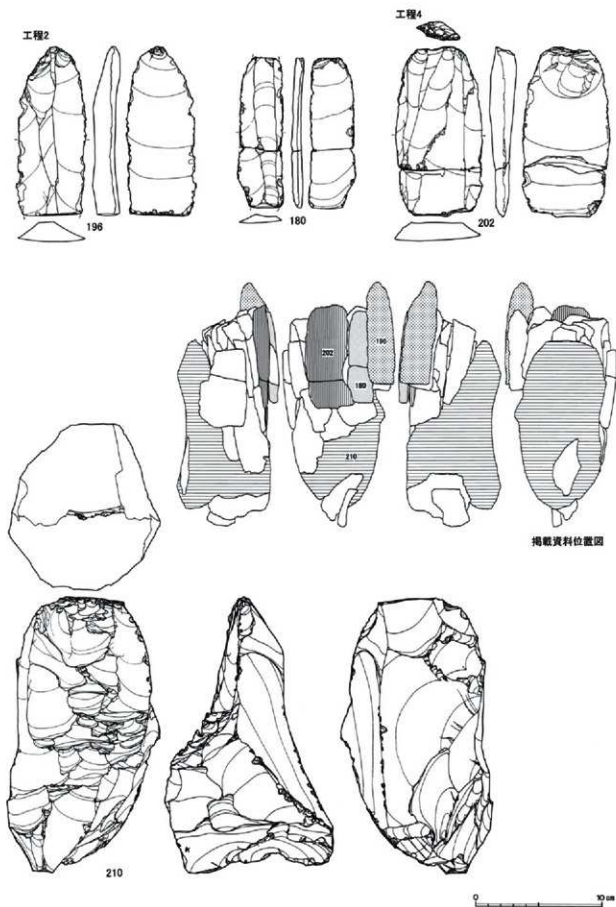


図Ⅲ-521 D3c区の石器(90) 母岩756 接合3232(1)

母岩708 接合2977



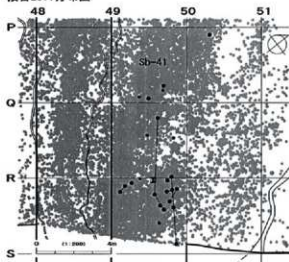
図Ⅲ-523 D3c区の石器(92) 母岩708 接合2977(1)



図Ⅲ-524 D3c区の石器(93) 母岩708 接合2977(2)

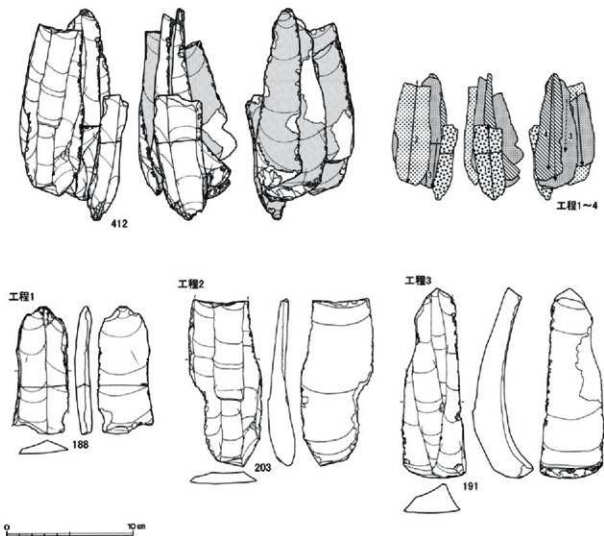
2 遺物

接合2977分布図



地区名	区画	調査年度	調査者	調査内容	調査日	調査時間	調査場所
D3c	706	2977	石野雄次	4	C	B	3
調査内容	調査方法	調査結果	調査者	調査日	調査時間	調査場所	調査結果
母岩707	接合2977	母岩707	石野雄次	4	C	B	3
3b-41	片断?	(30~) × 平断 × 平断 200	石野	(30~) × 平断 × 平断 200			
調査者: 石野雄次							調査日: 2007年10月10日
							調査場所: B/C:1

母岩707 接合2974



図Ⅲ-525 D3c区の石器(94) 母岩708 接合2977(3)、母岩707 接合2974(1)

母岩別資料 708 は接合資料 2977~2982、折れ接合資料 62051 および非接合剥片 32 点と石刃 6 点、縦長剥片 3 点で構成され、総点数は 98 点、総重量は 5,546.1 g である。

素材 411 は接合資料 2977 で、33 点(24 個体)が接合し、重量は 4,000.3 g である。石質は黒曜石 3 で、角礫素材とみられ、石核の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型は背部に平坦面を形成し、石刃剥離時には打面調整・頭部調整が施される。剥離技術類型は 4Cii 類に分類される。

【工程 1~3】小打面の石刃剥離段階である。工程 1 は母型・石核の整形剥離で、工程 2・3 で石刃剥離が行われる。石刃は破損品で占められるが、長さは概ね 20cm 程度とみられる。打面は幅 1cm 強・厚さ 0.5cm 程度で、細かな打面調整とやや軽微だが頭部調整が認められ、打面から続く石刃上部縁は「なで肩」を呈する。石刃剥離開始部はリップ状で、打縮の発達は弱い。工程 2 と工程 3 では作業面高が大きく変化しており、打面再生が行われたようである。

【工程 4~5】大型打面の石刃剥離段階である。工程 4 では工程 3 と同じ高さの打面が使用されるが、打面調整は粗いものになり、頭部調整は行われなくなる。石刃打面は幅 3cm 以上・厚さ 1cm 以上と大型化し、打縮の発達が強くなる。連続してヒンジが発生するが、これを除去・修正する作業は行われず、以後そのままヒンジが生じる石刃剥離を進行している。工程 5 では下端から厚手・幅広の剥離が右側面に行われるが、石核整形もしくは下設打面作出を意図したものが、不明である。工程 3 と工程 4 の間で石刃の剥離内容が大きく変化しており、あたかも製作者が変わった様な印象を受ける。

196・180 は工程 2、202 は工程 4 で剥離された石刃で、打面の大きさや打縮の発達が大きく異なる。202 は工程 4 の最初に剥離されたもので細かい打面調整がみられるが、以後の石刃ではこうした調整が省かれている。210 は残核である。打面厚は 0.3cm まで消費されている。大型打面でヒンジを生じる石刃剥離が連続したため、上部が薄く下部が厚い形状となっている。

分布 Sb-41 南部、P49区から R49区に主に分布し、特に R49区にまとまっている。同範囲からはホロカ型彫器を伴う石器群の資料が多く出土している。

母岩別資料 707、接合資料 2974(図Ⅲ-525・526、図版 259-2・図版 260-1)

母岩別資料 707 は接合資料 2974~2976、折れ接合資料 62047・62049・62050 および非接合剥片 5 点と石刃 2 点、縦長剥片 3 点で構成され、総点数は 31 点、総重量は 1,272.2 g である。

素材 412 は接合資料 2974 で、8 点(7 個体)が接合し、重量は 522.1 g である。石質は黒曜石 3 で、原石素材とみられ、石核の状態を遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型については不明、石刃剥離時には打面調整・頭部調整が施される。剥離技術類型は 4Cv 類に分類される。両設打面から石刃を剥離しているが、後半は上設打面の作業に限られる。リングの広さや器体幅、同一母岩資料などから、作業の前半は長さ 20cm 前後・幅 5cm 前後の大型、後半は長さ 14cm 前後・幅 3cm 前後の小型の石刃が剥離されていたようである。石核は出土していないが、作業面高 13cm 以下まで消費されたと観察できる。188・203・191・182 は石刃である。182 は工程 4 で剥離されたもので、小型打面に細かな打面調整が認められる。また剥離開始部はリップ状となっている。

分布 Sb-41 南部、R49区からまとまって出土している。

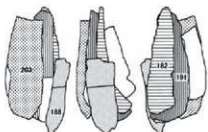
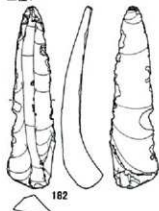
母岩別資料 689、接合資料 2938(図Ⅲ-526~528、図版 261・262-1)

母岩別資料 689 は接合資料 2938 および非接合剥片 1 点で構成され、総点数は 14 点、総重量は 2,747.5 g である。

素材 413 は接合資料 2938 で、13 点(10 個体)が接合し、重量は 2,734.5 g である。石質は黒曜石 1

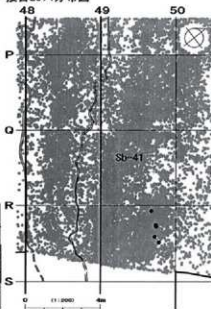
2 遺物

工程4



掲載資料位置図

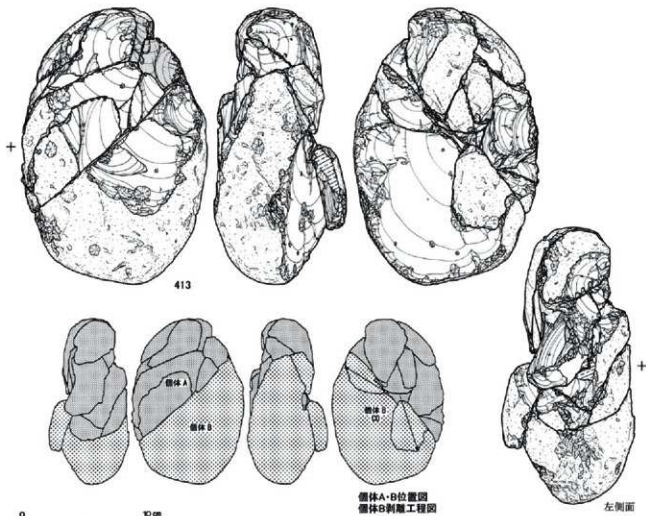
接合2974分布図



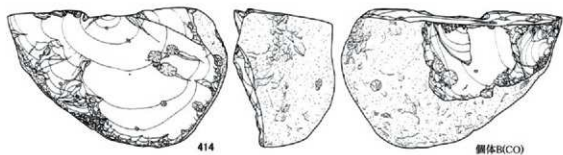
母岩	接合	遺物	石刀技術	C	C	V	3	8組	522.1g
D3c	707	2974	石刀技術						
母岩	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
接合	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
遺物	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
BC-CO.1	Fig. 1, (同一母岩群J.1)								



母岩689 接合2938

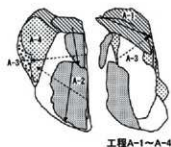
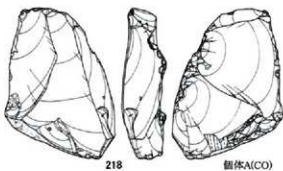
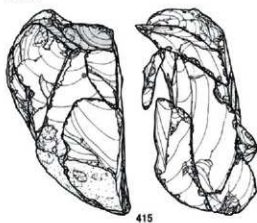


図Ⅲ-526 D3c区の石器(95) 母岩707 接合2974(2)、母岩689 接合2938(1)

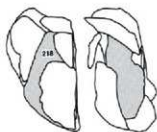


掲載資料位置図

個体A



工程A-1~A-4



掲載資料位置図

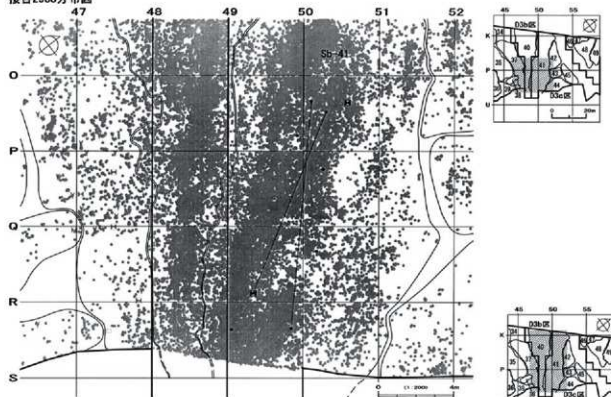


個体名	目録番号	接合番号	作製内情	割製法の種類	片数	接合片数	重量	
D3c	689	2938	製片生産	S	A	-	13点	2734.5g
				S	A	-		
<small>片数・重量は、接合片を除く。割製法は、片数・重量を別記する。接合片は、片数・重量を別記する。</small>								
30-41	総数	21.8 × 14.6 × 10.4 cm	原石				21.8 × 14.6 × 10.4 cm	
<small>製法・接合状況</small>							00-2	

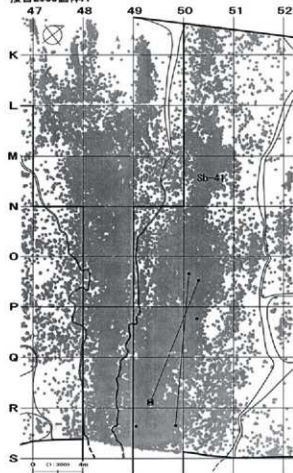
図Ⅲ-527 D3c区の石器(96) 母岩689 接合2938(2)

2 遺物

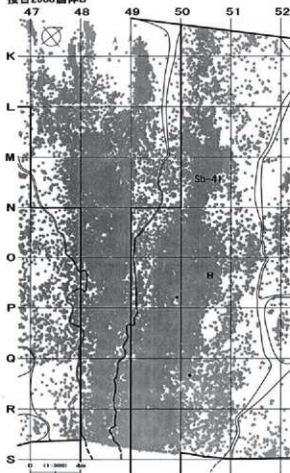
接合2938分布図



接合2938個体A



接合2938個体B



図Ⅲ-528 D3c区の石器(97) 母岩689 接合2938(3)

で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 原石分割後、各個体で打面と作業面を固定し一定方向に剥離を進行する作業を行ったもので、剥離技術類型は2個体とも5A類に分類される。特に個体Aでは縦長志向の剥離が連続的に行われたとみられ、石刃技法に準ずる資料として掲載した。なお、分割面のポジ面とネガ面の判断が困難であったため、両分割個体を個体A・Bとして扱った。

【個体A】工程A-1・2では打面作出後、正面側で縦長志向の剥片剥離を行う。正面での作業は最後幅広剥離となり、作業面を平坦にしている。工程A-3・4では左側面と背部に幅広剥離を加え、作業を終了している。218は残核である。工程3・4の剥離によって石核は扁平に加工されている。

【個体B】分割面を使用した平坦打面から大型剥片剥離を行っている。414は残核である。

分布 Sb-41の南半部O50区からR49区にかけて散発的に分布する。

石刃技法及び剥片生産母岩・写真図版掲載資料(図III-529・530、図版262-2・図版263)

母岩別資料691、接合資料2940(図III-529、図版263-1)

母岩別資料691は接合資料2940~2942、折れ接合資料62041および非接合剥片5点と石刃3点で構成され、総点数は23点、総重量は1,241.6gである。

素材 473は接合資料2940で、7点(6個体)が接合し、重量は746.7gである。石質は黒曜石1で、原石素材とみられ、石核の状態では遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型背部に横方向の剥離で平坦面を形成し、石刃剥離時には打面調整・頭部調整が施される。剥離技術類型は4Cii類に分類した。石刃と打面再生剥片が接合しており、打面再生は連続的に3回剥離されている。また、打面再生後、石核背部に整形剥離が加えられている。石刃は長さ15cmを越えるやや大型のもので、背面には石刃剥離と同方向の線状痕が観察される。石核は出土がなく、遺跡外へ搬出された可能性がある。

分布 Sb-41の南部、Q・R49区にまとまって分布する。

母岩別資料715、接合資料3016(図III-529、図版263-2)

母岩別資料715は接合資料3016~3018および非接合剥片15点で構成され、総点数は31点、総重量は1,420.8gである。

素材 474は接合資料3016で、8点(5個体)が接合し、重量は662.6gである。石質は黒曜石4で、角礫を素材とし、石核の状態では遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 石刃技法の接合資料で、母型の形状は不明、石刃剥離時には打面調整・頭部調整が施される。剥離技術類型は4Cv類に分類した。石刃は長さ20cm以上で、幅は4cm前後の細身と8cmを越える幅広のものがある。打面は厚さ0.5cm以下と小型で剥離開始部はリップ状を呈す。また、石刃背面には正裏面から加えられた横方向の大型剥離が認められ、母型を形成したと観察できる。

分布 Sb-41の南部、R49区にまとまって分布する。

母岩別資料675、接合資料2917・2918(図III-530、図版262-2)

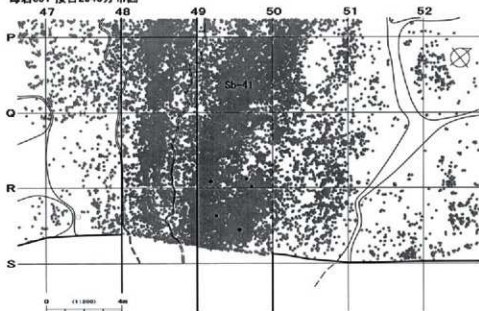
母岩別資料675は接合資料2917~2919および非接合剥片7点で構成され、総点数は30点、総重量は1,539.6gである。

素材 470は接合資料2918、471は接合資料2917で、二つ合計で19点(18個体)が接合し、重量は1,382.6gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態では遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 打面と作業面を固定し一定方向に剥離を進行する作業を行ったもので、剥離技術類型は5A類に分類される。両接合資料の位置関係は不明で、原石を分割し別個体で剥離作業を行った可能

2 遺物

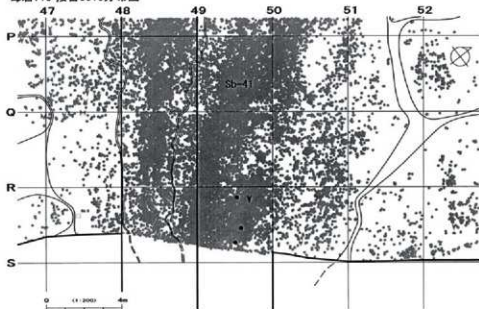
母岩691 接合2940分布図



母岩名	母岩ID	接合ID	石刃技法	石	石質	石質ID	重量
D3c	691	2940	石刃技法	4	C	I	746.7g
母岩ID	母岩名	接合ID	石刃技法	石	石質	石質ID	重量
3b-1	不明	不明 × 不明 × 不明	不明	不明	不明	不明 × 不明 × 不明	不明
母岩ID			母岩名				
BC-00:1			RF:1				



母岩715 接合3016分布図

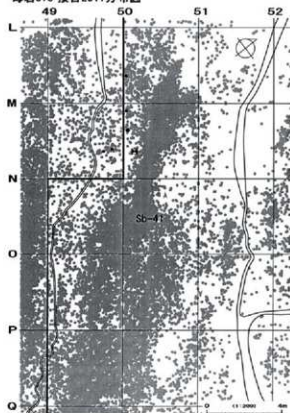


母岩名	母岩ID	接合ID	石刃技法	石	石質	石質ID	重量	
D3c	715	3016	石刃技法	4	C	V	4	462.4g
母岩ID	母岩名	接合ID	石刃技法	石	石質	石質ID	重量	
3b-1	内線	不明 × 不明 × 不明	不明	不明	不明	不明 × 不明 × 不明	不明	
母岩ID			母岩名					
BC-00:1			RF:1					

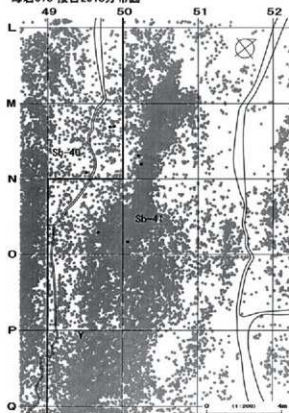


図Ⅲ-529 D3c区の石器(98) 石刃技法・剥片生産関連写真掲載資料(1)

母岩675 接合2917分布図



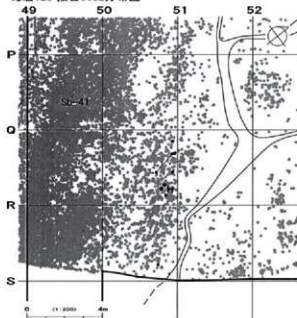
母岩675 接合2918分布図



母岩名	接合	種別	数量	片数	片種別	石種	形状	重量
D3c	675	2917・2918	剥片生産	3	A	-	1	19点 1382.8g
母岩725		3082	剥片生産	3	B	-	4	11点 485.5g
Sb-41	675	2917・2918	石核	不明	不明	不明	不明	不明
調査方法								調査方法
調査方法								調査方法

RF:1, OD:1

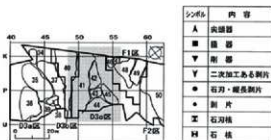
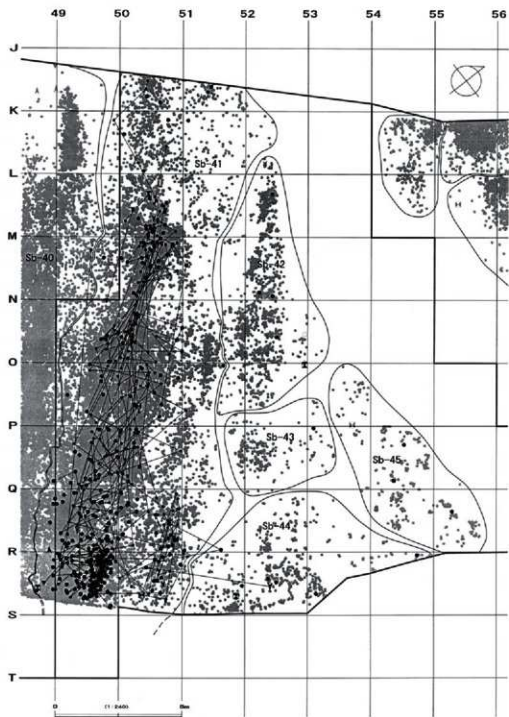
母岩725 接合3082分布図



母岩名	接合	種別	数量	片数	片種別	石種	形状	重量
D3c	725	3082	剥片生産	3	B	-	4	11点 485.5g
Sb-41	725	3082	石核	不明	不明	不明	不明	不明
調査方法								調査方法
調査方法								調査方法

OD:1, (同一層位) OD:1, OD:1

図III-530 D3c区の石器(99) 石刃技法・剥片生産関連写真真摯載資料(2)



シンボル	内容
A	尖頭器
■	鏃
▼	銚
Y	二次加工ある剥片
●	刮刀・磨石剥片
○	剥片
✱	石片核
H	石核

図Ⅲ-531 D3c区の石器(100) 石刃技法母岩別接合資料分布図

性がある。両接合資料とも縦長剥片志向の剥離を連続的に行っており、12cm大から5cm前後の剥片が得られている。また、接合2918では打面調整されたものや軽微な頭部調整を受けたものが認められる。472は接合2917の残核である。

分布 Sb-41の西部、M・N49・50区周辺にまとまって分布する。

母岩別資料725、接合資料3082(図Ⅲ-530、図版263-3)

母岩別資料725は接合資料3082～3088および非接合剥片16点と石刃3点で構成され、総点数は51点、総重量は946.3gである。

素材 476は接合資料3082で、11点(9個体)が接合し、重量は485.6gである。石質は黒曜石4で転礫を素材とし、石核の状態で遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 大型剥片を剥離し、これを素材として複数個体で石刃技法を行った母岩別資料である。石刃技法は母型形成がなく、石刃剥離に際して頭部調整が施される。接合3082は最終段階で調整打面となるため剥離技術類型では4Civ類と分類したが、同一母岩中の大半の石刃・縦長剥片は単剥離打面に頭部調整が施されたものであった。接合3082からは7cm前後の石刃・縦長剥片が剥離されているが、他の個体では5cm程度の小型石刃が多く得られており、残核も高さ5cm前後まで消費されている。

分布 Sb-41の南東部、Q50区にまとまって分布している。

石刃技法資料の分布状況について

図Ⅲ-531に石刃技法に関連する母岩別接合資料の分布状況を示した。大半の資料がSb-41から出土しているが、主にL～N区の北西側とQ・R50区の南東側の二つのまとまりが認められる。D3c区の石刃技法の内容は母型形成を行い打面調整・頭部調整が施されるものが主体であったが、さらに石刃の大きさに着目すると、①15cm未満主体の母岩(母岩668・755・756)と、②20cm前後主体の母岩(母岩691・707・708・715)に分けることができる。石刃の内容と分布との関係を見ると、①15cm未満石刃母岩が北西側、②20cm前後石刃母岩が南東側の分布に該当しており、異なる地点で異なる大きさの石刃を生産している状況が把握できる。断定的ではないが、他の特徴的遺物の分布状況などから推察して、①の北西側母岩が有舌尖頭器石器群、②の南東側母岩がホロカ型彫器を伴う石器群に該当する可能性がある。

(6) F1区(Sb-46～49)の石器

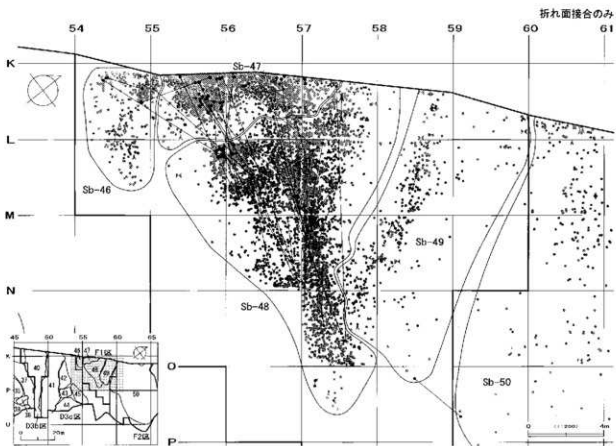
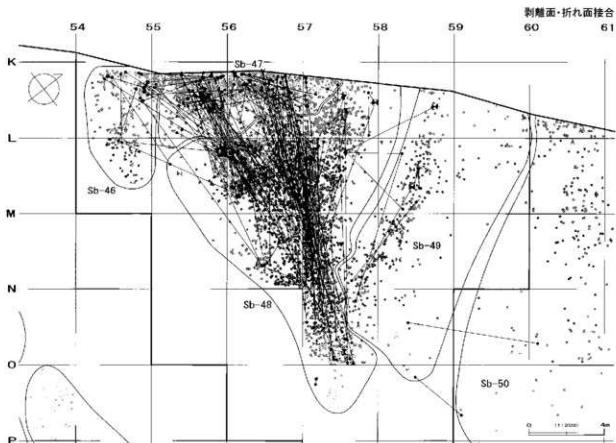
① 石器ブロックの分布

ブロック間接合状況(図Ⅲ-532)

F1区は調査区の中央から北東側に位置し、東側をF2区と接している。南西側には深い沢状地形が発達し、これを挟んだ対岸にD3c区が位置する。ブロック範囲の設定はⅢ章2節1項で説明したように、密度分布、組成器種の分布、接合資料の分布を根拠としている。なお、図Ⅲ-532は折れ・剥離面接合資料の接合線を表示した分布図であるが、隣接区域に分布する遺物であっても当該区域遺物と接合関係を有する資料については遺物点・接合線を表示している。

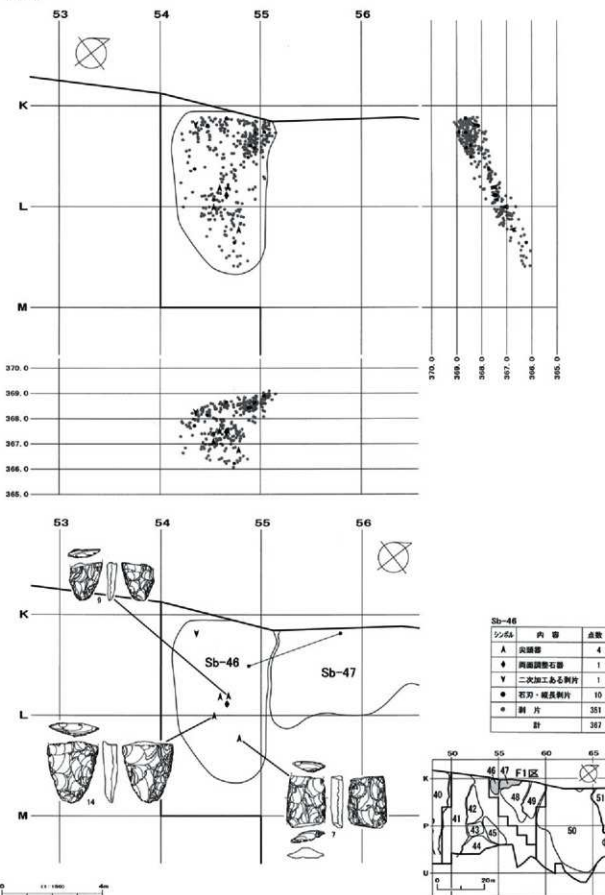
各ブロックともブロック内接合を主体とし、特に遺物集中域を中心とした接合関係が認められる。但し、Sb-47については接合関係の大半が傾斜方向に認められ、ソリフラクションの影響を受け、本来遺棄された原位置から地形に沿って大きく移動したと判断される。ブロック間接合は主に隣接ブロックとの間で確認できるが、特にSb-47・48間には濃密な接合関係が認められる。

Sb-46(図Ⅲ-533)



図Ⅲ-532 F1区 接合資料分布図

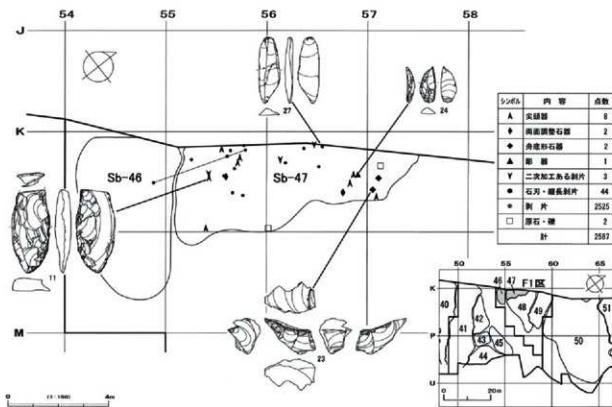
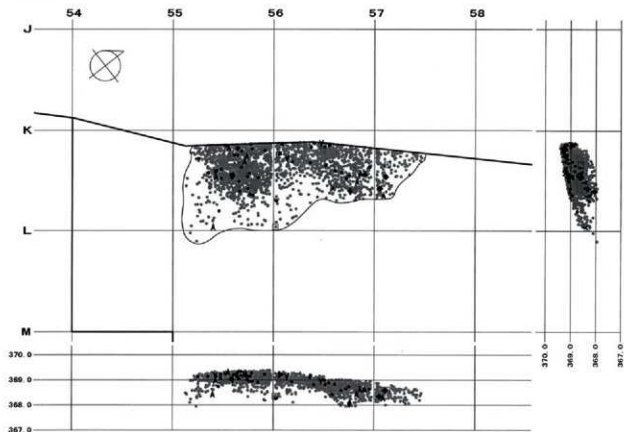
Sb-46



図Ⅲ-533 Sb-46 分布状況(平面・断面図)

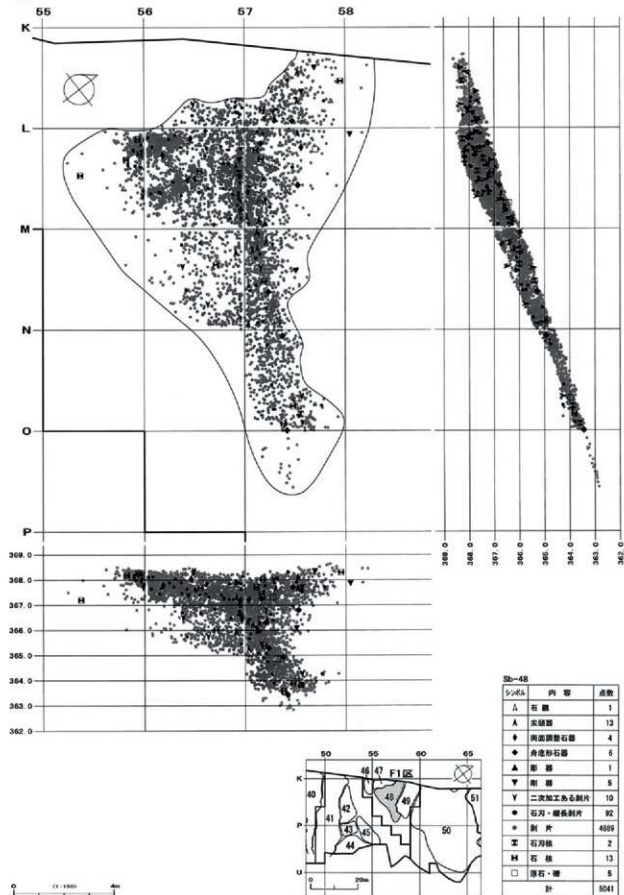
2 遺物

Sb-47



図Ⅲ-534 Sb-47分布状況(平面・断面図)

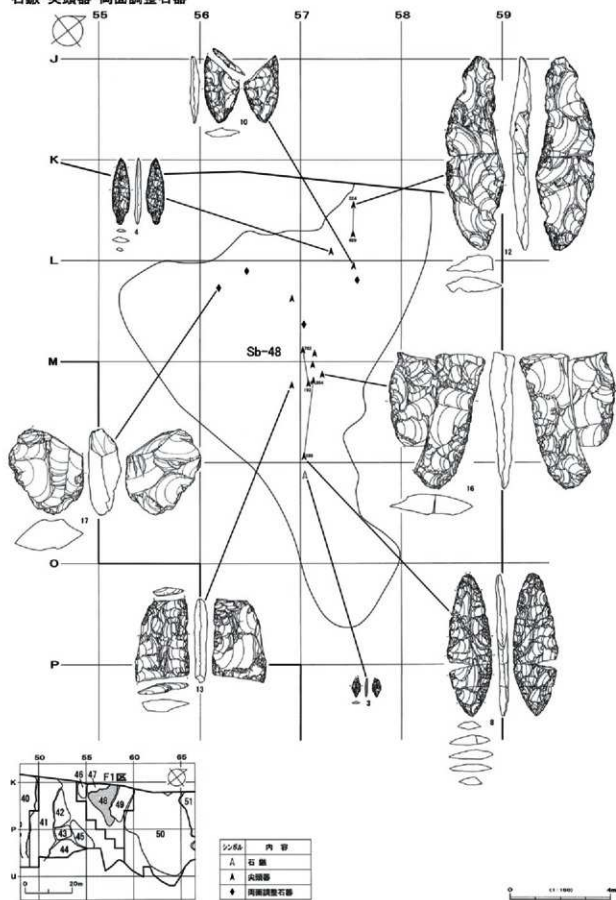
Sb-48



図Ⅲ-535 Sb-48 分布状況(平面・断面図)

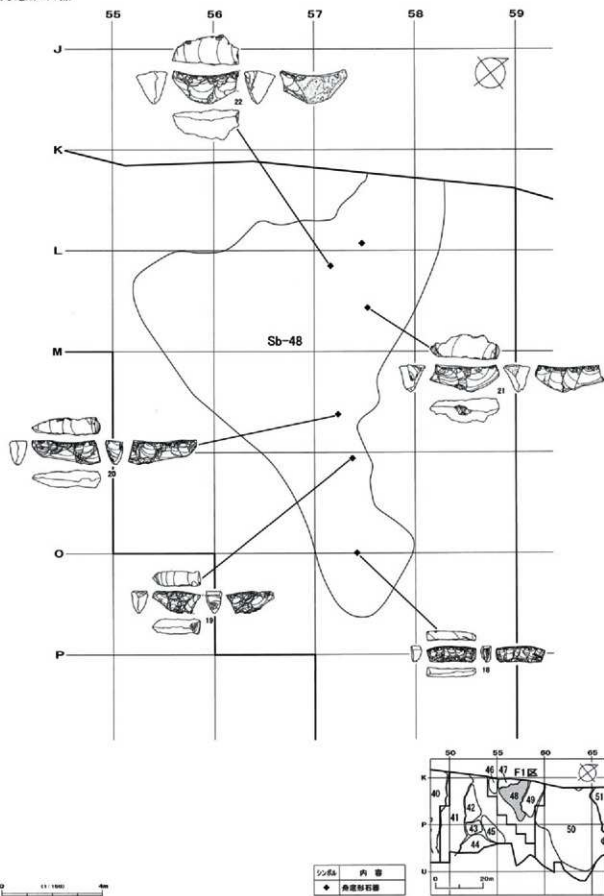
2 遺物

石鏃・尖頭器・両面調整石器



図三-536 Sb-48 出土遺物の分布 (1)

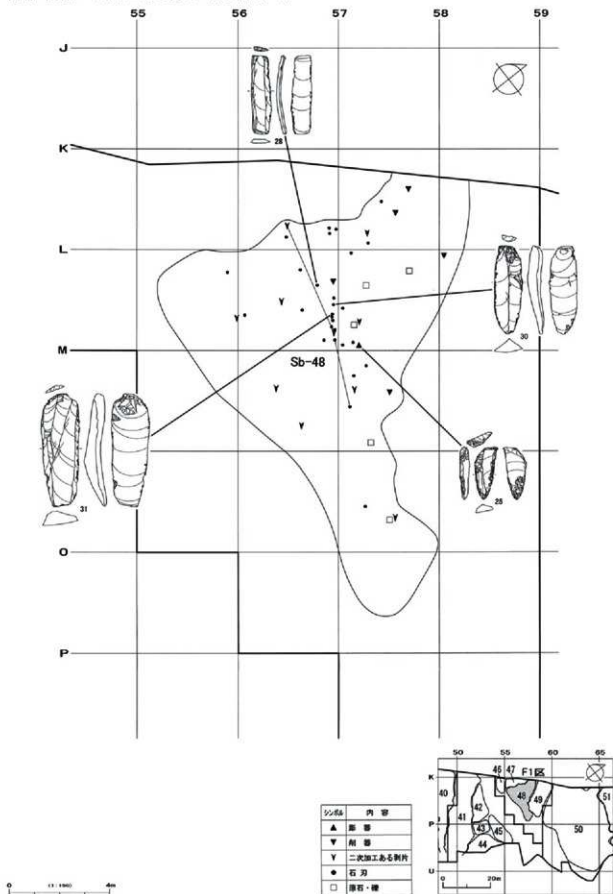
舟底形石器



図Ⅲ-537 Sb-48 出土遺物の分布(2)

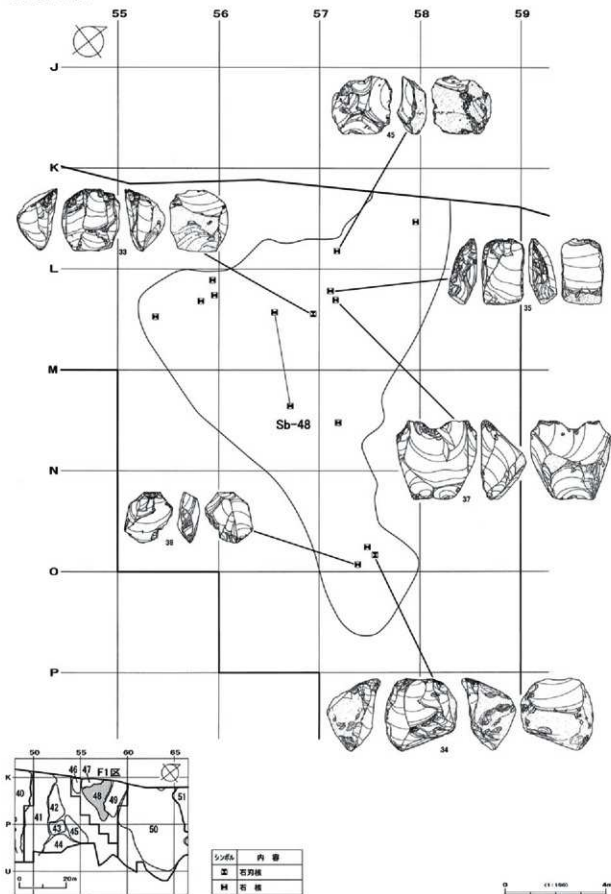
2 遺物

彫器・削器・二次加工ある剥片・石刃・原石・礫



図Ⅲ-538 Sb-48 出土遺物の分布(3)

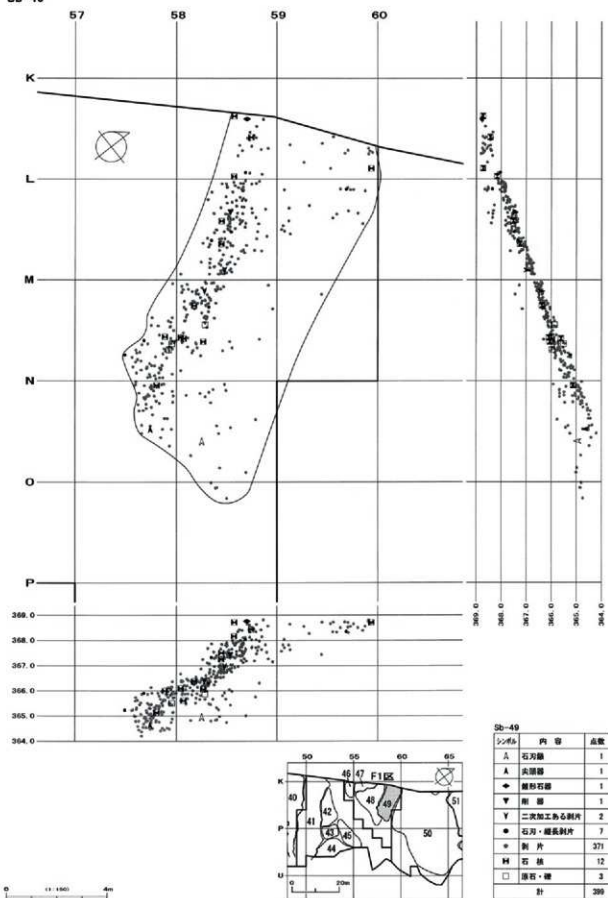
石刃核・石核



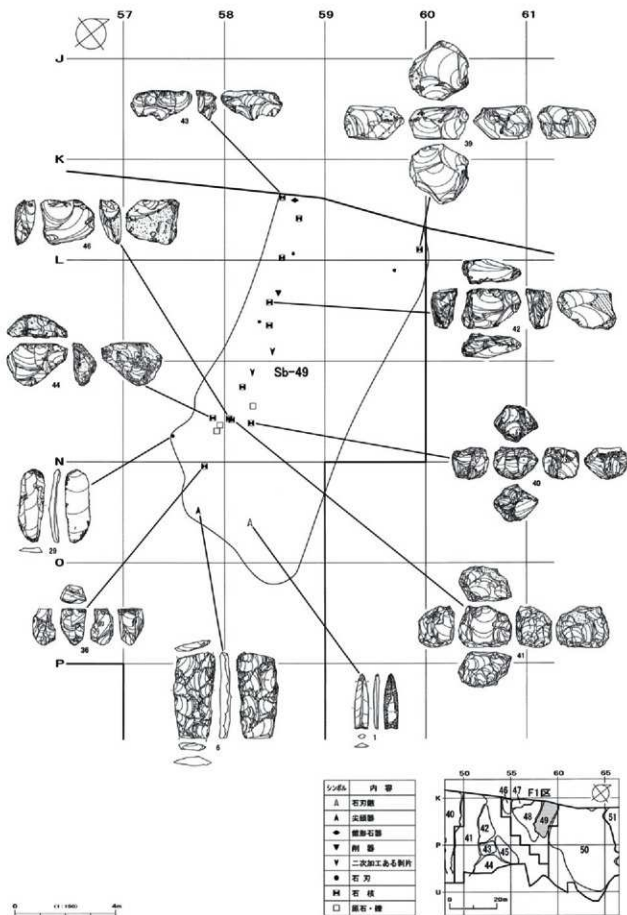
図III-539 Sb-48 出土遺物の分布(4)

2 遺物

Sb-49



図Ⅲ-540 Sb-49分布状況(平面・断面図)



図Ⅲ-541 Sb-49 出土遺物の分布

Sb-46はF1区西部、調査区境界付近に位置し、規模は6.5×4.1m、面積は21.4㎡を測る。

出土総点数は367点・3,382.8gで、その内剥片が351点・95.6%、石刃・縦長剥片が10点・2.7%を占める。この内剥片の19点(5.4%)、縦長剥片の2点(20%)に剥離面接合関係がみられる。主な出土遺物には尖頭器・両面調整石器がある。遺物分布はK54区北東側からK55区にかけて集中部が認められるが、尖頭器・両面調整石器などのツールは集中部より南東側のLライン付近にまとまって出土している。

Sb-47(図Ⅲ-534)

Sb-47はF1区北西部、調査区境界に接しており、遺物分布は調査区外に広がるのが推測される。調査区内での規模は10.1×3.6m、面積は25.6㎡を測る。出土総点数は2,587点・16,221.1gで、その内剥片が2,525点・97.6%、石刃・縦長剥片が44点・1.7%を占める。この内剥片の108点(4.3%)、縦長剥片の4点(9.1%)に剥離面接合関係が認められる。主な出土遺物には尖頭器・両面調整石器、舟底形石器、彫器がみられる。遺物分布は境界線付近に集中し、尖頭器や舟底形石器などの石器も集中部にまとまっている。

Sb-48(図Ⅲ-535~539)

Sb-48はF1区中央部から北東部、調査区境界付近に位置し、規模は17.6×11.6m、面積は106.5㎡を測る。

出土総点数は5,041点・48,017.3gで、その内剥片が4,889点・97.0%、石刃・縦長剥片が92点・1.8%を占める。この内剥片の244点(5.0%)、石刃・縦長剥片の8点(8.7%)に剥離面接合関係が認められる。主な出土遺物には尖頭器・両面調整石器、舟底形石器、彫器、削器、石刃核・石核がある。遺物分布は、①L55-56区の範囲と、②L56-57区からN57区にかけての範囲にまとまりが認められる。尖頭器、舟底形石器、削器、石核などの多くは②の範囲から出土している。

Sb-49(図Ⅲ-540・541)

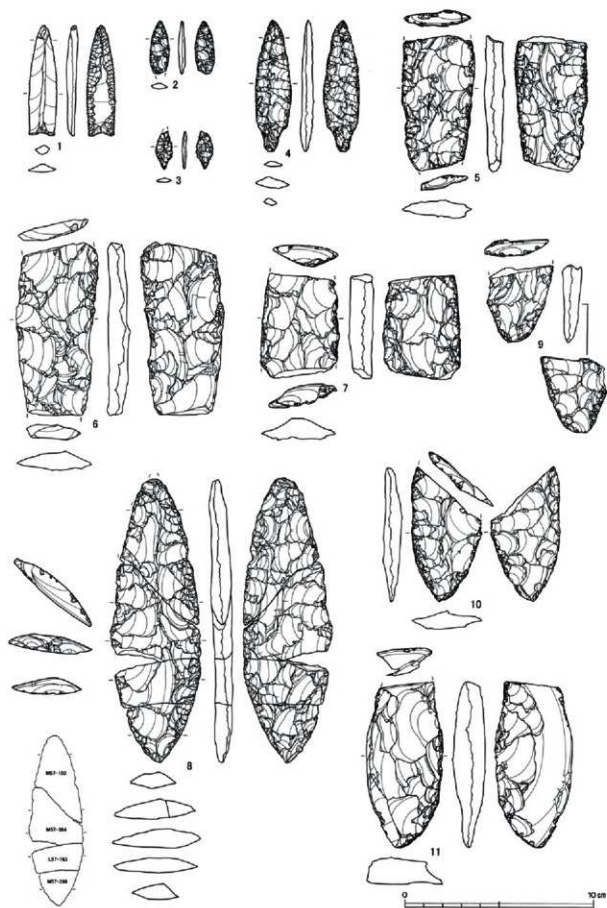
Sb-49はF1区北東部、調査区境界付近に位置し、規模は15.4×6.7m、面積は86.9㎡を測る。

出土総点数は399点・3,533.8gで、その内剥片が371点・93.0%、石刃・縦長剥片が7点・1.8%を占める。この内剥片の13点(3.5%)に剥離面接合関係が認められる。主な出土遺物には石刃鏃、尖頭器、錐形石器、削器、石核がある。遺物分布はブロックの西部K58区からM57区にかけてまとまり、同範囲からは石核、二次加工ある剥片、錐形石器などが出土している。尖頭器、石刃鏃は上述のまとまりからやや外れたN57・58区に分布している。石核の多くは形態から白滝I群と判断できる。

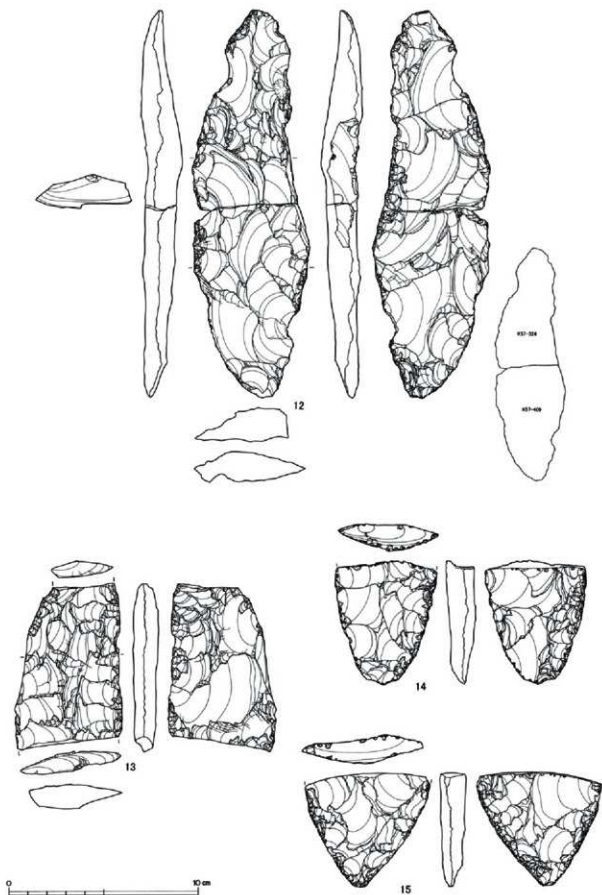
② 出土石器(表Ⅲ-1~7)

出土した遺物は表土・Ⅱ層をあわせ、石鏃(2点)、石刃鏃(1点)、尖頭器(I類32点・Ⅲ類1点)、両面調整石器(I類18点)、細石刃(2点)、舟底形石器(Ia類1点・IIa類3点・IIb類2点・II類2点)、彫器(2点)、搔器(2点)、削器(11点)、錐形石器(1点)、二次加工ある剥片(19点)、石刃(49点)、縦長剥片(110点)、石刃核(2点)、石核(28点)、剥片(20,906点)、原石(6点)、礫(6点)がある。総数は21,206点、総重量は113,261.7gである。層位・取り上げ方法別の内訳はⅡ層位取り遺物8,395点・71,155.8g、表土一括遺物5,665点・34,041.0g、Ⅱ層一括遺物7,110点・68,770g、ボサ遺物35点・1,176.4g、排土遺物1点・11.5gである。

出土石器の内容から白滝I群・有舌尖頭器石器群・小型舟底形石器石器群など複数石器群の混在が考えられた。しかし、①ソリアクションの影響を強く受けた分布であること、②接合資料数が少なく母岩別資料を良好に抽出するに至らなかったことが原因し、石器群としてまとまった資料を分離



図Ⅲ-542 F1区の石器(1) 石刃・石鏃・石鏃・尖頭器



図Ⅲ-543 F1区の石器(2) 尖頭器

することはできなかった。特徴的石器の出土状況からは、Sb-46は有舌尖頭器石器群、Sb-47・48は有舌尖頭器石器群と小型舟底形石器石器群、Sb-49は白滝I群が主体的に分布する可能性がある。

石器石材には黒曜石(21.202点)、めのう(2点)、泥岩(2点)がみられる。黒曜石が圧倒的に多く、99.9%以上を占める。黒曜石を石質細分すると、黒曜石1(3,653点・42.3%)、黒曜石2(52点・0.6%)、黒曜石3(607点・7.0%)、黒曜石4(3,557点・41.2%)、黒曜石5(770点・8.9%)の割合となる。括弧内の比率は石質を確認した資料数を分母に算出している。

石刃鉄・石 鐵(図Ⅲ-542-1~3、図版264)

石刃鉄・石鐵はⅡ層からの出土で、石刃鉄1点、石鐵2点があり、全て図示した。石材は全て黒曜石である。3点はSb-48・49の南側周辺に分布している。

1は石刃鉄である。素材は幅の狭い直線の二稜を中央に取り込むように剥離され、断面はほぼ三角形を呈する。厚みのある素材打面部を尖頭部とし、その腹面側に急角度調整を加えて断面が変形となる様に整形している。腹面側縁には幅1~2mm弱の薄型剥離が連続し、縁辺を鋸歯状に加工している。基部末端凹基の加工は両面調整によってなされている。また、基部は素材折断後に調整を施したと観察される。

2・3は石鐵である。2は木葉形、3はカエシ不明瞭な有茎鐵で、3の縁辺は抉り入る様な深いネガティブバルブが生じる小型剥離によって鋸歯状に加工されている。

尖頭器(図Ⅲ-542-4~図Ⅲ-544-16、図版264・265)

尖頭器は表土・Ⅱ層を含め33点・26個体が出土し13個体を図示した。類型別の出土点数は、Ⅲ類(有舌尖頭器)が1点・1個体で、他は全てⅠ類である。石材は全て黒曜石で黒曜石1(13個体)と黒曜石4(11個体)が多い。剥離面接合関係を有するものは確認できなかった。製品で搬入されたものが主体と考えられる。

4はⅢ類(有舌尖頭器)である。カエシ部は不明瞭で舌部縁辺にはやや摩耗がみられる。器面は主に右下がりの斜並行剥離によって調整されている。

5~16はⅠ類尖頭器である。5~10は幅4cm以下、厚さ1cm前後と薄手のもの。5~7は直線的な側縁を持つもの。5・6は薄手で扁平に整形されており、器体幅は上部に向かって若干広がりをもせる。7は5・6に比べ若干厚手で正面側に膨らみを持つ。8は薄手に加工された木葉形の尖頭器で下半側に最大幅を有す。折損後、下部側の個体に再加工が施されている。11は横長剥片を素材とし、素材打面部の除去から加工が開始されている。

12~16は幅4cmを超え、厚さ1.5cm前後と厚手で大型のもの。12は中央部右側面に正裏面と直交する平坦部を残し、側縁は全体的に不整である。13は右側縁が直線的で器体も扁平に作られており、形状は5・6に類似している。15は幅広の木葉形とみられ、器体は扁平に加工されている。16は幅広・大型のもの。粗い加工の段階で破損している。

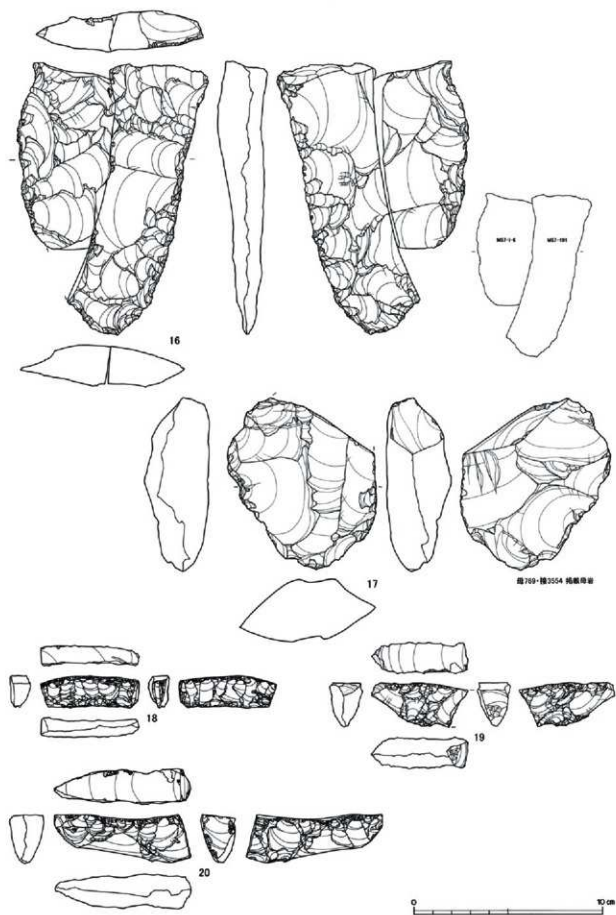
両面調整石器(図Ⅲ-544-17、図版265)

両面調整石器は表土・Ⅱ層を含め15点・14個体が出土し1個体を図示した。両面調整石器のほとんどは粗い加工による不整形のものか破損品であり、尖頭器製作過程で作業が困難となり遺棄されたことが考えられる。石材は全て黒曜石で特に黒曜石1が10個体も多い。

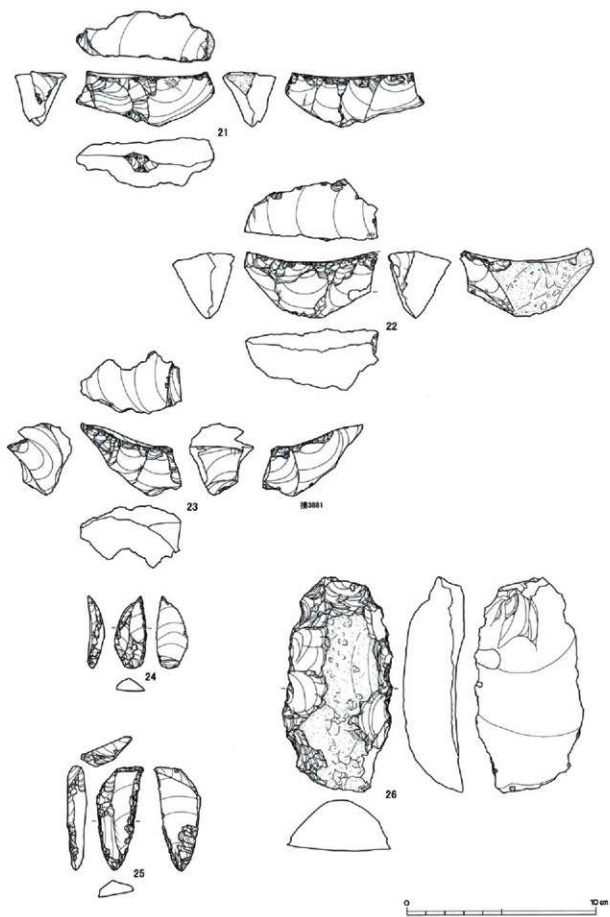
17は掲載母岩769の資料で扁平な石刃核を素材として両面調整石器に加工しており、粗い剥離の段階で破損し遺棄されている。加工は片側縁側の両面調整から開始されている。

舟底形石器(図Ⅲ-544-18~図Ⅲ-545-23、図版265)

舟底形石器は表土・Ⅱ層を含め8点・8個体が出土し6個体を図示している。器種類別ではIa



図Ⅲ-544 F1区の石器(3) 尖頭器・両面調整石器・舟底形石器



図Ⅲ-545 F1区の石器(4) 舟底形石器・影器・削器

類(小型で幅が4~8mm・黒曜石4多)が1点、IIa類(加工が粗く15cm以下、主に10cm以下)が3点、IIb類が2点、II類で細別ができなかったものが2点ある。Ia・IIa類は小型舟底形石器群の資料と考えられる。石材は全て黒曜石で、Ia・IIa類は茶系の黒曜石3・4が多用されている。剥離面接合関係を有するものは1点で23が該当し、調整剥片3点が接合している。舟底形石器は搬入品を主体とすることが考えられる。

18はIa類である。精緻な加工により器体全体をほぼ同じ高さに整形し、末端に桶状剥離を有す。19・20はIIb類で甲板面縁辺に細かな剥離が連続し、甲板面縁辺の側面・上面親共に直線的に整形されている。21・23はIIa類で粗い加工が主体のもの。甲板面縁辺は不整で側面の調整剥離は甲板面側からの加撃で占められる。22は大きさでIIa類としたが左側縁縁辺は小剥離で整えられ滑らかである。

細石刃(図版175-223・224)

細石刃は表土から2点が出土した。2点とも写真のみの掲載で、都合上D3b・c区の細石刃と同じ図版頁となっている。黒曜石製で剥離面接合関係はない。細石刃剥離技法を示す痕跡は認められなかった。223は器体がやや左側へ湾曲し、224は背面のリングがやや広い。細石刃様の剥片の可能性もある。

影器(図Ⅲ-545-24・25、図版266)

影器はII層から2点・2個体が出土し全て図示した。石材は2点とも黒曜石1が使用されている。剥離面接合関係を有するものではなく、全て搬入品と考えられる。素材は剥片とみられる。

24は影刀面が背面側に傾く左斜刃のもの。影刀面打面は右側縁の調整面である。先行して作出された影刀面が3面観察できる。同様の形態の影器は有舌尖頭石器群や忍路子型細石刃核を伴う石器群で認めることが出来る(寺崎 2006)。25は影刀面が腹面側に傾く左横刃のもの。影刀面打面は右側縁の調整面である。先行する影刀面から背面側に連続的な調整が施され、現行の影刀面がこれを切り取っている。基部は背腹両面の加工で尖頭形に整形されている。

削器(図Ⅲ-545-26、図版266)

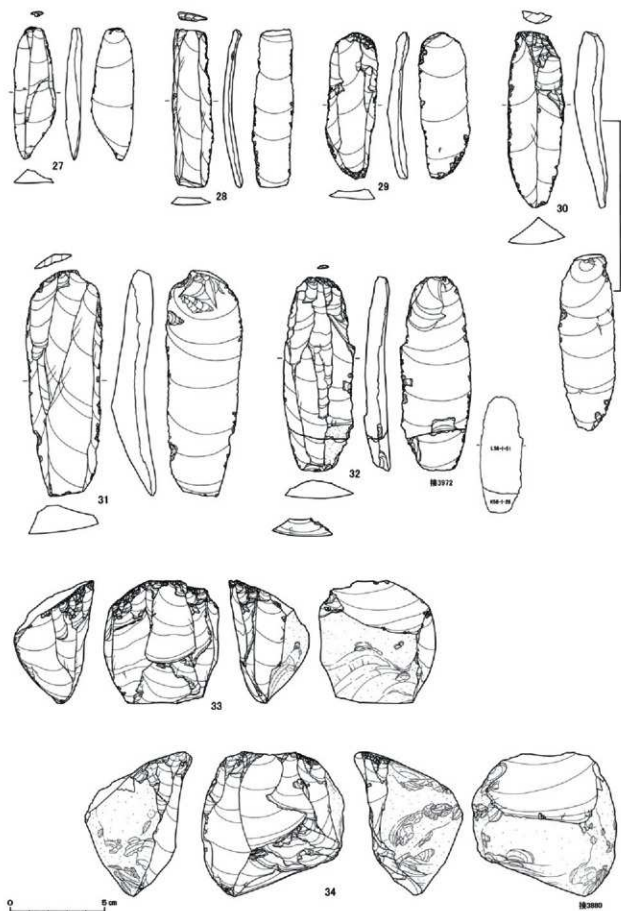
削器は表土・II層を含め11点・11個体が出土し1点を図示した。石材は全て黒曜石で特に黒曜石1が9点と多く使用されている。剥離面接合関係を有するものは1点で、尖頭器・両面調整石器の調整剥片を素材としている。

26は自然面付の分厚い剥片を素材とし両側縁に粗い剥離を主体とした加工を施している。左側縁辺下半がやや摩耗している。

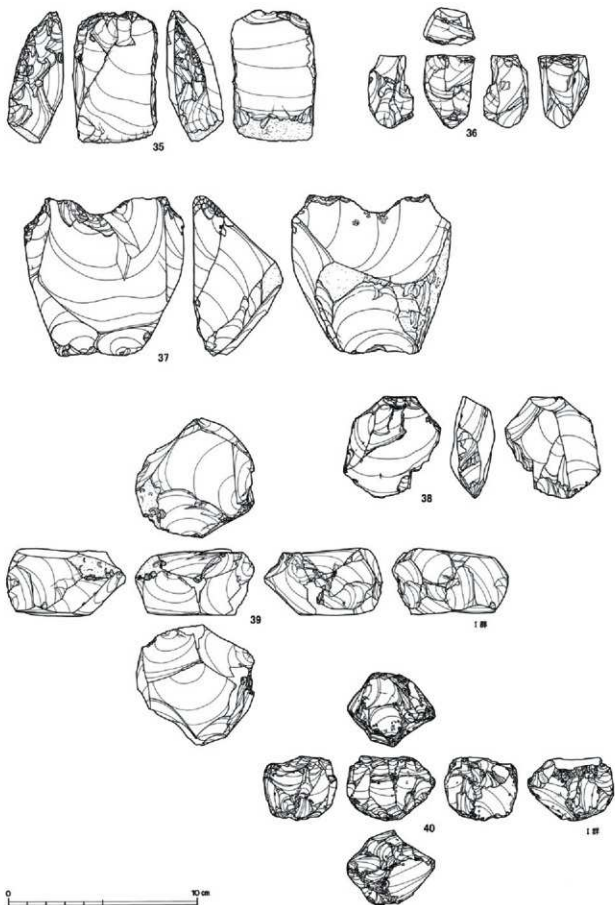
石刃(図Ⅲ-546-27-32、図版266)

石刃は表土・II層を含め49点・45個体が出土し、6個体を図示している。石材は全て黒曜石で、特に黒曜石1が30点・27個体と多い。剥離面接合関係を有するものは5点・4個体と少数で、石刃核を素材として尖頭器製作を行う母岩との接合が認められる。打面は調整打面と単剥離打面があり、両者に頭部調整が観察される。打面幅は0.5~1cm前後の小型が主体で、剥離開始部はリップが生じている。但し、やや大型の石刃にはコーン・バルブスカーが発達するものが散見される。大きさは長さ10cm以下、幅3.5cm以下が主体で、大きいものでも長さ12cm・幅4cm程度である。

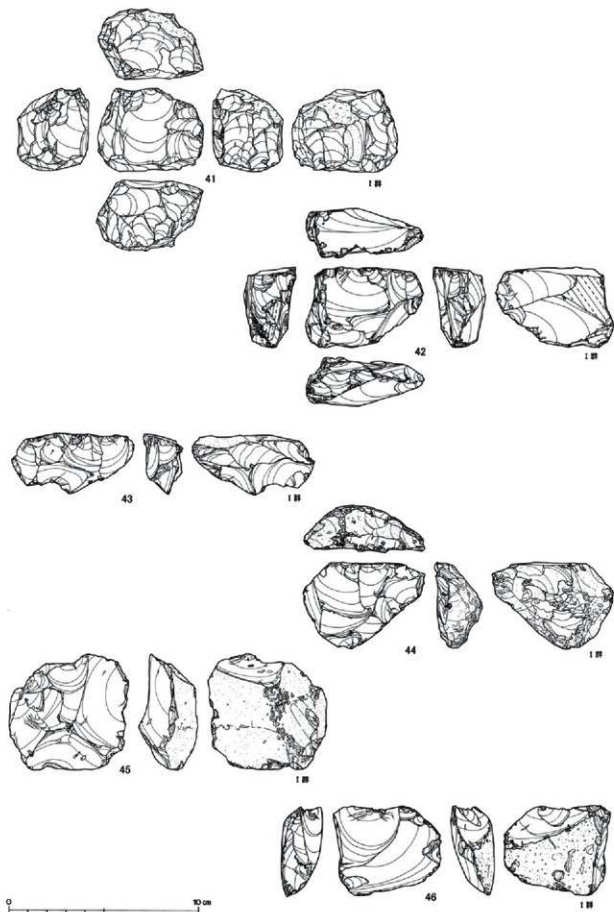
27~29は幅2.5cm以下のもの。厚さは1cm未満である。27は調整打面、29は単剥離打面でいずれも剥離開始部には薄いリップがみられる。28は母型形成を示す横方向の大型の剥離面が背面に観察される。30~32は幅3cm以上のもので、厚さは1cm以上である。いずれも単剥離打面で入念な頭部調整を受けている。剥離開始部にはコーン・バルブスカーの発達を観察できる。30・31は幅1.5cmを超える大型の打面を有す。



図Ⅲ-546 F1区の石器(5) 石刃・石刃核



図Ⅲ-547 F1区の石器(6) 石核



図Ⅲ-548 F1区の石器(7) 石核

石刃核(図Ⅲ-546-33・34、図版266)

石刃核はⅡ層から2点・2個体が出土し、全て図示した。石材は黒曜石3・4で茶色の石が使用されている。剥離面接合関係は34にみられ、打面作出剥片が接合している。2点とも直角礫を素材とし、母型形成をせず、平坦打面を作出し、細かい頭部調整を全縁に加えながら石刃剥離を進行するものと捉えられる。こうした内容は小型舟底形石器器群の石刃核に共通する特徴である。34は大きさ8cmほどの原石を素材としている。

石核(図Ⅲ-547-35～図Ⅲ-548-46、図版266・267)

石核は表土・Ⅱ層を含め28点・26個体が出土し、12個体を図示した。剥離特徴では、①打面と作業面を固定して一定方向に剥離作業を行うもの(35～38)、②多面・多方向に不規則な剥離作業を行うもの(39～41)、③正裏面に作業面を設定し多方向からの剥離作業を行うもの(42・43)、④作業面を固定し上下もしくは多方向から求心的な剥離作業を行うもの(44～46)がみられる。①には石刃技法の最終段階で幅広の剥離などが加えられて石核化したものが含まれる。②・③は白滝I群に該当するものと判断しており、9個体が出土している。白滝I群の石核はSb-49にまとまった分布がみられる。石材は全て黒曜石で、特に黒曜石1が11個体と多い。白滝I群では黒曜石1・5が多く、白滝I群以外では黒曜石1のほか黒曜石3・4の茶色の石も多くみられる。剥離面接合するものは5個体が確認された。

35は背部平坦面から側面への石核調整剥離が認められ、D3b区出土石刃核図Ⅲ-365-209に類似する。また、35の背部には横走する線状痕が観察される。36は母型形成された石刃核が剥離の進行で小型化したものと考えられる。37は作業面両端に頭部調整が加えられており、33・34と同様の特徴を持つ石核であったと考えられる。42の上部打面は節理面もしくは広い折れ面の可能性がある。45は石材が黒曜石2(梨肌)である。45・46は剥片素材である。

③ 母岩別接合資料

F1区では21,206点が出土し接合作業の結果、193個体、604点の剥離面接合資料を得ることができた。接合率は2.8%である。さらに母岩分類作業によって、母岩別資料18個体(遺物点数486点、内剥離面接合資料62個体・264点)と非母岩別剥離面接合資料131個体(遺物点数340点)に整理され、この内2個体を挿図と写真図版に掲載した。

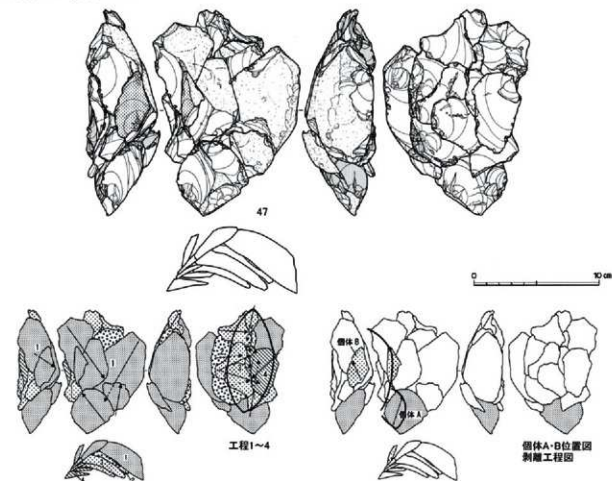
母岩別接合資料を作業内容別にみると、尖頭器・両面調整石器製作14個体(149点)、石刃技法2個体(30点)、剥片生産4個体(34点)が認められる。個体比率では尖頭器・両面調整石器製作が70.0%、石刃技法が10.0%、剥片生産が20.0%である。なお、上記した母岩別資料の個体数と点数は、2種類以上の剥離技術類型に属する場合はそれぞれの類型で集計されており、その合計は実数よりも多く算出される。F1区では単体遺物の内容から有舌尖頭器石器群、小型舟底形石器器群、白滝I群の存在が指摘されたが、母岩別接合資料で判別できたものは有舌尖頭器石器群(尖頭器・両面調整石器製作:1個体)のみであった。母岩別資料の掲載は尖頭器・両面調整石器製作関連(図Ⅲ-549)、石刃技法関連(図Ⅲ-550)の順序とした。

尖頭器・両面調整石器製作の母岩別資料(図Ⅲ-549、図版268-1)

尖頭器・両面調整石器製作母岩は、①転礫を素材とし一母岩から複数個体を製作するものと、②石刃核を素材とするものがあり、後者は石刃技法関連の母岩として掲載している。

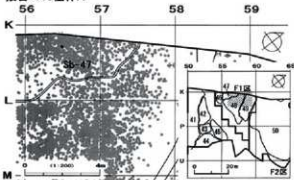
母岩別資料770、接合資料3559(図Ⅲ-549、図版268-1)

母岩770 接合3559

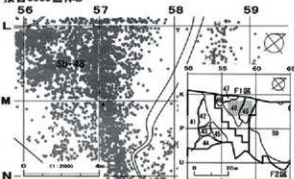


検出地	図名	図号	作業内容	割離技術種別	石種	母岩	重量
F1	770	3559	母岩770	Ⅰ A Ⅱ	Ⅰ	緑色	881.1g
56-47-48	砥石	不明	不明	不明	不明	不明	不明
母岩770		母岩770					
56-PT-3		56-PT-3					

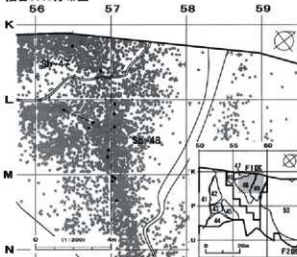
接合3559個体A



接合3559個体B

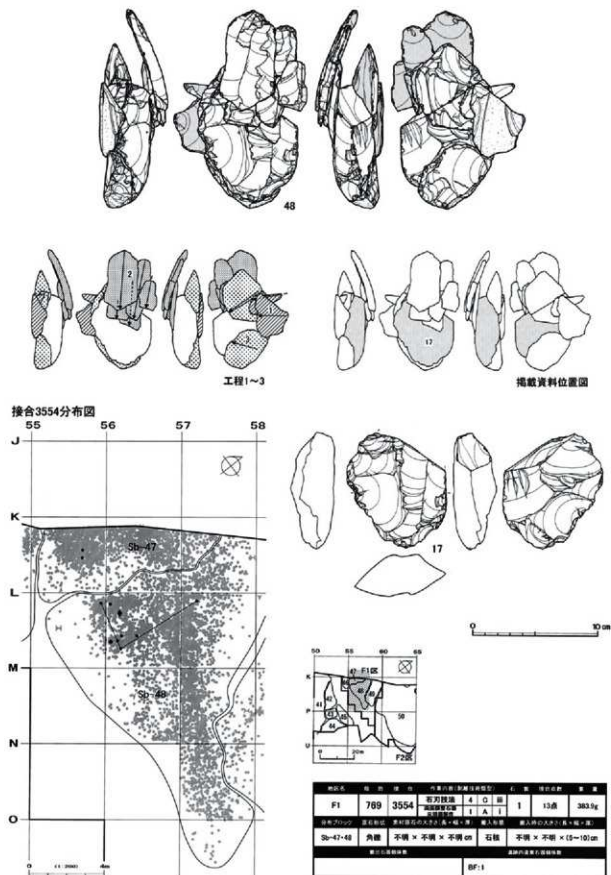


接合3559分布図



図III-549 F1区石器(8) 母岩770 接合3559

母岩769 接合3554



図三-550 F1区の石器(9) 母岩769 接合3554

母岩別資料 770 は接合資料 3559 および非接合剥片 4 点で構成され、総点数は 22 点、総重量は 786.1 g である。

素材 47 は接合資料 3559 で、18 点 (16 個体) が接合し、重量は 581.1 g である。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiii 類に分類される。工程 1 は大型剥片の粗割り段階で、個体 A・B の素材が剥離されている。個体 A・B とも両面調整石器を製作したと推測される。工程 2~4 は核素材の尖頭器製作作業である。工程 2 では打瘤の発達する厚手の剥離で自然面・粗割り剥離面を除去し、側縁部の厚みを減じている。工程 3・4 は打瘤の発達のない薄型平坦剥離を器体中軸まで取り込むように加え、器体を徐々に扁平化している。製作尖頭器・両面調整石器は全て出土がなく、剥片個体のものは大きさ等も不明である。核個体の尖頭器については長 13.7 × 幅 6.3cm 前後と復元できる。

分布 Sb-47 から Sb-48 北西部にかけて分布している。

石刃技法の母岩別資料 (図 III-550、図版 268-2)

石刃技法母岩は、石刃核を素材に尖頭器が製作されるものである。

母岩別資料 769、接合資料 3554 (図 III-550、図版 268-2)

母岩別資料 769 は接合資料 3554~3558 および非接合剥片 13 点で構成され、総点数は 35 点、総重量は 542.6 g である。

素材 48 は接合資料 3554 で、13 点 (10 個体) が接合し、重量は 383.9 g である。石質は黒曜石 1 で角礫を素材とし、石核の状態で遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 角礫原石の平滑な自然面を背部に設定し、打面調整・頭部調整を加えながら石刃剥離を行う。さらに石刃剥離後の石刃核を素材として両面調整石器を製作している。剥離技術類型は前半が 4Ciii 類、後半が 1Ai 類に分類される。石刃は幅 2.5~4cm、厚さ 0.5cm 前後の薄手のものが剥離され、石核は扁平な形状まで消費されている。その後正裏両面に打瘤の発達する厚手の剥離を加えて、両面調整石器 17 を製作している。石器は加工途中で破損したため遺棄されたとみられる。

分布 Sb-47 から Sb-48 北西部にかけて分布している。

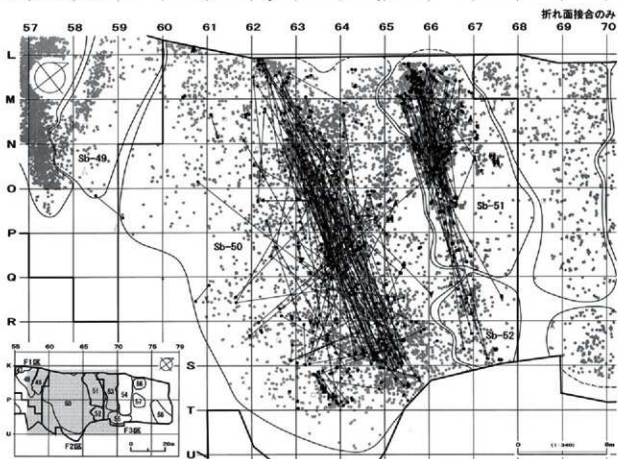
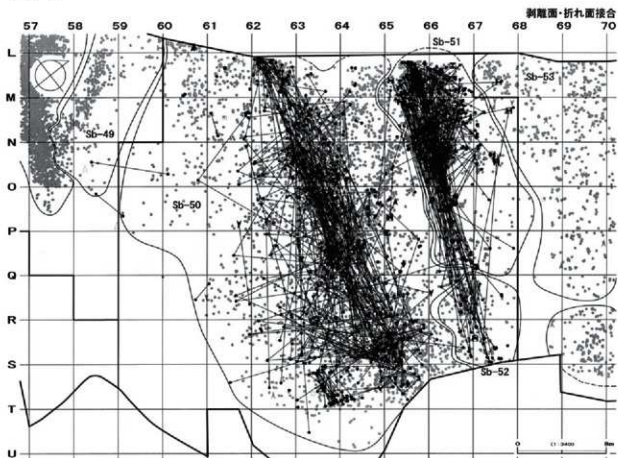
(7) F2区 (Sb-50~52) の石器

① 石器ブロックの分布

ブロック間接合状況 (図 III-551)

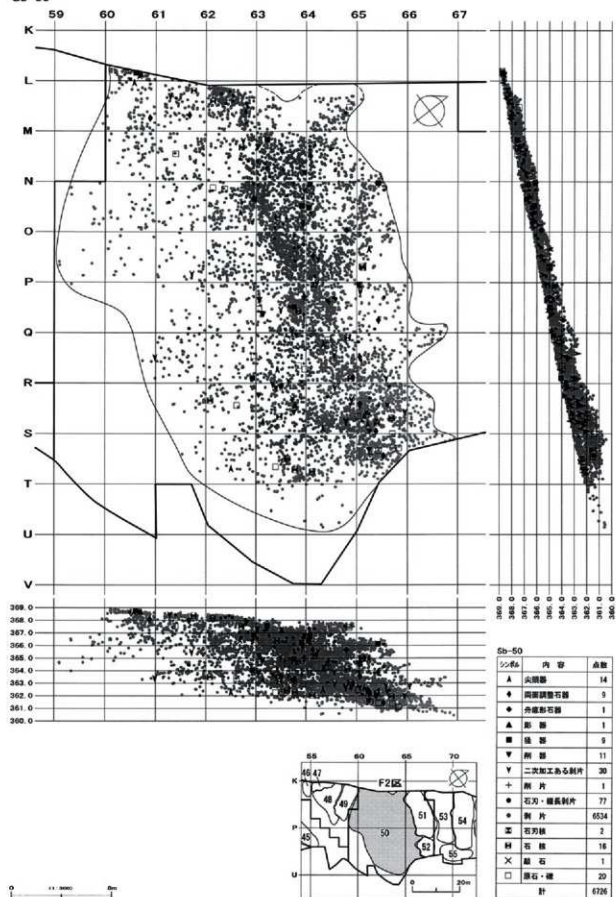
F2区は調査区北東部、F区の中央部に位置し、西側をF1区、東側をF3区と接している。ブロック範囲の設定はⅢ章2節1項で説明したように、密度分布、組成器種の分布、接合資料の分布を根拠としているが、Sb-50については分布が集中部から切れ間なく散発的に広がるため、広い範囲を括る結果となった。なお、図 III-551 の折れ・剥離面接合資料の接合線を表示した分布図であるが、隣接区域に分布する遺物であっても当該区域遺物と接合関係を有する資料については遺物点・接合線を表示している。

各ブロックともブロック内接合を主体とし、特に遺物集中域を中心とした接合関係が認められる。但し、Sb-50については接合関係の大半が傾斜方向に認められる状況であり、ソリフラクションの影響を受け本来遺棄された原位置から地形に沿って大きく移動したと判断できる。ブロック間接合は主に Sb-51・52 間で濃密に認められ、Sb-50 との間には殆ど確認することができなかった。



図Ⅲ-551 F2区 接合資料分布図

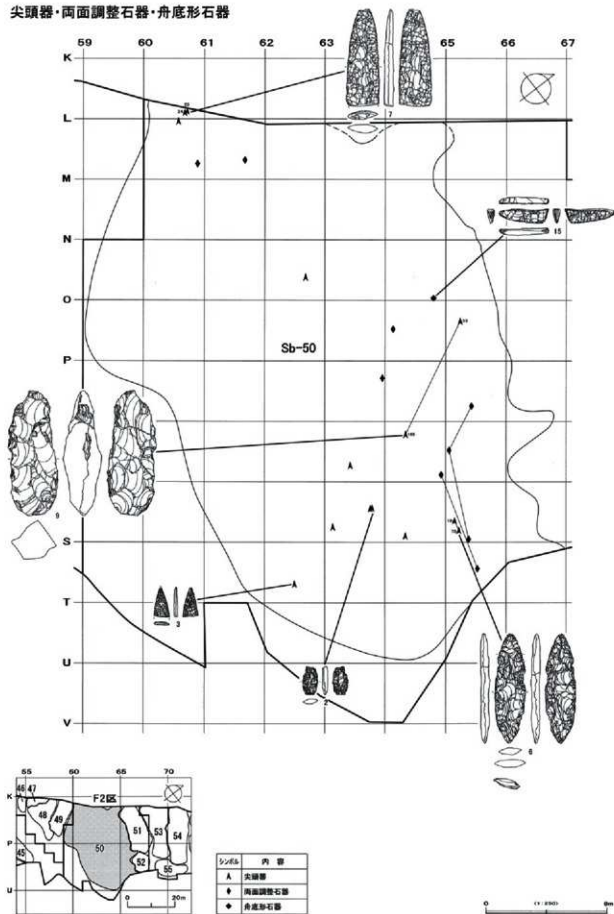
Sb-50



図Ⅲ-552 Sb-50 分布状況(平面・断面図)

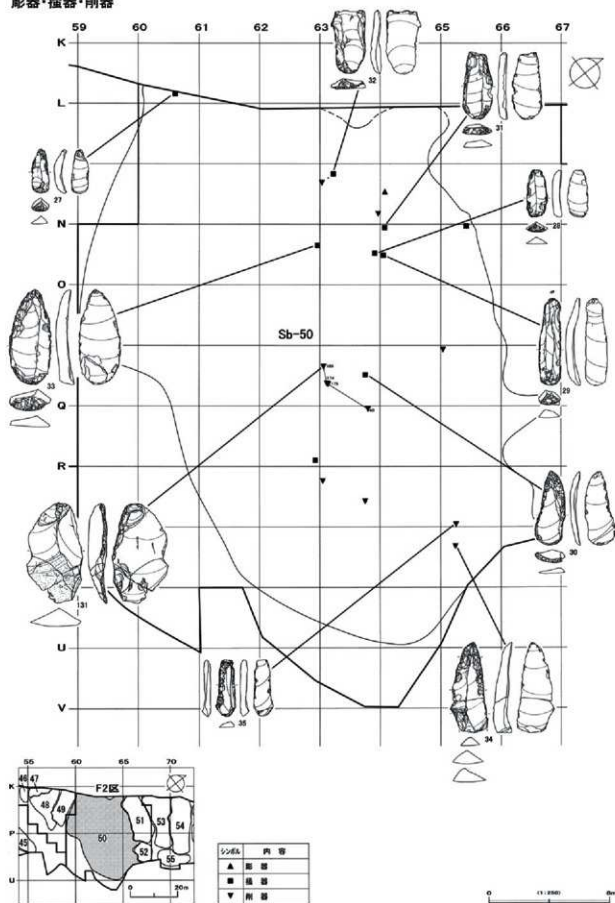
2 遺物

尖頭器・両面調整石器・舟底形石器



図Ⅲ-553 Sb-50 出土遺物の分布(1)

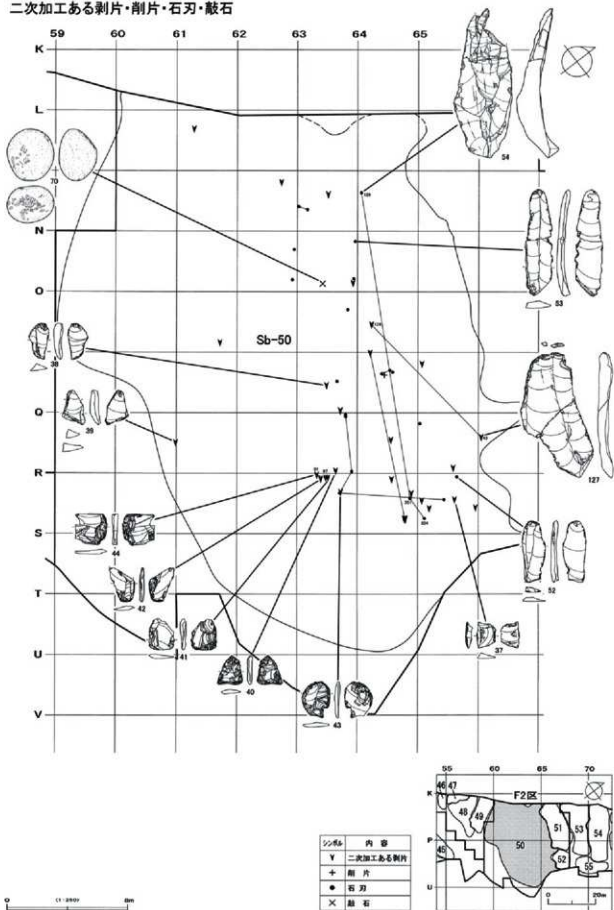
彫器・搔器・削器



図III-554 Sb-50 出土遺物の分布(2)

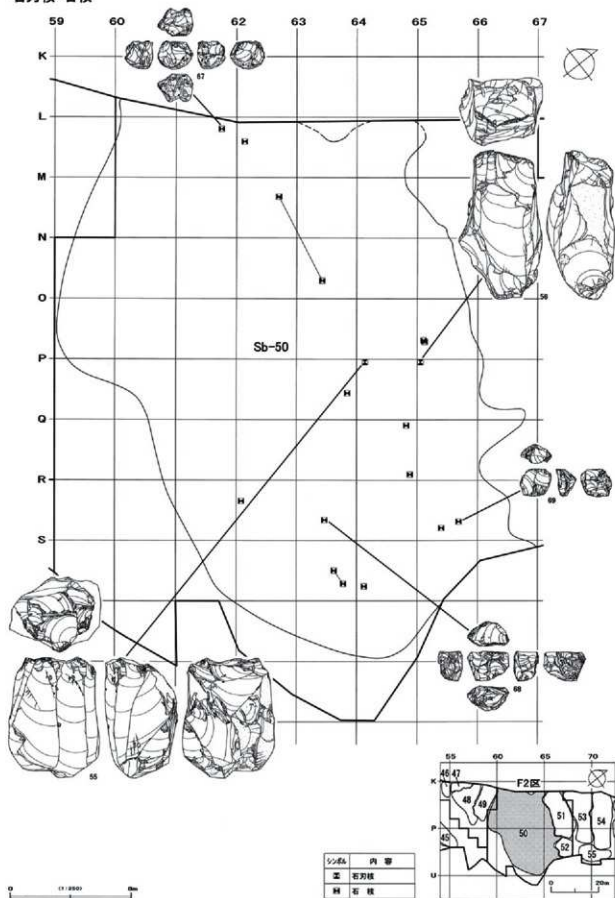
2 遺物

二次加工ある剥片・削片・石刃・敲石



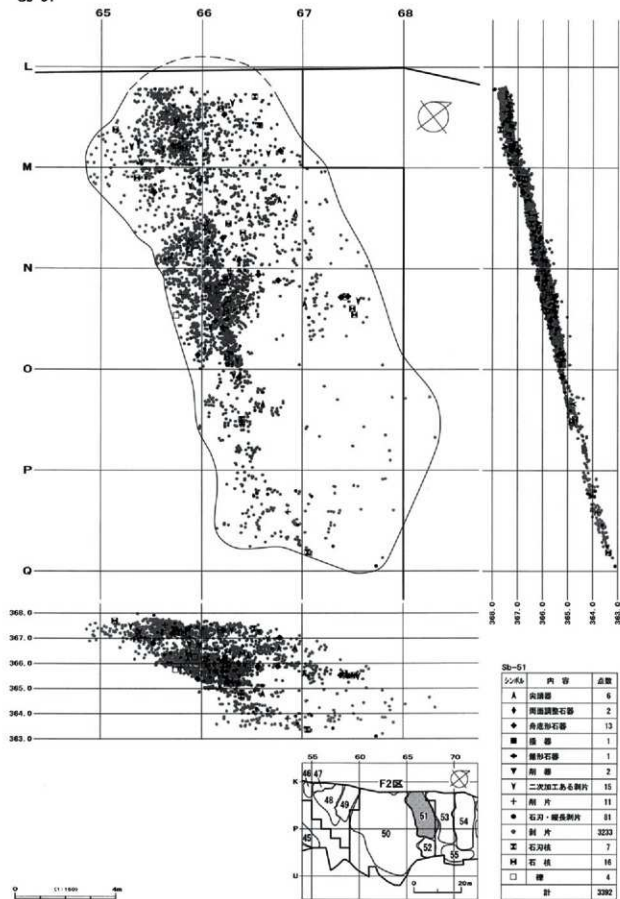
図三-555 Sb-50 出土遺物の分布 (3)

石刃核・石核



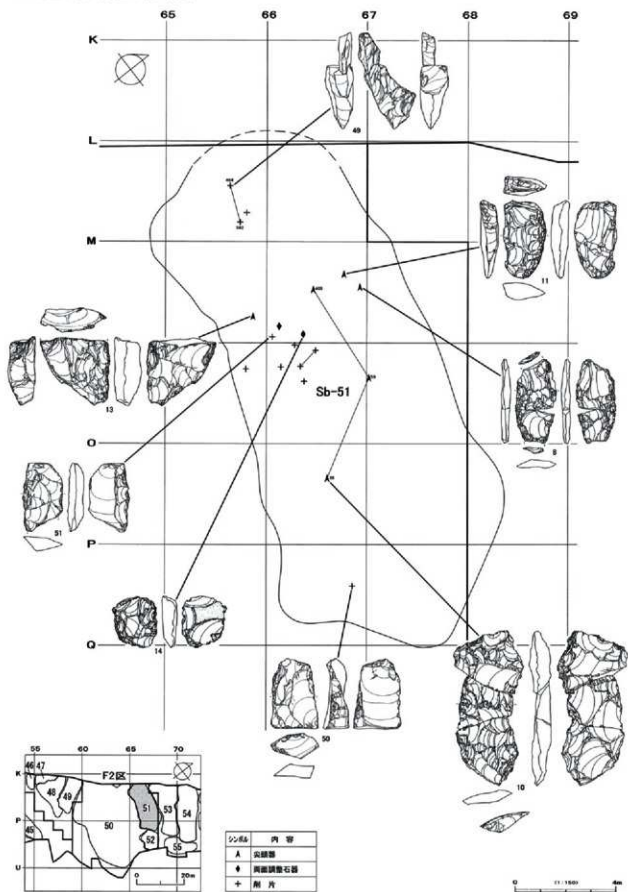
図Ⅲ-556 Sb-50 出土遺物の分布 (4)

Sb-51



図Ⅲ-557 Sb-51 分布状況(平面・断面図)

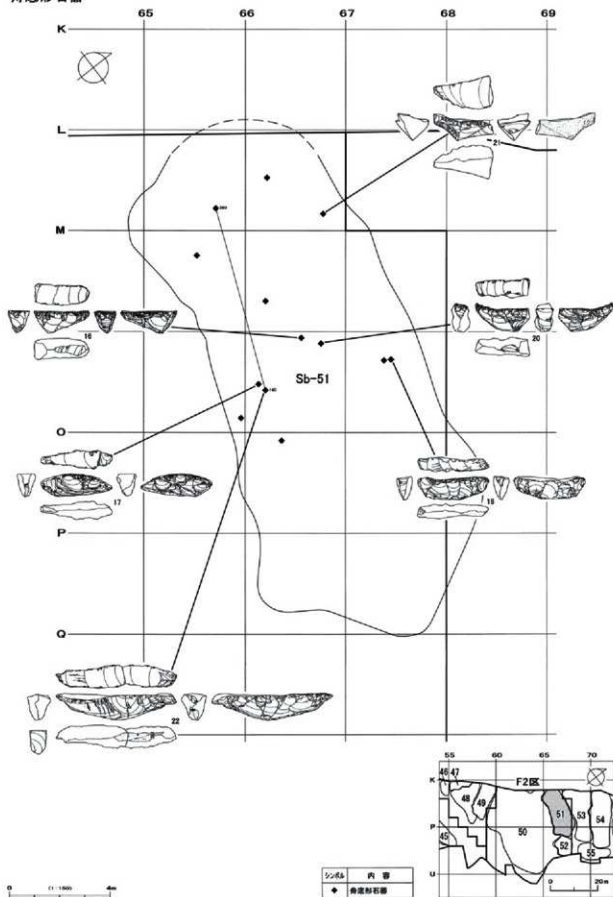
尖頭器・両面調整石器・削片



図III-558 Sb-51 出土遺物の分布(1)

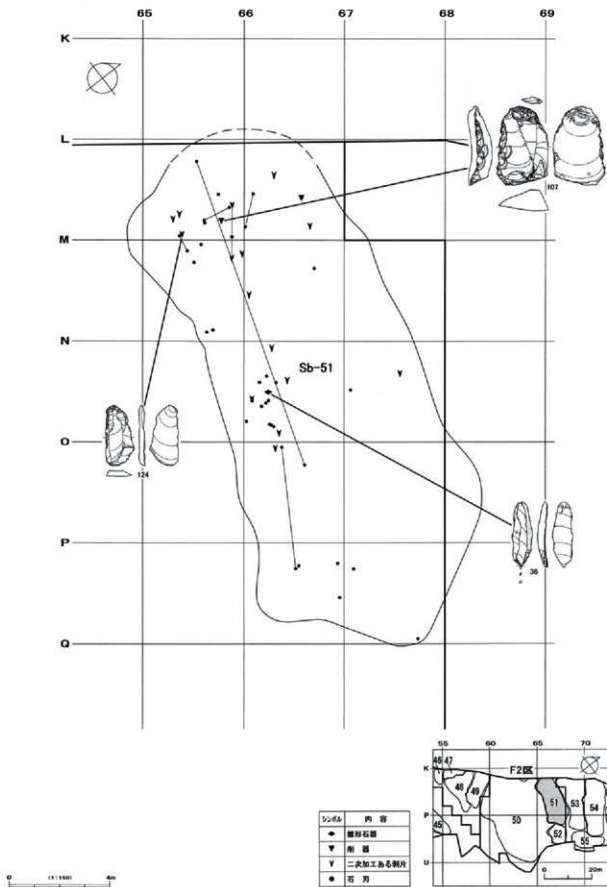
2 遺物

舟底形石器



図Ⅲ-559 Sb-51 出土遺物の分布(2)

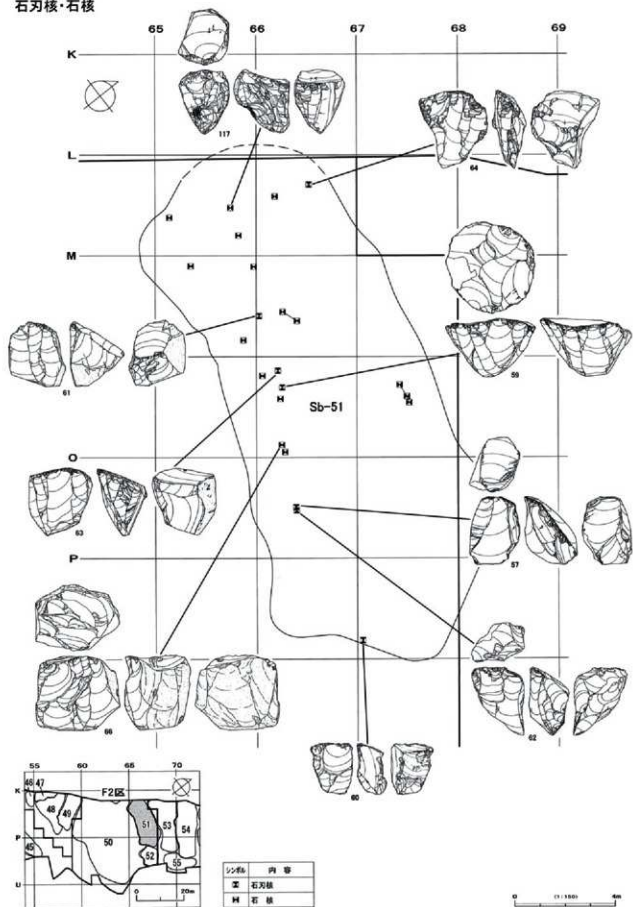
削器・鐘形石器・二次加工ある剥片・石刃



図Ⅲ-560 Sb-51 出土遺物の分布 (3)

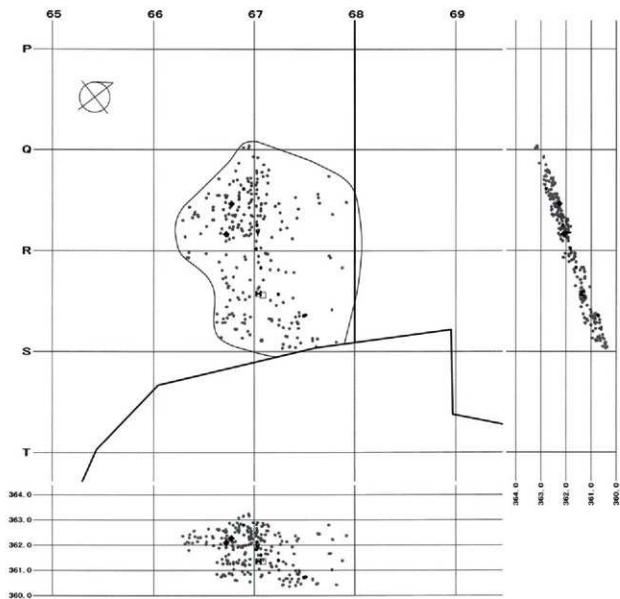
2 遺物

石刃核・石核

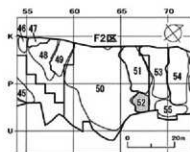


図三-561 Sb-51 出土遺物の分布(4)

Sb-52



Sb-52		
シンボル	内容	点数
◆	青澄和石器	2
Y	二次加工ある割片	1
●	石刃・硬質割片	7
○	割片	236
H	石器	1
□	溝	1
計		248



図III-562 Sb-52分布状況(平面・断面図)

後述するようにF2区では白滝I群、有舌尖頭器石器群、小型舟底形石器石器群、縄文時代石器群の四つの石器群が認められた。石器群ごとの分布状況は、白滝I群がSb-50の北西部と南東部に、有舌尖頭器石器群がSb-50に、小型舟底形石器石器群がSb-51に、縄文時代石器群がSb-50の南西部に、まとまりが認められた。この内、母岩別接合資料が良好に復元できたのは有舌尖頭器石器群(15母岩)と小型舟底形石器石器群(20母岩)で、前者はSb-50、後者はSb-51にその大半が分布している。こうしたブロック単位で石器群が異なる状況から、上述のようなブロック間の排他的な関係が生じたと捉えられる。

Sb-50(図Ⅲ-552~556)

Sb-50はF2区範囲の大半を占め、規模は35.9×26.9m、面積は761.3㎡を測る。出土総点数は6,726点・54,632gで、その内剥片が6,534点・97.1%、石刃・縦長剥片が77点・1.1%を占める。また剥片の845点(12.9%)、石刃・縦長剥片の37点(48.1%)に剥離面接合関係がみられる。遺物分布はL62区からS65区にかけてまとまって認められる。しかし、地形傾斜方向に連なる帯状の分布であり、個別に形成されていた分布集中範囲がソリフラクションの影響を受けて一つの分布にまとまった可能性を考慮する必要がある。

主な出土遺物には尖頭器・両面調整石器、搔器、削器、二次加工ある剥片、石刃核・石核、敲石があり、白滝I群、有舌尖頭器石器群、縄文時代石器群が含まれる。石器群毎の分布傾向は、①有舌尖頭器石器群【尖頭器・両面調整石器、石刃、石刃核、搔器】はブロックの遺物集中範囲、②縄文時代石器群【二次加工ある剥片(薄手剥片に平坦剥離が加えられるもの)、側縁鋸歯状尖頭器(Ⅳ類)】はブロック南側のR63区周辺に主にまとまり、③白滝I群【二次加工ある剥片、サイコロ状石核】はブロック中央部のP~Rラインの間に散発的に認められる。広いブロック範囲の中で石器群毎に特定の分布範囲を有する状況が把握できる。

Sb-51(図Ⅲ-557~561)

Sb-51はF2区北部に位置し、規模は21.7×9.4m、面積は162.9㎡を測る。出土総点数は3,392点・31,622gで、その内剥片が3,233点・95.3%、石刃・縦長剥片が81点・2.4%を占める。また剥片の590点(18.2%)、石刃・縦長剥片の39点(48.1%)に剥離面接合関係がみられる。遺物分布はL65区およびM・N65・66区の2か所にまとまって認められる。

主な出土遺物には尖頭器・両面調整石器、舟底形石器、削器、削片、石刃核・石核があり、これらは主に小型舟底形石器石器群に属するものと捉えられる。各器種とも上記した2か所のまとまりに概ね偏りなく分布している。

Sb-52(図Ⅲ-562)

Sb-52はF2区東部の段丘崖縁辺に位置し、規模は8.6×7.3m、面積は46.8㎡を測る。出土総点数は248点・2,257.8gで、その内剥片が236点・95.2%、石刃・縦長剥片が7点・2.8%を占める。また剥片の30点(12.9%)、石刃の5点(71.4%)に剥離面接合関係がみられる。遺物分布はQ66・67区にややまとまって認められる。

主な出土遺物は舟底形石器、石核がある。出土遺物内容や接合状況から、小型舟底形石器石器群の遺物が主体と考えられる。

② 出土石器(表Ⅲ-1~7)

出土した遺物は表土・Ⅱ層をあわせ、石鏃(3点)、尖頭器(Ⅰ類21点・Ⅱ類4点・Ⅳ類4点)、両面調整石器(Ⅰ類19点)、舟底形石器(Ⅰa類1点・Ⅱa類26点・Ⅱb類1点・Ⅱ類1点)、彫器(1点)、

搔器(13点)、削器(16点)、錐形石器(2点)、二次加工ある剥片(58点)、石刃(72点)、縦長剥片(108点)、石刃核(11点)、石核(42点)、削片(20点)、剥片(32,780点)、敲石(2点)、原石(7点)、礫(20点)がある。総点数は33,232点、総重量は136,205.1gである。層位・取り上げ方法別の内訳はⅡ層点取り遺物10,367点・88,513.0g、表土一括遺物6,724点・39,195.0g、Ⅱ層一括遺物16,131点・6,669.4g、ボサ遺物9点・1,781.6g、排土遺物1点・46.1gである。

F2区は出土遺物の内容から複数の石器群が混在する区域と判断される。そのため、分布状況、接合状況、石器形態、製作技術等から検討を行い石器群の分離に努めた。結果まとまったものとして、白滝I群(小型不定形石器石器群)、有舌尖頭器石器群、小型舟底形石器石器群、縄文時代(草創期?)石器群の四石器群への区分が可能となった。但し、剥片など技術形態的特徴の乏しいもの、石器ブロック外のもの、非母岩・非接合資料については、石器群分離の困難なものが多数存在する。

石器群別で主な器種組成をみると、白滝I群は二次加工ある剥片(裏面微細加工石器含む)・石核など、有舌尖頭器石器群は尖頭器・搔器・削器・石刃・石刃核など、小型舟底形石器石器群は尖頭器・舟底形石器・削器・錐形石器・石刃・石刃核・石核など、縄文時代石器群は石鏃・二次加工ある剥片(石器素材)が認められる。なお有舌尖頭器石器群については有舌尖頭器自体の出土はみられないものの、尖頭器の製作技術(IAii・iii・iv類)や搔器形状から当該石器群と判断した。

石器石材には黒曜石(33,217点)、頁岩(7点)、安山岩(1点)、チャート(1点)、めのう(1点)、泥岩(1点)、砂岩(4点)がみられる。黒曜石が圧倒的に多く、99.9%以上を占める。黒曜石を石質細分すると、黒曜石1(3,634点・33.4%)、黒曜石2(150点・1.4%)、黒曜石3(651点・6.0%)、黒曜石4(4,890点・44.9%)、黒曜石5(1,559点・14.3%)の割合となる。括弧内の比率は石質を確認した資料数を分母に算出している。石器群別・黒曜石石質別でみると、白滝I群は(黒曜石1:21点・72.4%、黒曜石3:8点・27.6%)で黒曜石1が主体、有舌尖頭器石器群は(黒曜石1:285点・55.6%、黒曜石2:103点・20.1%、黒曜石3:4点・0.1%、黒曜石4:1点・0.1%、黒曜石5:119点・23.2%)で黒曜石1・5が主体、小型舟底形石器石器群は(黒曜石1:6点・0.9%、黒曜石3:12点・1.8%、黒曜石4:658点・97.3%)で黒曜石4が主体であった。

石器群ごとの分布状況は、白滝I群がSb-50の北西部と南東部に、有舌尖頭器石器群がSb-50に、小型舟底形石器石器群がSb-51に、縄文時代石器群がSb-50の南西部に、まとまりが認められる。

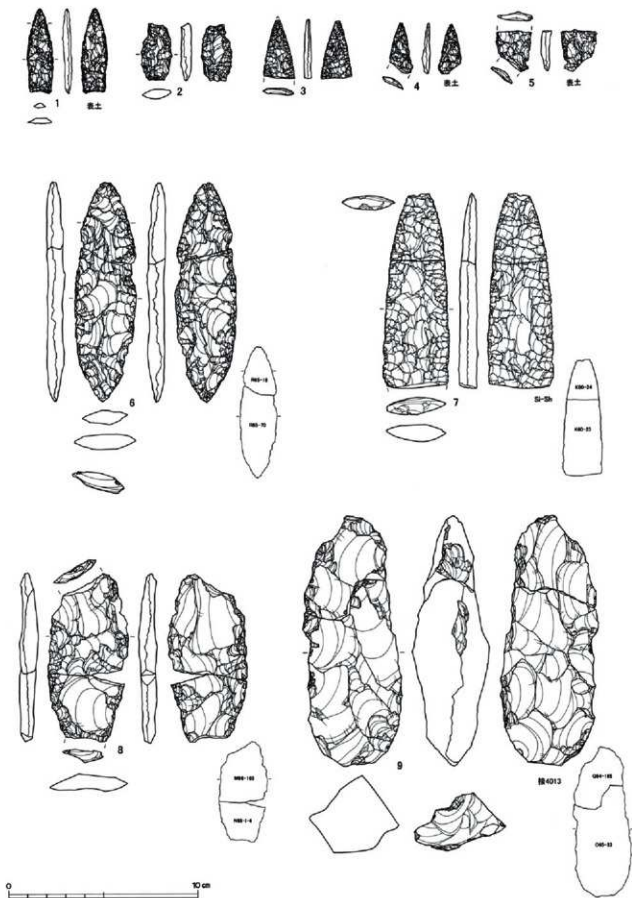
石 鏃(図Ⅲ-563-1、図版269)

石鏃は表土・Ⅱ層を含め3点・2個体が出土し1点を図示した。石材は全て黒曜石である。形態は2点とも長身の三角形で基底部は緩やかに内湾する。

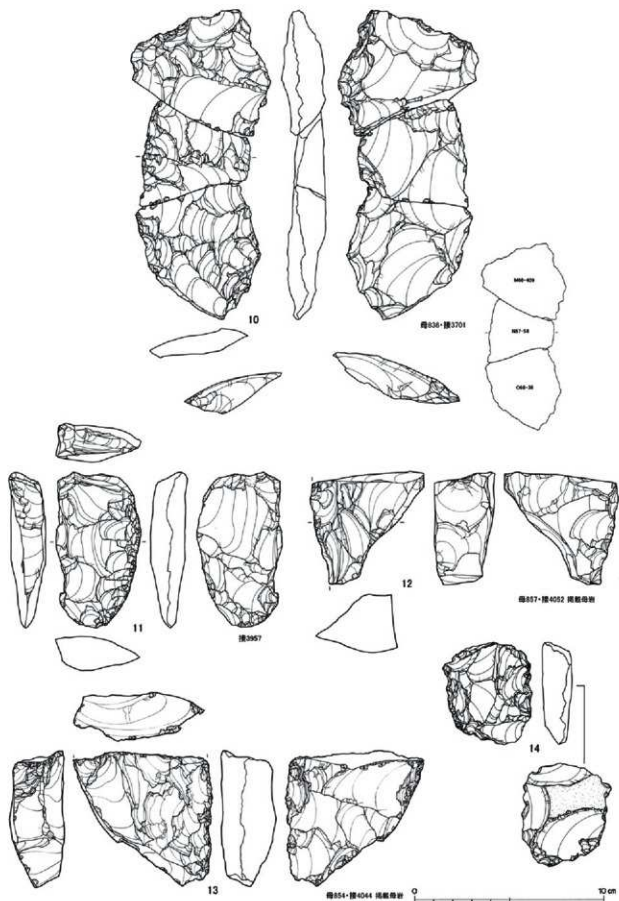
尖頭器(図Ⅲ-563-2~図Ⅲ-564-13、図版269・270)

尖頭器は表土・Ⅱ層を含め29点・23個体が出土し12個体を図示した。類型別の出土点数は、I類(舌部・削片剥離のないもの)が15個体、Ⅱ類(削片剥離があるもの)が4個体、Ⅳ類(側縁鋸歯状尖頭器)が4個体である。石材は頁岩が1個体ある他は全て黒曜石で、I類は黒曜石1・4・5と頁岩が、Ⅲ類は黒曜石4のみ、Ⅳ類は黒曜石4が多く認められた。特に黒曜石1・5と頁岩はSb-50にのみ分布し有舌尖頭器石器群と関係することが考えられる。剥離面接合関係を有するものは8個体あり、I類では両面調整石器で搬入し核素材の尖頭器を製作する資料、Ⅲ類では削片と接合する資料などが認められる。

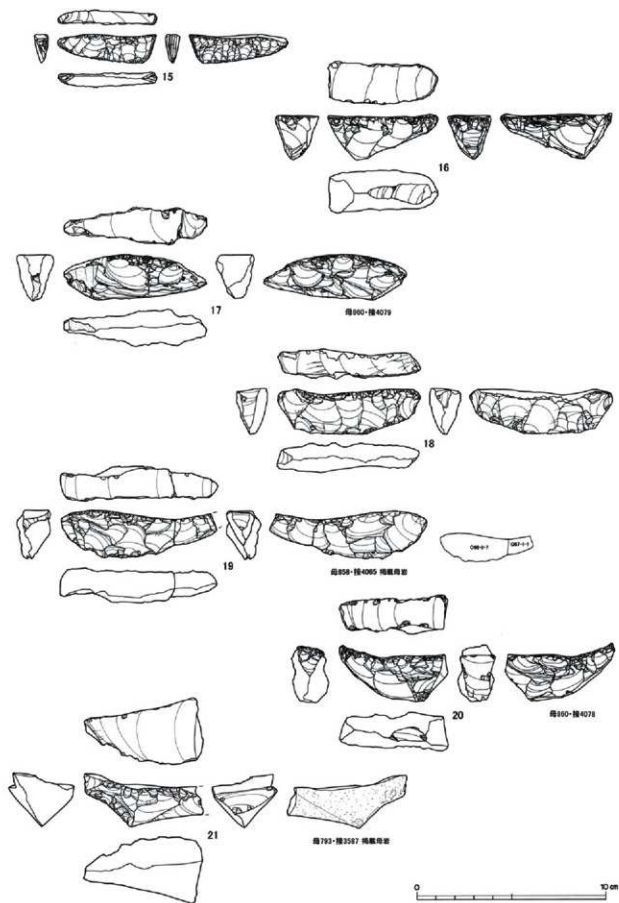
2~5はⅣ類の側縁鋸歯状小型尖頭器である。2は器体がねじれて素材面が残る不整形だが、深く抉る様な小剥離による鋸歯縁加工が認められる。3は右上がりの斜行剥離が施されている。4はやや細身で平坦剥離主体のようである。鋸歯はやや弱い。



図Ⅲ-563 F2区の石器(1) 石楯・尖頭器



図Ⅲ-564 F2区の石器(2) 尖頭器・両面調整石器



図Ⅲ-565 F2区の石器(3) 舟底形石器

6～10はⅠ類尖頭器である。6はやや細身で平坦剥離を主体に器体整形されている。7は頁岩製で入念な右下がりの斜並行剥離により器体を扁平に整形している。9は粗い加工段階で先端部が破損し再加工を施したもののだが、数回剥離した段階で遺棄している。幅は狭いが器体全体に厚みが残っている。10も先端部の破損後再加工が施されているが、再び破損したため遺棄されている。

11～13はⅡ類で側面に削片剥離が施されるものである。いずれも折れ面を削片剥離の打面としている。11には削片剥離以前の器体調整剥片、12・13には削片が接合しており、尖頭器で搬入し遺跡内で削片を剥離したことが分かった。12・13は厚さが3cm前後、幅10cm以上的大型尖頭器を母型としている。11・12は正裏面に対し直交するように削片剥離が行われるが、13は最終的に正面側に傾くように剥離が進行している。

両面調整石器(図Ⅲ-564-14、図版270)

両面調整石器は表土・Ⅱ層を含め20点・15個体が出土し1個体を図示した。そのほとんどが粗い加工による不整形のものか破損品であり、尖頭器製作過程で作業が困難となり遺棄されたものと考えられる。石材は全て黒曜石で特に黒曜石4が9個体と多い。

14は上端部に折れ面がみられ、これを正面から裏面への剥離で除去した後、正面側の剥離で長幅比1に近い形状に整形している。破損した尖頭器を再加工したことが考えられる。

舟底形石器(図Ⅲ-565-15～図Ⅲ-567-26、図版270・271)

舟底形石器は表土・Ⅱ層を含め29点・26個体が出土し12個体を図示した。器種類型ではⅠa類(小型で幅が4～8mm・黒曜石4多)が1個体、Ⅱa類(加工が粗く15cm以下、主に10cm以下)が23個体、Ⅱb類が1個体、Ⅱ類で細別ができなかったものが1個体ある。Ⅰa・Ⅱa類は小型舟底形石器器群の資料と考えられ、ほとんどがこれに該当する。石材は全て黒曜石で、黒曜石3・4の茶色が24個体と大多数を占める。剥離面接合関係を有するものは20個体で全てⅡa類である。接合状況からは、①剥離技術4Aiv類(石刃技法で母型形成がなく、平坦打面・頭部調整のもの)の打面作出削片や石刃・縦長削片素材のもの、②遺跡内で生産された削片素材のもの、③搬入した製品を加工するもの、が認められ、特に①が多くみられる。舟底形石器の分布は区域西側のブロックであるSb-51・52にまとまっている。

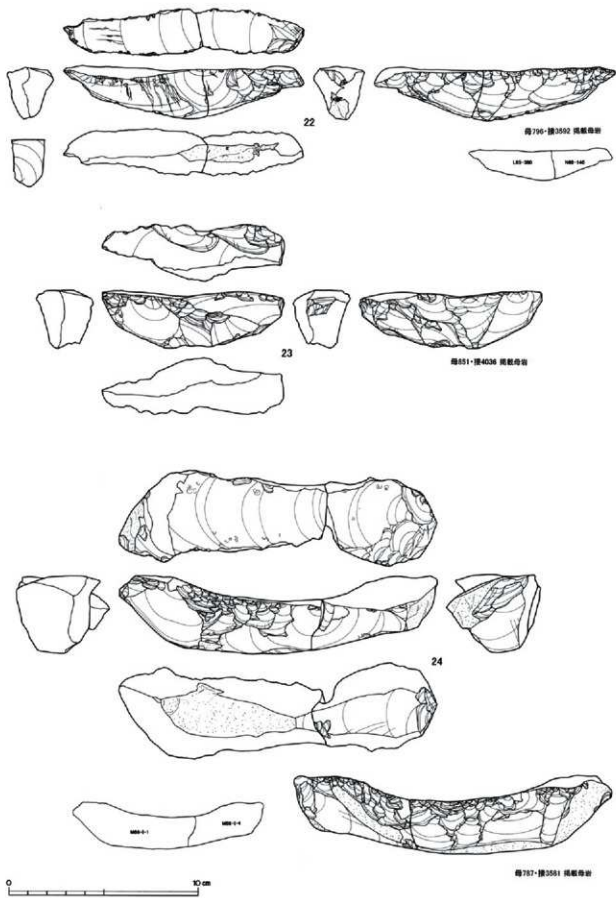
15はⅠa類(加工が精緻で幅が4～8mm・黒曜石4多)である。正面側に桶状剥離が認められ、ここを最大高とし逆端部側へ収斂していく。

16はⅠb類としたもの。甲板面が平坦で縁辺は丁寧に調整され、甲板縁の上面観は直線的である。正面側甲板縁の端部が摩耗している。

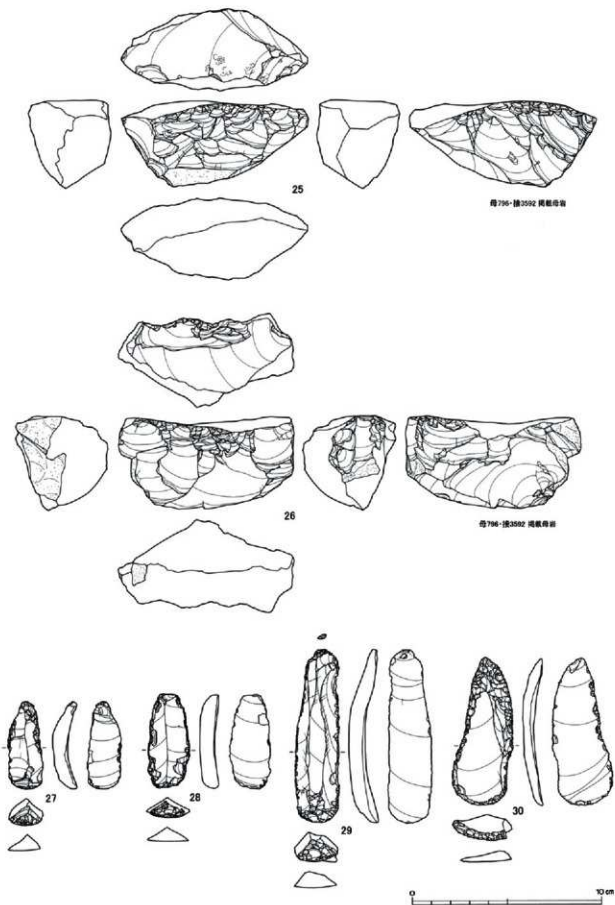
17～26はⅡa類である。17は甲板面が山なりに湾曲している。18は甲板面の素材剥離面が右側面下縁からの剥離を切っており、尖頭器・両面調整石器から剥離された削片を素材とした可能性がある。19・21～26は4Aiv類の石刃技法母岩に接合するもので、19・23・24・26は打面作出削片、21・22・25は粗削段階の縦長削片を素材としている。21は片側面加工の段階で破損している。23は左側面正面側下方からの剥離が舟底形状を大きく損ねている。24～26の甲板面には縁辺から5mm以上内側の範囲にパンチ痕が顕著に観察でき、大型打面・厚手の調整削片剥離により舟底形石器の幅を大きく減少させる狙いがあったと推測される。しかし、25・26などはヒンジの発生や縁辺部の鈍角化が原因し、加工途中で遺棄されたようである。

掻器(図Ⅲ-567-27～図Ⅲ-568-33、図版271)

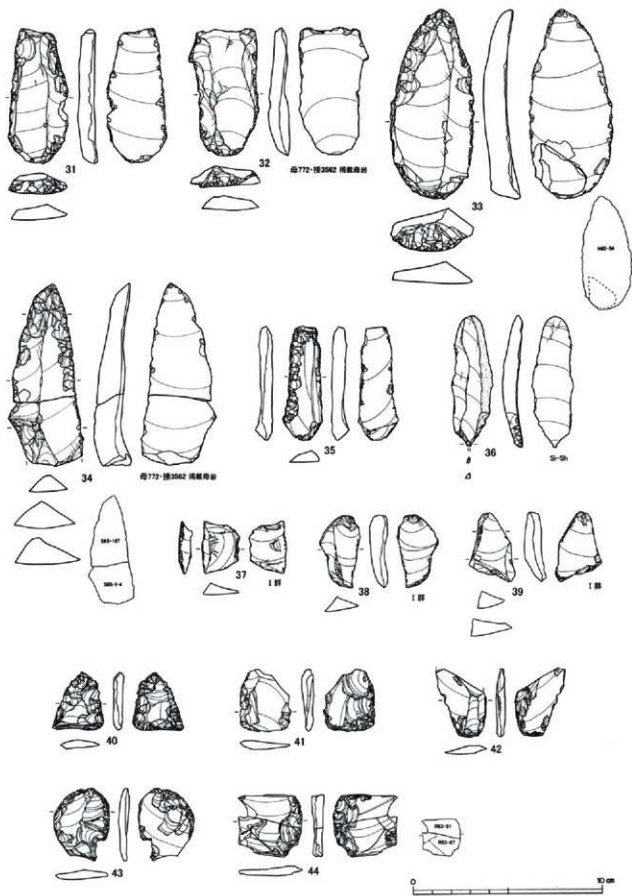
掻器はⅡ層から13点・12個体が出土し7個体を図示した。石材は全て黒曜石で、黒曜石1が多く9個体に使用されている。剥離面接合関係を有するものは1点で、搬入品が主体と考えられる。素材



図Ⅲ-566 F2区の石器(4) 舟底形石器



図Ⅲ-567 F2区の石器(5) 舟底形石器・擗器



図Ⅲ-568 F2区の石器(6) 擗器・削器・錐形石器・二次加工ある剥片

は大多数が石刃である。特徴的な形態のものとして基部が尖頭形に加工されるもの(30・31・33)が認められる。基部尖頭形搔器は上白滝2遺跡Sb-1・2(鈴木 2000)、幕別町札内N遺跡スポット4(大矢 2000)、富良野市東麓郷1遺跡(杉浦 1987)、千歳市メボシ川2遺跡I群(田村 1983)、北見市水口遺跡(畑・田原 1983)などで有舌尖頭器石器群と忍路子型細石刃核石器群に共存することが確認されている。搔器の大多数はSb-50に分布しており有舌尖頭器石器群に属すると考えられる。

27・28は小型のもの。27の刃部調整剥離末端部付近には軽微なパンチ痕が観察される。パンチ痕が認められたのは27のみである。28・29の両側縁には微細剥離が連続している。30・33は平坦剥離により基部末端が尖頭形に加工されている。31の基部は欠損するが尖頭形を呈したと推測できる。また、31・33は表面に多方向の細かな傷が顕著に観察できる。32は掲載母岩772の資料で、石刃核56と接合する。母岩772では母型形成し頻繁な打面調整・頭部調整を施す石刃技法が復元されている。削器(図Ⅲ-568-34・35、図版271)

削器は表土・Ⅱ層を含め16点・12個体が出土し2個体を図示した。石材は全て黒曜石で黒曜石1・4が多く使用されている。剥離面接合関係を有するものは4点で、3点が石刃技法母岩、1点が縦長志向剥離の接合資料に接合している。素材は石刃・縦長剥片もしくは母型調整剥片である。

34は下端部欠損のため削器としたが基部尖頭形搔器の可能性もある。35は左側縁に平坦剥離による緩斜度調整、右側縁に小型剥離による急角度の連続的な調整が加えられ、右側縁中央部が著しく摩耗し潰れている。

錐形石器(図Ⅲ-568-36、図版271)

錐形石器は表土・Ⅱ層を含め2点・2個体が出土し1個体を図示した。石材は黒曜石1と頁岩がある。剥離面接合関係を有するものはみられない。素材はいずれも石刃である。

36は頁岩製で素材打面側に錐形突出部を作出している。36はSb-51出土で小型舟底形石器石器群に共存すると考えられる。

二次加工ある剥片(図Ⅲ-568-37~44、図版272)

二次加工ある剥片は表土・Ⅱ層を含め58点・47個体が出土し8個体を図示した。石材は全て黒曜石である。剥離面接合するものは16個体あり、石刃技法母岩、尖頭器製作母岩、剥片生産母岩などに接合する。素材は石刃・剥片・調整剥片があり大きさ・形状なども多様である。

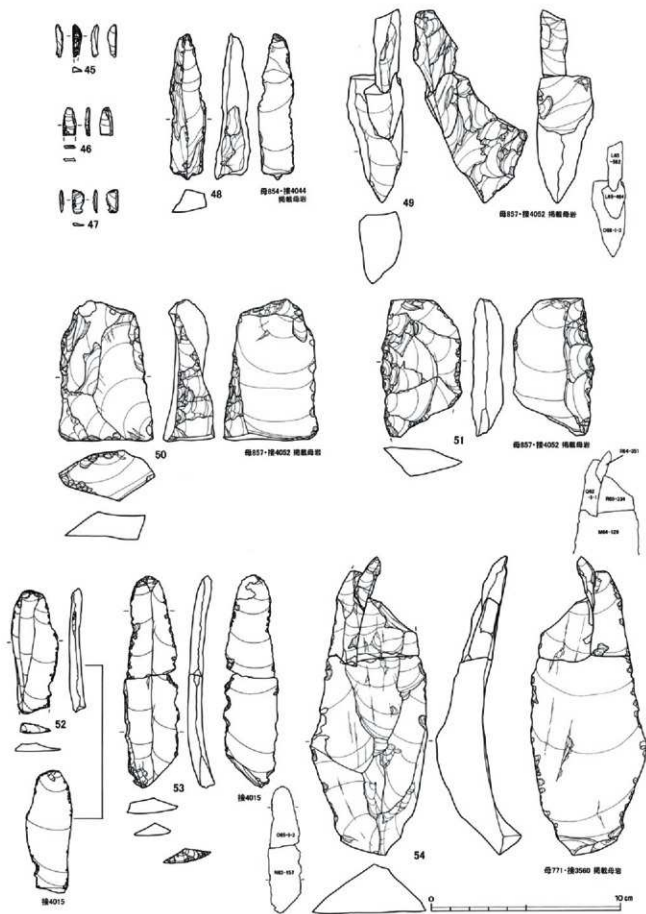
二次加工ある剥片で石器群が判別できたものは、白滝I群が3個体、小型舟底形石器石器群が6個体、縄文時代石器群が6個体である。白滝I群と縄文時代石器群は主に形態的特徴によって判別している。小型舟底形石器石器群については接合により判別が可能であった。

37~39は白滝I群である。コーンやバルブの発達する小型不定形剥片の背面縁縁に、微細な剥離がやや連続的に認められる。

40~44は縄文時代石器群と判断した資料である。厚さ5mm未満の薄手の不定形剥片を素材とし、小型剥離や平坦剥離を加えている。旧石器時代遺物と比較し剥離面のパティナの光沢が強い。白滝遺跡群では上白滝7遺跡と同様の資料がまとめて出土しており、深川市内園3遺跡・内園6遺跡の「石器素材」と対比されている。内園3遺跡・内園6遺跡の「石器素材」の時期は縄文時代後期以降と報告されているが、本ブロックでは縄文時代草創期・早期と考えられる石鏃・尖頭器(Ⅳ類)が出土している。40は三角形を呈し石鏃形状に近い。41・43は素材打瘤を割くように平坦剥離が加えられている。

削片(図Ⅲ-569-45~51、図版272)

削片は表土・Ⅱ層を含め20点・16個体が出土し7個体を図示している。石材は全て黒曜石で、黒曜石3・4の茶色の石が13個体あり、多数を占める。形態・接合状況から、彫器削片(6個体)と尖頭



図Ⅲ-569 F2区の石器(7) 削片・石刀

器削片(10個体)が認められ、後者は小型舟底形石器器群の資料と考えられる。剥離面接合関係を有するものは6点が認められ、全て尖頭器削片である。

45~47は彫器削片である。45は素材腹面と彫器腹面とのなす角度が鋭角、46・47は鈍角であり、45は彫刀面が背面側に、46・47は腹面側に傾く彫器から作出されたものとみられる。45・46には素材腹面との縁辺に、削片剥離前に加えられた連続的な調整が認められる。

48~51は尖頭器削片である。48は掲載母岩854の資料である。腹面が若干右側面へねじれる様に傾くが、概ね尖頭器正裏面と直交するように剥離されている。厚さは1.7cmと厚手で、末端はヒンジを起こしている。49~51は掲載母岩857の資料である。49はウートラバッセを起こしており全体に厚手である。50・51は正裏面と65°前後傾く様に剥離されており、接合資料は削片剥離以降舟底形石器の製作へ移行している。尖頭器削片は50・51を除き、全て尖頭器正裏面に対しおよそ直交方向に剥離されている。但し、Ⅲ類尖頭器には削片剥離が進行した段階で尖頭器正裏面に対し鋭角に剥離されるもの(図Ⅲ-564-13)も認められる。また、50以外は全て2回目以降の剥離で生じたもの(所謂セカンドスポール)であった。

石 刃(図Ⅲ-569-52~54、図版273)

石刃は表土・Ⅱ層を含め72点・52個体が出土し、3個体を図示している。石材は全て黒曜石で黒曜石1が25個体、黒曜石4が21個体と多数を占める。特に黒曜石4はSb-51・52にまとまった分布が認められる。剥離面接合関係を有するものは56点37個体で、剥離技術類型4Aiv類(平坦打面・頭部調整あり、母型形成なし)と4C類(打面調整・頭部調整あり)の母岩に多数が接合している。主に前者は小型舟底形石器器群、後者は有舌尖頭器石器群と理解している。全体的に石刃の大きさは幅3・4cm以下、長さ10cm以下で、打面内容が判別できない小打面・頭部調整のものが主体を占める。

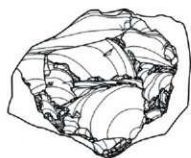
54は掲載母岩771、4Ciii類(打面調整・頭部調整あり、石核背部に平坦な自然面設定)の石刃技法から剥離された資料で、幅広・大型である。

石刃核(図Ⅲ-570-55~図Ⅲ-573-65、図版273~275)

石刃核はⅡ層から11点・11個体が出土し、全て図示した。石材は全て黒曜石で、黒曜石1・2が4個体で有舌尖頭器石器群(4C類母岩)、黒曜石4が7個体で小型舟底形石器器群(4Aiv類母岩)の資料に使用されている。剥離面接合関係は全点にみられ、ほとんどが原石・準原石の状態に復元されている。原石で搬入し、石刃剥離作業の後、遺跡内に遺棄されたことが理解できる。素材原石は55・57・59~62・64・65が角礫、63が亜角礫、56・58が転礫であった。有舌尖頭器石器群は角礫と転礫が、小型舟底形石器器群はもっぱら角礫が選択されている。

55~58は母型形成が施され、石刃剥離過程では打面調整・頭部調整が加えられるもの。有舌尖頭器石器群の資料と判断している。打面に調整もしくは再生の意図による大型の剥離を加え、さらに石刃剥離に際して石刃打面として取り込まれる縁辺部に小型の剥離調整を施している。但し58のみは単剥離打面で作業が進行していた。56・58は背部が平坦に加工され、これを打面として側面調整を行っている。但し58右側面下半部の剥離は、石刃剥離後に加えられた石核の再調整加工である。57は母型段階では背稜が形成されていたが、打面作出剥離により背部平坦に変化している。

59~65は母型が形成されず、平坦打面で頭部調整が加えられるものである。小型舟底形石器器群の資料と判断している。石刃核背部・側面にみられる石刃剥離以前的大型剥離面は、主に舟底形石器の素材を得るために厚手の剥片を粗割りしたもので、母型形成とは異なるものと判断している。58・62の打面には2面以上的大型剥離面が観察されるが、剥離される石刃打面が単剥離であることから、平坦打面と理解している。59・65は作業面がほぼ全周し円錐形となっている。64は背部が当



55

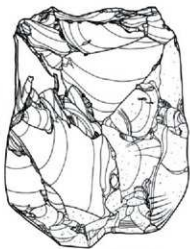
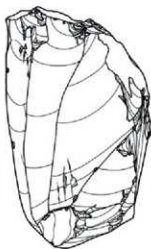
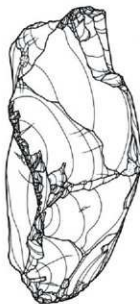


図771・図7700 掲載省略



56

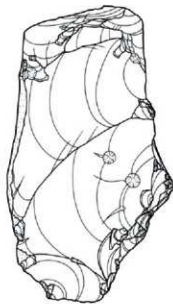
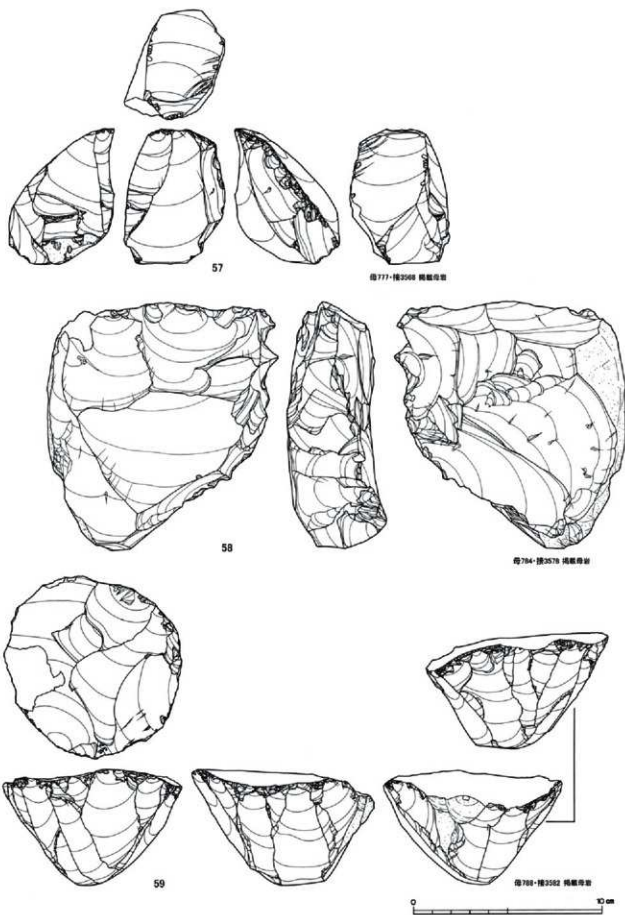


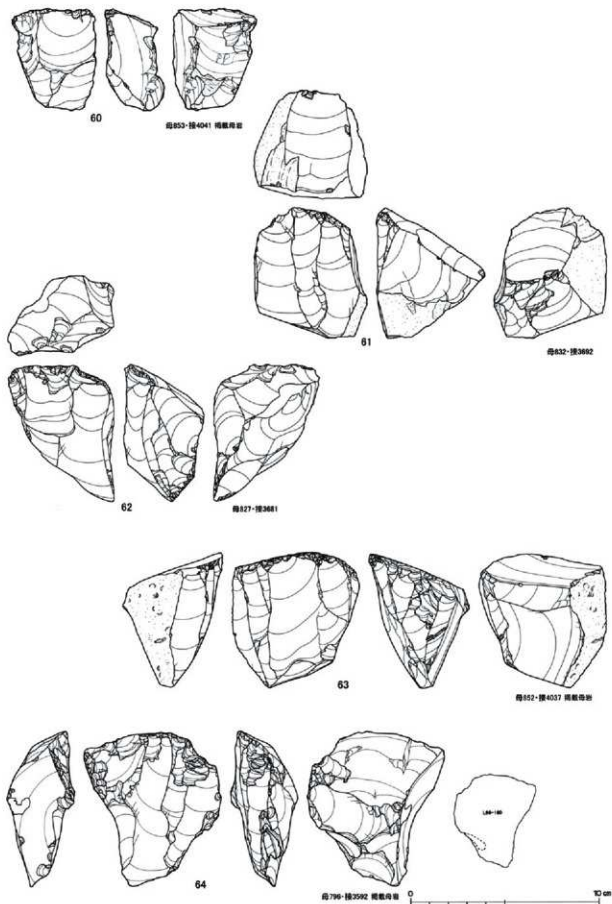
図772・図3562 掲載省略



図Ⅲ-570 F2区 of 石器(8) 石刃核



図Ⅲ-571 F2区の石器(9) 石刃核



図Ⅲ-572 F2区の石器(10) 石刃核

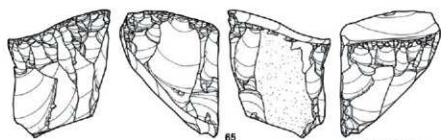


図558-種4065 燧石片

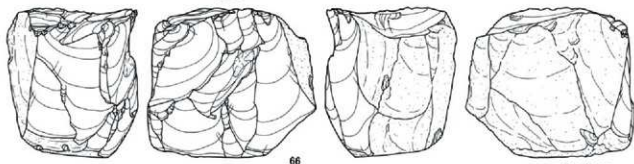
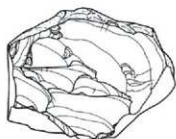
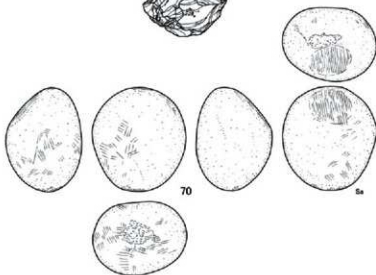
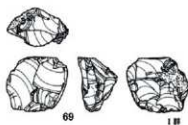
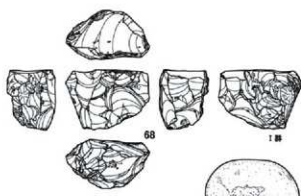
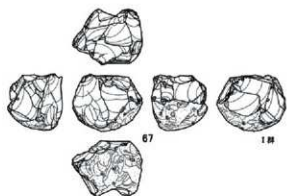


図559-種3066



図Ⅲ-573 F2区の石器(11) 石刃核・石核・敲石

初の作業面で、大型剥離でウートラッセした作業面末端部を打面として180°打面転移・作業面転移し、正面側で石刃剥離を行っている。59・61・63・65でみられる様に頭部調整はほぼ全縁に施されており、石刃の剥離に伴い全縁を随時加工したと考えられる。

石核(図Ⅲ-573-66-69、図版275)

石核は表土・Ⅱ層を含め42点・34個体が出土し、4個体を図示した。剥離特徴では、①打面と作業面を固定して一定方向に剥離作業を行うもの(66)、②多面・多方向に不規則な剥離作業を行うもの(67-69)、③正裏面に作業面を設定し多方向からの剥離作業を行うもの、④作業面を固定し上下もしくは多方向から求心的な剥離作業を行うものがみられる。①には石刃技法の最終段階で幅広い剥離などにより石核化したものが含まれ、特に小型舟底形石器器群の4Aiv類の母岩が6個体と多くみられる。②は白滝Ⅰ群と判断しており、5個体が出土している。石器形態や接合状況から判別された石器群別の出土点数は白滝Ⅰ群5個体、有舌尖頭石器器群1個体、小型舟底形石器器群11個体である。

石材は全て黒曜石で、白滝Ⅰ群では黒曜石1・3が、小型舟底形石器器群では全て黒曜石4が選択されている。剥離面接合するものは24個体が確認され、有舌尖頭石器器群は1個体、小型舟底形石器器群は9個体が認められたが、白滝Ⅰ群は全て非接合であった。

66は石刃技法4Aiv類の残核で、小型舟底形石器器群と判断している。67-68は白滝Ⅰ群のサイコロ状石核でパンチ痕が顕著に観察される。69は剥片素材である。

敲石(図Ⅲ-573-70、図版275)

敲石はⅡ層から2点・2個体が出土し、1個体を図示した。いずれも6cm前後の円礫素材で手のひらに取まる大きさである。石材は70が細粒の砂岩、非掲載のものが安山岩である。掲載した70は分布状況から有舌尖頭石器器群に属する可能性がある。

70は石質が緻密・硬質で表面が滑らかである。下端部には長軸1.5cm、短軸1.2cmの範囲に敲打痕が観察できる。また上部には腹面側に傾斜する平滑なすり面が認められる。

③ 母岩別接合資料

F2区では33,232点が出土し接合作業の結果、336個体、2,109点の剥離面接合資料を得ることができた。接合率は63%である。さらに母岩分類作業によって、母岩別資料72個体(遺物点数2,609点、内剥離面接合資料191個体・1,697点)と非母岩別剥離面接合資料145個体(遺物点数412点)に整理され、この内29個体を挿図掲載し、14個体を写真図版のみに掲載した。

母岩別接合資料を作業内容別にみると、尖頭器・両面調整石器製作35個体(797点)、舟底形石器製作14個体(262点)、石刃技法21個体(414点)、剥片生産17個体(170点)が認められる。また、尖頭器製作・石刃技法・剥片生産とされた母岩の内12個体が、継続する作業の中で舟底形石器製作を行っている。なお、上記した母岩別資料の個体数と点数は、2種類以上の剥離技術類型に属する場合はそれぞれの類型で集計されており、その合計は実数よりも多く算出される。

F2区では単体遺物の内容から白滝Ⅰ群、有舌尖頭石器器群、小型舟底形石器器群、縄文時代石器器群の存在が指摘されたが、母岩別接合資料で判別できたものは有舌尖頭石器器群(尖頭器・両面調整石器製作:11、石刃技法:4、剥片生産:1)と小型舟底形石器器群(尖頭器・両面調整石器製作:2、舟底形石器製作:13、石刃技法:13、剥片生産:4)および白滝Ⅰ群(剥片生産:1)であった。なお、括弧内の数字は作業内容別の個体数を表すが、一個体で複数の作業内容が認められた場合、それぞれを別個に数えたため、作業別集計結果の総計が実数よりも多くなっている。母岩別資料の掲載は尖

頭器・両面調整石器製作(図Ⅲ-574~598)、石刃技法(図Ⅲ-599~628)の順序とし、舟底形石器製作は尖頭器・両面調整石器製作や石刃技法の作業工程中に含まれている。

尖頭器・両面調整石器製作の母岩別資料(図Ⅲ-574~598、図版276~289)

尖頭器・両面調整石器製作母岩は、① 転礫を素材とし一母岩から複数個体を製作するもの(図Ⅲ-574~584・596、母岩776・780・797・802・805)、② 転礫を素材とし単体を製作するもの(図Ⅲ-584~588・597、母岩773・774・782・800・804)、③ 角・亜角礫を素材とし単体を製作するもの(図Ⅲ-589~593・597、母岩801・803・848・850・859)、④ 尖頭器を搬入し側縁で削片剥離を行うもの(図Ⅲ-594~595、母岩854・857)、⑤ 剥片・分割礫を素材とするもの(図Ⅲ-596、母岩775・798)が認められ、概ねこの順序で掲載した。有舌尖頭器石器群母岩は11個体、小型舟底形石器群母岩は4個体で、前者は①・⑤を、後者は③・④を主体とする。

母岩別資料776、接合資料4020(図Ⅲ-574・575、図版276)

母岩別資料776は接合資料4020および非接合剥片2点で構成され、総点数は31点、総重量は1,851.6gである。有舌尖頭器石器群の母岩と判断している。

素材 71は接合資料4020で、29点(19個体)が接合し、重量は1,810.3gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器と両面調整石器類を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。72・73は正裏面調整剥片の腹面側を図示している。

【工程1~2】工程1は10cm大、工程2は6~7cm大の分厚い大型剥離を加え、原石正裏面の自然面と厚さを大きく除去している。特に正面側からは非常に大型の剥片が剥離され、個体Aの素材に使用されている。この工程により断面が菱形様となる粗い両面調整体が形成される。

【工程3】細かな側縁調整が加えられ、小打面で打瘤の発達のない平坦剥離に移行する。側縁の整形と器体の扁平化が進められている。製作石器の出土はなく、遺跡外への搬出が推測される。石器は長さ14.0以下×幅6.7×厚2.2cm前後の尖頭器と考えられる。

【個体A】工程A-1で歪な自然面形状を折断除去し、工程A-2では背面に不整な粗削面を除去する剥離が加えられているが、核部分の折損により作業を終了している。両面調整石器を製作した個体とも捉えられるが、粗い剥離のため石核に分類している。

分布 Sb-50北西部から南東部にかけてみられる遺物集中範囲に分布している。個体Aと作業最終段階の工程3はブロック北西部に分布する。

母岩別資料797、接合資料3593(図Ⅲ-576~578、図版277・278-1)

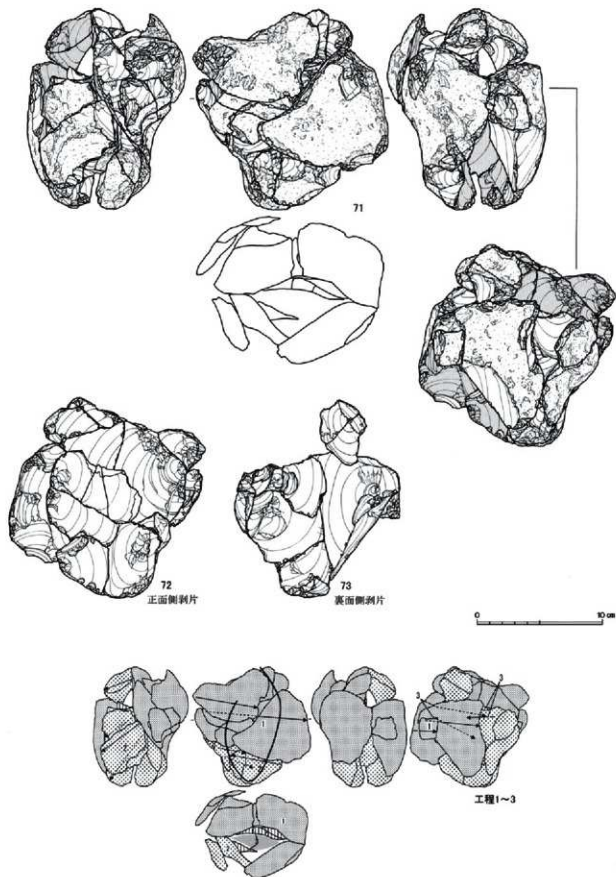
母岩別資料797は接合資料3593のみで構成され、総点数は34点、総重量は1,142.7gである。有舌尖頭器石器群の母岩と判断している。

素材 75は接合資料3593で、34点(19個体)が接合している。石質は黒曜石5で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

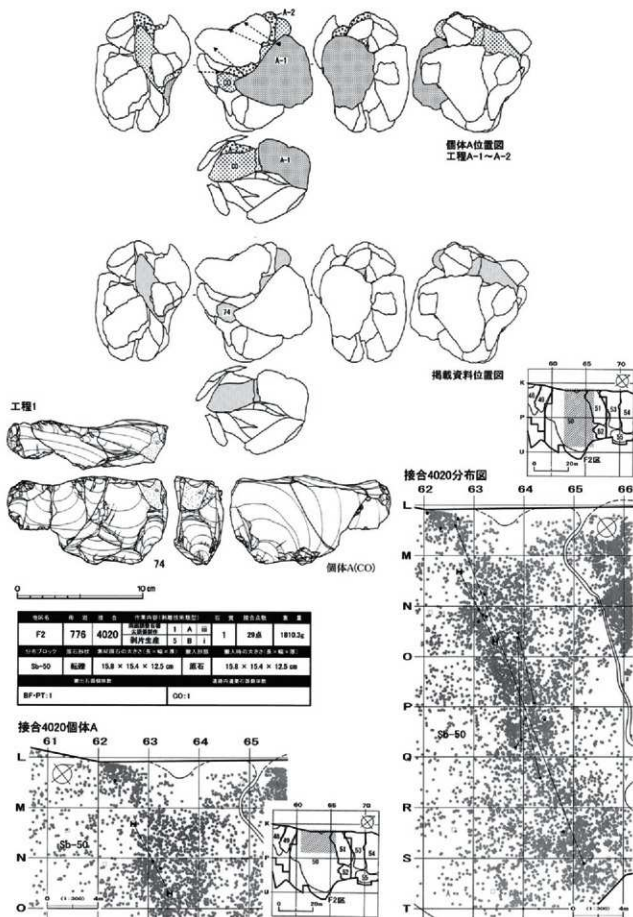
剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。製作石器の多くは欠落し、遺跡外への搬出が推測される。

【工程1~3】工程1では原石を分割する様に正面側へ剥離を加え、得られた大型剥片を個体Aの素材に使用する。素材剥片の大きさは17.0×12.0×5.0cm前後と観察される。工程2では右側縁を粗く剥離して側縁調整を行っている。工程3では折損が生じて両面調整石器が二つに折断され、それぞ

母岩776 接合4020



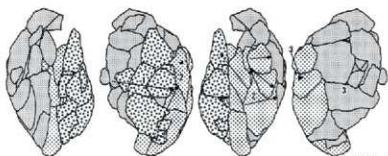
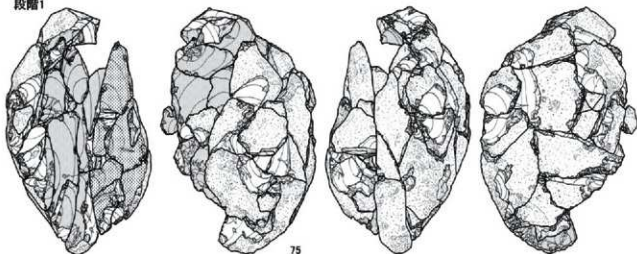
図Ⅲ-574 F2区の石器(12) 母岩776 接合4020(1)



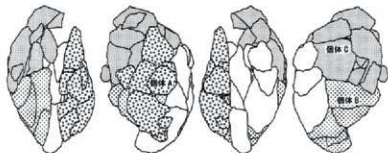
図III-575 F2区の石器(13) 母岩776 接合4020(2)

母岩797 接合3593

段階1

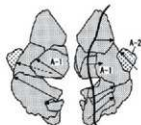
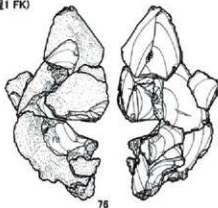


工程1~3



個体A~C位置図

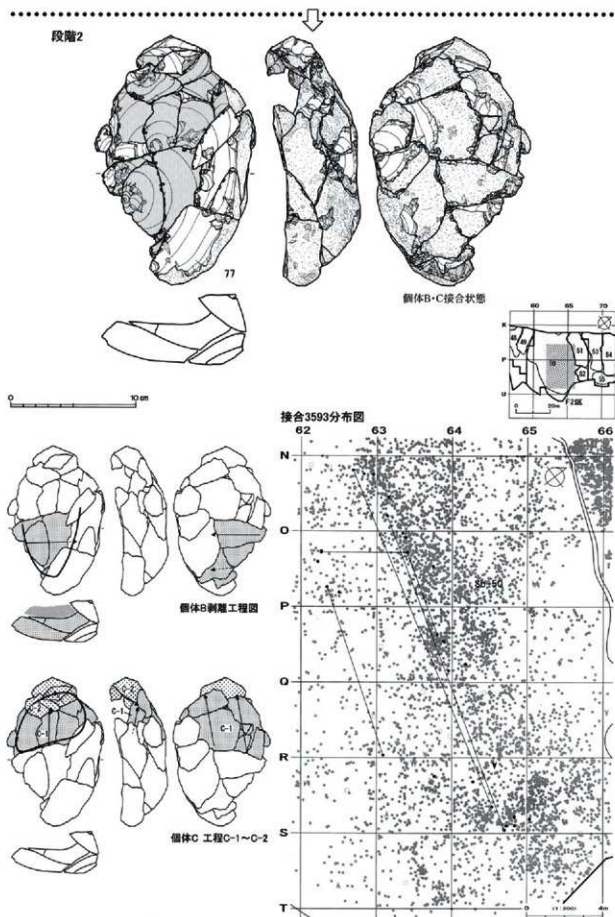
個体A (素材:工程1 FK)



工程A-1~A-2



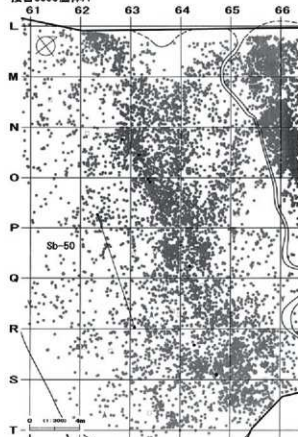
図Ⅲ-576 F2区の石器(14) 母岩797 接合3593(1)



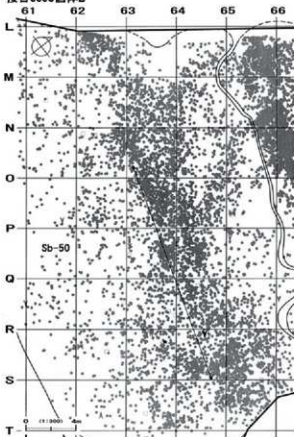
図III-577 F2区の石器(15) 母岩797 接合3593(2)

2 遺物

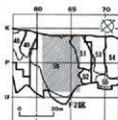
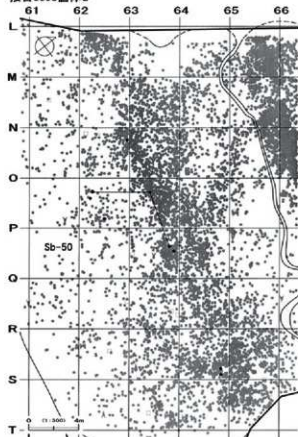
接合3593個体A



接合3593個体B



接合3593個体C



地区名	調査年度	調査区画	調査内容	調査方法	調査回数	調査面積	調査量
F2	797	3593	接合3593	1	5	34点	1142.7g
調査方法	調査区画	調査内容	調査方法	調査回数	調査面積	調査量	
Sb-50	転機	18.1 × (10~15) × 11.5 cm	磨石			18.1 × (10~15) × 11.5 cm	
調査内容				調査内容			
BF-PT.3				RF.1			

図Ⅲ-578 F2区の石器(16) 母岩797 接合3593(3)

れ個体B・Cの素材に使用される。折断後の両面調整石器は長幅12cm前後、厚さ5.5cm程度の平面三角形を呈している。

【個体A】両面調整石器を製作している。76は個体A接合状態である。素材背面側へ分厚い自然面除去の剥離を行っている。剥離は大型打面で器体幅を取り込むように加えられており、平面を整形したと観察される。製作石器の形状・大きさ等は不明である。

【個体B】両面調整石器を製作している。77は個体B・C接合状態である。素材背面側へ打瘤の発達する分厚い幅広大型剥離を加えて自然面を除去し、大きく厚みを減じている。製作石器の形状・大きさ等は不明である。

【個体C】両面調整石器を製作している。工程C-1では折れ面から大型打面の剥離を加えて折れ面を除去し、併せて自然面を広く取り除いている。工程C-2では打瘤の発達する剥離で石器縁道を整形したとみられる。製作石器は長10.4×幅6.0cm前後と推測される。

分布 Sb-50北西部から南東部にかけてみられる遺物集中範囲に広く分布している。

母岩別資料 802、接合資料 3598(図Ⅲ-579~582、図版279~281-1)

母岩別資料802は接合資料3598・3600・4021、折れ接合資料62535・62536および非接合剥片23点で構成され、総点数は84点、総重量は3,527.6gである。有舌尖頭器石器群の母岩と判断している。

素材 78は接合資料3598で、53点(24個体)が接合し、重量は3,407.6gである。石質は黒曜石5で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 転礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Aiii類に分類される。

段階1(原石の粗割)

【工程1】裏面と左側面に長さ15cm・厚さ5cmを越える大型剥片の剥離を行う。これにより三角柱様の石核が形成される。裏面から剥離した大型剥片は個体A・Bの素材に使用されている。

【個体A】79は個体A接合状態である。工程1で剥離された長19.8×幅19.2×厚8.1cm前後の大型剥片を素材に尖頭器を製作している。工程A-1では打瘤の発達する分厚い剥離で自然面を除去し、工程A-2では素材打瘤部と末端部を折断する。これにより「延べ棒」状を呈する核が形成される。工程A-3では折れ面を打面とし、器体を横断する厚手の剥離が加えられて器体の厚さを減じている。工程A-5では折断面と正面を取り込む小型の剥離に移行し、側縁の形成が行われている。

【個体B】80は個体B接合状態である。工程1で剥離された長18.0×幅12.6×厚5.1cm前後の大型剥片を素材に両面調整石器を製作している。腹面側にやや粗い加工が施された後破損が生じ、遺棄されている。

段階2(尖頭器の製作)

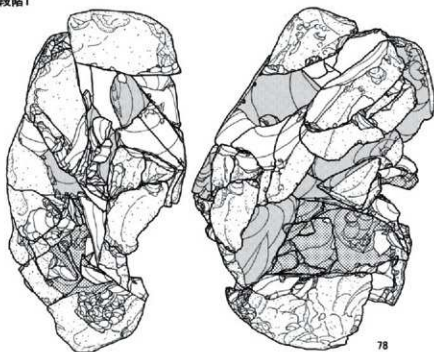
【工程2~4】81は工程2~4接合状態で、全体図78から90°回転した状態で図示している。工程2では三角柱様の石核の長軸上縁線に沿った剥離、工程3では横方向からの厚手の剥離で中軸部を取り込み、器体の厚さを大きく減じている。工程4では平坦面側に打瘤の発達する幅広剥離を加えて側縁を形成している。粗い剥離の段階ではあるが、長20.1×幅8.9×厚7.3cm前後の尖頭器が製作されたことと観察できる。

分布 Sb-50北西部から南東部にかけてみられる遺物集中範囲に広く分布している。

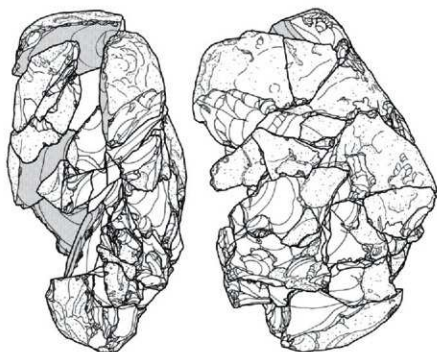
母岩別資料 805、接合資料 3615(図Ⅲ-583・584、図版278-2)

母岩別資料805は接合資料3615~3620、折れ接合資料62539および非接合剥片41点で構成され、総点数は100点、総重量は1,257.9gである。有舌尖頭器石器群の母岩と判断している。

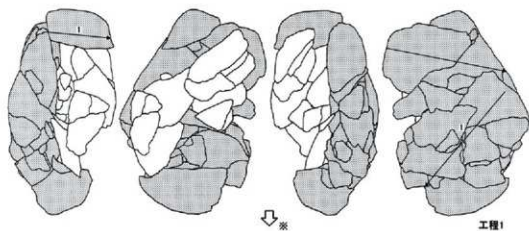
段階1



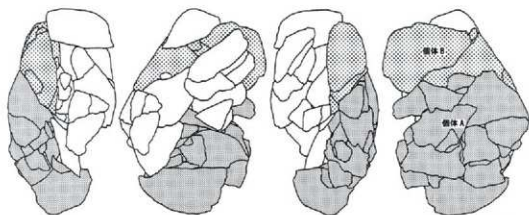
78



図Ⅲ-579 F2区の石器(17) 母岩802 接合3598(1)

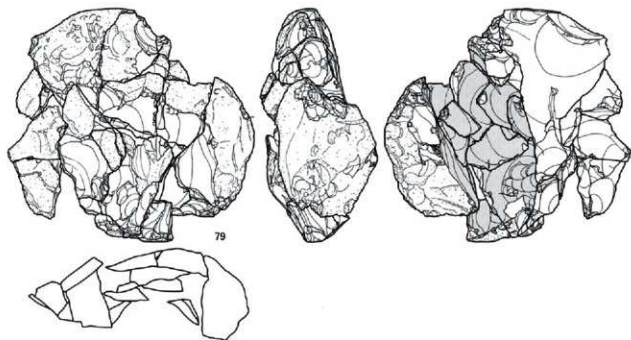


工程1

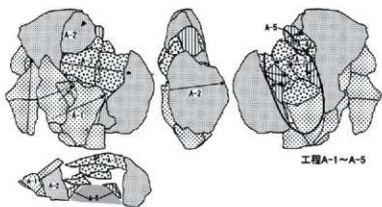


個体A・B位置図

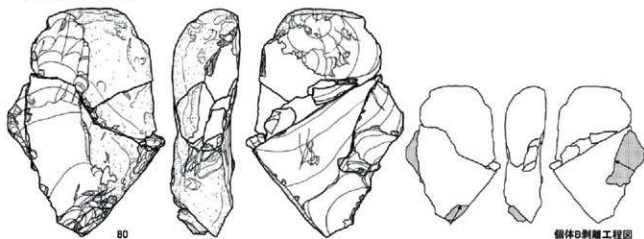
個体A(素材:工程1 FK)



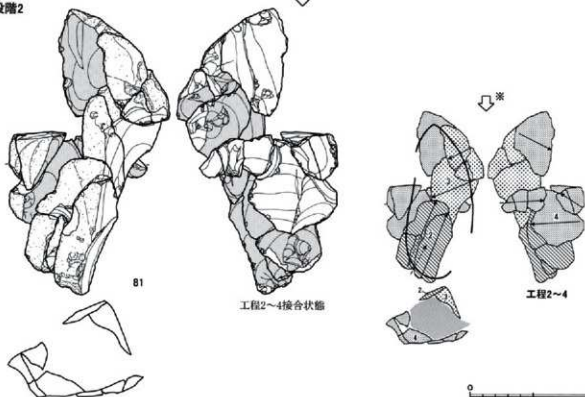
図Ⅲ-580 F2区の石器(18) 母岩 802 接合 3598(2)



個体B (素材:工程1 FK)

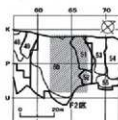
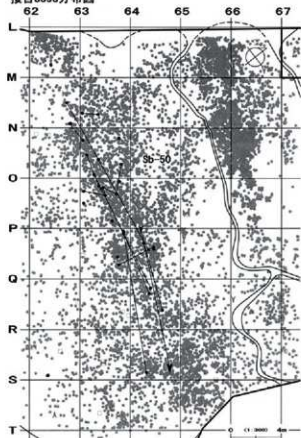


段階2



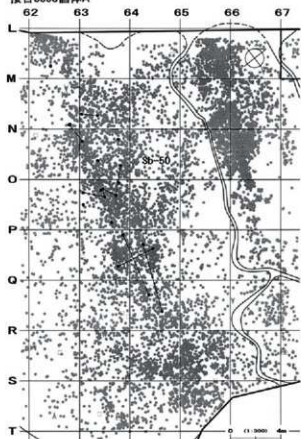
図Ⅲ-581 F2区の石器(19) 母岩 802 接合 3598(3)

接合3598分布図

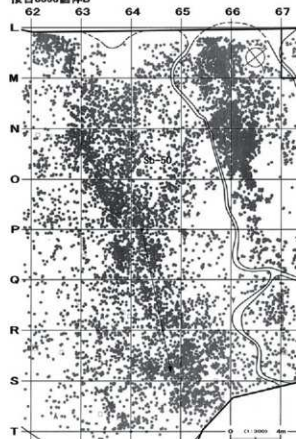


発見名	発見番号	母岩	接合	石器の部・片数	石器の種類	石器の形状	重量
F2	802	3598	接合3598	1	片	5	53点 3407g
母岩の寸法		母岩の厚	接合部分の寸法(長×幅×厚)		接合の厚	接合部分の寸法(長×幅)	
35-50		約20	26.8 × 18.1 × 14.2 cm		約1	26.8 × 18.1 × 14.2 cm	
撮影・調査時期				遺構の調査・記録時期			
BF-PT-2				RF-1			

接合3598個体A

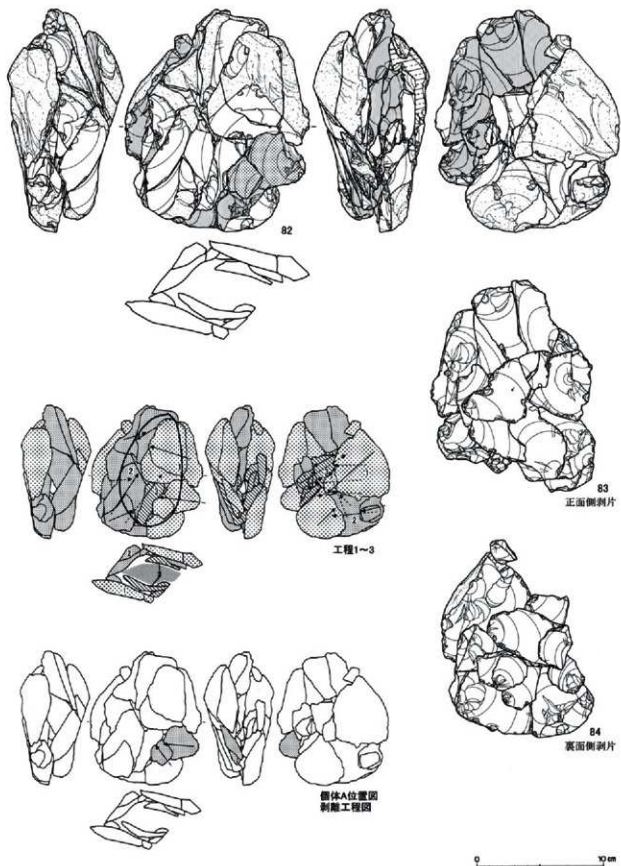


接合3598個体B



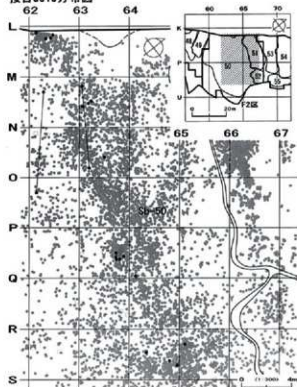
図III-582 F2区の石器(20) 母岩802 接合3598(4)

母岩805 接合3615

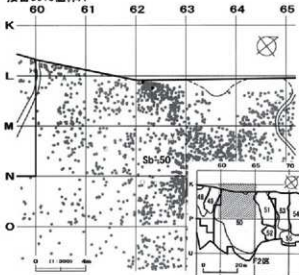


図Ⅲ-583 F2区の石器(21) 母岩 805 接合 3615(1)

接合3615分布図

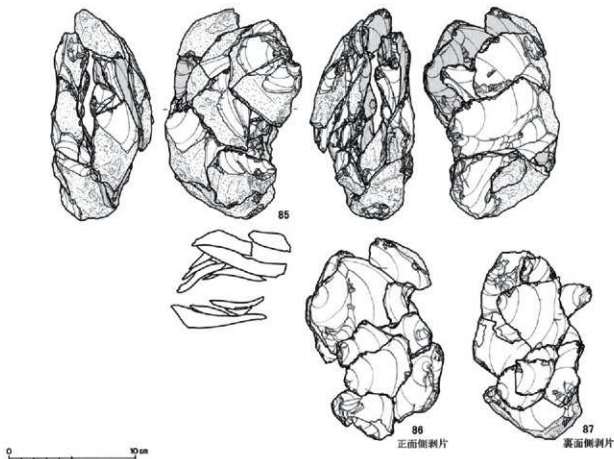


接合3615個体A



地域名	区	区画	内容	内容(1)	内容(2)	内容(3)	内容(4)	内容(5)	内容(6)	内容(7)	内容(8)	内容(9)	内容(10)
F2	805	3615	接合3615	1	A	個	5	32点	917.7g				
出土状況	出土層	出土層(1)	出土層(2)	出土層(3)	出土層(4)	出土層(5)	出土層(6)	出土層(7)	出土層(8)	出土層(9)	出土層(10)	出土層(11)	出土層(12)
Sb-50	遺構層	17.8 × (15~20) × (~10)cm	原石	17.8 × (15~20) × (~10)cm									
<small>出土状況: 遺構層(1) 出土層(2) 出土層(3) 出土層(4) 出土層(5) 出土層(6) 出土層(7) 出土層(8) 出土層(9) 出土層(10) 出土層(11) 出土層(12)</small>													
<small>出土状況: 遺構層(1) 出土層(2) 出土層(3) 出土層(4) 出土層(5) 出土層(6) 出土層(7) 出土層(8) 出土層(9) 出土層(10) 出土層(11) 出土層(12)</small>													

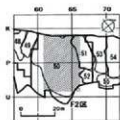
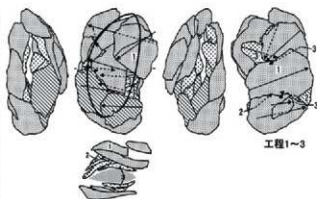
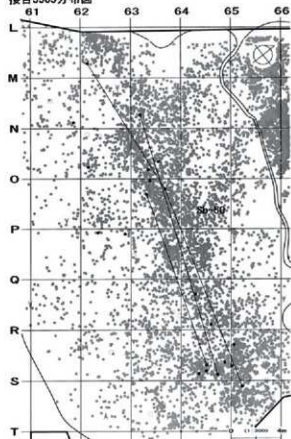
母岩773 接合3565



図Ⅲ-584 F2区の石器(22) 母岩805 接合3615(2)、母岩773 接合3565(1)

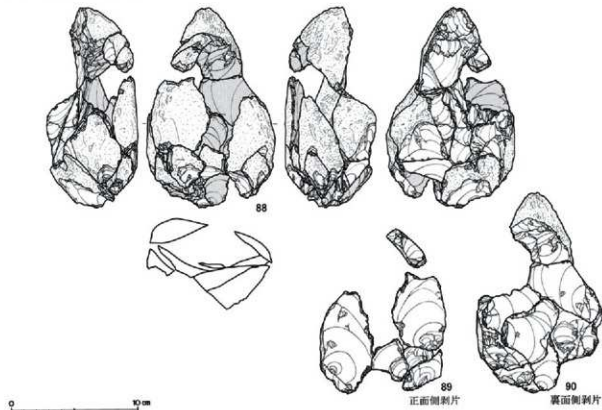
2 遺物

接合3565分布図



物品名	品目	品番	作業内容	発掘出場所	区	層	埋没深度	重量
F2	773	3565	接合3565	1	A	I	24点	800.7g
分析・加工	品目別記	発掘層の深さ(土層+幅+厚)	掘り手	掘り手	掘り手	掘り手	掘り手	掘り手
品-90	透視図	16.5 × 10.7 × (~10)cm	原石	16.5 × 10.7 × (~10)cm				
資料提供機関				資料提供者(発掘者)				
F2-PT:1								

母岩774 接合3566



図Ⅲ-585 F2区の石器(23) 母岩773 接合3565(2)、母岩774 接合3566(1)

素材 82は接合資料3615で、32点(24個体)が接合し、重量は9177gである。石質は黒曜石5で亜角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。83・84は正裏面調整剥片の腹面側を图示している。

剥離工程 亜角礫原石を粗割りし、剥片および石核を素材に複数個体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1AⅢ類に分類される。

【工程1～3】工程1・2では正裏面に打瘤の発達する分厚い大型剥離を加えて自然面を除去し、また器体の厚みを大きく減じて、併せて側縁の形成を行っている。これにより横断面が菱形を呈する粗い両面調整器が形成される。工程3では細かい側縁調整が施されるようになり、小打面で打瘤の発達の弱い平坦剥離に移行する。粗割り剥離面の高い稜線を除去し器体を扁平化している。製作石器は出土していないが、長149×幅8.3×厚3.0cm前後の両面調整石器と観察できる。

【個体A】工程1で剥離された長10.0×幅11.0cm前後の剥片を素材とし、両面調整石器を製作したと考えられる。素材腹面側へは打瘤部が厚く末端が薄い剥離が加えられ、石器側縁を形成したようである。製作石器の大きさは不明である。

分布 Sb-50北西部から南東部にかけてみられる遺物集中範囲に広く分布している。個体Aを含む工程1・2はブロック北西部のL62区からN63区にかけて、工程3はP63区から東側に主な分布が認められる。

母岩別資料773、接合資料3565(図Ⅲ-584・585、図版281-2)

母岩別資料773は接合資料3565および非接合剥片27点で構成され、総点数は51点、総重量は902.7gである。

素材 85は接合資料3565で、24点(20個体)が接合し、重量は800.7gである。石質は黒曜石1で、亜角礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したとみられる。

剥離工程 亜角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1AⅠ類に分類される。原石長軸を石器の長軸に設定している。86・87は正裏面調整剥片の腹面側を图示している。工程1・2では打瘤の発達する分厚い大型剥離を加えて自然面を除去し、器体全体の厚みを大きく減じている。また打面・打瘤に側面部の厚みを取り込んで側縁を形成している。これにより粗い両面調整器が形成される。工程3では細かい側縁調整が加えられるようになり、小打面で打瘤の発達の弱い平坦剥離に移行する。これにより粗割り剥離面の高い稜線を除去して器体の扁平化を進め、横断面を凸レンズ状へ近づけている。製作石器は出土していないが、長14.2×幅6.7×厚2.1cm前後の両面調整石器と観察できる。

分布 Sb-50北西部から南東部にかけてみられる遺物集中範囲に広く分布している。

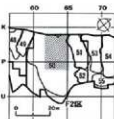
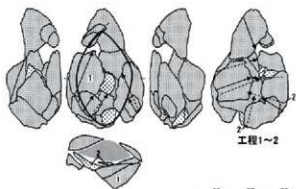
母岩別資料774、接合資料3566(図Ⅲ-585・586、図版282)

母岩別資料774は接合資料3566および非接合剥片7点で構成され、総点数は24点、総重量は548.0gである。

素材 88は接合資料3566で、17点(14個体)が接合し、重量は523.9gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石に粗割りを加えた状態で遺跡内に搬入したとみられる。原石は裏面が平坦で平面は涙滴形を呈す。

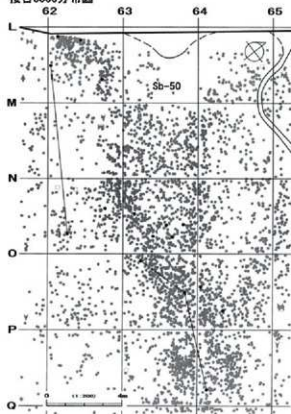
剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1AⅠ類に分類される。原石長軸を石器の長軸に設定している。89・90は正裏面調整剥片の腹面側を图示している。工程1は粗割りの段階である。正面側に打瘤の発達する分厚い剥離を加えて自然面の除去と器体全体の厚みを減じ、平坦な裏面側には打面・打瘤部が厚く末端が薄い剥離を加えて側縁を形成して

2 遺 物



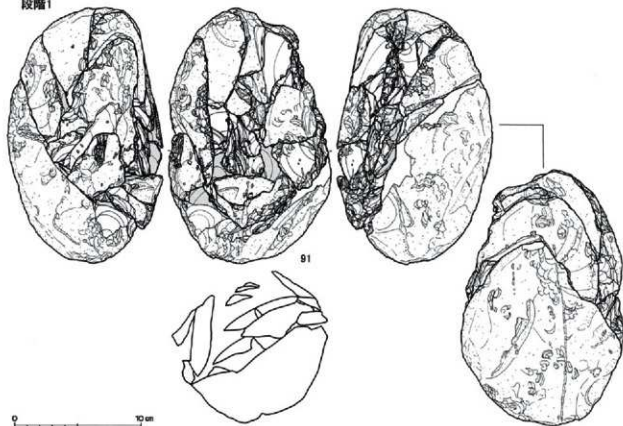
母岩名	接合	種	作業内容	製法	用途	長さ	幅	厚さ	重量	
F2	774	3566	接合部	1	A	1	1	17	17	523g
母岩の寸法 長さ×幅×厚さ(約) 長さ×幅×厚さ(約) 長さ×幅×厚さ(約)										
母岩774	長さ	15.7 × 10.2 × (→10) cm	幅	15.7 × 10.2 × 7.2 cm	厚さ					
母岩の重量					接合部の重量					
母岩774					接合部					

接合3566分布図

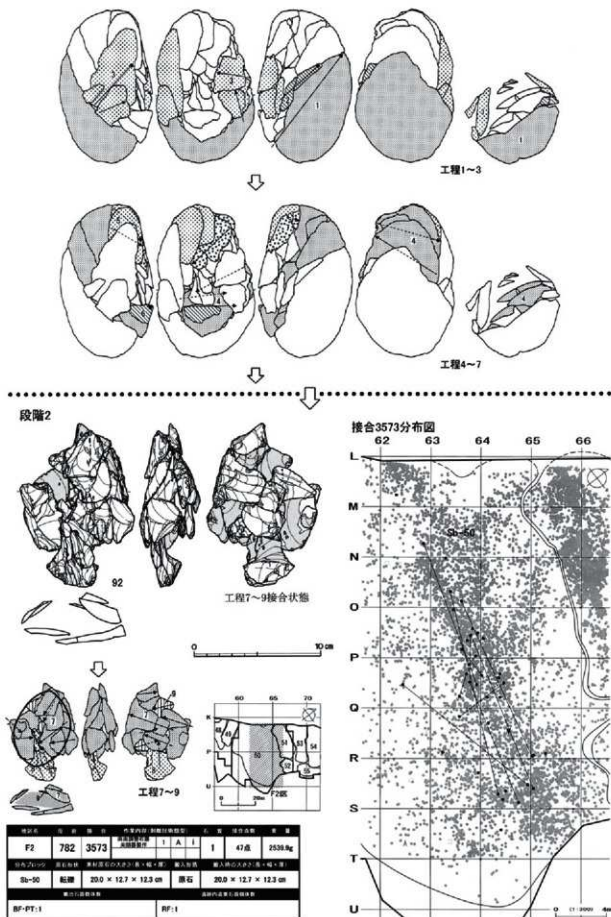


母岩782 接合3573

段階1

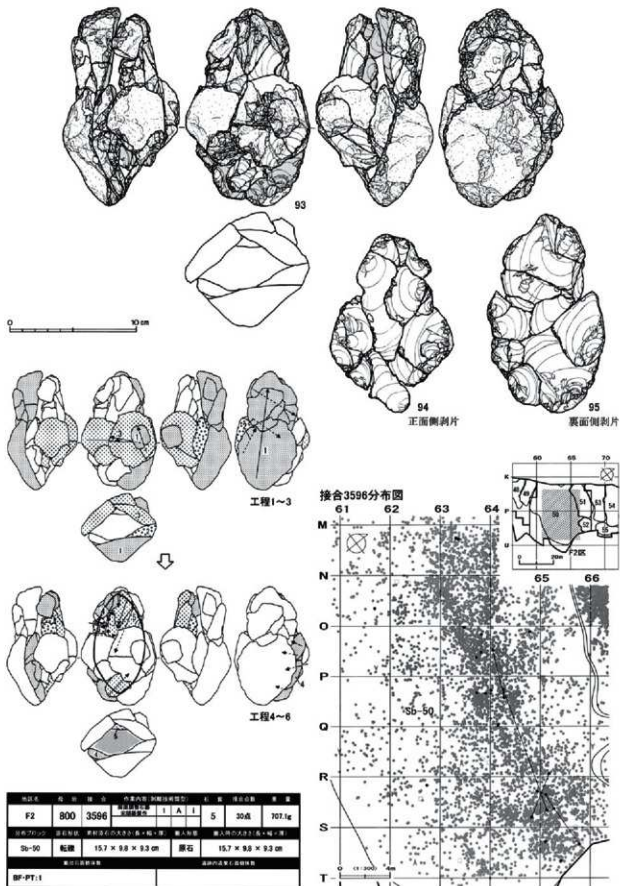


図Ⅲ-586 F2区の石器(24) 母岩774 接合3566(2)、母岩782 接合3573(1)



図III-587 F2区の石器(25) 母岩782 接合3573(2)

母岩800 接合3596



図Ⅲ-588 F2区の石器(26) 母岩800 接合3596

いる。工程2は平坦剥離調整の段階で、粗割り剥離面を除去して器体を扁平化している。製作石器は出土していないが、長12.4×幅7.3×厚3.0cm前後の両面調整石器と観察できる。

分布 Sb-50の遺物分布集中範囲から北西側にかけてやや散発的な分布が認められる。

母岩別資料782、接合資料3573(図III-586・587、図版283)

母岩別資料782は接合資料3573～3576および非接合剥片16点で構成され、総点数は69点、総重量は2601.2gである。有舌尖頭器石器群の母岩と判断している。

素材 91は接合資料3573で、47点(32個体)が接合し、重量は2539.9gである。石質は黒曜石1で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。原石は楕円形を呈し分厚い。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。

段階1(原石の粗割り・自然面の除去)

【工程1～3】工程1・2で原石を半割りし、大型平坦面を形成する。工程3では広い分割面を打面として両側面から正面にかけて自然面除去の厚手の剥離を加えている。

【工程4～6】工程4・5では正裏面に横方向の分厚い剥離を加えて、器体の厚みを全面的に大きく減じている。工程6は自然面の残る末端部を折断により除去している。

段階2(両面調整石器の製作)

【工程7～9】工程7以降は平坦な剥離に移行する。工程7では正面側へ打痕の発達するやや厚手の剥離と、裏面側へ長軸を大きく取り込む薄手の剥離が加えられる。これにより正面側粗割り剥離面の高い稜線や中軸上の厚みが大きく除去され、裏面は平坦に整形される。工程8では下端部から長軸方向の剥離を加えて末端の収斂形状を整えている。工程9では細かな側縁調整を施し小型で薄型の剥離を加えて、器面を平坦に整形している。製作石器は出土していないが、長10.0×幅7.5×厚2.2cm前後の両面調整石器と観察できる。

分布 Sb-50北西部から南東部にかけてみられる遺物分布集中範囲に広く分布し、特にO・P63・64区周辺にまとまりが認められる。

母岩別資料800、接合資料3596(図III-588、図版282)

母岩別資料800は接合資料3596および非接合剥片7点で構成され、総点数は37点、総重量は742.2gである。

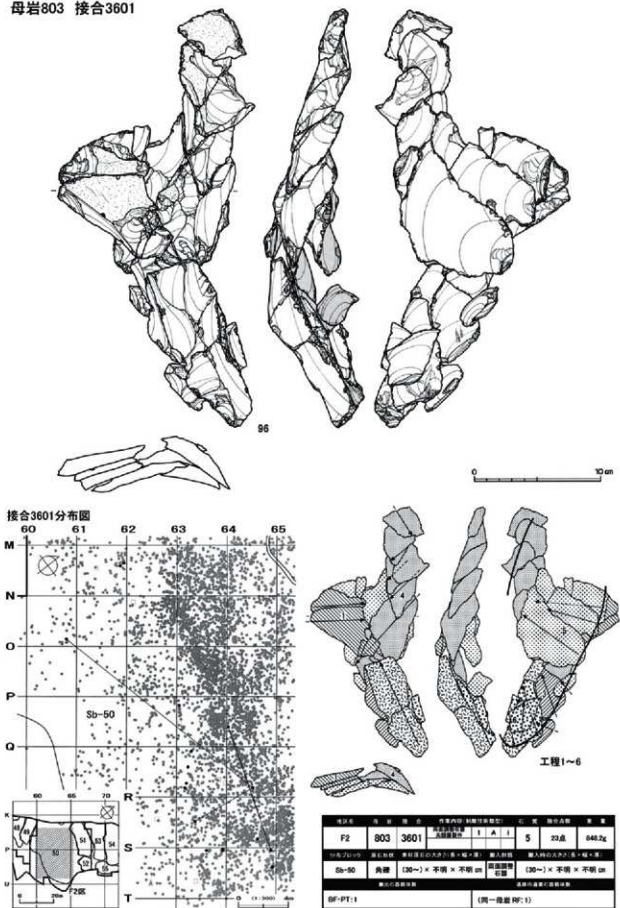
素材 93は接合資料3596で、30点(20個体)が接合し、重量は707.1gである。石質は黒曜石5で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。やや角張った稜線が残るため亜角礫とも判別できる形状である。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。原石横断面は四角形を呈し、その角部を両側縁と正裏面中軸上に設定している。94・95は正裏面調整剥片の腹面側を図示したものである。

【工程1～3】原石を粗割りして自然面の除去を行う。工程1では裏面に長軸方向の分厚い大型剥離を加えて自然の凹凸形状を除去し、横断面を三角形としている。工程2・3では横方向の分厚い剥離を加えて高く盛り上がる長軸部を取り込み、厚みを大きく減じている。これにより粗い加工の両面調整器が形成されている。

【工程4～6】整形を主とした剥離に移行する。工程4では右側縁の縁辺付近を主体に打痕の発達する剥離が加えられ、側縁部の厚みを減じている。工程5では上下端部から長軸方向の剥離を行って器体を扁平化している。工程6では器体長軸に達する程度の薄型平坦剥離に移行している。製作石器は

母岩803 接合3601



図五-589 F2区の石器(27) 母岩803 接合3601

出土していないが、長130×幅7.6×厚3.1cm前後の両面調整石器と観察できる。

分布 Sb-50北西部から南東部にかけてみられる遺物分布集中範囲に広く分布している。剥離順序と分布の関係をみると、工程1～3は南東部、工程4が北西部にやや偏る傾向がある。

母岩別資料 803、接合資料 3601(図Ⅲ-589、図版284-1)

母岩別資料803は接合資料3601～3609、折れ接合資料62537・62538および非接合剥片37点で構成され、総点数は87点、総重量は1,986.0gである。

素材 96は接合資料3601で、23点(17個体)が接合し、重量は848.2gである。石質は黒曜石5で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 30cmを越える大型角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。

【工程1～4】著しく打瘤の発達する厚手の幅広剥離で自然面や粗割り剥離面の高い稜線を除去する。工程2では長軸方向の剥離に中央部稜線を取り込んで厚みを除去している。また工程4では打瘤部の厚い剥離によって側縁の厚みを減じている。

【工程5～6】工程5では打瘤の発達する大型剥離により広く面的に平坦化を行っている。工程6は端部へのやや平坦化した剥離で、収斂形状を整えたと観察される。製作石器は出土がなく正確な形状等は不明であるが、幅は12.7cm前後、長さは28cmを越える大型の尖頭器と考えられる。

分布 Sb-50中央部から南東部に主にまとまって分布し、北西部にも若干が散在する。

母岩別資料 848、接合資料 4022・4023(図Ⅲ-590・591、図版285-1)

母岩別資料848は接合資料4022～4027、折れ接合資料62756および非接合剥片23点で構成され、総点数は87点、総重量は779.1gである。分布状況から小型舟底形石器器群の母岩と判断している。

素材 97は接合資料4022、99は接合資料4023で、二つ合計で49点(32個体)が接合し、重量は553.3gである。石質は黒曜石4で亜角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。接合4022と接合4023の位置関係は不明である。

剥離工程 亜角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。但し大型の調整剥片を素材に二次加工ある剥片が製作されている。剥離工程は接合資料別に観察していく。

【接合4022】工程1は大型の分厚い剥離で、自然面と厚さの除去を行っている。工程2・3は器体長軸を越える幅広剥離で、打瘤の発達は弱い。広く面的に器体を扁平化している。

【接合4023】工程1は自然面除去の剥離である。工程2は打瘤が発達し長軸を大きく越える幅広剥離で、側縁の厚みを除去し、広く器体を扁平化している。工程3・4では細かな側縁調整剥離が加えられ、小打面で打瘤の発達の弱い平坦剥離に移行して器面を平坦に加工している。工程1・2は接合4022の工程1に、工程3・4は接合4022の工程2・3に並行すると考えられる。製作尖頭器は出土がなく大きさ等も不明である。

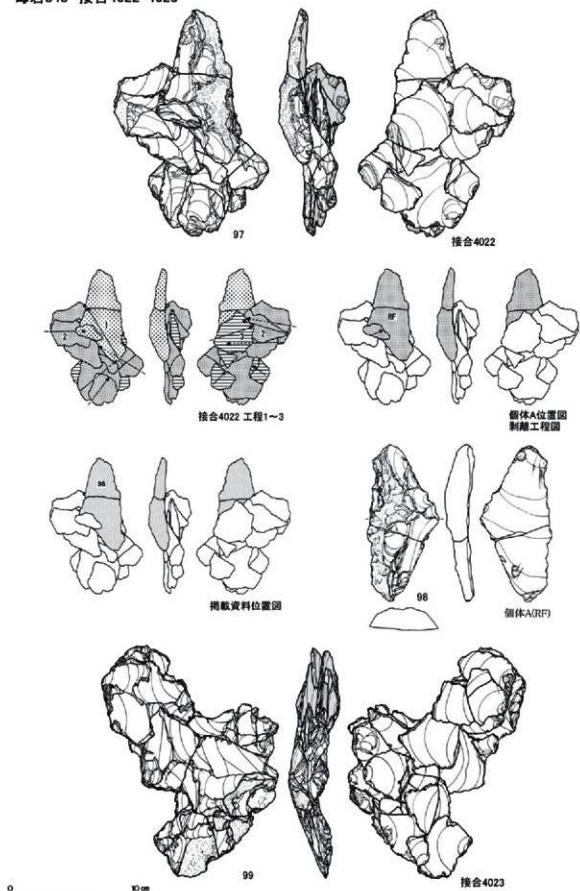
分布 両接合資料ともSb-51・52に分布し、主にSb-51西部にまとまって認められる。

母岩別資料 850、接合資料 4031(図Ⅲ-592、図版284-2)

母岩別資料850は接合資料4031～4034・4110、折れ接合資料62757・62758および非接合剥片32点で構成され、総点数は97点、総重量は937.2gである。分布状況から小型舟底形石器器群の母岩と判断している。

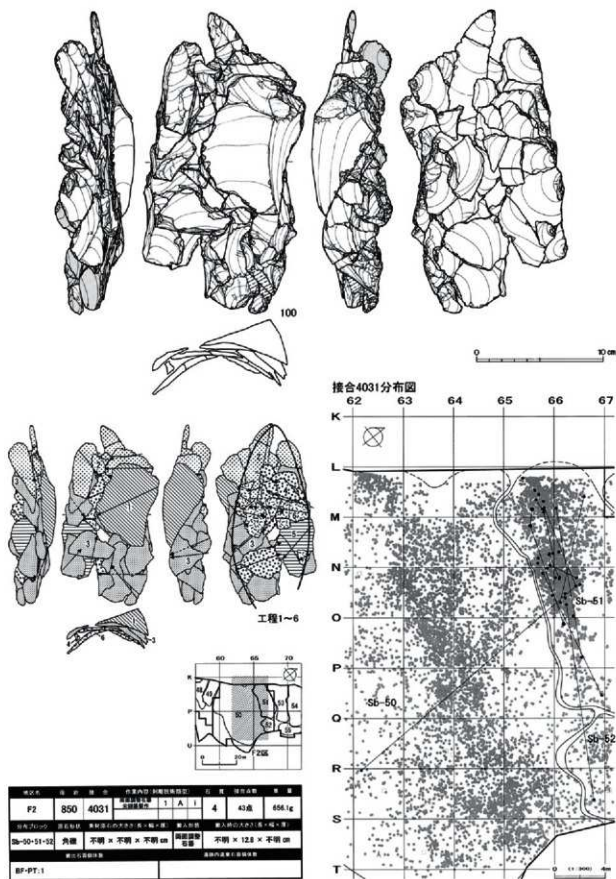
素材 100は接合資料4031で、43点(28個体)が接合し、重量は656.1gである。石質は黒曜石4で角礫を素材とし、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。

母岩848 接合4022・4023



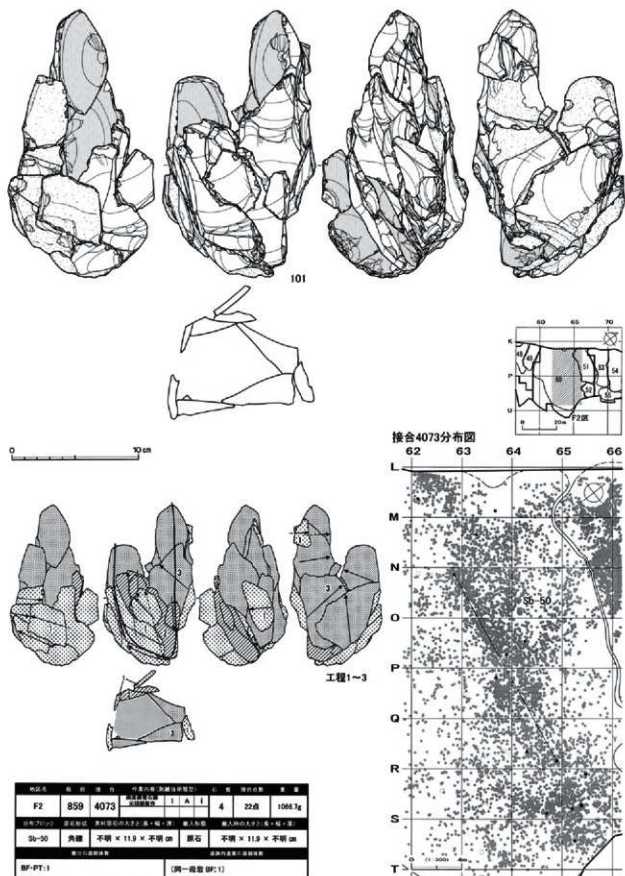
図Ⅲ-590 F2区の石器(28) 母岩848 接合4022・4023(1)

母岩850 接合4031



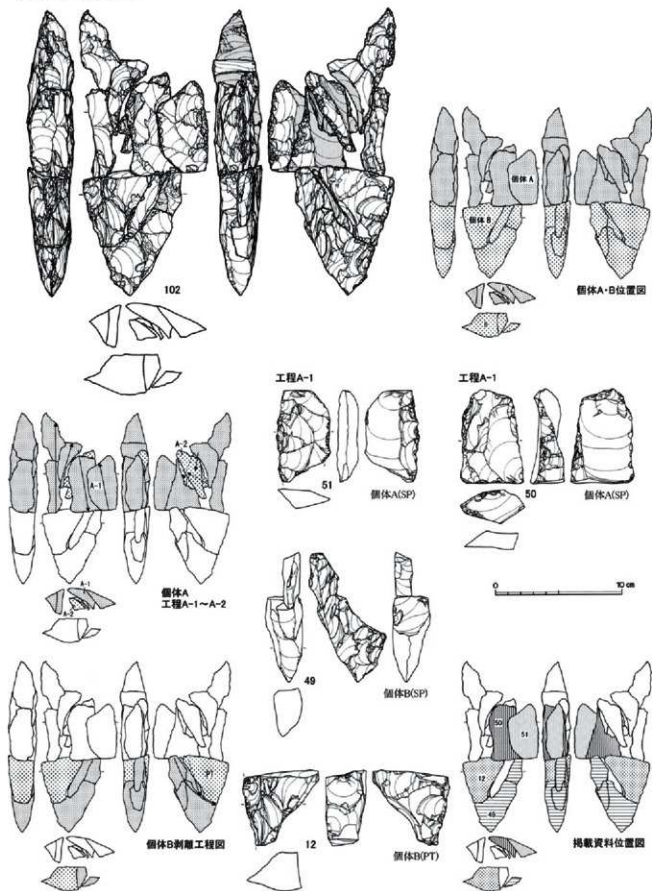
図五-592 F2区の石器(30) 母岩850 接合4031

母岩859 接合4073



図Ⅲ-593 F2区の石器(31) 母岩859 接合4073

母岩857 接合4052



図Ⅲ-594 F2区の石器(32) 母岩 857 接合 4052(1)

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は1Ai類に分類される。工程1は分厚い大型剥離により、粗割りで生じた高い稜線部を除去している。工程2・3・5は打瘤の発達する幅広の剥離を連続させて縁辺付近の厚みを除去し、側縁を形成している。また長軸方向の剥離によって器体中央部を加工し、横断面形を修正している。工程4・6では中軸に達する程度の打瘤が発達しない平坦剥離に移行し、器体を徐々に扁平化させたと観察される。製作尖頭器は出土がなく、遺跡外への搬出が推測され、大きさは長さ24.0cm以上・幅10.4cm前後と復元できる。

分布 Sb-50~52の広範囲に分布するが、主にSb-51北西部から南東部にかけての遺物集中範囲にまとまっている。Sb-50・52に離れて出土する資料は工程4・5の剥片である。

母岩別資料 859、接合資料 4073 (図Ⅲ-593、図版 285-2)

母岩別資料 859 は接合資料 4073~4077、折れ接合資料 62959 および非接合剥片 10 点で構成され、総点数は 47 点、総重量は 1,635.6 g である。

素材 101 は接合資料 4073 で、22 点 (19 個体) が接合し、重量は 1,066.7 g である。石質は黒曜石 4 で、角礫を素材とし、原石の状態では遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Ai 類に分類される。原石の長軸を石器長軸に設定している。工程 1・2 では自然面除去の後、長軸方向の厚手の剥離と、長軸部を横方向から剥ぎ取る剥離が繰り返され、器体の厚みを大きく除去している。工程 3 では著しく打瘤の発達した分厚い幅広剥離を、左右側面から正裏面に加えて側縁を形成し、横断面が五角形様の粗い両面調整器を製作したと観察できる。製作尖頭器は出土がなく、遺跡外への搬出が推測され、大きさは長さ 20.0 cm 以上 × 幅 8.2 × 厚 6.0 cm 前後と復元できる。

分布 Sb-50 北部から南東部にかけて広がる遺物集中範囲内に散在している。

母岩別資料 857、接合資料 4052 (図Ⅲ-594・595、図版 286-1)

母岩別資料 857 は接合資料 4052~4064、折れ接合資料 62953~62958 および非接合剥片 72 点で構成され、総点数は 155 点、総重量は 1,568.1 g である。小型舟底形石器器群の母岩と判断している。

素材 102 は接合資料 4052 で、13 点 (10 個体) が接合し、重量は 466.7 g である。石質は黒曜石 4 で原石素材とみられ、両面調整石器の状態では遺跡内に搬入している。素材原石形状は不明である。

剥離工程 搬入した両面調整石器から削片剥離を行った資料で、剥離技術類型は 1B 類に分類される。大型で厚手の両面調整石器を折断し個体 A・B に分割している。

【個体 A】削片剥離後の II 類尖頭器を素材に小型舟底形石器を製作している。工程 A-1 では主に折断面を打面として両側面に削片剥離を行う。削片は右側縁側が正面側へ傾くように剥離されるのに対し、左側縁側は正裏に傾かず器体と直交する様に剥離されている。工程 A-2 では直交方向に剥離した左側面を舟底形石器の甲板面に設定し、甲板面から下縁 (尖頭器右側縁) を取り込む調整剥離が加えられている。また下縁側からも同時縁辺を整形する小剥離を施している。これにより舟底形石器は高さ 1 cm 程度の小型に製作されている。また、工程 A-1 でみられた左右側縁での削片剥離の差異は、舟底形石器の甲板面と下縁を意図した可能性がある。50・51 は右側縁で剥離された削片である。

【個体 B】右側縁での剥離に限定され、削片は正裏に傾かず器体と直交する様に作出されている。49 は削片でウートラバッセにより尖頭器末端を大きく取り込んでいる。12 は II 類尖頭器で、最終段階で正面から削片剥離面に剥離が加えられている。

分布 Sb-51 の西部から南東部にかけて分布し、主に N66 区にまとまっている。この内個体 A は N66 区から南東部、個体 B は N66 区から西部に分布が偏って認められる。

母岩別資料 854、接合資料 4044 (図Ⅲ-595、図版 286-2)

母岩別資料 854 は接合資料 4044 のみで構成され、総点数は 5 点、総重量は 256.2 g である。小型舟底形石器石器群の母岩と判断している。

素材 103 は接合資料 4044 で、5 点 (4 個体) が接合している。石質は黒曜石 4 で原石素材とみられ、両面調整石器の状態で遺跡内に搬入している。素材原石形状は不明である。

剥離工程 両面調整石器から削片剥離を行った資料で、剥離技術類型は 1B 類に分類される。両面調整石器は大型・厚手で、折断した状態で遺跡内に搬入された様である。削片は当初は正裏に傾かず器体と直交する様に剥離されるが、最終段階では裏面側に傾いている。また削片は末端部までを厚く取り込むように剥離される。48 は削片でヒンジを起こしている。13 は II 類尖頭器である。

分布 Sb-50 南西部 M65 区、N65・66 区にまとまって分布している。

尖頭器・両面調整石器製作母岩・写真図版掲載資料(図Ⅲ-596・597、図版 287~289)

母岩別資料 775、接合資料 3567(図Ⅲ-596、図版 287-1)

母岩別資料 775 は接合資料 3567 のみで構成され、総点数は 15 点、総重量は 2,408.9 g である。有舌尖頭器石器群の母岩と判断している。

素材 136 は接合資料 3567 で、15 点 (11 個体) が接合している。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入している。

剥離工程 転礫原石を半割して素材とし、両面調整石器類を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aiv 類に分類される。137・138 は正表面調整剥片の腹面側を撮影している。平坦な分割面に対しては大型打面で打痕が発達し末端部の薄い剥離を、自然面側には分厚い大型剥離を加えている。これにより自然面と器体の厚みの除去と側縁の形成を行い、横断面菱形の粗い両面調整体を形成したとみられる。製作石器の出土はないが、長 15.0 × 幅 7.5 × 厚 4.5cm 前後と復元できる。

分布 Sb-50 北部 N63 区と東部 R64・65 区に分かれて分布し、後者から多数が出土している。

母岩別資料 780、接合資料 3571(図Ⅲ-596、図版 288-1)

母岩別資料 780 は接合資料 3571 のみで構成され、総点数は 15 点、総重量は 1,222.2 g である。

素材 140 は接合資料 3571 で、15 点 (11 個体) が接合している。石質は黒曜石 1 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 転礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Ai 類に分類される。141・142 は正表面調整剥片の腹面側を撮影している。剥離工程は以下の内容で進められている。① 正表面側に大型剥離を複数回加えて原石の厚みを半分近く減少させる。② 両側面から正表面へ著しく打痕の発達する幅広い剥離を加えて厚みの除去と側縁の形成を行い、横断面菱形の粗い両面調整体を形成する。③ 軽微な側縁調整が加えられ、幅広で平坦な剥離に移行する。反りが少ない剥離で器面を平坦化したと考えられる。製作石器の出土はないが、長 15.0 × 幅 9.0 × 厚 3.5cm 前後の両面調整石器と復元できる。

分布 Sb-50 の北部から東部の遺物分布集中範囲内に分布する。

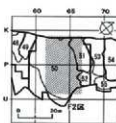
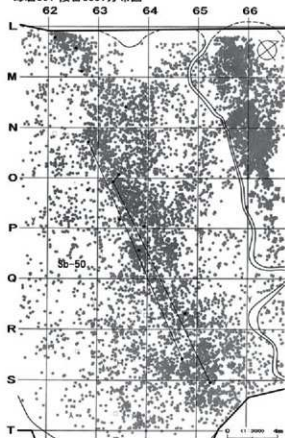
母岩別資料 798、接合資料 3594(図Ⅲ-596、図版 288-2)

母岩別資料 798 は接合資料 3594 および非接合剥片 6 点で構成され、総点数は 21 点、総重量は 497.0 g である。有舌尖頭器石器群の母岩と判断している。

素材 143 は接合資料 3594 で、15 点 (14 個体) が接合し、重量は 473.2g である。石質は黒曜石 5 で転礫から剥離された剥片を素材とし、剥片の状態で遺跡内に搬入したと考えられる。

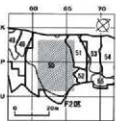
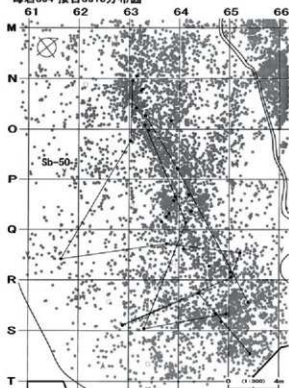
剥離工程 剥片素材の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1Aii 類に分類される。

母岩801 接合3597分布図



地区名	母岩番号	接合番号	母岩内容(計測時採得品)	石種	採出点数	重量			
F2	801	3597	尖頭器(35)	1	A	1	5	14点	928.9g
採出状況		採出位置	母岩採出状況(長×幅×厚)	採入石種	採入採出状況(長×幅×厚)				
35-50		遺物集	33.9 × 12.0 × (3-10)cm	磨石	33.9 × 12.0 × (3-10)cm				
掘り出し位置情報				遺構内位置(東向き)					
BF-PT.1									

母岩804 接合3610分布図



地区名	母岩番号	接合番号	母岩内容(計測時採得品)	石種	採出点数	重量			
F2	804	3610	尖頭器(35)	1	A	1	5	38点	2085.9g
採出状況		採出位置	母岩採出状況(長×幅×厚)	採入石種	採入採出状況(長×幅×厚)				
35-50		磨石	18.8 × (20-25) × 14.7 cm	磨石	18.8 × (20-25) × 14.7 cm				
掘り出し位置情報				遺構内位置(東向き)					
BF-PT.2									

図III-597 F2区の石器(35) 尖頭器・両面調整石器関連写真掲載資料(2)

素材剥片は平面が長方形で、大きさは長11.0×幅16.5×厚4.0cm前後であり、平面長方形の対角線を石器長軸に設定している。正裏面に打瘤が著しく発達する分厚い剥離を加えて自然面と厚みを除去し、併せて側縁の形成を行っている。横断面が菱形様の粗い両面調整体が形成されたと観察できる。製作石器の出土はないが、長13.0×幅6.0×厚2.5cm前後と復元できる。

分布 Sb-50北西部から東部の遺物集中範囲内に分布し、P63・64区付近にまとまりが認められる。

母岩別資料 801、接合資料 3597 (図Ⅲ-597、図版 287-2)

母岩別資料 801 は接合資料 3597 および非接合剥片 3 点で構成され、総点数は 17 点、総重量は 586.6 g である。

素材 139 は接合資料 3597 で、14 点(11 個体)が接合し、重量は 529.8g である。石質は黒曜石 5 で亜角礫を素材とし、原石または粗割原石の状態で遺跡内に搬入したと考えられる。

剥離工程 亜角礫原石から単体の尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1A*i* 類に分類される。亜角礫の直線的な自然面稜線が石器の長軸に設定されている。剥離工程は大きく次の内容で進められている。①大型打面できつ打瘤が発達する分厚い剥離を正裏面に加えて自然面と厚みを除去する。併せて側縁が形成され、断面は菱形を呈したとみられる。②打瘤の発達のない薄型・幅広の平坦剥離に移行し、器体を扁平に加工している。製作石器の出土はないが、長 13.0×幅 7.0cm 前後と復元できる。

分布 Sb-50北西部から南東部の遺物集中範囲内にやや散在するように分布が認められる。

母岩別資料 804、接合資料 3610 (図Ⅲ-597、図版 289)

母岩別資料 804 は接合資料 3610~3614 および非接合剥片 26 点で構成され、総点数は 74 点、総重量は 2,523.0 g である。有舌尖頭器石器群の母岩と判断している。

素材 144 は接合資料 3610 で、38 点(11 個体)が接合し、重量は 2,085.9g である。石質は黒曜石 5 で転礫を素材とし、原石の状態で遺跡内に搬入したと考えられる。

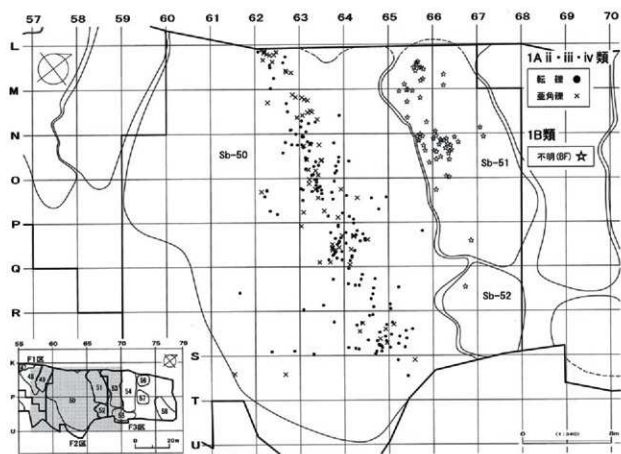
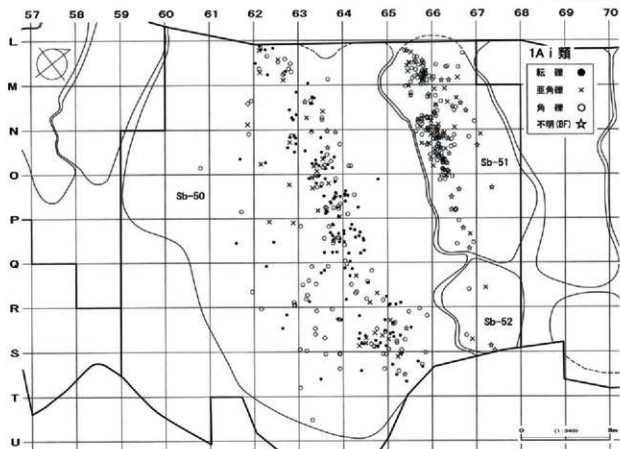
剥離工程 転礫原石を半割し、各個体から尖頭器・両面調整石器を製作した資料で、剥離技術類型は 1A*iv* 類に分類される。作業は個体別に以下の内容で進められている。①分割礫にさらに折断が生じ、長 13.0×幅 8.0×厚 4.0cm の剥片を素材とした石器製作が行われる。平坦な分割面へ打瘤の発達する幅広剥離が加えられており、両面調整石器を製作したと推測できる。製作石器の形態・大きさ等は不明である。②145 は分割された正面側の個体である。平面長方形を呈する素材の対角線を石器長軸に設定し、側面に張り出す角部を大型打面の剥離を正裏面に加えることによって除去し、併せて自然面・器体の厚みも取り除いている。さらに打瘤の発達する幅広剥離を加えて側縁を形成したと観察される。製作石器の出土はないが、長 15.0×幅 8.0cm 前後の両面調整石器と復元できる。

分布 Sb-50北西部から東部にかけての遺物集中範囲とその周辺に広く分布している。

尖頭器・両面調整石器製作資料の分布状況について

図Ⅲ-598 に尖頭器・両面調整石器製作に関連する母岩別接合資料の分布状況を示した。製作内容を一母岩から単体を製作するもの(1A*i* 類、以下単体製作母岩)と複数個体を製作するもの(1A*ii*・*iii*・*iv* 類、以下複数製作母岩)に分け、原石形状をシンボルで表示している。

Sb-50 では単体製作母岩と複数製作母岩の両方が分布し、角・転・亜角礫のそれぞれが素材に使用されている。しかし、両面調整石器で搬入されるものは極めて少数である。対して Sb-51・52 は単体製作母岩で占められ、素材は角礫・亜角礫もしくは両面調整石器で搬入されるものとなっている。転礫を使用した母岩がみられない点、特徴的である。単品石器の分布から Sb-50 は有舌尖頭器石器



図Ⅲ-598 F2区の石器(36) 尖頭器・両面調整石器製作母岩別接合資料分布図